

高松港頭地区再開発関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

こうざいみなみにしうらいせき
香西南西打遺跡

2000. 3

高松市教育委員会

はじめに

今日、30余万市民の生活が展開されている高松市は、その都市景観の骨格を16世紀後葉、生駒親正による高松城築城の頃に形成したものと言えましょう。

まもなく新しい世紀である21世紀を迎えるとしています。新時代にふさわしく、高松では表玄関である高松港頭地区の再開発が鋭意進められており、装いを一新することでしょう。

さて、この再開発の一環として、JR貨物ヤードを現在の港頭地区から、香西・鬼無の地へ移すことになりました。香西から鬼無にかけての地は、高松平野の西にそびえる勝賀山の麓にあたり、その東には本津川がおだやかに流れ、のどかな田園地帯が広がっています。この新しいJR貨物ヤード西端に沿って都市計画道路香西東臨港線が建設されることになり、道路建設用地で確認された遺跡を本市教育委員会で発掘調査することになりました。

香西南西打遣跡と名づけられた本遺跡では、人々が土器を発明する前の旧石器時代の石器が数多く見つかりました。旧石器は、県内ではこれまで丘陵地や島嶼部で見つかる場合が多かったのですが、今回は標高4mという低地での発見となりました。また、古代末の粘土採掘跡が多数検出されましたが、胎土分析の結果、大型の土師器釜などを作るための粘土を採掘した跡であることがわかるなど、新しい歴史的事実を明らかにすことができました。

最後になりましたが、今回の調査に際し、多大なご理解とご協力をいただきました地元の方々や関係者に感謝の意を表するものです。

平成12年3月

高松市教育委員会
教育長 山口 寮式

例　　言

- 1 本書は、高松港頭地区再開発関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、高松市香西南町に所在する香西南西打遺跡の調査報告を収録した。
- 2 発掘調査および整理作業については、高松市教育委員会が実施した。
- 3 調査から報告書作成に至るまで、下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。（五十音順、敬称略）

香川県教育委員会　　財團法人香川県埋蔵文化財調査センター　　讃岐文化遺産研究会
小野秀幸、片桐孝浩、白川雄一、藤好史郎、松藤和人、森 格也、森下英治
- 4 本遺跡の調査は、試掘調査を平成8～9年度に文化振興課文化財専門員山元敏裕・小川賢が行い、本調査を平成9～11年度に山元・小川が行った。整理作業は、平成11年度に山元・小川が行った。
- 5 本報告書の執筆は第3章第8節を山元が、それ以外を小川が分担し、編集は小川が行った。
- 6 本文の挿図として、国土地理院発行2万5千分の1地形図「高松北部」「高松南部」「丘色台」「白峰山」を一部改変して使用した。
- 7 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 8 挿図中の方位は、第132・134・135図は磁北を、その他は座標北を表す。
- 9 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。

S D…溝　S E…井戸　S P…柱穴　S X…不明遺構

目 次

はじめに

例言

目次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	3

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5

第3章 調査の成果

第1節 調査区の設定	9
第2節 遺跡の概要と層序	9
第3節 旧石器時代	33
第4節 弥生時代の遺構・遺物	81
第5節 古代～中世の遺構・遺物	89
第6節 中世の遺構・遺物	105
第7節 近世以降及びその他の遺構・遺物	112
第8節 香西南部ポンプ場建設予定地の発掘調査について	114

第4章まとめ

第1節 遺構の変遷	141
第2節 条里遺構について	147
第3節 出上煮沸具について	147

第5章 自然科学的分析

第1節 土壌中火山灰抽出分析	149
第2節 香西南西打遣跡の花粉化石	159
第3節 香西南西打遣跡のプラント・オパール	165
第4節 香西南西打遣跡出土土器の胎土分析	168

図版目次

図版 1-1	SD101 (I-①区)	図版11-1	SD507
図版 1-2	I-①区 全景	図版11-2	SD508(左) SD504(右)
図版 2-1	I-②区 粘土採掘坑遺物出土状況	図版12-1	V区 石器出土状況
図版 2-2	I-②区 全景	図版12-2	V区 石器調査状況
図版 3-1	I-②区 束壁	図版13-1	香西南部ポンプ場建設予定地調査区 全景
図版 3-2	SD103 遺物出土状況	図版13-2	SX01
図版 3-3	SD102, SD103	図版14	石器接合資料
図版 4-1	SD105	図版15	石器接合資料
図版 4-2	SD106	図版16	V区 出土石器
図版 4-3	I-③区 石器出土状況	図版17	I-③区 出土石器
図版 5	I-④区 石器出土状況	図版18	ナイフ形石器
図版 6-1	I-④区 石器出土状況	図版19	I-①,②区 出土石器
図版 6-2	I-④区 SD107	図版20	出土土器
図版 6-3	I-④区 粘土採掘坑	図版21	出土土器
図版 7-1	II区 粘土採掘坑遺物出土状況及び 遺構検出状況	図版22-1	SD403 出土遺物
図版 7-2	II区 全景	図版22-2	III-①区 褐灰色シルト質極細砂層 出土遺物
図版 8-1	SR01 遺物出土状況	図版23-1	III-①区 明褐灰色シルト質極細砂 層出土遺物
図版 8-2	SX301	図版23-2	SD107 上層部出土遺物
図版 8-3	SD301(左) SD304(右)	図版24-1	I-④区 粘土採掘坑出土遺物
図版 8-4	SD303	図版24-2	香西南部ポンプ場建設予定地調査区 出土遺物
図版 9-1	SR01		
図版 9-2	III-②区 全景		
図版10-1	SD402及び粘土採掘坑		
図版10-2	IV区 南部		

挿 図 目 次

第1図	周辺主要遺跡分布図(1/30000).....	1	第40図	抉入石器.....	62
第2図	調査区設定図(1/2000).....	11~12	第41図	翼状剥片.....	62
第3図	遺構配置図①.....	13~14	第42図	剥片①.....	63
第4図	遺構配置図②.....	15~16	第43図	剥片②.....	64
第5図	遺構配置図③.....	17~18	第44図	剥片③.....	65
第6図	II区西壁土層図.....	19~20	第45図	剥片④.....	66
第7図	III-①区東壁上層図.....	21~22	第46図	石核類①.....	67
第8図	III-②区東壁上層図.....	21~22	第47図	石核類②.....	68
第9図	III-④区東壁土層図.....	23~24	第48図	石核類③.....	69
第10図	III-③区東壁上層図.....	23~24	第49図	接合資料①.....	70
第11図	IV区東壁土層図.....	25~26	第50図	S108,109剥離痕観察図.....	71
第12図	I-④区東壁土層図.....	25~26	第51図	S108,109接合図.....	71
第13図	I-①区東壁土層図.....	27~28	第52図	接合資料②-1.....	72
第14図	I-②区東壁土層図.....	27~28	第53図	接合資料②-2.....	73
第15図	I-③区東壁土層図.....	29~30	第54図	S110,111,112剥離痕観察図.....	73
第16図	V区西壁土層図.....	31~32	第55図	S110,111,112接合図.....	74
第17図	V区第8層石器出土分布図.....	35~36	第56図	S110,112接合図.....	74
第18図	I-③区第8層石器出土状況図.....	37~38	第57図	縄文時代以降の石器.....	75
第19図	I-④区第8層石器出土分布図.....	39	第58図	SR01出土遺物.....	81
第20図	V区第8層出土石器①.....	44	第59図	SR01遺物出土状況図(1/20).....	82
第21図	V区第8層出土石器②.....	45	第60図	SD101断面図.....	83
第22図	V区第8層出土石器③.....	46	第61図	I-①区SD101遺物出土状況図(1/20).....	83
第23図	S3,4剥離痕観察図.....	47	第62図	I-②区SD101遺物出土状況図(1/20).....	84
第24図	S3,4接合図.....	47	第63図	SD103遺物出土状況図(1/20).....	84
第25図	V区第8層出土石器④.....	48	第64図	SD101出土遺物.....	85
第26図	I-③区第8層出土石器①.....	49	第65図	SD102断面図.....	85
第27図	S15,16剥離痕観察図.....	50	第66図	SD103断面図.....	85
第28図	S15,16接合図.....	50	第67図	SD103出土遺物.....	86
第29図	I-③区第8層出土石器②.....	51	第68図	SD104断面図.....	86
第30図	I-③区第8層出土石器③.....	52	第69図	SD106断面図.....	86
第31図	I-③区第8層出土石器④.....	53	第70図	SD106出土遺物.....	87
第32図	I-③区第8層出土石器⑤.....	54	第71図	I-②区不定形土坑出土遺物.....	87
第33図	I-④区第8層出土石器①.....	55	第72図	SD401断面図.....	88
第34図	I-④区第8層出土石器②.....	56	第73図	SD303断面図.....	88
第35図	I-④区第8層出土石器③.....	57	第74図	SK301出土遺物.....	88
第36図	ナイフ形石器①.....	58	第75図	I-③区北壁・粘土採掘坑堆積状況図.....	89
第37図	ナイフ形石器②.....	59	第76図	I-②区粘土採掘坑出土遺物.....	90
第38図	スクレイバー①.....	60	第77図	I-④区粘土採掘坑出土遺物.....	91
第39図	スクレイバー②.....	61	第78図	IV区粘土採掘坑出土遺物.....	92

第79図	III-②区粘土採掘坑出土遺物	92	第114図	I-③区第一遺構面遺構配置図	106
第80図	III-④区粘土採掘坑出土遺物	92	第115図	SD113,114,115断面図	107
第81図	II区粘土採掘坑出土遺物	93	第116図	V区灰黄色シルト質極細砂～灰黃褐色シルト出土遺物	107
第82図	粘土採掘坑遺物出土状況図(1/20)	94	第117図	II区灰黄色シルト質極細砂層	
第83図	I-①区SD107断面図	95		出土遺物	108
第84図	I-②区SD107,108断面図	95	第118図	II区灰オリーブ色砂質土～シルト質極細砂出土遺物	108
第85図	I-④区SD107出土遺物	96	第119図	SD202断面図	108
第86図	I-①,I-②区SD107出土遺物	96	第120図	III-①区褐灰色シルト質極細砂層出土遺物	109
第87図	I-②区(南部)SD107上層部(黄灰色シルト)出土遺物	97	第121図	III-①区明褐灰色シルト質極細砂層出土遺物	110
第88図	I-②区SD108出土遺物	97	第122図	III-①区床土下～明褐灰色シルト質極細砂層出土遺物	110
第89図	SD110,111断面図	98	第123図	III-④区 上面精査中出土遺物	111
第90図	SD110出土遺物	98	第124図	SD404断面図	111
第91図	SD111出土遺物	98	第125図	SE201出土遺物	112
第92図	SD402,403断面図	99	第126図	SE201断面図	112
第93図	SD402出土遺物	99	第127図	SX301断面図	112
第94図	SD403出土遺物	99	第128図	SX101断面図	112
第95図	SD301断面図	100	第129図	SD501断面図	113
第96図	SD304断面図	100	第130図	III-②区人力掘削中出土遺物	113
第97図	SD201断面図	100	第131図	香西南部ポンプ場建設予定地調査位置図	114
第98図	SD506,507断面図	100	第132図	香西南部ポンプ場建設予定地遺構配置図	115～116
第99図	SD507出土遺物	100	第133図	香西南部ポンプ場建設予定地南壁上層図	115～116
第100図	SD508,509断面図	101	第134図	SX01検出状況図	117
第101図	SD510断面図	101	第135図	SX01平面図, 土層図	117
第102図	SD502断面図	101	第136図	SX01出土土器実測図(1)	118
第103図	SD503断面図	101	第137図	SX01出土土器実測図(2)	119
第104図	SD504断面図	101	第138図	石器計測例図	76
第105図	SD505断面図	101	第139図	遺構変遷図①	143～144
第106図	I-①,②区第5層出土遺物	102	第140図	遺構変遷図②	145～146
第107図	I-④区第5層出土遺物	102			
第108図	IV区第5層出土遺物	103			
第109図	V区第5層出土遺物	103			
第110図	II区第5層出土遺物	103			
第111図	III-③区第5層出土遺物	104			
第112図	I-④区灰黄色シルト層出土遺物	105			
第113図	I-①,②区灰黄色シルト層細砂層出土遺物	105			

自然科学的分析挿図目次

土壤中火山灰抽出分析	香西南西打遺跡のプラント・オパール
図1 香西南西打遺跡I-③区東壁土壤試料分析 5試料試料採取層準土層模式柱状図および 分析結果 149	図1 I-①区東壁のプラント・オパール分布図 166
香西南西打遺跡の花粉化石	香西南西打遺跡出土土器の胎土分析
図1 試料採取地点付近の土層断面図(I-①区 東壁) 159	第1図 器種別による胎土の比較 175
図2 I-①区東壁の花粉化石分布図 162	第2図 器種別による胎土の比較 175
	第3図 出土土器と粘土採掘坑粘土との比較 176
	第4図 出土土器と粘土採掘坑粘土との比較 176
	第5図 空港跡地遺跡出土土器との比較 177
	第6図 空港跡地遺跡出土土器との比較 177

挿 表 目 次

第1表 整理作業工程表 3	第9表 剥片背面の剥離方向 43
第2表 周辺主要遺跡分布図遺跡名一覧 7	第10表 剥片の剥離角 43
第3表 調査区分出土数と重量 42	第11表 香西南西打遺跡出土石器観察表 77~80
第4表 出土全器種組成グラフ 42	第12表 繩文時代以降の石器観察表 80
第5表 出土石器長幅比 42	第13表 香西南西打遺跡出土遺物観察表 121~139
第6表 剥片の打面構成 42	第14表 香西南西打遺跡とポンプ場出土遺物との 口径比較 148
第7表 剥片の底面構成 42	第15表 器種別出土数 148
第8表 剥片の背面剥離方向数 43	

自然科学的分析挿表目次

土壤中火山灰抽出分析	香西南西打遺跡のプラント・オパール
第1表 香西南西打遺跡I-③区東壁における火 山ガラス濃集層準とその特徴 152	表1 試料1g当たりのプラント・オパール個数 166
第2表 香西南西打遺跡I-③区東壁土壤中火山 灰抽出分析 155	香西南西打遺跡出土土器の胎土分析
香西南西打遺跡の花粉化石	香西南西打遺跡出土土器の胎土分析
表1 産出花粉化石一覧 160	香西南西打遺跡出土土器の胎土分析(%)-一覧表 171~174

第1章 調査の経緯と経過

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

香西南西打遺跡が所在する香西南町は、東に本津川が流れ、西に勝賀山を望む高松平野の西部に位置する。北の町並みには城下町の趣を残すが、旧国道周辺部では開発が進んでおり、南部に広がる田園も宅地化しつつある。これまで周辺部での発掘調査の事例はほとんど見られないが、佐料、是竹で縄文及び弥生時代に属する土器が採取されており、また勝賀山の東尾根先端部の古墳群、佐料城や藤尾城など香西氏に関係した城跡が既に知られるところである。本津川の沖積地になる平野部は、条里型の地割を留めており、南部の田園地帯には中・近世の塚といわれる集石、盛土が点在するのが見られる。

本遺跡調査の契機となったのが、高松港頭地区再開発事業に関連した香西・鬼無地区における開発事業である。香川県と高松市との間に高松港頭地区再開発に関する基本協定書が平成7年3月1日付けで締結されており、その中で香西・鬼無地区における関連事業のうち、木太鬼無線以北のJR貨物施設用地での埋蔵文化財発掘調査を県が主体となり、市道等の道路及び排水対策関連事業を高松市が施行することになった。

高松市が行う事業の主幹課である都市再開発課との協議で、高松市教育委員会は開発面積が広大であること、また事業箇所周辺では周知の埋蔵文化財包蔵地の確認調査がほとんどなされていない空白地帯であるため、試掘調査の実施を同課に提案した。平成8年11月、土地買収の一括調印を受けて試掘調査を行った結果、古代から中世の埋蔵文化財包蔵地であることが確認されたため、事業主体の費用負担で事前調査を行うことで同課の了解を得た。

本遺跡の調査結果は、後に高松市教育委員会が調査を実施した筑城城跡等の遺跡やJR貨物予定地で香川県教育委員会が調査した西打遺跡とともに、香西・鬼無地区的平野部においては、これまでにあまり例がなかった埋蔵文化財の知見から、当地区的歴史を浮かび上がらせる資料として期待される。

第2節 調査の経過

調査は平成9年5月6日から行っているが、南部の一区画を同年6月5日に終了した後、本体工事の工程上から、先に鬼無地区的調査を行うこととなった。再び本遺跡の調査に取り掛かるのが、平成10年7月13日からである。平成11年3月5日までに、土地交渉等のため調査に入れない2箇所の区画を除いて調査範囲の大部分を終了した。

平成11年度に持ち越された箇所は、平成11年5月31日～6月15日と、平成11年12月13日～平成12年1月14日とでそれぞれ調査を行っている。

なお調査の詳細は、次の調査日誌（抄）のとおりである。

調査日誌（抄）

平成9年

5月6日 機械掘削開始

9日 地山直上包含層除去及び遺構検出

16日 水田層掘り下げ 東壁、北壁土層図面及び遺構配置図面作成

- 19日 完掘状況写真撮影 写真撮影後性格不明遺構にトレーナーを入れる
- 27日 拡張区機械掘削終了
- 29日 拡張区包含層除去終了、遺構検出及び掘り下げ
- 6月5日 拡張区平面、土層図面作成終了
- 平成10年
- 7月13日 I区機械掘削開始
- 28日 I-①区人力掘削、下笠居中学生発掘体験
- 31日 遺構検出及び水田土壤層除去
- 8月5日 I-①区条里遺構完掘
I-②区第3層除去中
- 9月14日 I-①区粘土取り土坑完掘、全景及び土層堆積状況写真撮影
I-②区北端十字セクション土層注記終了、土鍋出土状況図面作成終了
南端弥生溝、その北の土釜出土状況図面作成及び写真撮影
- 22~28日 雨天の為、野外作業中止 資料整理及び土器洗浄
- 10月5日 I-③区人力掘削、上面精査及び遺構検出
I-①区南東隅拡張部弥生溝遺物出土状況図面作成
I-②区南西部弥生溝完掘作業
- 14日 I-③区粘土取り穴及び弥生溝遺構掘り、条里溝跡断面図作成
II区、III-①区機械掘削
- 22日 II区人力掘削、上面精査及び遺構検出
- 11月6日 II区粘土取り穴遺構掘り 西壁上層図面及び遺構配置図面作成
III-①区側溝掘り
- 20日 II区完掘及び遺物出土状況写真撮影
- 25日 正午より I区、II区航空写真撮影
- 12月2日 III-①区中世灰色包含層除去、III-②区上面精査及び遺構検出
11日 III-①区南部溝跡完掘写真撮影、その後南部黒褐色土掘り下げ
III-②区東、北壁土層図面作成、III-③区人力掘削
- 22~25日 III区完掘作業及び写真撮影
- 平成11年
- 1月5日 IV区ベルトコンベヤー設置、人力掘削
- 7日 IV区上面精査及び遺構検出
- 11日 IV区条里溝、粘土取り穴遺構掘り 東壁分層作業及び土層図面作成
14日まで完掘作業及び図面作成
- 20日 香西公民館高齢者教室参加者による遺跡見学会
V区が工事用の仮設道として使用されているため、調査を一時中断する
- 2月5日 V区機械掘削開始
- 10日 側溝掘り中に旧石器出土
19日 第1遺構面完掘、写真撮影及び図面作成
22日 第2遺構面完掘、写真撮影及び図面作成
23日 1m×1mのグリット法による石器ブロックの調査を行う。

3月1日 V区完掘写真撮影 平板測量及びレベル入れ
 III, IV区航空測量準備作業
 2日 正午よりIII, IV, V区航空写真撮影
 5日までに図面作成、遺物取り上げ等の業務を終了
 5月31日 III-④区調査開始
 6月1日 人力掘削（黄色粘土地山直上まで）
 上面精査及び遺構検出
 8日 粘土取り穴等遺構掘り終了
 10日 北、東壁土層図面作成 平面図作成
 15日までに図面作成等を終え、調査終了
 12月13日 1-④区調査開始
 16日 西半坪界溝跡遺構検出及び遺構掘り
 20日 積雪のため野外作業中止
 21日 粘土採掘坑検出及び遺構掘り
 平成12年
 1月7日 1-④区第1遺構面完掘写真撮影
 8日 西半坪界溝跡記録作業及び溝下遺構検出
 9日 遺構記録作業、黄色粘土層中の石器調査
 14日 撤収作業

第3節 整理作業の経過

整理作業は、発掘調査期間中に現場事務所で行った作業と調査終了後に円座整理事務所で行った作業がある。前者の作業内容は出土遺物の水洗いが主であり、大半の作業は後者において行っている。その整理作業は、平成11年度において以下の工程のように実施した。

	平成11年												平成12年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
遺物の注記															
遺物の接合・復原															
遺構図整理															
上器実測・トレース															
石器実測・トレース															
遺構トレース															
原稿執筆															
遺物写真撮影															
レイアウト															
編集集															

第1表 整理作業工程表

第2章 地理的環境・歷史的環境

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

瀬戸内沿岸、香川県の中央に位置する高松平野は、西側を五色台山塊、東側を立石山地に囲まれた東西約20キロ、南北約16キロの範囲に広がる。山塊は、キャップロックと呼ばれる安山岩層が侵食されやすい花崗岩層上に覆うことで侵食開析から取り残され、メサあるいはピュートとなっている。五色台、有名な屋島もまた平坦な頂部を有する開析から取り残された台地であり、石清尾山塊、日山、由良山等の独立丘とともに高松平野を象徴する風景となっている。

これらの侵食作用が進んだ後、沖積世に入って本津川、香東川、春日川、新川と讃岐山脈から瀬戸内海へ北流する河川は、その堆積作用により平野部を形成していった。堆積力において香東川が最大であり、その堆積力は平野部形成に大きな影響を及ぼしている。これに比べて平野の東を流れる春日川及び新川は流域面積が少なく、また扇状性の堆積が見られない小規模な自然堤防性の微高地が点在する氾濫平野を形成したと言われている。

高松平野の北西部に位置する当該地は、北に瀬戸内海、西に勝賀山を、そして東には本津川を各々に近接している。海岸部に近接する箇所では厚い三角洲地帯の堆積等により遺跡の所在が危ぶまれるが、近年の調査において本遺跡の北で中世の畝敷跡が確認されており、標高約2.5～4.5mで遺構を検出した本遺跡においても、地山はほぼ安定した黄色粘土層であった。このことから東に広がる平野部は等高線が示すとおり本津川の扇状地帯であるが、本遺跡においてはその影響が少なく、西の勝賀山山麓の末端部に位置するものと考えられる。遺構の検出状況からすれば、弥生時代まではこの南西から北東へと緩やかに下る地形に沿った土地利用がなされ、徐々に土地改良され古代～中世においては、現在の地割とほぼ同じ条理方向に区画されていたと推察できる。

第2節 歴史的環境

高松平野西部における近年の調査から、中間（なかつま）西井坪遺跡をはじめ中間東井坪遺跡、正筋遺跡、中森遺跡で旧石器時代後期に属する石器群が見つかっており、本遺跡遺跡を含め、本津川の扇状地帯に高松平野最古の文化層が存在することが確認されている。これらの石器群は、瀬戸内技法を反映したナイフ形石器を主とするものと角錐状石器を主とするものに大別できる。

続く縄文時代では、本遺跡で草創期と見られる有舌尖頭器が、後世の包含層より出土している。鬼無町佐野では後期に属する土器が採取されている他、鬼無藤井遺跡で自然流路の埋上中から晩期の土器片が見つかっており、近接して発掘された弥生前期の環濠との関係で興味深い。また西打遺跡や中間東井坪遺跡でも土器、石器が出土した事例が報告されている。

稻作が始まる弥生時代については、鬼無藤井遺跡で前期の環濠集落が出現する。この集落は2重の環濠を巡らし、最大径約70mの規模をもつ。弥生時代中期の遺跡は、未確認であり空白を生じるが、後期になると西打遺跡で竪穴住居や掘建柱建物跡を、中間西井坪遺跡でも掘建柱建物跡や土器棺墓が確認されている。

古墳時代になると、高松平野でも古墳の造営が顕著になる。石清尾山塊では、前期初頭の鶴尾神社4号墳を皮切りに前方後円墳や双方中円墳といった積石塚が出現する。積石塚は、尾根頂部や山頂に累々と築造され、全長100m近くを測るものも現れるが、中期中頃には、その築造は終焉するようである。

一方、平野西部では、中間・西井坪遺跡で前方後円墳を含む前期古墳の周濠が3基確認されている。中期になると平野西部で最大規模をもつ全長60.5mの前方後円墳・今岡古墳が築造される。ほぼ同時期、中間西井坪遺跡では埴輪や陶棺を作製・焼成していたことが知られており、ここで製作された陶棺が今岡古墳に供給されたと推測されている。後期初頭になると、それまで山塊や丘陵部のみだった古墳の築造が、平野にも見られるようになる。相作（あいさこ）牛塚古墳は、後期初頭に築造された古墳で、挂甲（けいこう）や金銅装の馬具を副葬していた。

古墳時代後期後半では、平野部縁辺部の丘陵において横穴式石室を主体部とした群集墳の築造が盛んになる。先の石清尾山塊でも横穴式石室墳が見られるほか、山塊南の淨願寺山山頂付近では小規模な横穴式石室墳が密集している。一方、平野西縁辺に位置する平木古墳群や古宮古墳周辺では、大型の横穴式石室墳が点在している。

古墳時代に属する集落は、兀（はげ）塚遺跡で後期末と推定される掘建柱建物跡群が確認されているだけで、墳墓と比べて不明な部分が多い。

古墳の築造が終了し、代わって豪族たちは寺院建築を行う。平野中央部では坂田廃寺、平野北西部で勝賀廃寺が知られており、両寺とも川原寺式が退化した瓦当文様をもつ軒瓦が出土しており、白鳳期（飛鳥時代後半）の創建年代が推定されている。

奈良～平安時代にかけては、正箱遺跡・薬王寺遺跡が知られる。6時期に分かれるが計50棟以上の掘立柱建物跡が見つかり、中には面積40m²を越す大型のものがある。さらに、区画溝や掘立柱建物跡の中には条里地割と方位が符合するものがあり、南海道に接する当該地区では、早くから条里地割の敷設が進んでいたことがわかる。

鎌倉～室町時代でも条里地割に符合した溝跡が、鬼無藤井遺跡や西打遺跡で数多く広範に検出されており、条里地割がこの頃には普遍的であったと考えられている。さらに、西打遺跡では東西54m、南北40mの範囲で、区画溝に囲まれた鎌倉時代に属する屋敷跡が発掘されており、莊園を基盤とした領主層の成長がうかがえる。力を蓄えた領主たちは、武装して武上化し、やがて戦国時代を強力な武士団として活躍していく。

香川郡を拠点として、讃岐各地や備讃瀬戸に支配権をのばしたのが、香西氏である。香西氏は、承久の乱で戦功をあげ、幕府より阿野・香川郡を与えられた氏族で、香西氏の核として地元の領主が結集して一大勢力を築いた。この香西氏を経済的に支えたのが、『兵庫北関入船納帳』（文安2年（1445））にも記されている香西浦であり、活発な商業活動が行われたのであろう。香西氏は、勝賀山に有事の際の城を築き、常は佐料城を居館とし、その周囲には植松城・芝山城・鬼無城などの出城を築いた。後には、本拠地を香西浦に近い藤尾城に移し、作山城を築いている。さらに、香西氏に従った地元の領主たちの居城が周囲に点在している。筑城城や飯田城、片山城が該当し、香川郡や阿野郡を中心に、その数は一説には40余りにのぼったという。また筑城城跡および飯田城跡周辺には、今でも塚が群集している。埴輪片が出土するものもあり、相作牛塚古墳のような古墳もあると推定されるし、中世の「武将の墓」という言い伝えも残っている。

豊臣秀吉による四国攻撃以後、その家臣である生駒親正が讃岐一国を支配し、高松城を築き、江戸時代に至る。現在の市街地は、この高松城の城下町が発達したものである。やがて藩主は生駒家から松平家に替わり、明治維新を迎える。正箱遺跡・薬王寺遺跡や鬼無藤井遺跡では、江戸時代の庶民の墓や屋敷跡が発掘されている。

詳細は、各報告書等を参照されたい。

第2表周辺主要遺跡分布図遺跡名一覧			
1 植松城跡	13 平木古墳群	25 振田城跡	37 片山城
2 芝山城跡	14 大塚古墳	26 御殿大塚古墳	38 净願寺山古墳群
3 勝賀施跡	15 神高池北西古墳	27 半田・小坂塚群	39 南山浦古墳群
4 藤尾城跡	16 神高池西古墳	28 青木塚群	40 片山池1号窓跡
5 作山城跡	17 こめ塚古墳	29 紙淵塚群	41 坂田魔寺
6 香西南西打遺跡	18 古宮古墳	30 石清水山9号墳	42 がめ塚古墳
7 勝賀城跡	19 空家古墳	31 北大塚古墳	43 正箱・薬王寺遺跡
8 かしが谷古墳群	20 山野塚古墳	32 鏡塚古墳	44 中間西井坪遺跡
9 佐料城跡（佐料遺跡）	21 鬼無城跡	33 石船塚古墳	45 元塚遺跡
10 西打遺跡	22 筑城城跡	34 姫塚古墳	46 中間東井坪遺跡
11 鬼無藤井遺跡	23 大塚古墳	35 萩塚古墳	47 中森遺跡
12 今岡古墳	24 相作牛塚古墳	36 鶴尾神社4号墳	

参考文献

- 金田章裕、高橋学「讃岐弘福寺領の調査 第2章第1節、第4章第1節」高松市教育委員会1992
 「高松市立弦打公民館改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 筑城城跡」高松市教育委員会1999
 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」平成9年度 香川県教育委員会
 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」平成10年度 香川県教育委員会
 「高松港頭土地区画整理作業平成9年度埋蔵文化財発掘調査概報 西打遺跡 高松城跡（西の丸）」
 香川県教育委員会 1998



第1図 周辺主要遺跡分布図（縮尺1/30,000）

第3章 調査の成果

第3章 調査の成果

第1節 調査区の設定（第2図）

調査区は、道路改良工事に伴う発掘調査であるため南北に細長く設定された。工事は南北方向の坪界に相当する現有道路を東へと拡幅するものだが、調査範囲とした南端ではこの南北坪界を横断し西側に道路を建設するものである。対象となった路線の範囲は、幅約12m、全長約650mの区間である。このうち随時行った試掘調査により、調査不要とした個所及び進入路等の確保により調査のできなかった部分、現有道路、水路、コンクリート壁等は、調査範囲から除いた。調査は大部分を平成10年度に行つたが、平成9年度と11年度にも部分的に行っており、調査した面積は、平成9年度に約200m²、平成10年度に約3,353m²、平成11年度約370m²の合計約3,923m²である。

工事の工程上で急がれる個所から調査を行つたが、ほぼその順序により調査範囲をI～V区に分割し設定した。南部に位置するI区は、現有道路、宅地及び水田を区画するコンクリート壁等により4分割される。なおI～③区の南東部は水路建設のため全体の調査に先行して平成9年度に調査を行い、また北端のI～④区の調査は平成11年度を行つた。II区は、調査地の北端に位置するL字形の調査区である。続くIII区は、現有の水路、宅地のコンクリート壁等により4分割され、宅地部分であったIII～④区を後の平成11年度に調査を行つてある。IV区は、現有道路を挟みI区の北に位置する。V区は調査地の南端に位置し、南で里界に比定される舟入川に接する。また調査地では唯一、南北坪界に比定される現有道路の西に位置している。

第2節 遺跡の概要と層序

1 遺跡の概要（第3～5図）

調査地周辺の地形は方形の区画が顕著であるため、等高線によりもとの地形を読み取るのは難しいが、調査範囲である南部においては、南北方向の坪界を境に東側と西側とでは明確な段差があり、勝賀山山裾の末端にあたると考えられる。現在でも西の高地には宅地が多く見られ、東の低地には水田が広がっている。北部においては、西の勝賀山及び北に位置する薬師山等により、等高線は複雑になる。調査区の東においても水田等の区画が乱れており、西の山麓に発する流路と本津川の氾濫によるものと考えられる。

南部の調査区であるI区とV区は、小さな谷に挟まれた微高地となっており、地山と考えられた黄色粘土層において、旧石器が出土する文化層が残存するのを確認した。調査範囲においては、西の山麓から本津川へ流れ出ると考えられる自然流路をいくつか確認したが、遺物はほとんど含まれず僅かに埋没した自然流路最上部で弥生前期の壺等が出土したのみである。いずれの流路上層の堆積はほぼ同質であり、この時期にはほぼ埋没し低地等であったと考えられる。続く弥生時代後期には、主に南部の微高地上で溝跡を地形に沿って確認している。古代末では不定形の土坑を大量に確認しているが、後述のように粘土を採取した痕と考えられる。また当遺跡から出土した大型土器の胎土には、採取した粘土が使用されたと考えられ、周辺部で窯業の存在が推察される。またSD107等南北坪界に沿った用水路及び同時期の土壤層（第5層）が調査区の大半において確認されていることから、水田としての土地利用が考えられる。中世以降においても条里方向の溝跡、鋤痕を確認した他には、柱痕等の建物跡を示す遺構は確認していないため、概ね水田等の耕作地として利用されていたものと考えられる。

2 層序（第6～16図）

香西南西打遺跡は南北に細長く設定されるが、その層序は平安時代末の水田層とした第5層より上部ではほぼ水平堆積であり、現代に至るまでの間、主に水田等の耕作地として利用されたと考えられる。第5層より下部では、人工的に搅乱した堆積が広範に見られる他、その下部に微高地と自然流路等の低地が創出する緩やかな凹凸のある堆積が見られる。調査にあたっては、ほぼ第4層までを重機により掘削し、人力掘削の後、第8層上面で遺構検出を行った。部分的な堆積については、土層図及び各遺構の断面図等により、ここでは調査区全般での基本層序について詳述する。

第1層：盛上された花崗土で、近年宅地等に利用されていた個所に見られる。

第2層：現水田耕作土及び床土である。調査地の全域に見られ、宅地開発がなされる以前も周辺が主に水田として利用されていたと考えられる。

第3層：西の勝賀山に発する洪水等により堆積したと考えられる砂層で、調査地のほぼ全域に見られる。部分的には鉄分の沈着等により橙色を呈する。

第4層：黄灰色のシルト層で、中世に属する堆積と考えられる。シルト質極細砂、砂混シルト等土質により2～3層に細分できる。いずれも土壤化が進んでなく、水田等の耕作上は随時削平されたものと考えられる。

第5層：褐灰色シルト層で、古代末の堆積物と考えられる。畦畔や水路等の遺構を検出していないが、土壤化が進んでいること、プラントオパールが多く検出（後述掲載の分析結果参照）されていることから、当時期に水田による稲作が行われていたと考えられる。

第6層：調査範囲の広範において見られる複数層である。上下の堆積層に分割できるものと思われるが、堆積状況が極めて複雑であり大半の調査区において分層作業を行っていない。下層部では、黒褐色粘土層に第8層の黄色粘土がブロック状に含まれることから、埋め戻し等人工的に搅乱された痕と考えられる。上層部は、第5層に近似した堆積物である。

第7層：低地及び凹地部分で部分的に見られる黒褐色のシルト質粘土層である。I-③区土層サンプルでは、2次堆積であるが、鬼界アカホヤ（K-Ah）に由来する火山ガラスとプラントオパールが検出されている。（後述掲載の分析結果参照）またIII-①区において、同堆積直下の埋没した自然流路上部より弥生前期中葉に属する遺物が出上していることから、当堆積が弥生時代以降の水田層と推測できる。

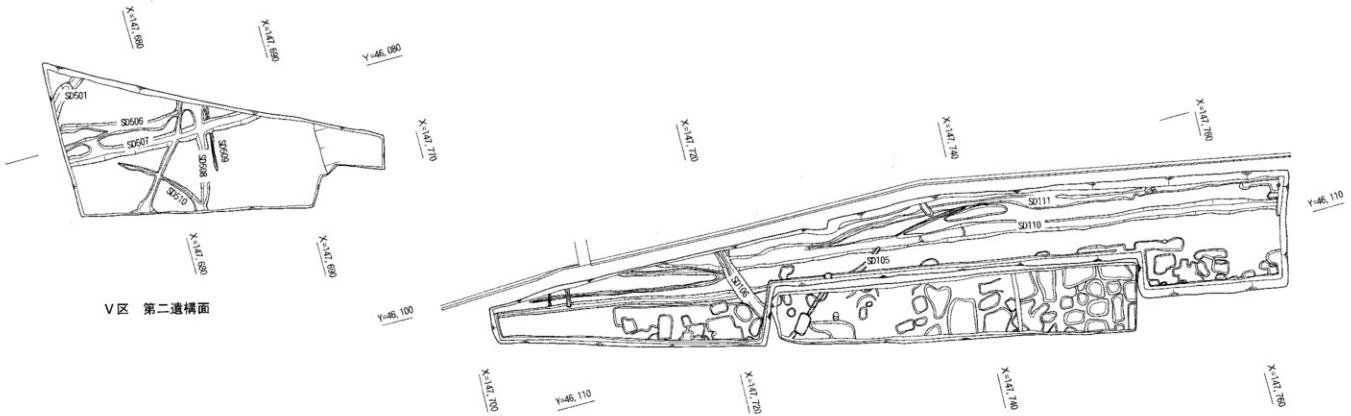
第8層：弥生時代以前の地山となる黄色粘土の堆積層である。上記の第6層によりかなり搅乱、削平を受けるが、調査地の南部では後期旧石器時代に属する石器類が出土している。火山灰分析（後述掲載の分析結果参照）では、2次堆積した始良一Tn（AT）による火山ガラスが検出され、上層に見られたK-Ahガラスが含まれないことから、K-Ah降灰以前でAT降灰以降の堆積物であると考えられる。

+ /

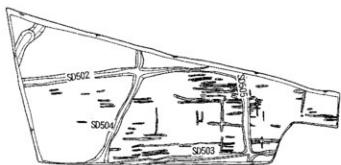


第2図 調査区設定図 (1/2000)

0 100m



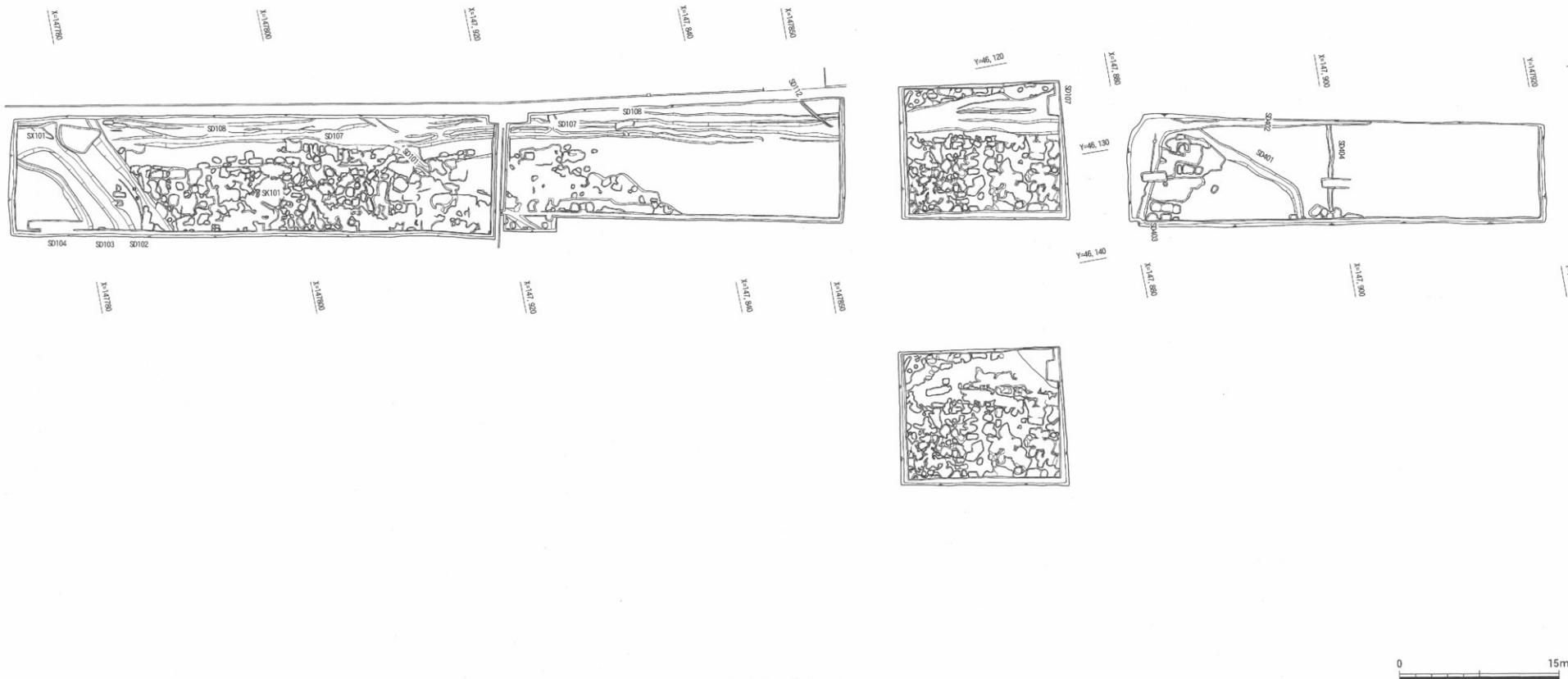
V区 第二造構面



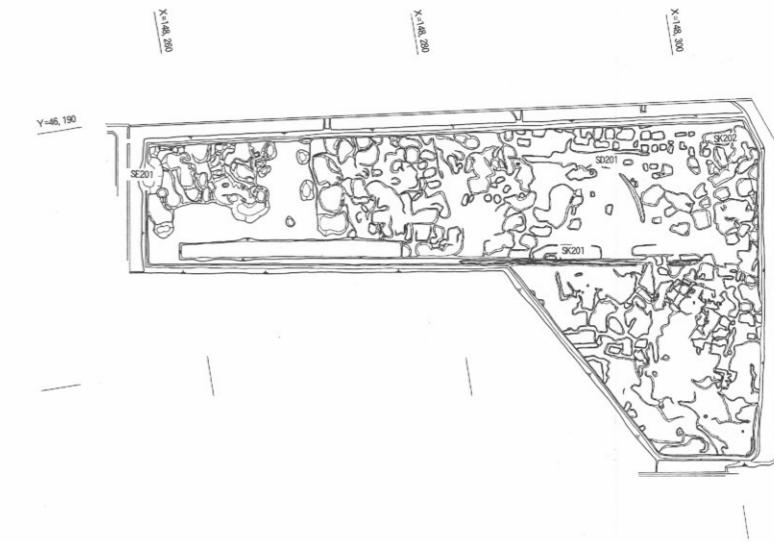
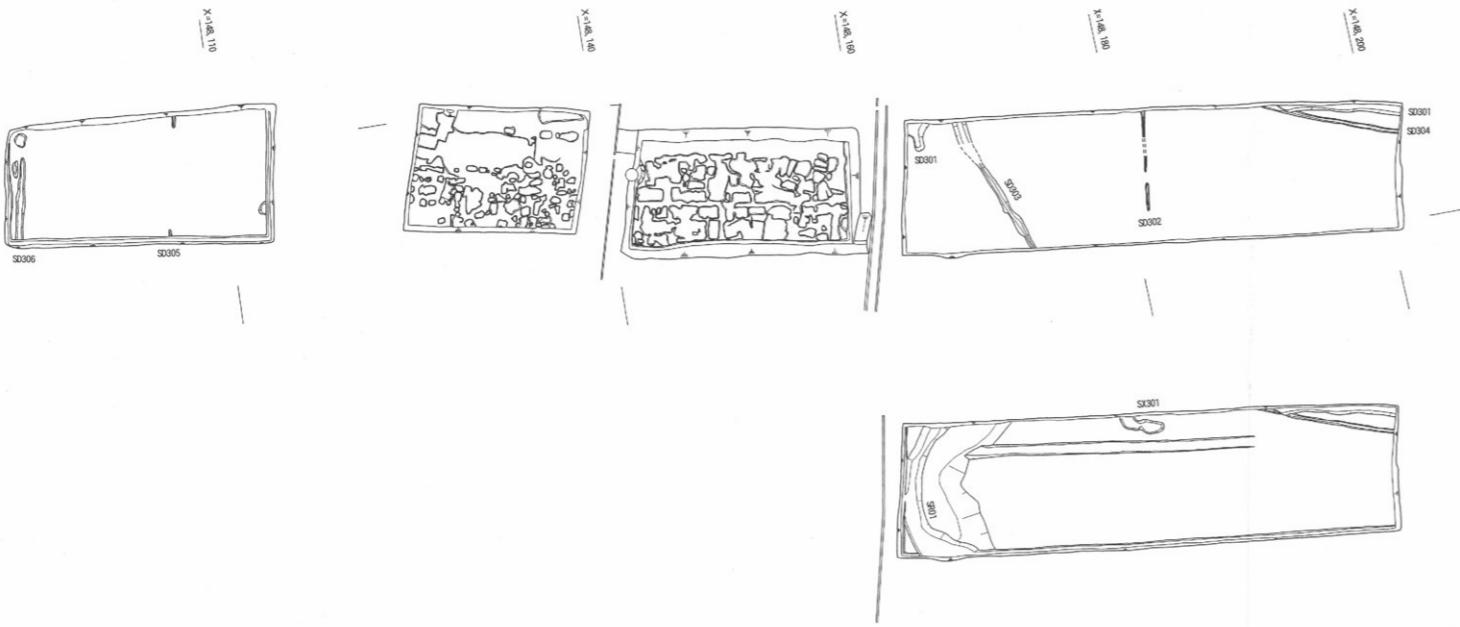
V区 第一造構面

第3図 造構配置図①



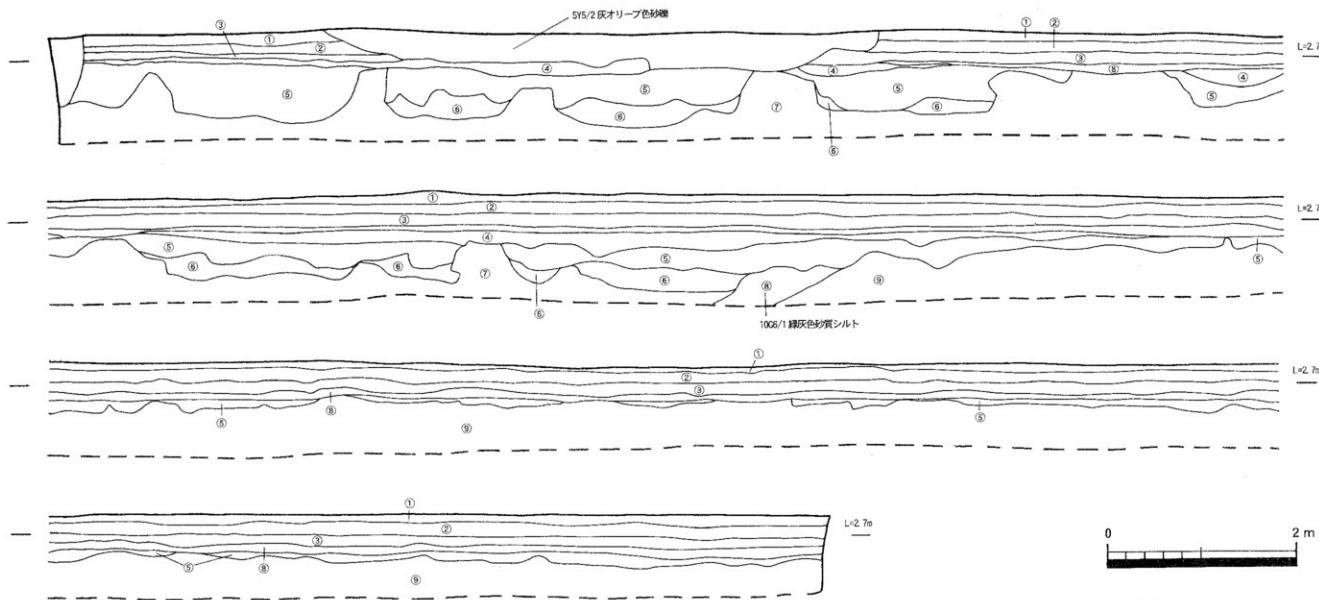


第4図 遺構配置図②



第5図 造構配置図③

0 15m



① 現耕作土

② SY5/2灰オリーブ色砂質土
③ SY6/2灰オリーブ色シルト質極細砂
④ 10YR4/1褐灰色シルト質極細砂

⑤ 10YR4/1褐灰色（第5層）に10YR3/2黒褐色シルトが混じる

⑥ 10YR3/2黒灰色シルトにSY2/1黒色粘土が混じる

⑦ SY2/1 黑色粘土

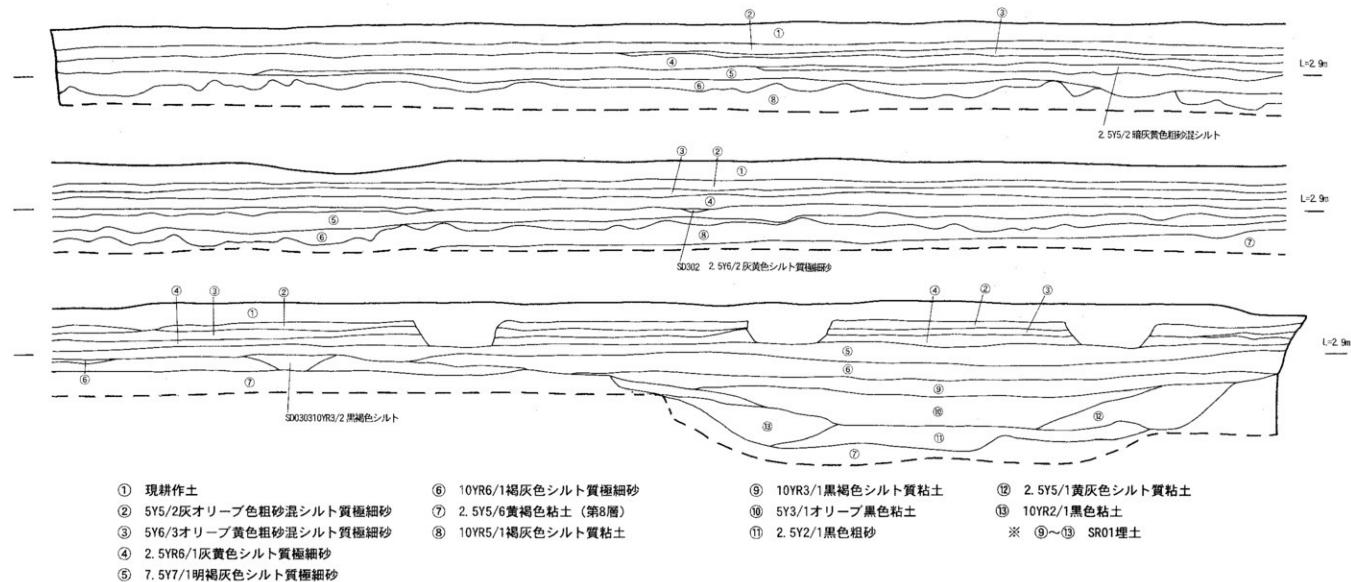
⑧ 2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂

⑨ 2.5Y6/6明黄褐色シルト質粘土（第8層）

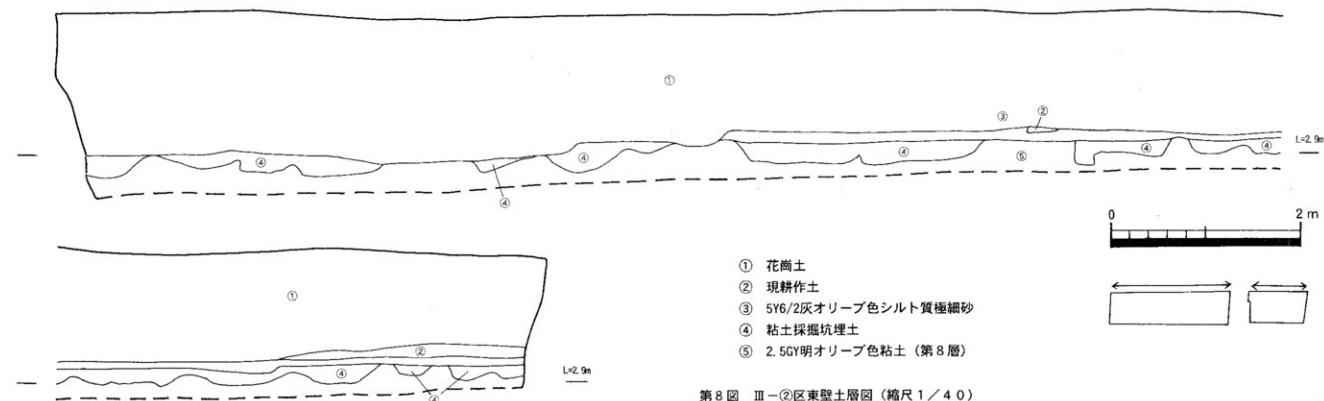
※ ⑤⑥は粘土探査坑埋土

第6図 II区西壁土層図（縮尺1/40）

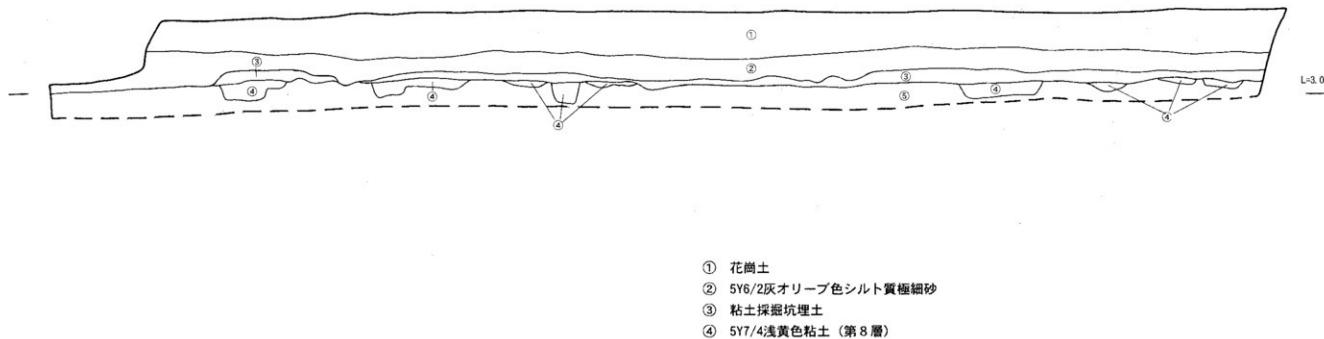




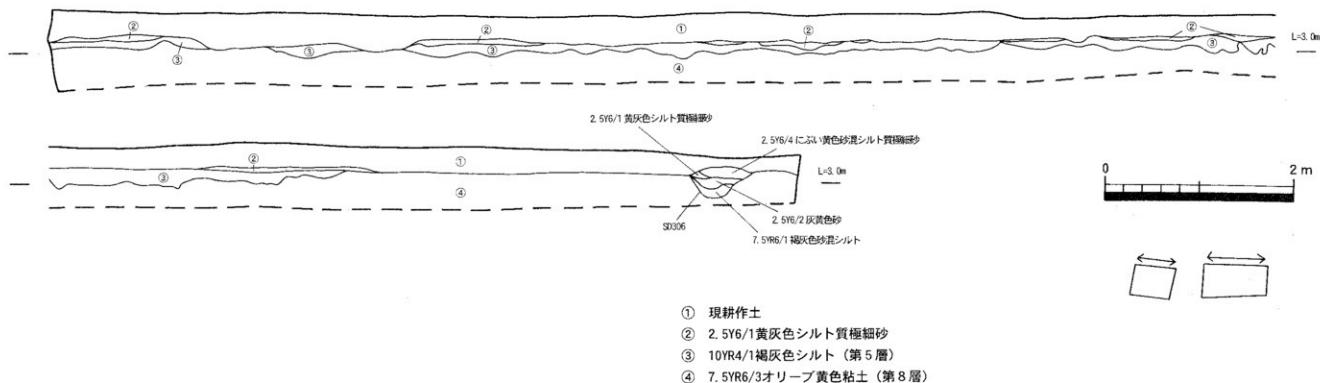
第7図 III-1区東壁土層図（縮尺1/400）



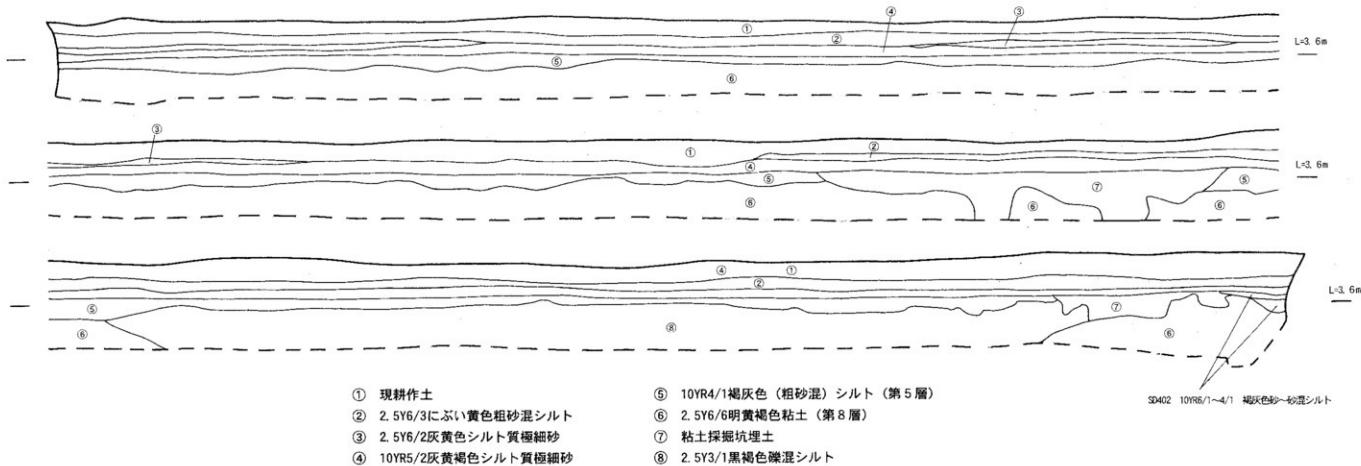
第8図 III-2区東壁土層図（縮尺1/400）



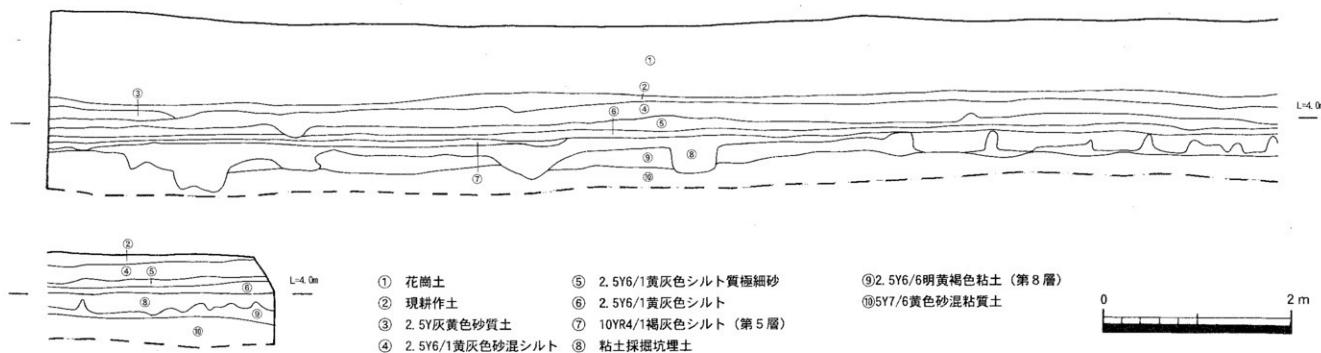
第9図 III-④区東壁土層図（縮尺1／40）



第10図 III-③区東壁土層図（縮尺1／40）

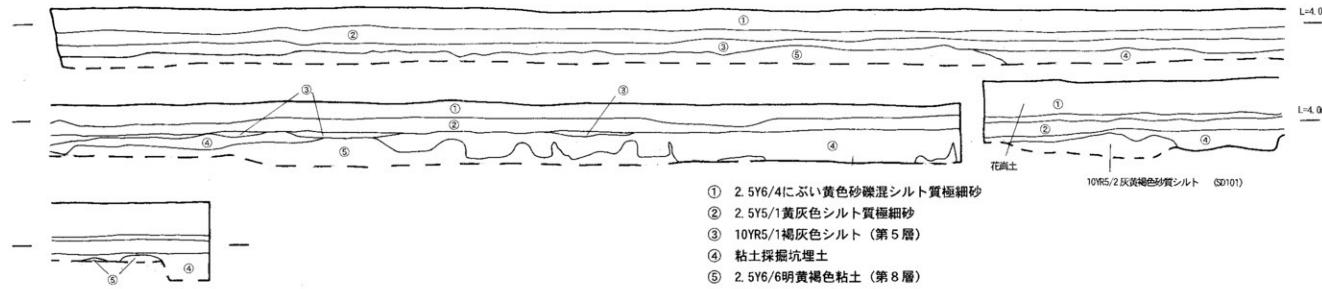


第11図 IV区東壁土層図（縮尺1/40）

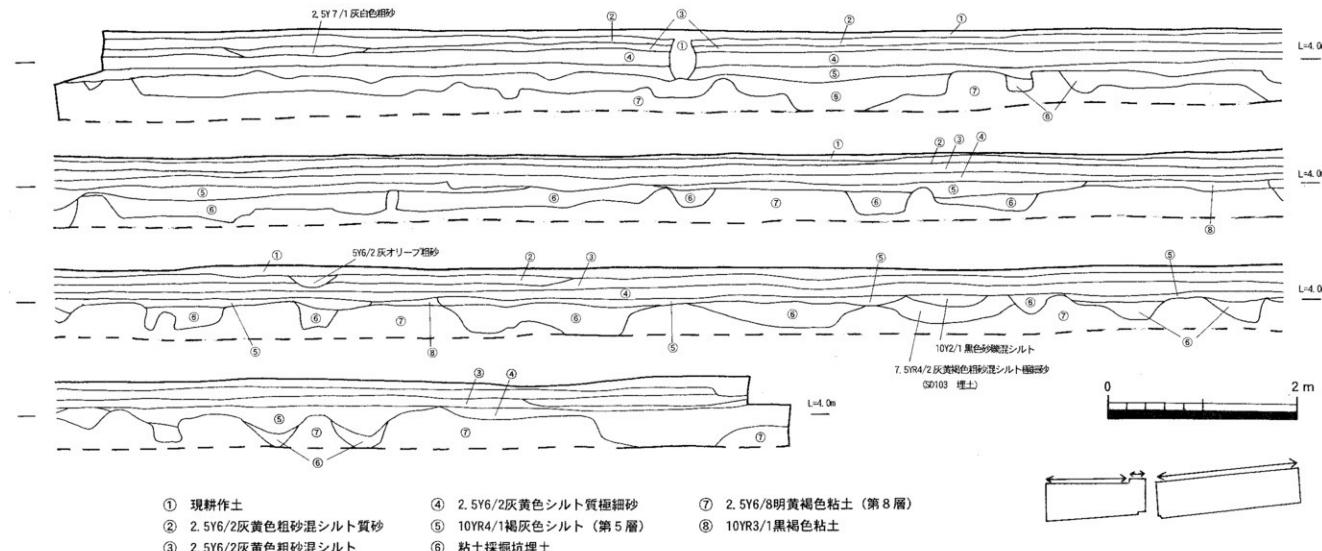


第12図 I-(4)区東壁土層図（縮尺1/40）

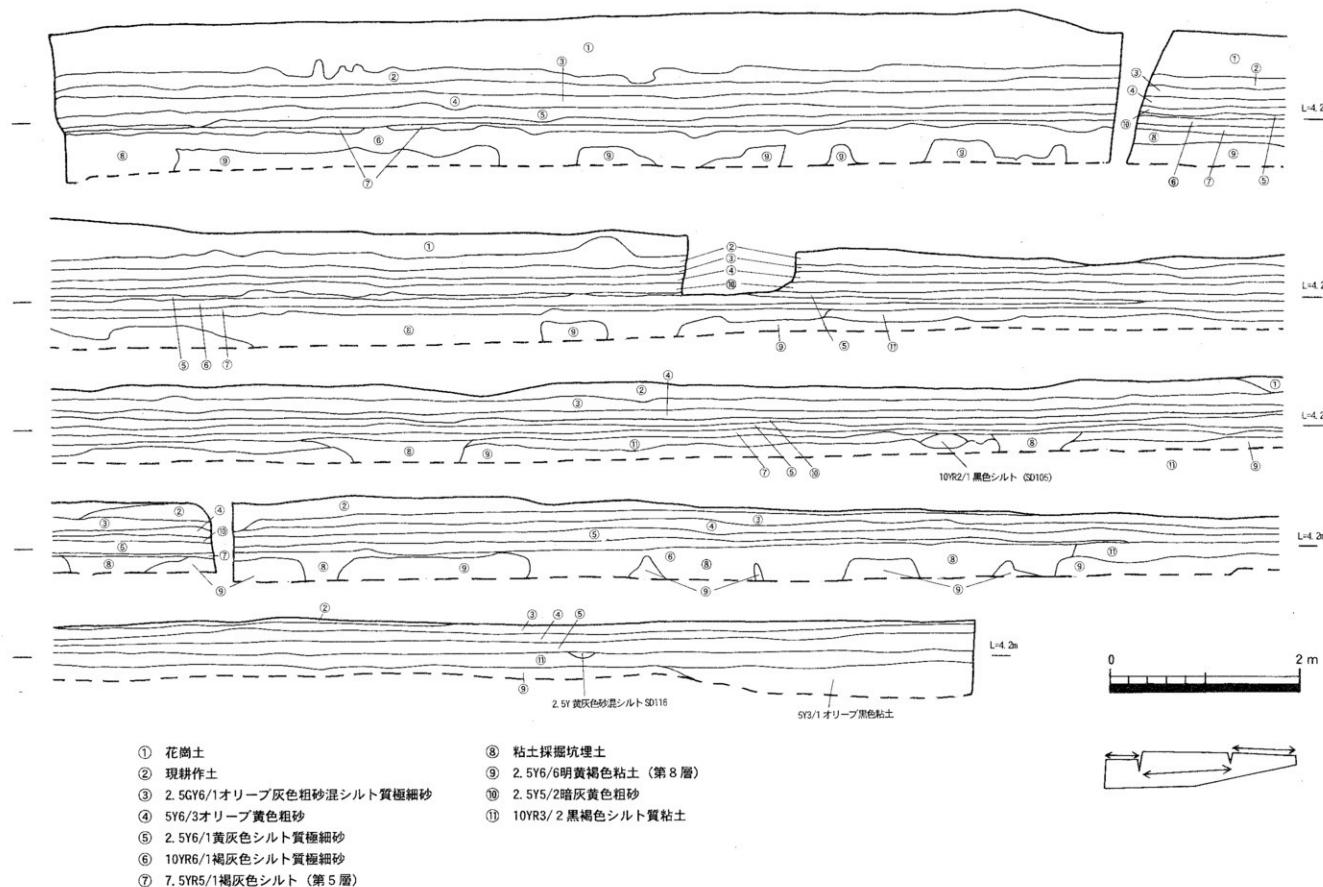




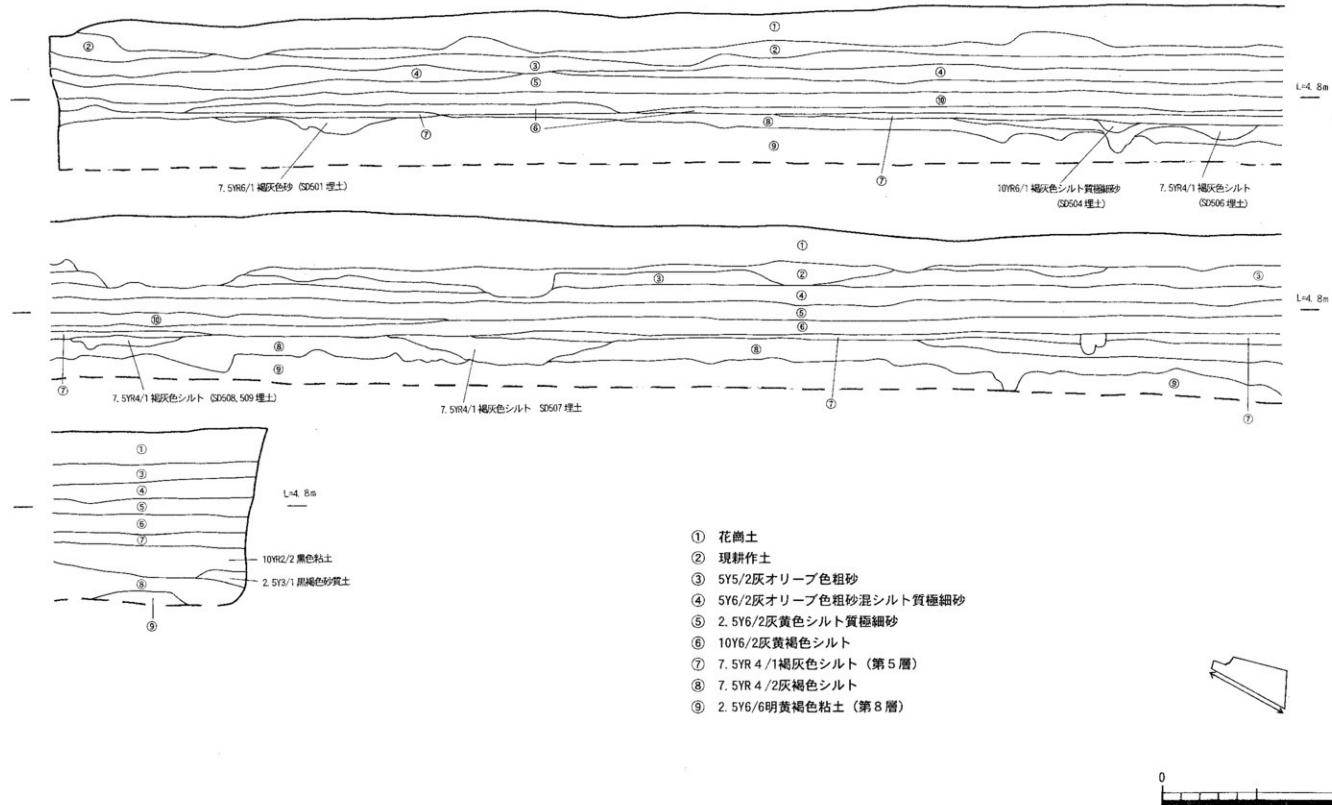
第13図 I-①区東壁土層図 (縮尺 1/40)



第14図 I-②区東壁土層図 (縮尺 1/40)



第15図 I-③区東壁土層図（縮尺1/40）



第16図 V区西壁土層図 (縮尺1/40)

第3節 旧石器時代

旧石器時代の石器の存在は、I-①、②区の古代～中世遺物包含層である第5層、第6層の掘削中に確認された。I-③区調査中に、原位置を留めるものと推測される石器群を第8層直上部で出土した（第18図）ため、土壤をサンプリングし火山灰分析を行った。火山灰分析の結果、旧石器を包含していた黄色粘土層（第8層）は、始良一Tn（AT）による火山ガラスを包含する堆積層と確認できたため、V区及びI-④区において、それまで地山と考えられた第8層の掘削を行った。

調査の結果、第8層より出土した石器は総点数40を数えるが、出土状況は大半が後世の堆積物直下においてであり、散漫な分布を示す（第17、19図）。このため、かなりの削平及び破壊を受けたものと推察される。しかし後世の堆積層より出土した石器においても摩滅がほとんど見られないことから、大きく原位置を変更するものではないと考えられる。

1 第8層出土石器

V区は調査範囲において最も高い地点に位置しており、標高3.9～4.6mにおいて第8層を確認した。北東方向に下る谷状の地形となっており、分布は南西に広がるものと考えられる。14点が第8層より出土している。

V区第8層出土石器（第20～25図）

S1, 2は、盤状剥片の縁辺部に2次加工を施した大型のスクレイパーである。S1は、剥離角126°を測り、石理方向に対し約20°で剥離される。背面に自然面を留め、原礫塊の転磨中に生じたと考えられる衝撃痕が見られる。S2は、剥離角144°を測り、石理方向に対し約5°で剥離される。背面は、薄い剥離痕を除きほぼ自然面を留める。S1, 2とも背面の打面側には、打面調整を行ったと考えられる剥離痕が見られる。S3, 4は接合資料である。S3は、横長剥片で自然面とみられる平坦面を打面とし、剥離される。背面は1枚のネガティブな面で形成される。S4は、横長剥片の石核である。a面において、S3と接合する。S3剥離後の剥離面を打面とし、b面において交互に剥離される。底面はポジティブ面で、またb面には逆方向からの剥離痕が残る。S5～11は、剥片類。S12, 13は、打面部に自然面を留める縱長の剥片。S14は横長剥片の石核である。底面をポジティブな面として打面調整の後、石核幅にほぼ一致した剥離がされる。

I-③区は南端部にV区からの谷状の落ち込みが見られ、概ね標高4m前後で第8層を確認した。調査区北部において、素材となる大型の剥片等8点が密集して出土している（第18図）。

I-③区第8層出土石器（第26～32図）

S15, 16は接合資料である。S15は剥離角140°を測り、石理方向に対し20°でS16より剥離される。底面はネガティブな面で、背面には主要剥離面と同方向の剥離痕が認められる。またこの剥離面の片側に打面調整を行い、a面において石理方向に平行する剥離が行われている。S16は、細長い亜角礫を用いたとみられる石核である。上記の様に、b面下半の横方向剥離痕（石理に平行）を底面とし、S15が剥離されている。背面の上部には、打面調整痕が認められる。S17は盤状剥片である。剥離角157°を測り、石理方向に対し20°で剥離されている。背面には打面側からの調整痕があり、c面において石理方向に平行する剥離痕が認められる。S18は盤状剥片石核である。a面及びb面は大きな1枚のネガティ

ブな面であり、石理方向に対し 0° 及び 20° で交互剥離を行い盤状の剥片を得たものと考えられる。S 19～S 21は、やや小型の板状剥片である。S 19, 20の背面は、主要剥離面と同方向の大きなネガティブな面が残る。剥離は石理方向に対し、ほぼ 0° 及び 20° で行われている。S 22は盤状剥片を素材とする石核である。b面（ネガティブ面）を打面、a面（ポジティブ面）を底面とした剥離痕がc, d面において認められる。

I-④区は、南から続く微高地から北へと下る地形となる。第8層は標高3.4～3.8m程において確認できる。18点が出土している。

I-④区第8層出土石器（第33～35図）

S 23は一側縁加工のナイフ形石器である。S 24は翼状剥片。両側部に僅かに自然面が認められ、山形となるような打面調整が施される。底面はポジティブな面で、背面には2枚の剥離痕が見られる。S 25は背面、腹面側が不明だが、打面部の2次加工が急斜度のためナイフ形石器と考えられる。先端部には、一部自然面が残る。S 26, 28～30, 34の横長剥片は背面に複数の剥離痕が認められ、主要剥離面と剥離方向が異なるものが見られる。打面調整は僅かで、打面はほぼ平坦かネガティブな面となっている。以上から、並列及び交互剥離により生じた剥片と推察される。S 40はa, b面に交互剥離によって生じた剥離痕が残る。剥離は、石理方向に対し約 20° と順目で行われる。またb面においては打面を移転したと考えられる剥離痕がある。

以下は、後世遺構の2次堆積物より出土した石器である。73点を図化した。

ナイフ形石器（第36, 37図）

一側縁加工のもの（S 41, 45）と基部に加工を施した二側縁加工のもの（S 51, 53）がある。S 41, 45は長さ、幅に対し厚みがあり先述のS 23とほぼ同等の規格を持つ。S 69に見られるような翼状剥片を素材としたものと推察される。42は細身の縦長状の剥片を素材とし、上半部にのみ加工を施す。S 49の素材となった剥片背面には、複数の剥離痕が認められる。S 50は大型のナイフ形石器である。S 51は刃縁側の基部に加工を施すもので、剥片の腹部にも調整痕が見られる。その他、S 52等底面の取り込みが一定しない剥片を使用するものも見られる。

スクレイパー（第38, 39図）

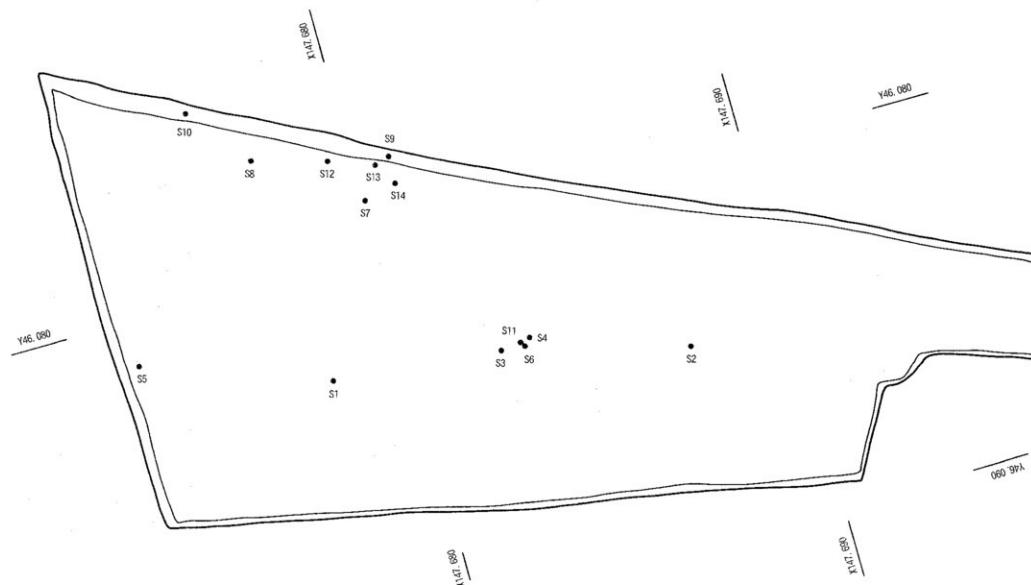
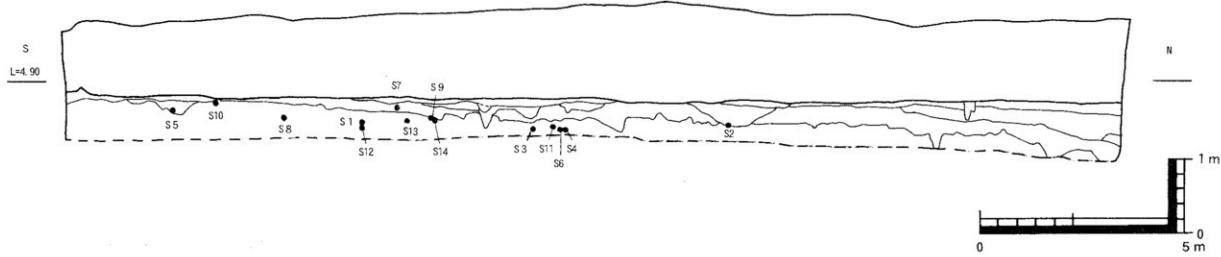
剥片の縁部分に角度の浅い加工を施すもの（S 54, 58, 62～65）、急角度の加工を施すもの（S 55, 57, 61）がある。S 56は石理方向に反して剥がされたものに、加工が為される。S 59, 60は急角度の刃部が、円形状あるいは外彎状に取り付けられる。S 66は大型剥片を使用した槍状あるいは舌状を呈するもので、刃部の加工が緻密に施されている。

抉入石器（第40図）

剥片刃縁部を数回の加工によりノッチ状に仕上げたものが2点出土した。S 68は、ナイフ形石器等、他の器種も考えられる。腹面及び底面に縁部の厚さを減じる調整痕が見られる。

翼状剥片（第41図）

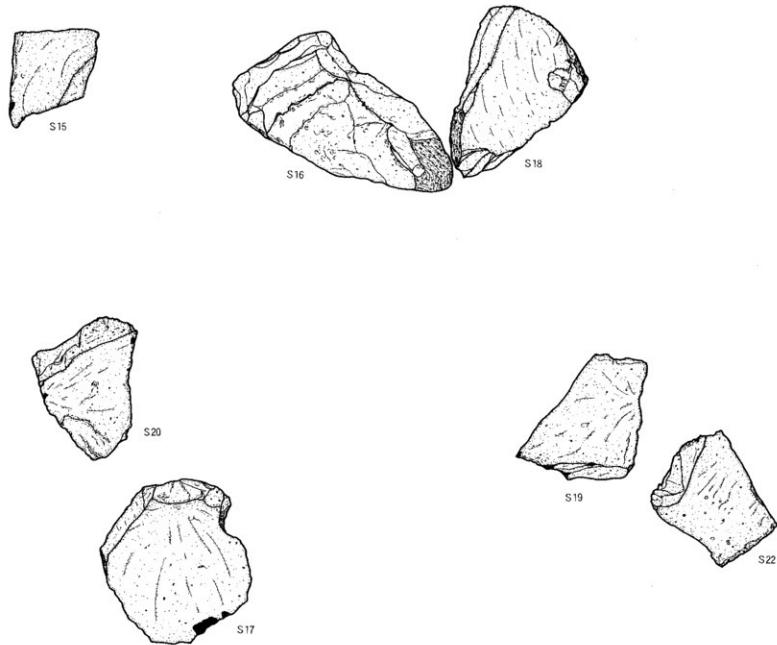
横長剥片のうち緻密な打面調整により山形を呈するもの4点を翼状剥片としたが、S 69以外は形状及



第17図 V区第8層石器出土分布図 (1/100)



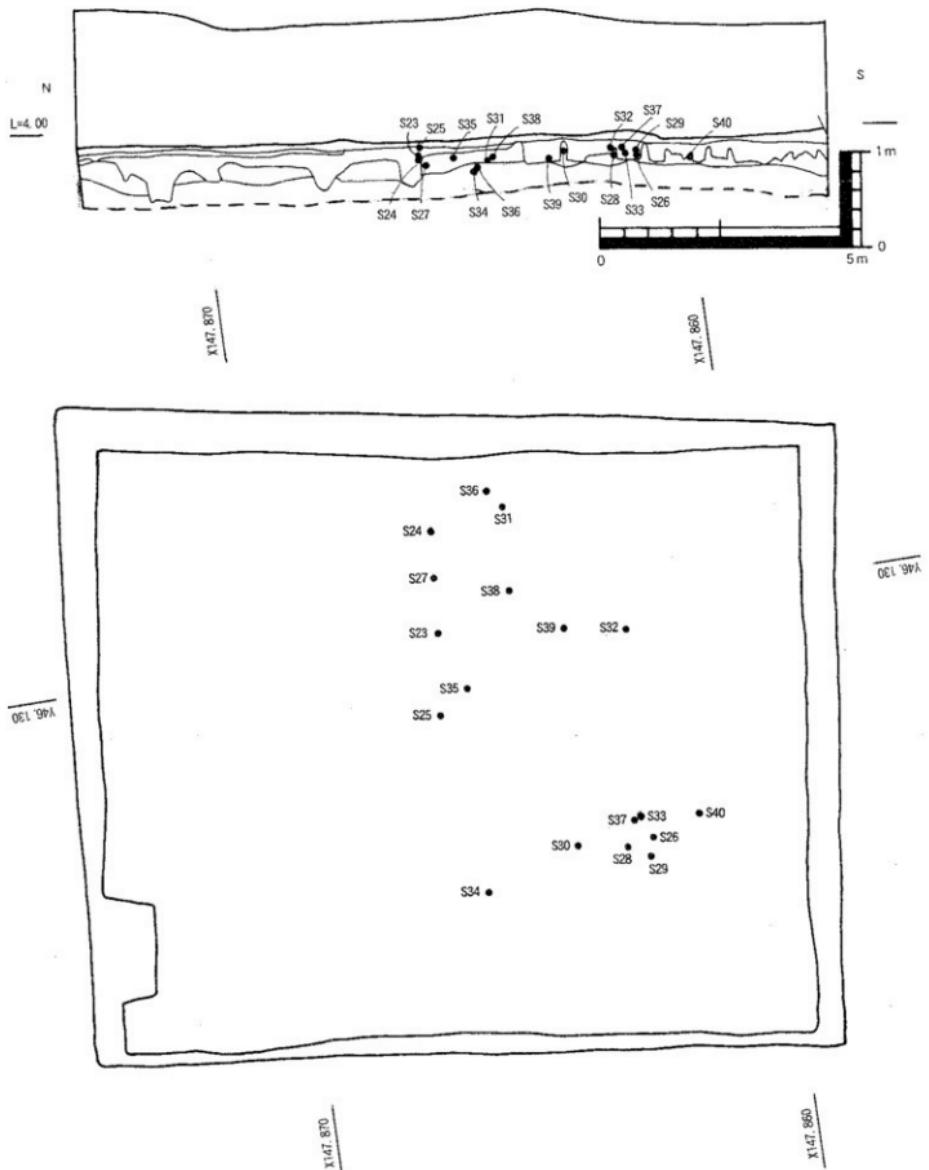
A



B

A X=147.752
Y=46.107
B X=147.752
Y=46.108

第18図 I-③区第8層石器出土状況図 (1/3)



第19図 I-④区第8層石器出土分布図(1/100)

び底面の取り込みが不定形で、S 72は底面がネガティブな面となっている。

剥片（第42～45図）

剥片は一部に縦長状のもの、不定形なものが見られたが、大半を横長剥片が占める。S 83～88等、打面は平坦及びネガティブな面とするものが多く、調査を行ったものでも緻密なものは見られない。底面の構成においては、底面を持たないものは全体で1/4程あり、それらは原礫及び素材の小口付近から剥ぎ取られたと考えられるものが多い。S 74、75等は、底面の取り込みが不定形で剥離が作業面全域に広がらない。また背面に残された剥離痕は、複数見られ主要剥離面の剥離方向と合致しないものが多い。以上からすれば、交互及び並列剥離技法により剥ぎ取られた剥片が多く含まれるものと考えられる。

石核類（第46～48図）

S 101, 103, 105はポジティブな面を底面とし、石核幅と剥離痕の幅がほぼ一致するものである。S 101, 103は粗い打面調整を行い、S 105は大きな剥離痕の稜上付近に打撃が加えられている。対してS 102に見られる剥離痕には、石核幅と一致するものがない。打面を逆側に転移させ、石理方向にほぼ沿った交互剥離を行ったものと考えられる。c面中央においては、打面調整と考えられる石理方向に対し直交した剥離痕が認められる。S 101～103, 105は緻密なサスカイトが使用されているためか底面、剥離面が凹凸状の波打つのが見られる。S 104は、a面に残る2つの剥離痕より生じた稜上を打撃しb面において大きな横長の剥片を得たと考えられるが、その他は調整痕と目的剥片の剥離痕との区別がつき難い。先端部には僅かに剥離痕が見られる。S 106及び107は、別々に出土したものが各々接合したもので、やや人型の剥片を素材とする。S 106は、a面下方に残る剥離の後、平坦面を打撃し2分している。S 107は、両側部に自然面を留める。a面の小口を剥離の後、稜上を打撃し2分している。

接合資料①（第49～51図）

S 108+109は、背面に自然面を残した盤状の剥片を素材とする接合資料である。接合状態で側部からの剥離後、S 108が剥離されている。その後S 108のa及びb面には剥離痕が残ることから、交互剥離が行われたと考えられる。S 109は山形にする為の丹念な打面調整が行われ、ポジティブな面であるb面を底面として、数回の剥離が認められる。S 109のb面に残る剥離痕からすれば、底面の整った剥片を得ていない。

接合資料②（第52～56図）

S 112は自然面を留め、底面が平坦面の右核。S 110は、一部加工痕の見られる横長の剥片。S 111は、自然面を留める不定形の剥片。接合状態では自然面を有する逆方向からの剥離痕が認められるが、主要な剥離はc面側から為されている。接合資料の剥ぎ取り以前に、c面の方向から少なくとも3回の剥離が認められる。3つの資料が接合したc面に見られる大きな剥離面がS 111の打面となり、石理方向に対し約25°で剥離される。S 110は、ほぼ同位置でS 111の剥離面上に打面を移し、石理方向に対し約20°で剥離されている。

まとめ

香西南西打遺跡では、旧石器とみられるものが192点出土している。そのうち約8割が2次堆積されたものであるが、第8層出土石器と2次堆積層出土石器には風化、摩滅の状態がほぼ同程度であること、また同形の一側縁加工ナイフ形石器が含まれ、剥片及び石核からは同様の剥離技法が考えられることから、大半は同一の文化層に存在したものと推察される。

調査区別の出土数（第3表）ではI区及びV区の微高地部分に集中し、I-④区から北部及びI-③区からV区にかけて谷状の地形となる調査区において減少している。また調査区別重量比が示すように、I-④区にナイフ形石器及び横長剥片が多く見られ、I-③区、V区において大型の素材が出土する等、南部の調査区において大型のもの、北部に小型のものが分布していたことが推定される。

製品となる器種は、一側縁加工若しくは基部加工のナイフ形石器、剥片縁部に加工を施したスクレイバー等にはば限られる。ナイフ形石器には、基部加工された二側縁加工のものが見られる他、翼状剥片を素材として使用されたと考え難いものが含まれる。

典型的な翼状剥片は1点しか出土せず、他は翼状剥片としたが底面をネガティブな面としたり、完全に取り込めていないものであるが、丹念に仕上げられた翼状剥片は搬出された可能性も推察できる。石核からは、交互剥離により多くの横長剥片が生じたものと考えられる。

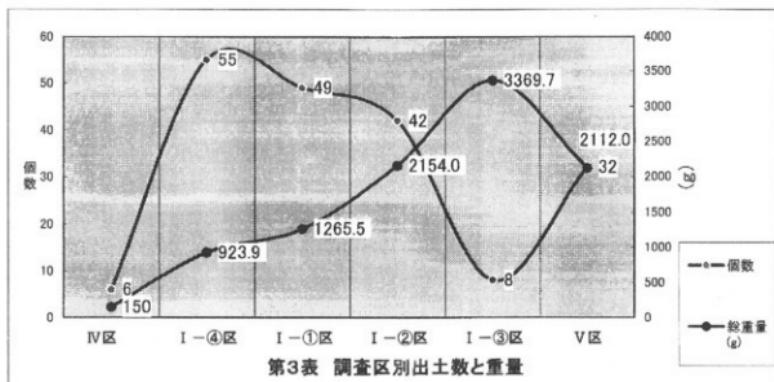
剥片では打面、底面をネガティブな面や平坦な面としたものが多く（第6、7表）、また背面に残る剥離痕も主要剥離方向と異なり複数見られるものが多い（第8、9表）ことから、交互剥離を行ったと考えられる石核と接合資料の状況に矛盾しないものと考えられる。一方で石核の中には、ポジティブな素材剥離面を底面とし、打面調整を行い石核幅に一致した作業面を設定したもの、あるいは稜上を打面としほぼ石核幅一杯の剥離を行ったものが見られる等、瀬戸内技法を反映させたものも出土している。

以上、香西南西打遺跡において出土した旧石器は火山灰分析によりAT降灰後に位置付けられ、交互並列剥離技法により削出されたと考えられる遺物が多く含まれる。また一方では瀬戸内技法を反映させた剥片、石核等が見られ、製品として加工されたものでは一側縁及び二側縁加工のナイフ形石器が主となっている。このことから瀬戸内技法を主体とした石器群において、やや新相に位置付けられるものと考えられる。

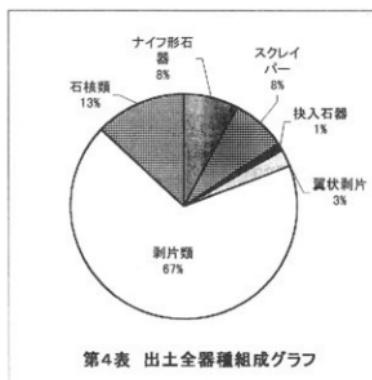
2 繩文時代以降の石器（第57図）

縩文時代以降と考えられる石器類も古代～中世包含層及び遺構から出土しており、代表的なもの8点を選び図化した。

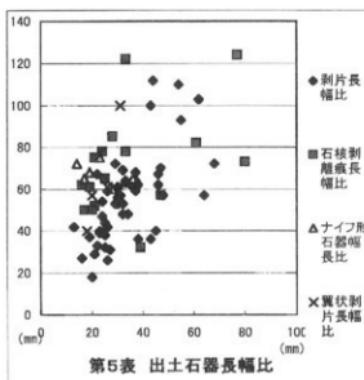
S113は、有舌尖頭器である。先端部を欠損するが、長さ8cm、幅2.4cmを測る。II区北部、中世包含層除去中に出土した。S114は、石槍である。先端部を失うが、基部には両面からの調整が為されている。S115～118は、石鎌である。すべて無茎で、S118以外は凹基式。S119、120は、弥生時代の石小刀、紐孔を持つ磨製石庖丁である。



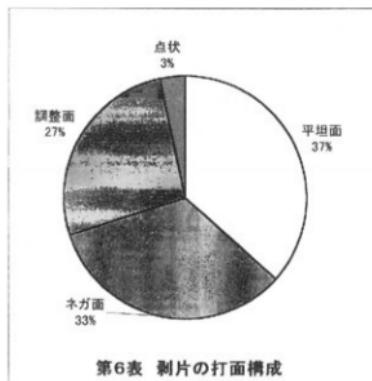
第3表 調査区分別出土数と重量



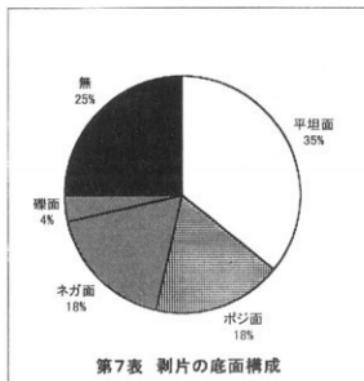
第4表 出土全器種組成グラフ



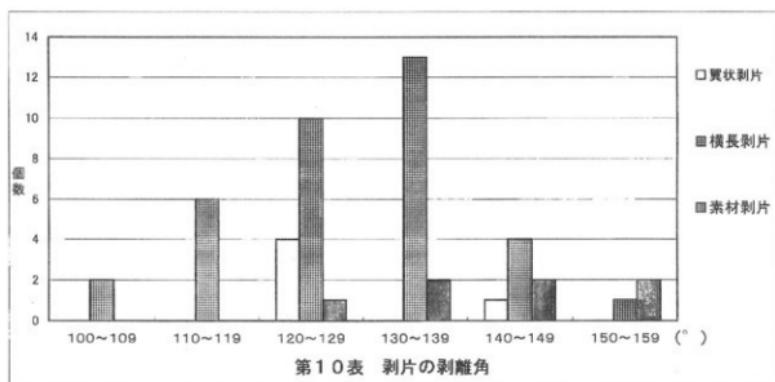
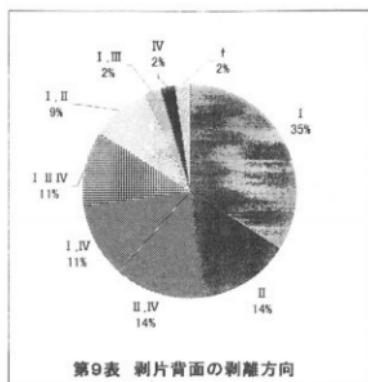
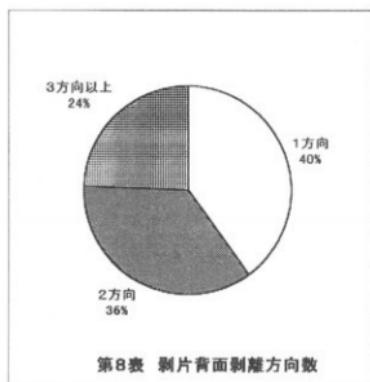
第5表 出土石器長幅比



第6表 剥片の打面構成

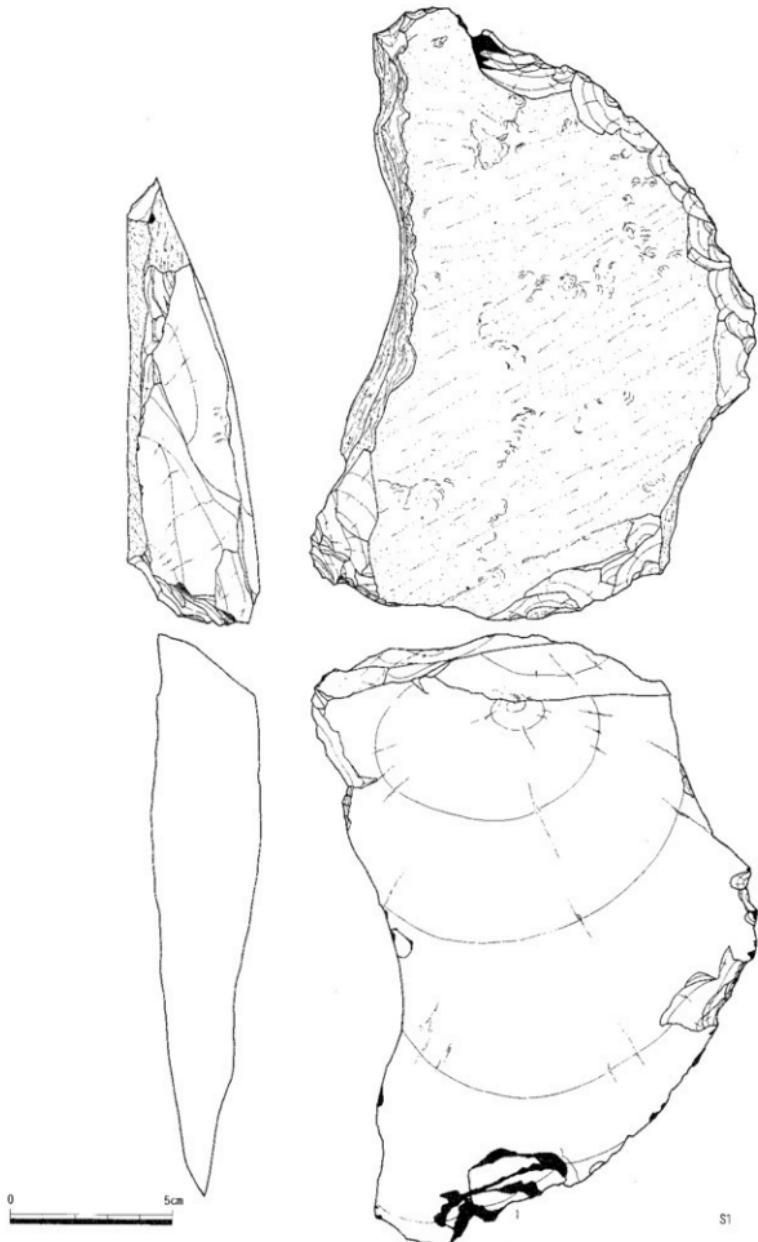


第7表 剥片の底面構成

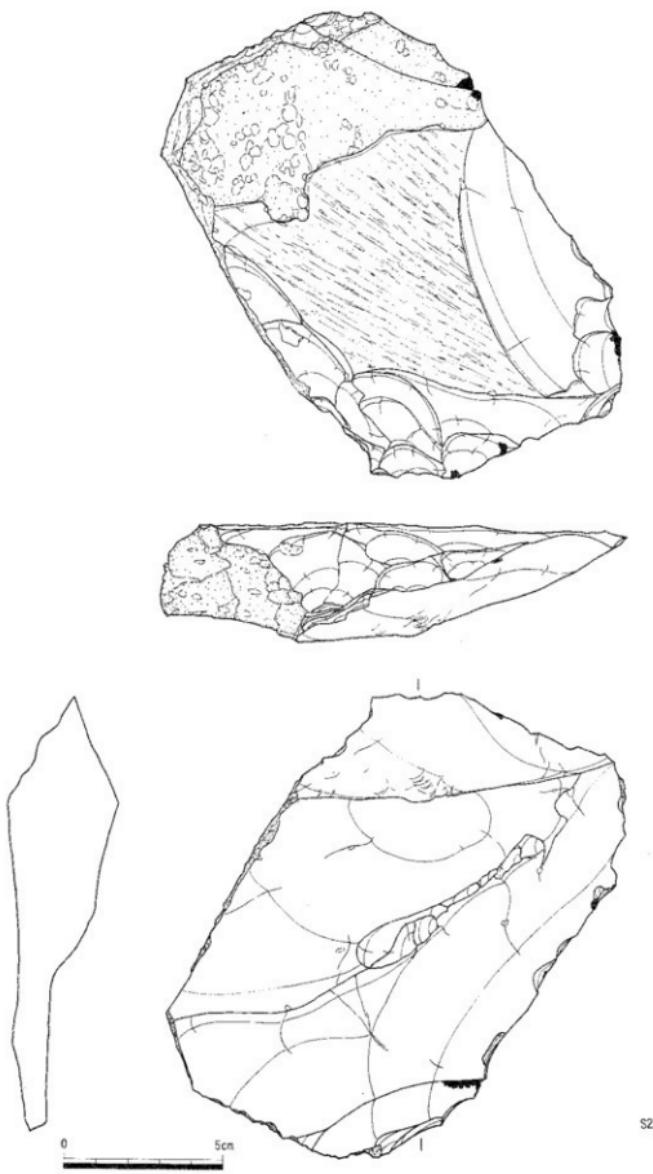


参考文献

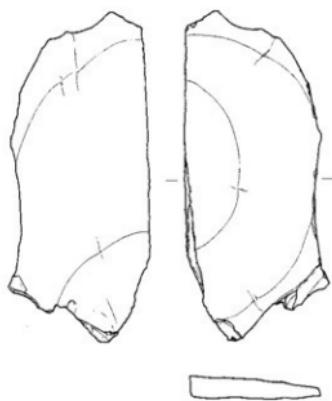
- (財)香川県埋蔵文化財調査センター「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅱ 大浦遺跡」1984
 (財)香川県埋蔵文化財調査センター「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告VI 花見山遺跡」1989
 (財)香川県埋蔵文化財調査センター「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告 三条黒島遺跡 川西北七条Ⅰ遺跡」1997
 奈良県教育委員会「二上山・桜ヶ丘遺跡-第1地点の発掘調査報告-」1979
 松藤和人、平口哲夫、竹岡俊樹「瀬戸内技法の定義」『瀬戸内技法とその時代』中・四国旧石器文化談話会 1994



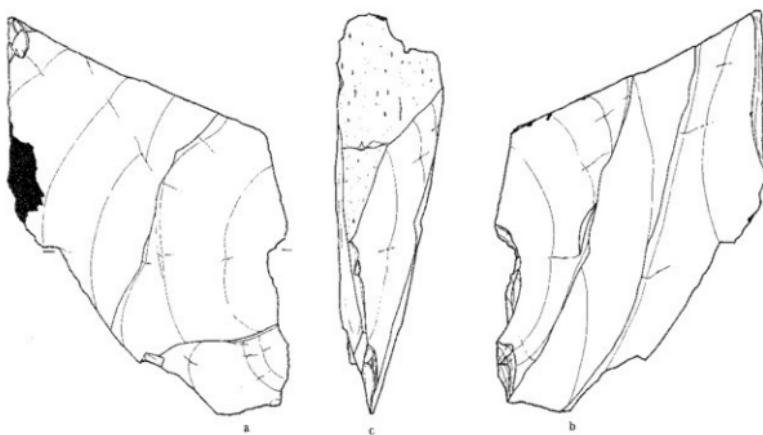
第20図 V区 第8層出土石器①



第21図 V区 第8層出土石器②



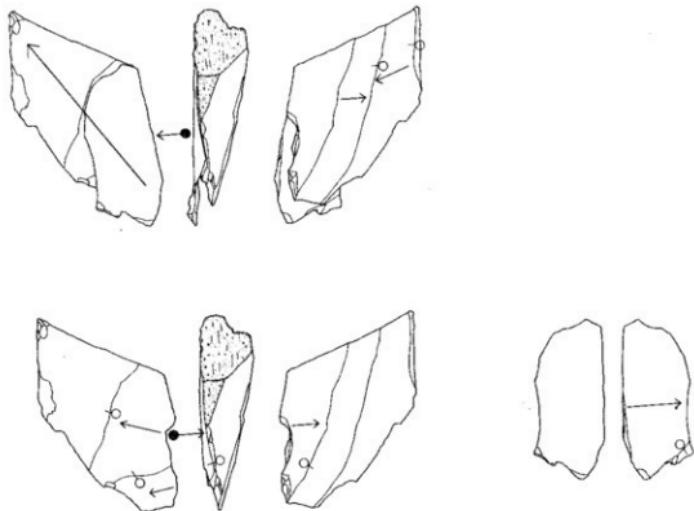
S3



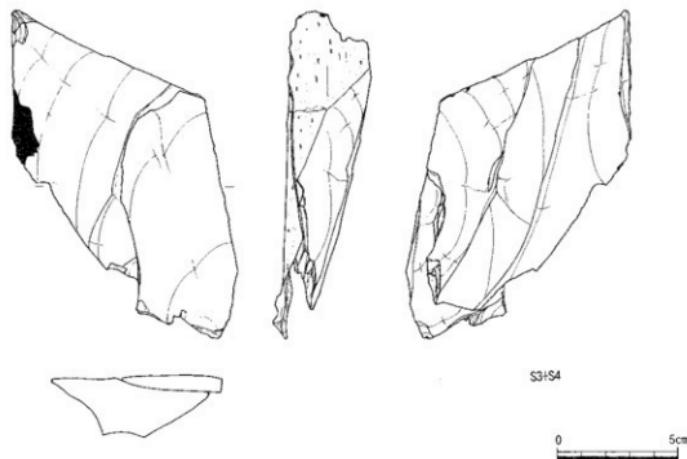
S4



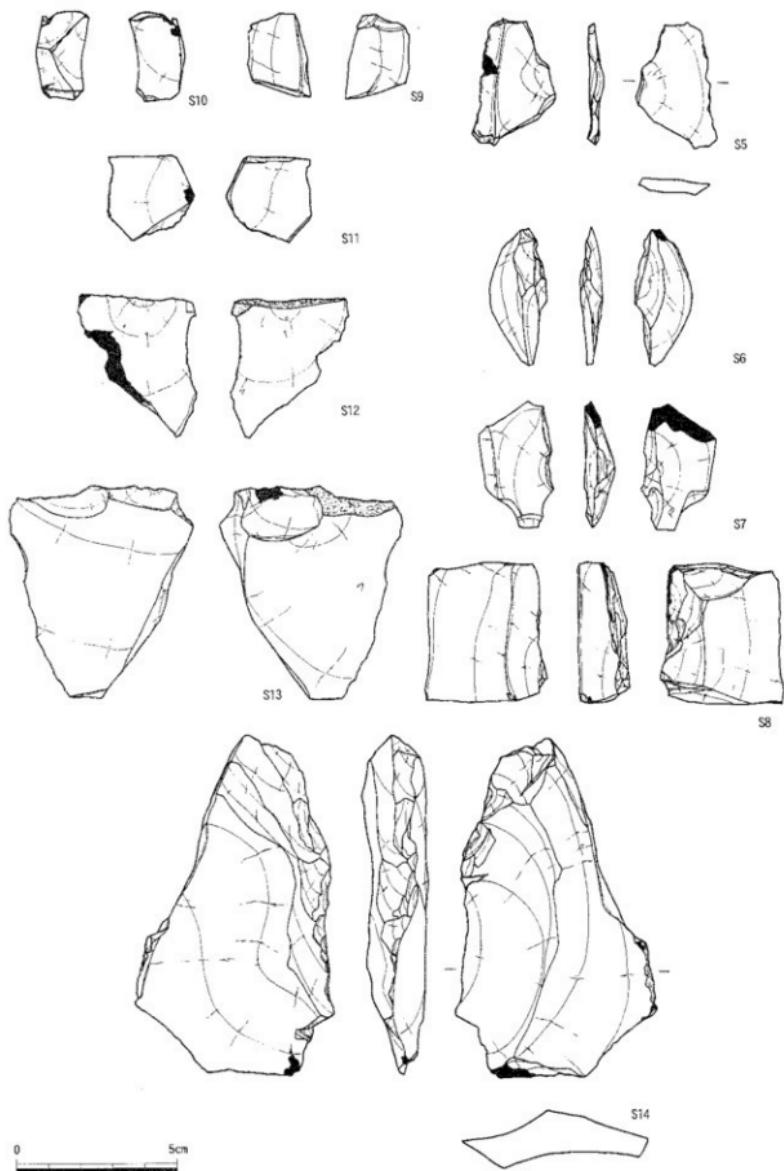
第22図 V区 第8層出土石器③



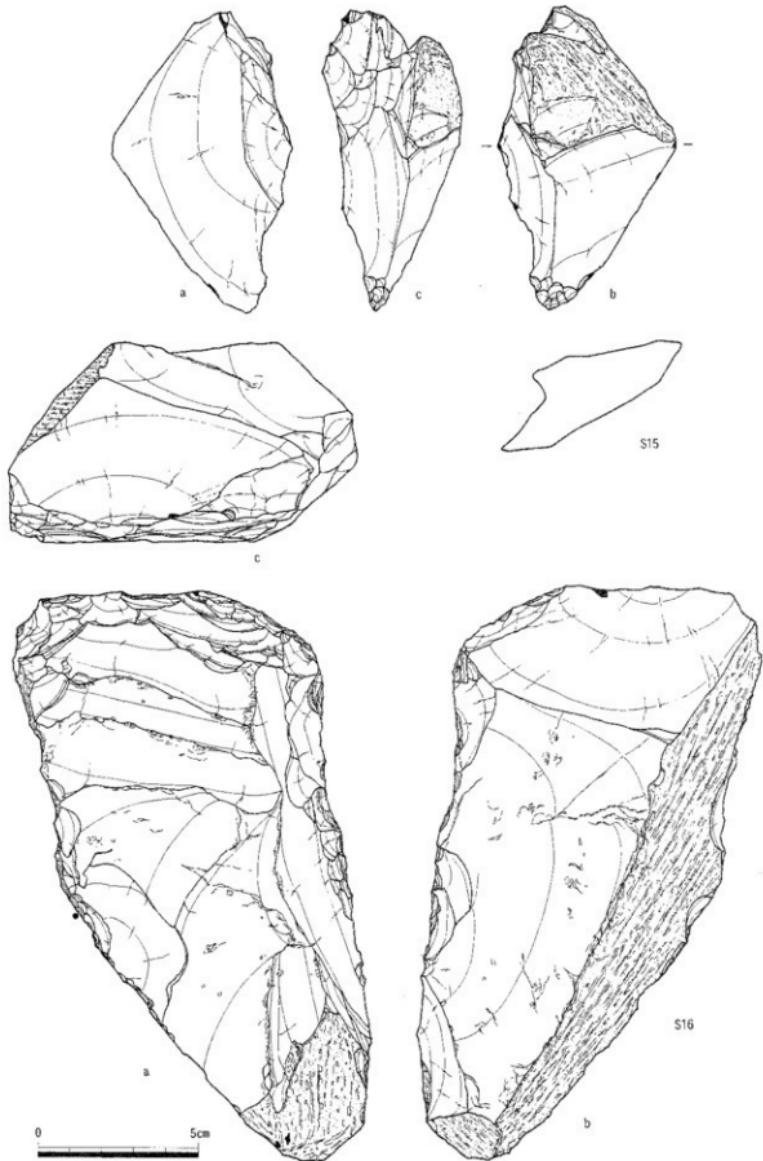
第23図 S3, 4剥離痕観察図



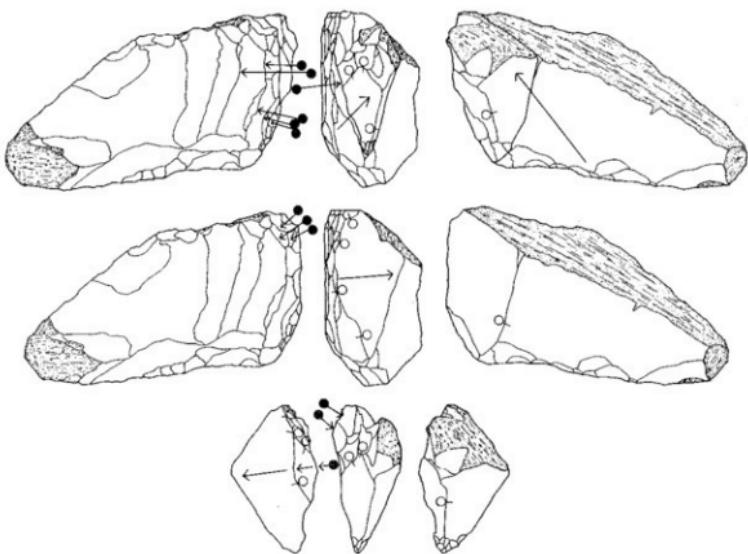
第24図 S3, 4接合図



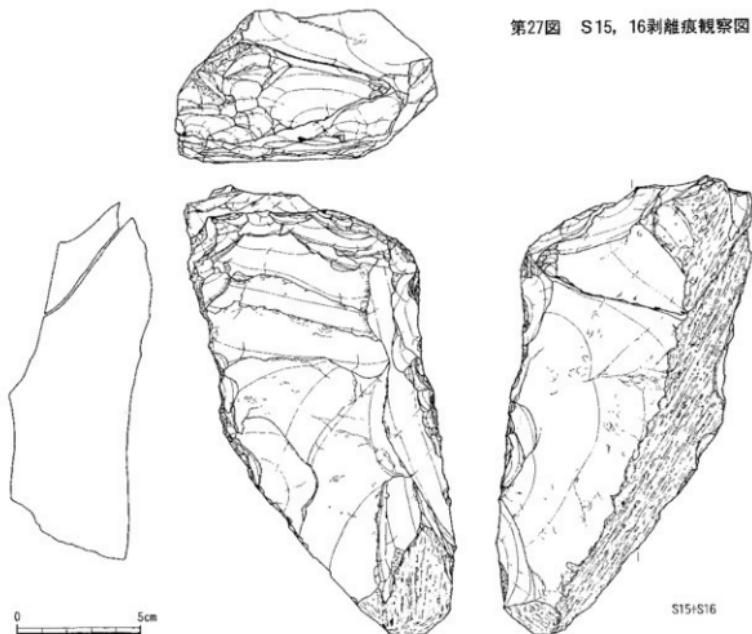
第25図 V区第8層出土石器④



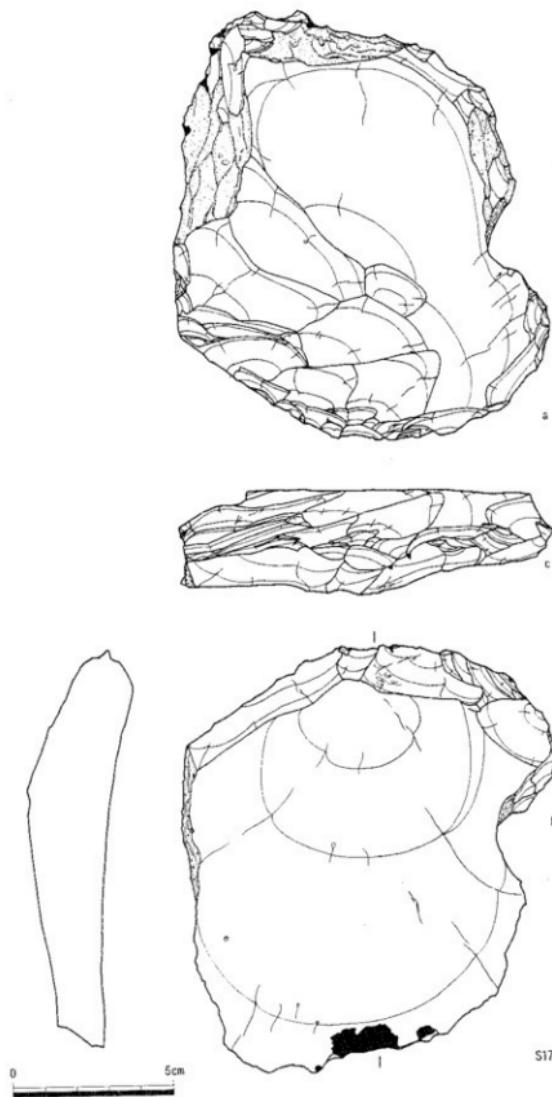
第26図 I-③区第8層出土石器①



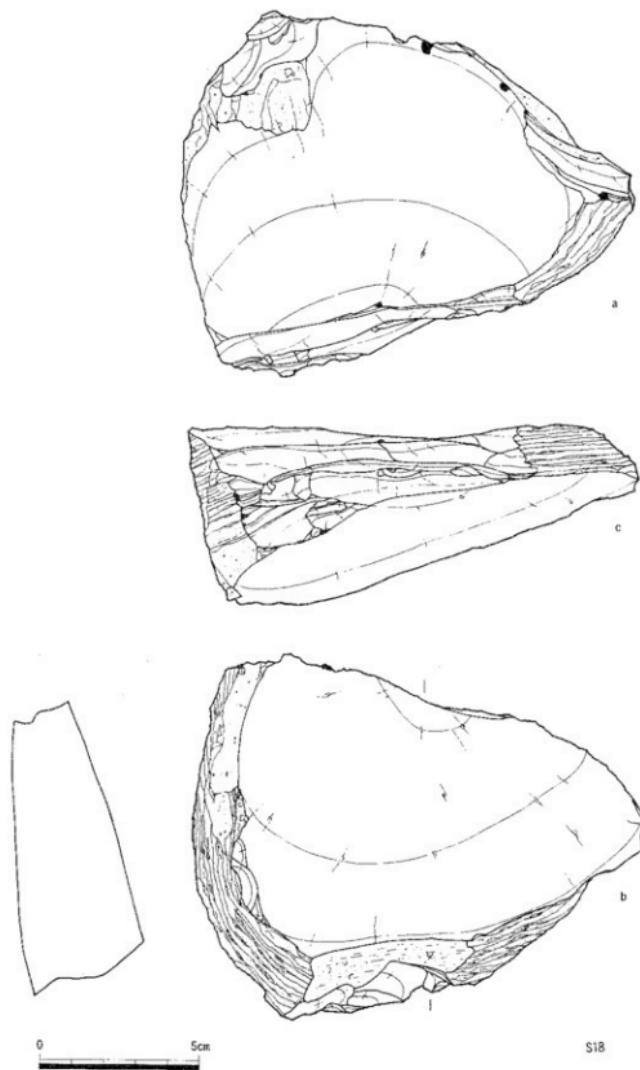
第27図 S15, 16剥離痕観察図



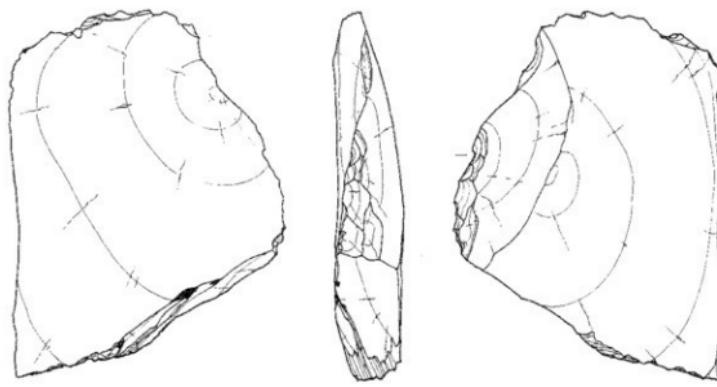
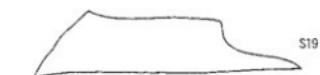
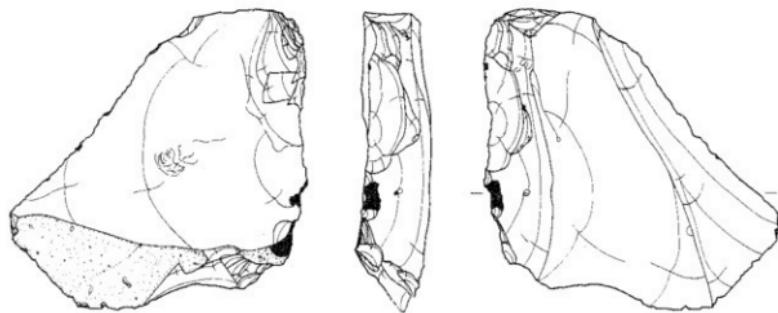
第28図 S15, 16接合図



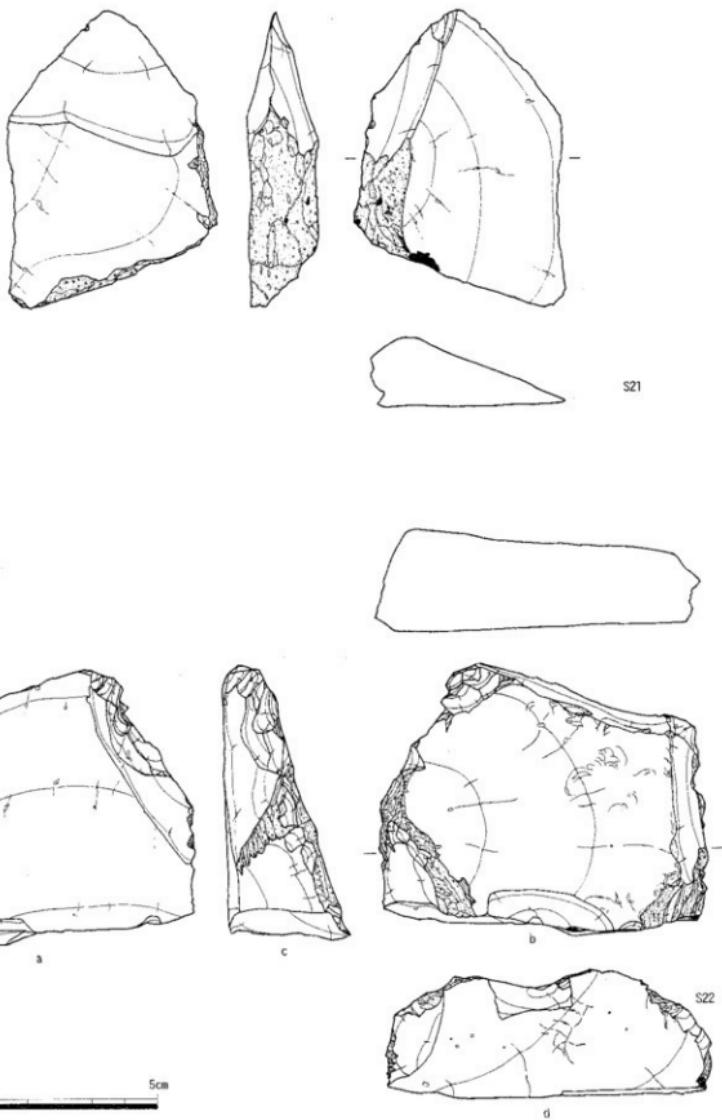
第29図 I-③区第8層出土石器(2)



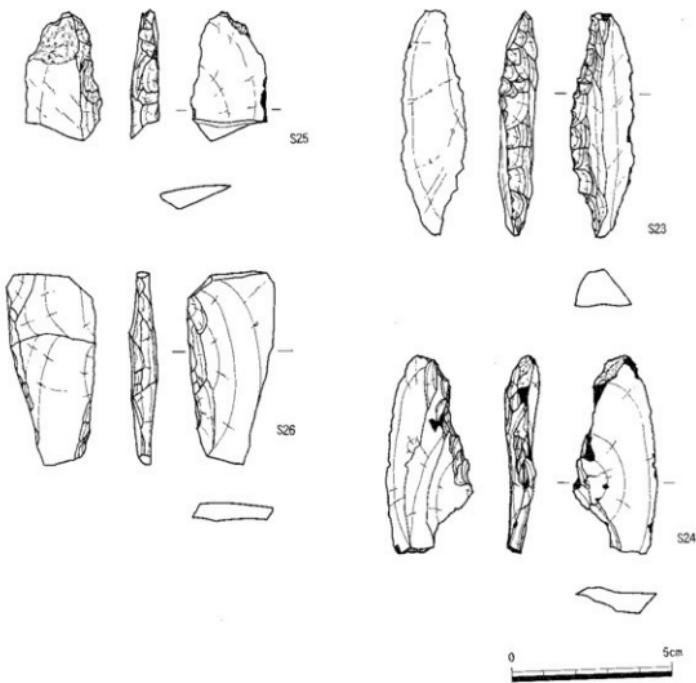
第30図 I-③区第8層出土石器③



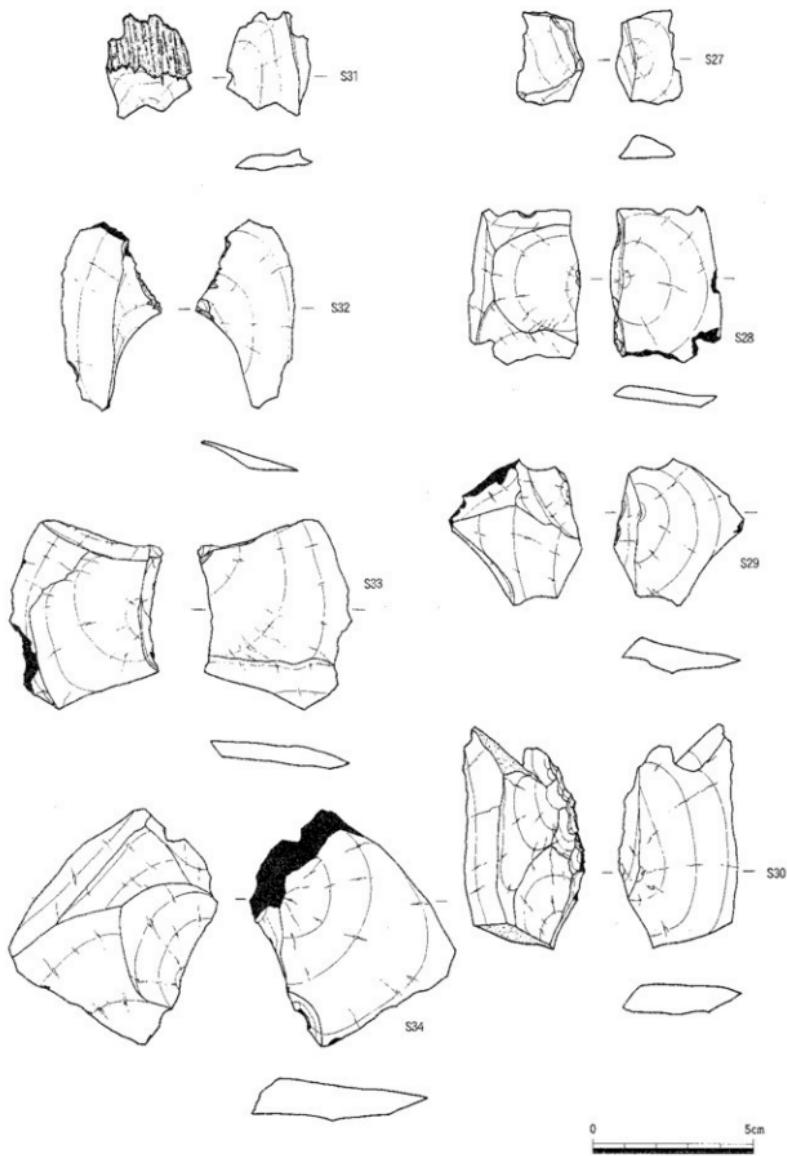
第31図 I-③区第8層出土石器④



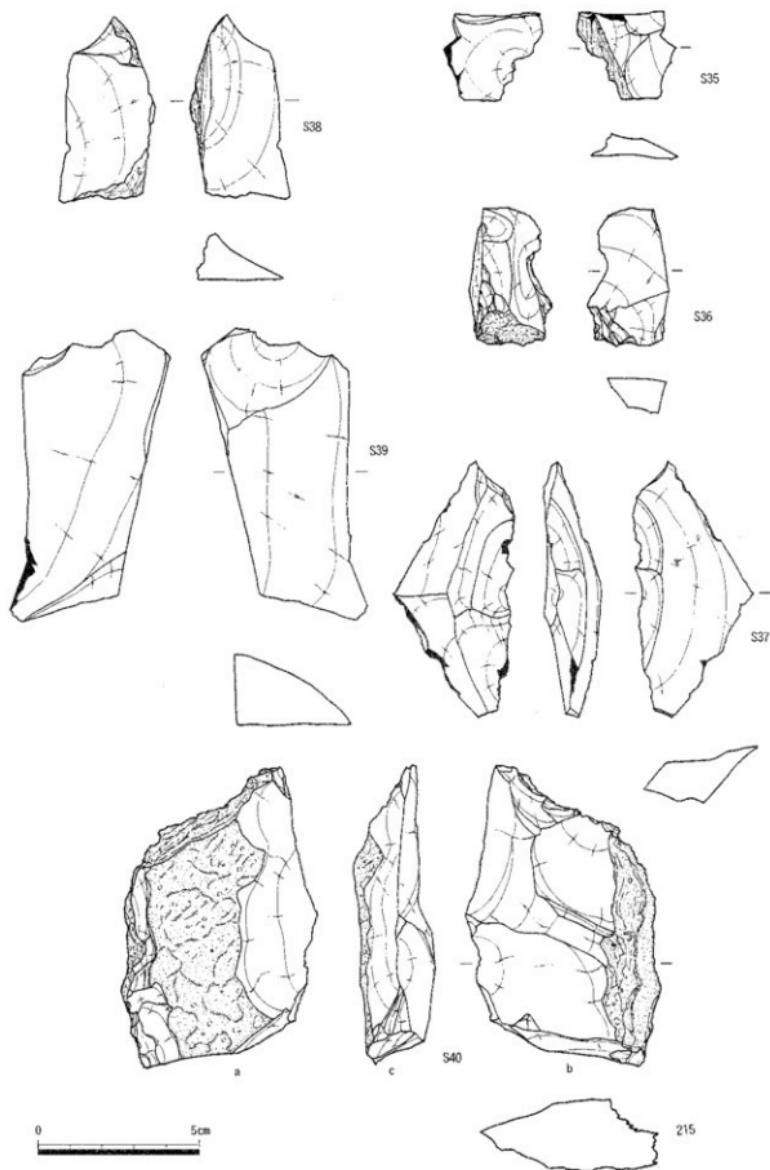
第32図 I-③区第8層出土石器(5)



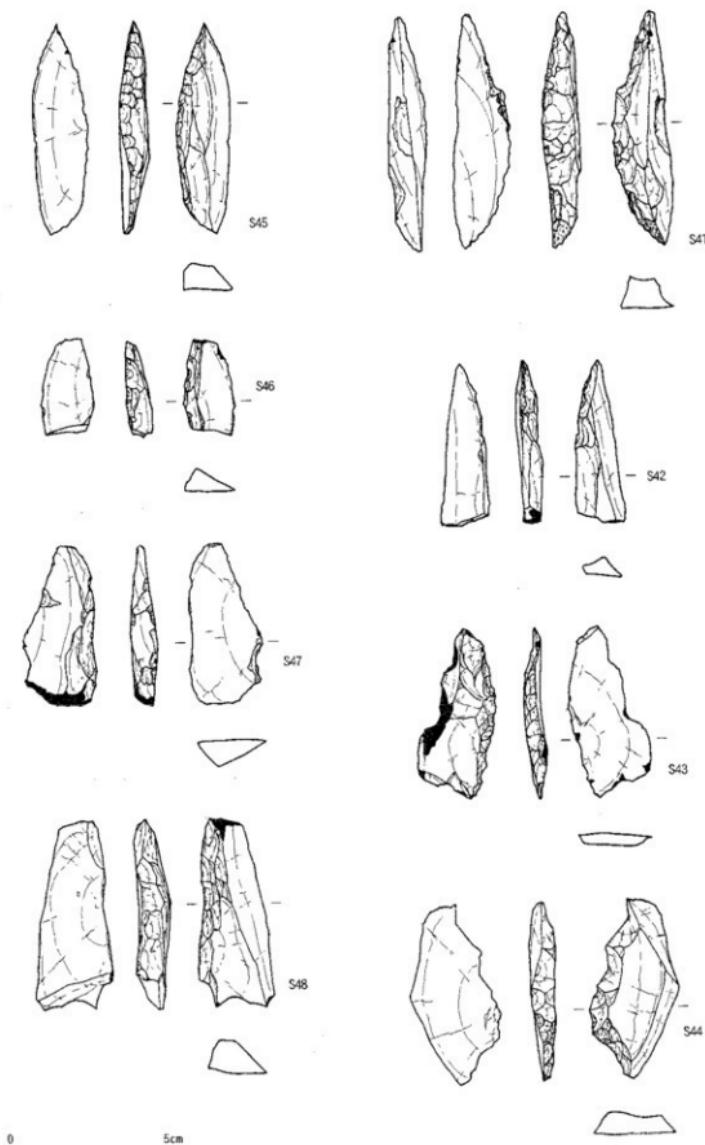
第33図 I-④区第8層出土石器①



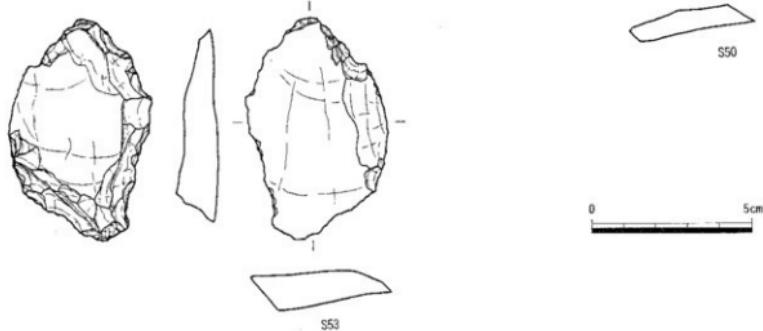
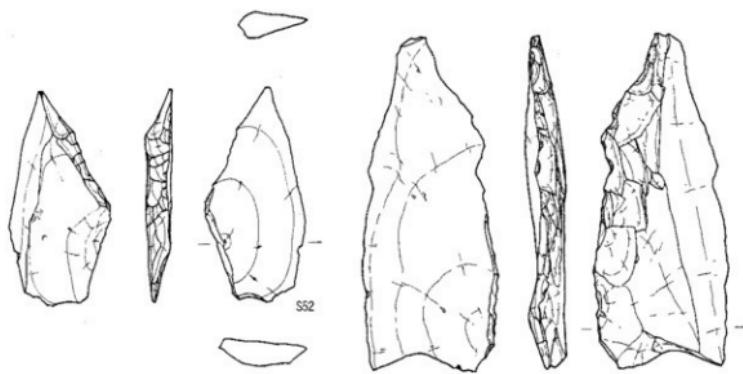
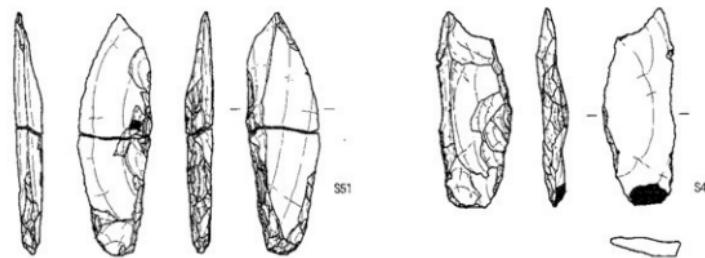
第34図 I-④区第8層出土石器②



第35図 I-4区第8層出土石器③

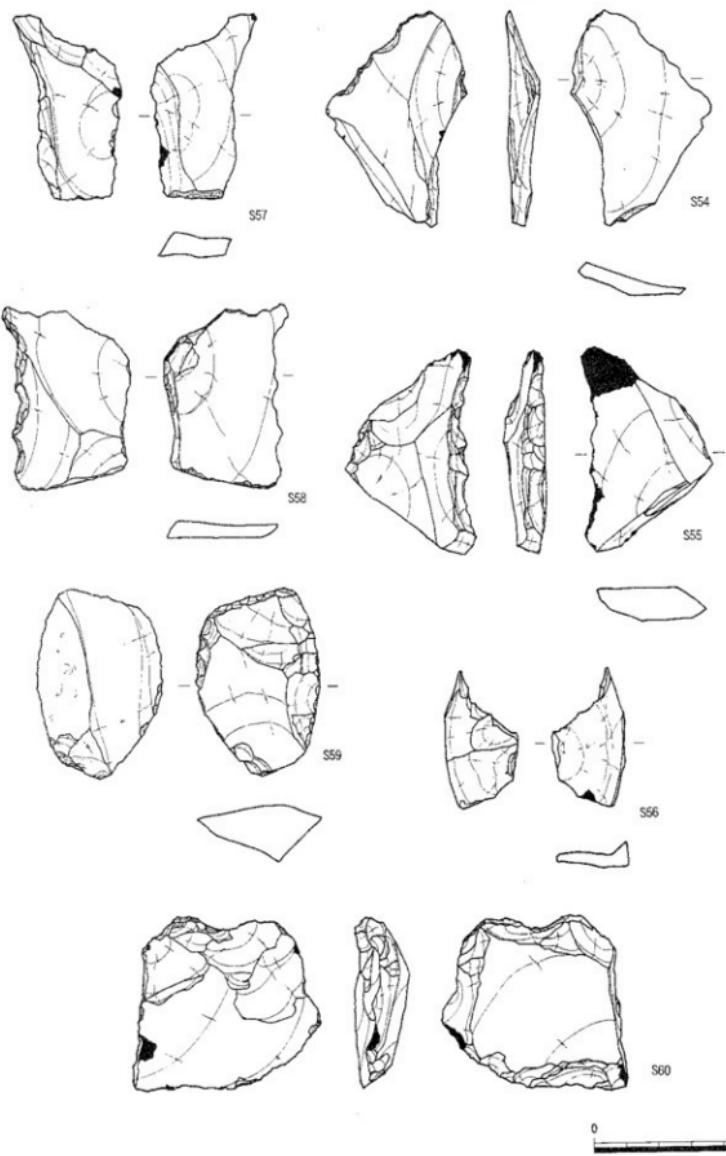


第36図 ナイフ形石器①

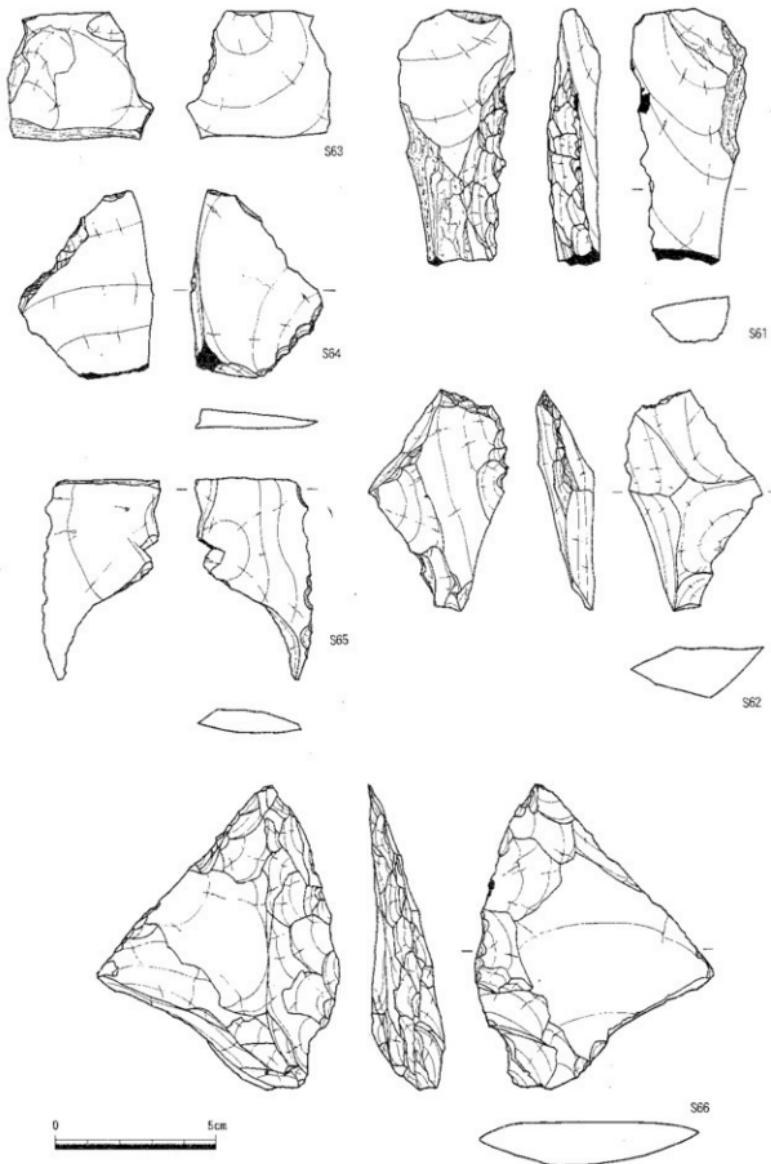


0 5cm

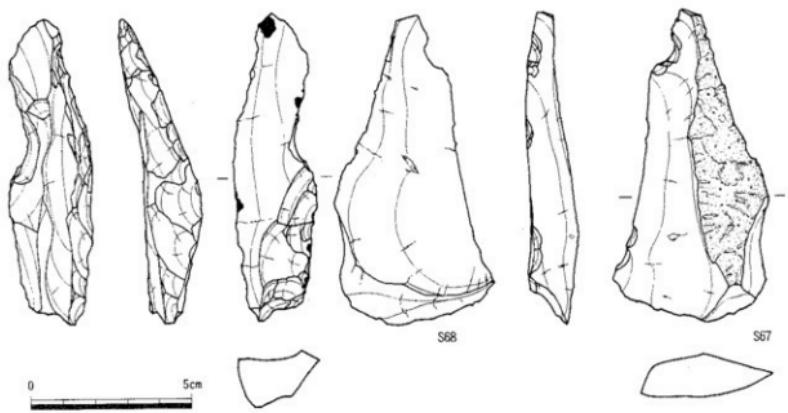
第37図 ナイフ形石器②



第38図 スクレイパー①



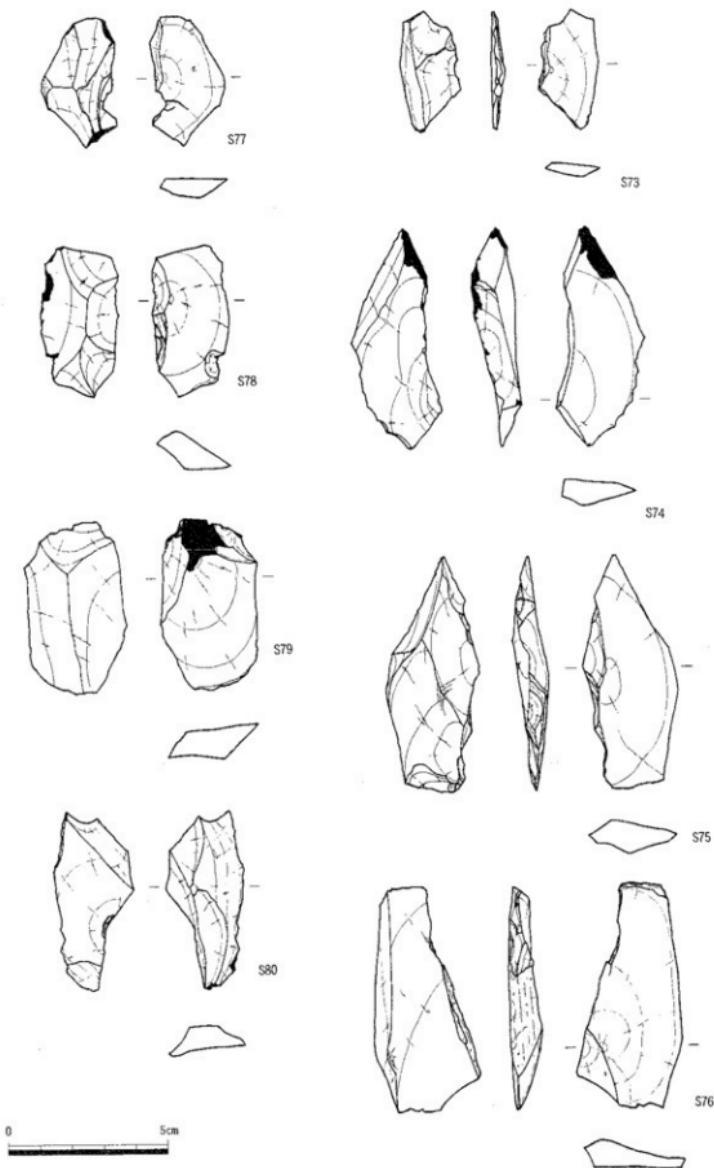
第39図 スクレイバー②



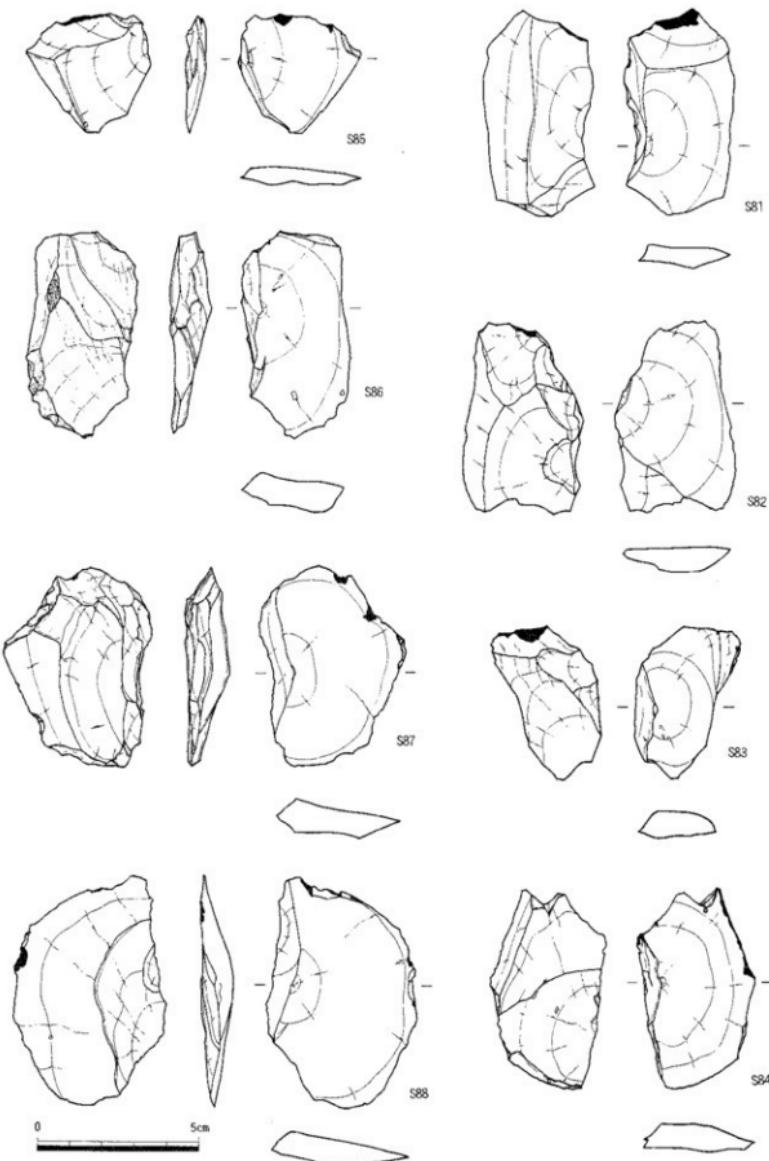
第40図 挟入石器



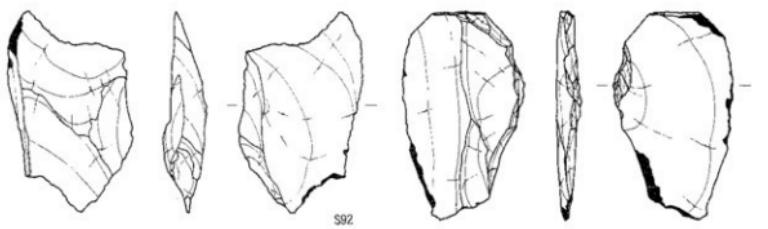
第41図 翼状剥片



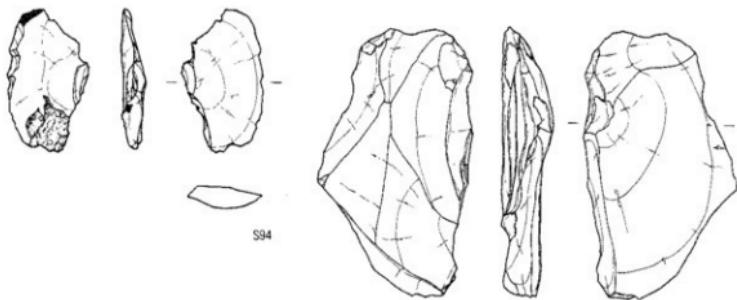
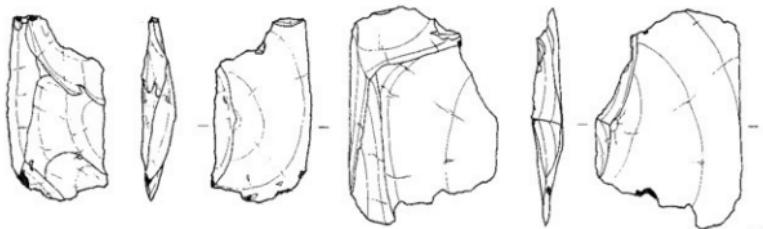
第42図 剥片 ①



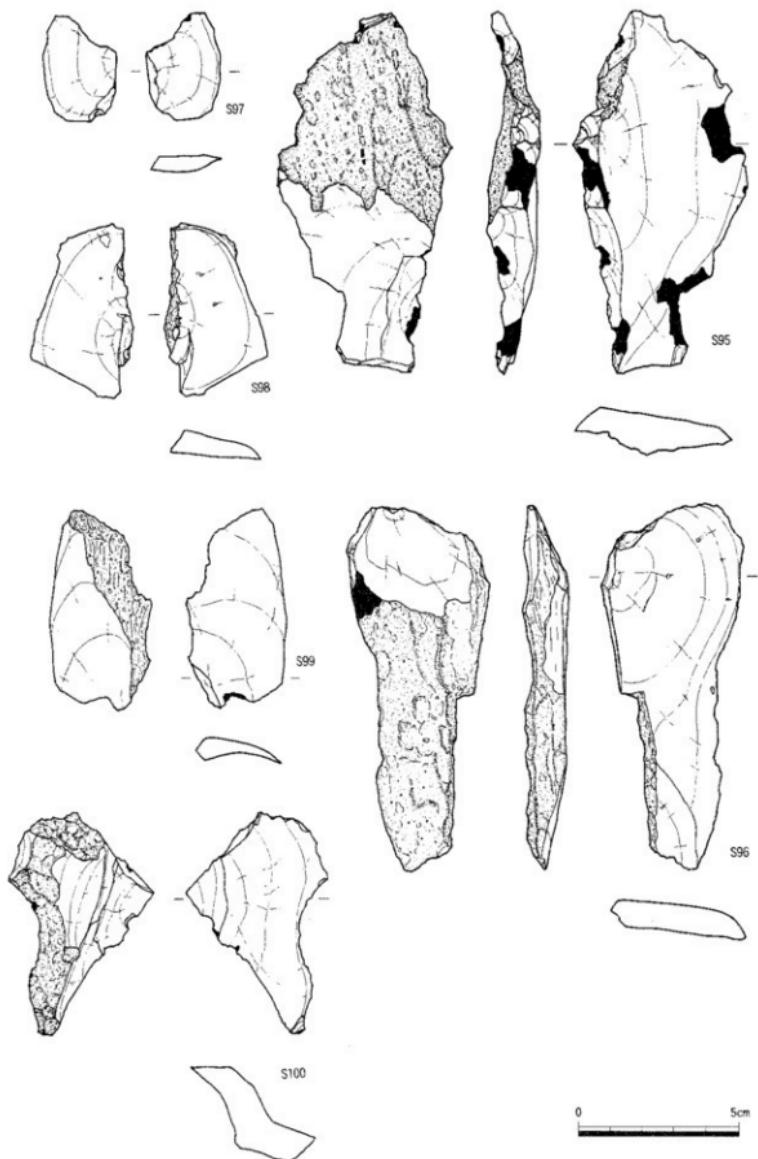
第43図 剥片 ②



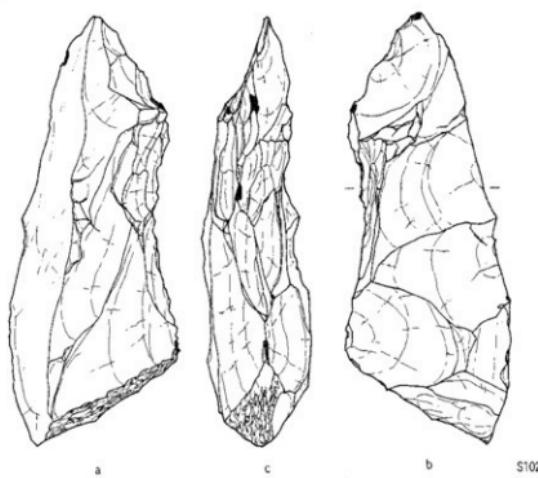
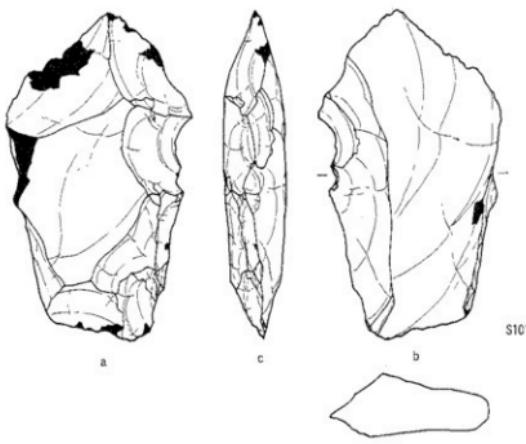
S89



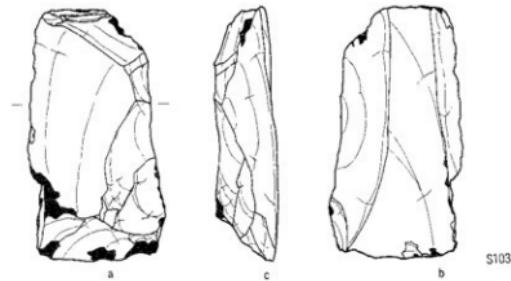
第44図 剥片 ③



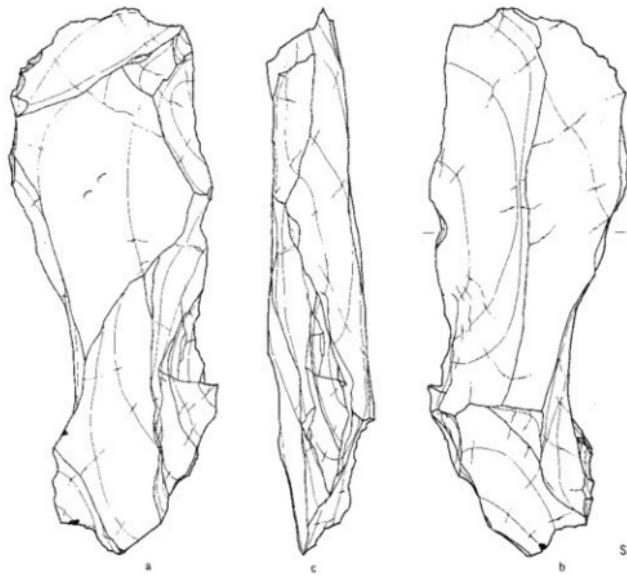
第45図 剥片 ④



第46図 石核類 ①



S103

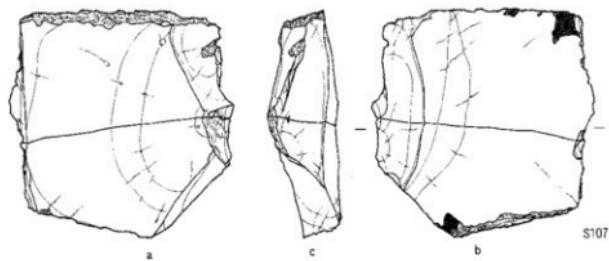
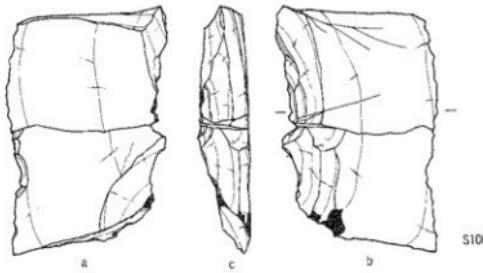
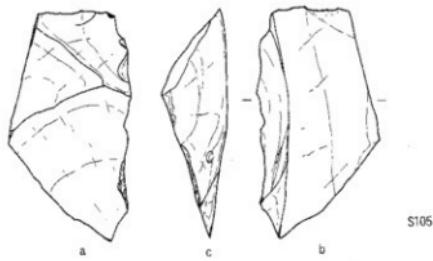


S104



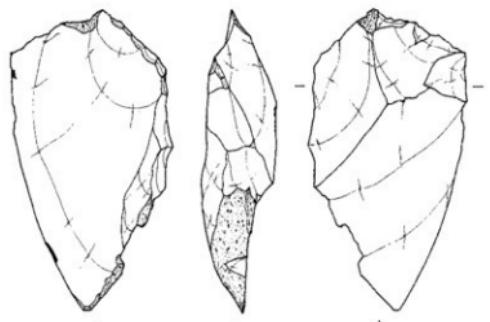
第47図 石核類 ②



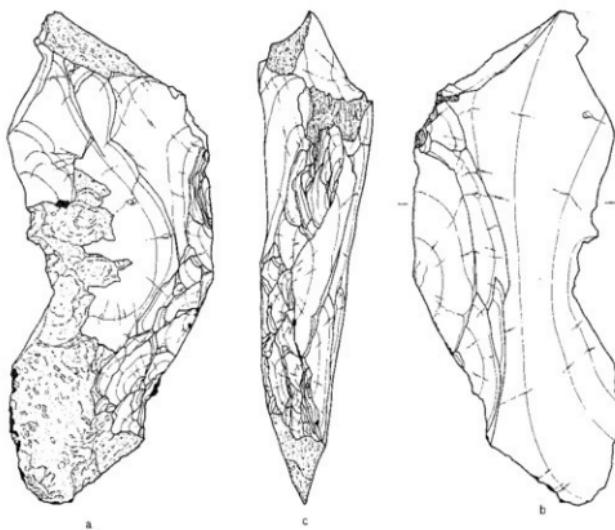


0
5cm

第48図 石核類 ③



S108

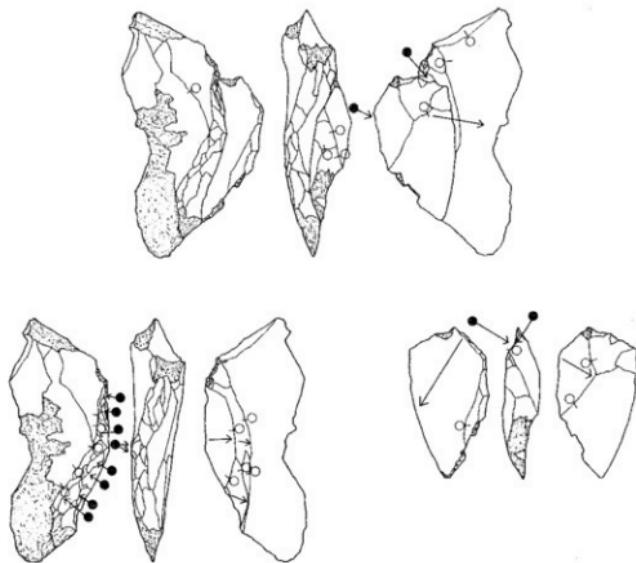


0 5cm

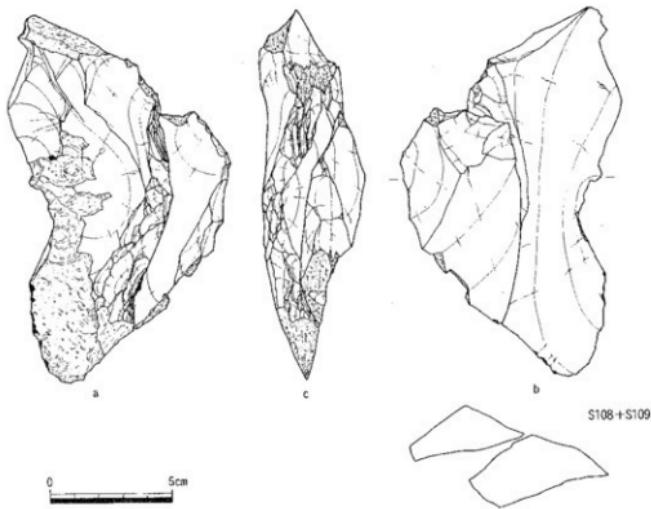


S109

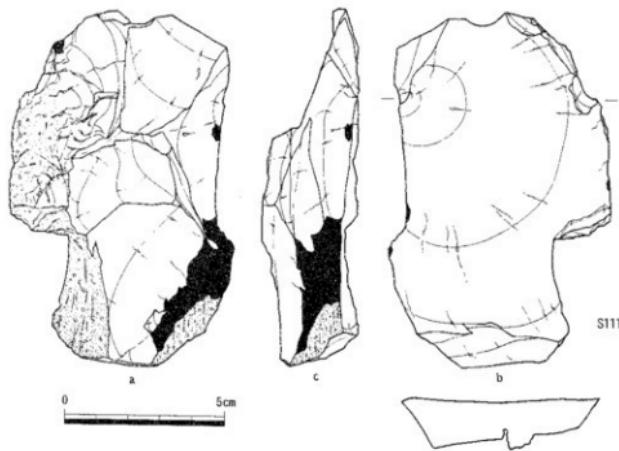
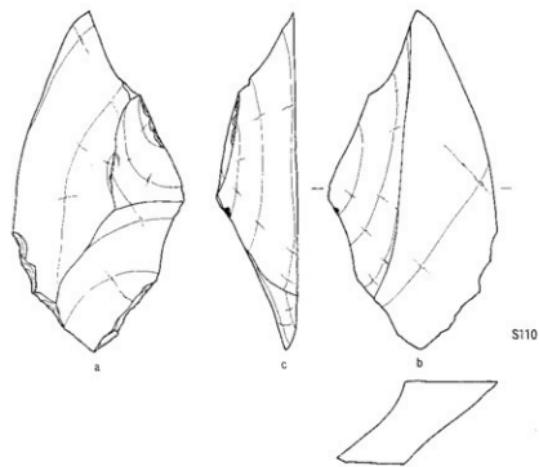
第49図 接合資料①



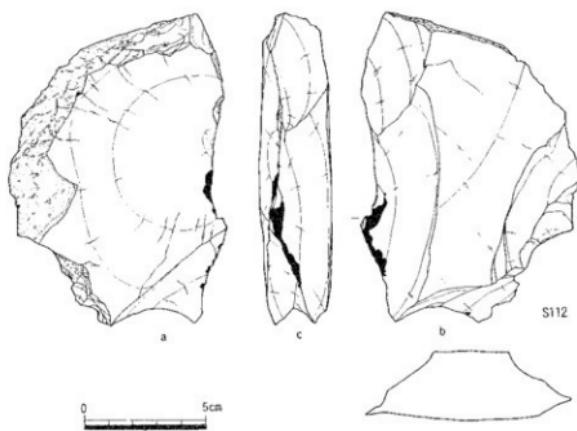
第50図 S 108, 109剥離痕観察図



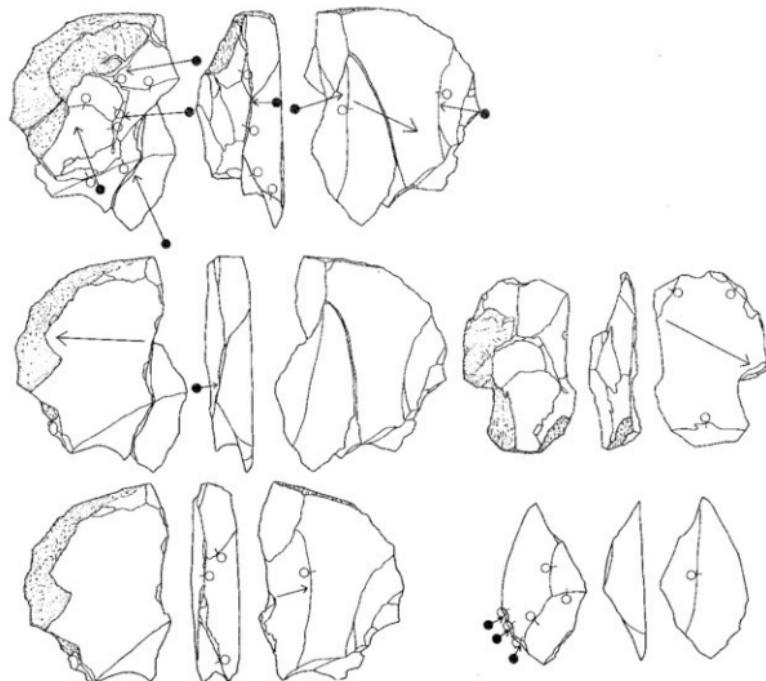
第51図 S 108, 109接合図



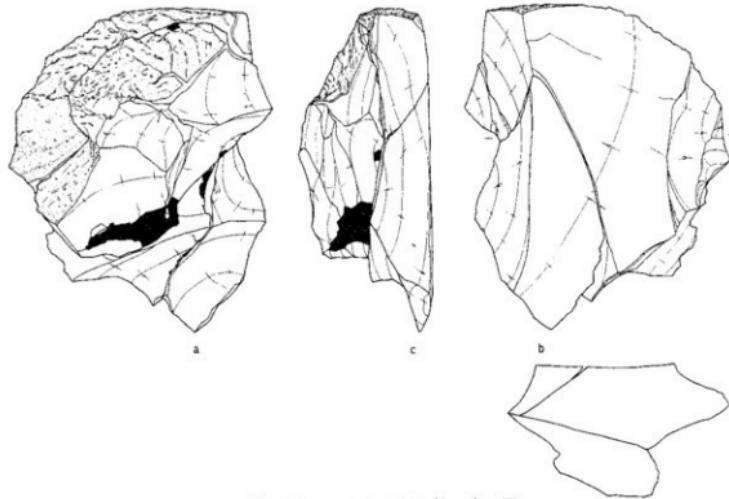
第52図 接合資料②-1



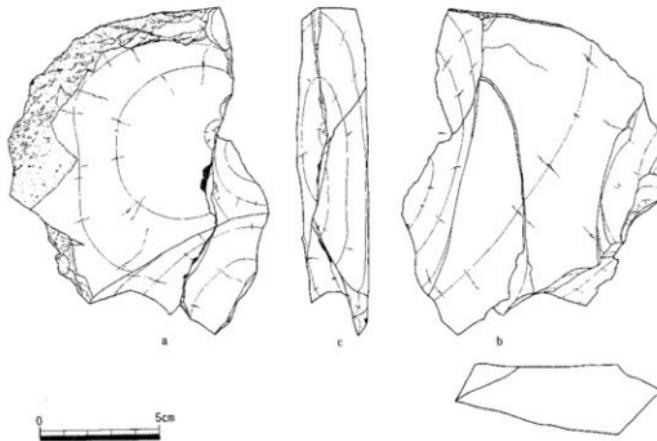
第53図 接合資料②-2



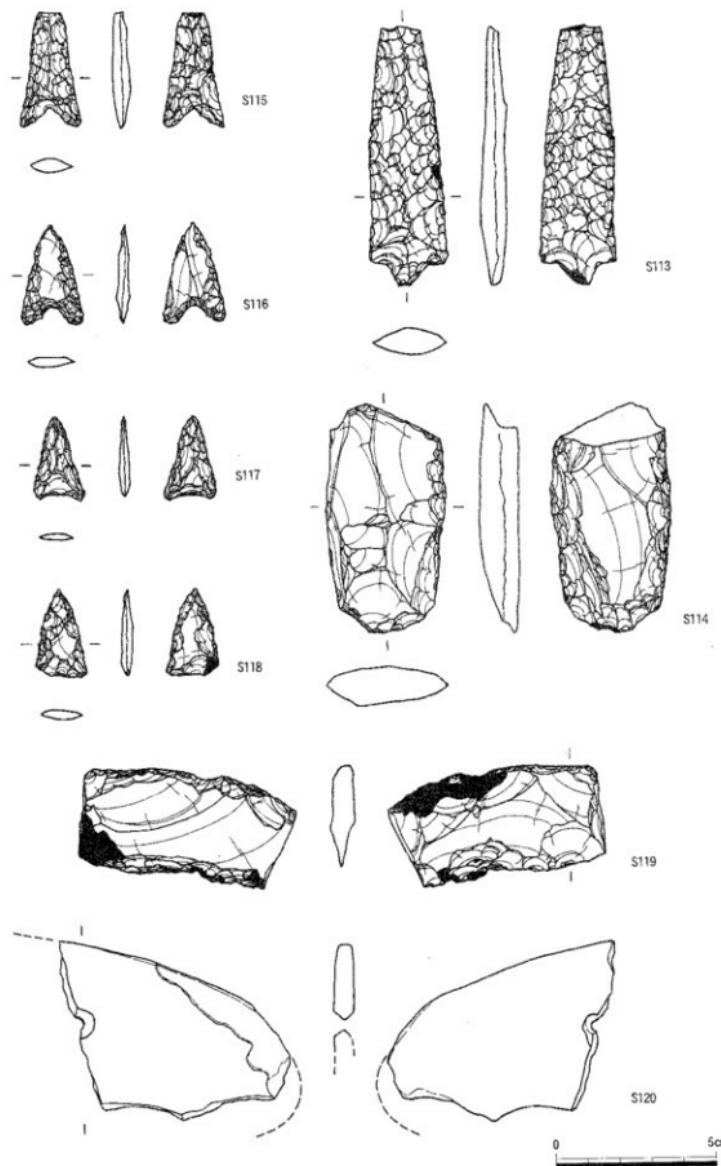
第54図 S110, 111, 112剥離痕観察図



第55図 S110, 111, 112 接合図



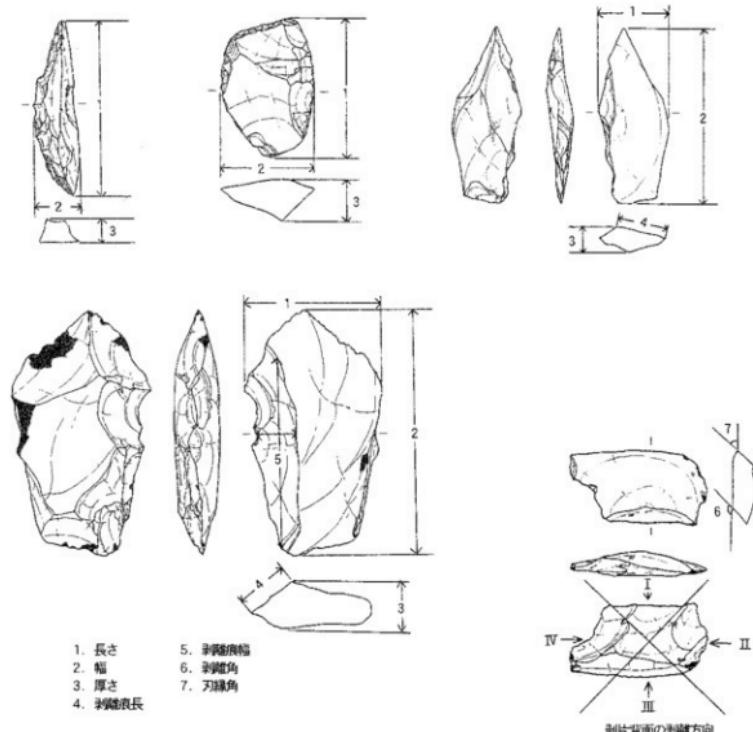
第56図 S110, 112 接合図



第57図 繩文時代以降の石器

香西南西打遺跡出土石器観察表

- 主要器種の計測値は、下記図の通り求めた。表記されていない器種については、石器の長軸を長さ、短軸を幅として計測した。
 - 旧石器の石材については、ほぼ全てが国分台産と考えられる普通サスカイトである。
 - 石核の作業面位置は、実測図記載のa～dと対応する。
 - 各面の略称は、次の通りである。
- p : ポジティブ面
 n : ネガティブ面
 f : 平坦面
 調 : 調査面
 磨 : 磨面 (自然面)
- 石の目が判明するものについては、主要剥離面を基準としその傾きを石理角として求めた。



第138図 石器計測凡例図

第11表 香西南西打遺跡旧石器觀察表

標印番号	器種	出土調査区	長さ (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	剥離角 (°)	底縁角 (°)	打削 (°)	右理角 (°)	刮削痕長 (mm)	剥離量 (mm)	底面	背面剥離	住実面	残存度	標示位置	備考		
s 1	大型スクレイパー	V区	188	137	33	885.6	125	38	—	29	153	117	—	—	—	—	完	骨面	整剥片	
s 2	大型スクレイパー	V区	142	142	32	524.9	144	12	—	55	101	111	剥	n	IV	—	—	完	底面	整剥片
s 3	横長剥片	V区	43	100	7	34.1	102	10	—	—	40	100	—	f	II	—	—	完		結合費料
s 4	横長剥片石核	V区	83	122	24	239	—	—	146	31	33	78	p	n	—	a,b	2		結合費料	
s 5	横長剥片	V区	25	38	5	3.9	105	49	—	—	22	38	f	調	I	—	—	完		
s 6	横長剥片	V区	13	42	7	4.1	—	49	—	—	16	49	p	—	I	II	IV	—	完	
s 7	横長剥片	V区	23	39	9	5.7	112	54	—	—	19	39	f	調	I	—	—	完		
s 8	剥片	V区	38	43	14	24.4	—	—	—	—	—	—	平	n	—	—	—	—		
s 9	剥片	V区	20	18	8	2.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/2	底面	
s 10	剥片	V区	16	27	8	2.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/2	底面	
s 11	剥片	V区	26	26	6	4.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/2	底面	
s 12	横長剥片	V区	43	36	5	7.4	100	11	—	—	—	—	f	I	I	—	—	完	打面	
s 13	横長剥片	V区	64	57	10	31.1	140	12	—	—	—	—	f	f	—	—	—	—	打面	
s 14	横長剥片石核	V区	62	103	18	98.5	—	—	126	—	24	78	p	調	—	b	1			
s 15	素材剥片	I-③区	55	93	16	123.1	149	29	—	—	—	—	n	調	I	—	a	1	完	側部
S 16	素材石核	I-③区	107	175	60	1075.8	—	—	132	20	61	82	n	調	—	b,c	2		結合費料	
s 17	盤状剥片	I-③区	132	115	25	523.4	157	60	—	20	111	105	剥	n	—	—	—	完	底面	
s 18	盤状剥片石核	I-③区	111	139	38	851.3	—	—	162	0	77	124	—	n	—	a,b	2			
s 19	板状剥片	I-③区	90	91	17	172.8	131	25	—	0	68	84	—	f	I	I	—	—	完	
s 20	板状剥片	I-③区	81	112	16	197.3	136	30	—	20	53	194	—	f	I	I	—	—	完	
s 21	板状剥片	I-③区	62	91	24	100.9	157	23	—	20	50	83	f	剥	IV	—	—	完		
s 22	横長剥片石核	I-③区	100	81	31	325.1	—	—	107	0	80	73	p	—	—	b,c,d	3			
s 23	ナイフ形石器	I-④区	68	19	11	13.8	—	59	—	—	—	—	p	—	—	—	—	完		
s 24	葉状剥片	I-④区	26	61	6	13.6	142	45	—	—	20	55	p	調	I	2	—	—	側部	
s 25	ナイフ形石器	I-④区	40	24	6	5.8	—	25	—	—	—	—	f	—	—	—	—	1/2	底面	
s 26	横長剥片	I-④区	26	59	6	13.3	117	—	—	—	23	97	n	調	B, IV	2	—	—	完	
s 27	横長剥片	I-④区	21	29	7	3.3	114	27	—	—	13	28	f	—	I	2	—	—	完	
s 28	横長剥片	I-④区	34	48	4	11.4	130	45	—	—	29	45	p	f	I	3	—	—	完	
s 29	横長剥片	I-④区	45	49	8	12.2	125	30	—	—	32	45	p	調	IV	2	—	—	完	
s 30	横長剥片	I-④区	37	68	9	22.6	130	49	—	—	31	60	f	f	IV	2	—	—	完	

s 3 1	刮片	I- ④区	25	32	5	-	-	-	-	-	f	III	1	-	-	完		
s 3 2	刮片	I- ④区	31	57	4	5.5	-	12	-	-	f	-	-	-	-	完	打面	
s 3 3	刮片	I- ③区	68	57	5	21.6	-	36	-	-	p	-	II	1	-	完	打面	
s 3 4	横长刮片	I- ④区	68	72	11	40.3	135	37	-	46	72	f	IV	3	-	完		
s 3 5	刮片	I- ④区	27	31	6	4.7	-	-	-	-	-	裸	-	-	-	完	打面	
s 3 6	刮片	I- ⑤区	26	42	11	14.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	完		
s 3 7	刮片	I- ④区	36	79	13	27.7	-	-	143	-	-	f	n	-	a,b	4		
s 3 8	刮片	I- ④区	30	56	14	17.4	129	31	-	-	-	f	f	-	-	完	背面	
s 3 9	刮片	I- ④区	89	49	22	84.5	-	-	140	-	39	32	f	f	-	b	1	
s 4 0	横长刮片右端 I- ③区	97	61	22	113.9	-	-	136	20	-	-	裸	n	-	a,b	4		
s 4 1	ナイフ形石器 I- ③区	72	34	9	12.3	-	56	-	-	-	p	-	-	-	-	完		
s 4 2	ナイフ形石器 I- ③区	49	16	5	4	-	45	-	-	-	f	f	-	-	-	完		
s 4 3	ナイフ形石器 I- ②区	53	25	4	6.9	-	36	-	-	-	p	-	-	-	-	完	打面	
s 4 4	ナイフ形石器 I- ③区	55	28	7	9	-	55	-	-	-	p	-	-	-	-	完		
s 4 5	ナイフ形石器 I- ③区	65	17	7	9	-	50	-	-	-	p	-	-	-	-	完		
s 4 6	ナイフ形石器 I- ②区	29	16	8	3.5	-	30	-	-	-	p	-	-	-	-	完	打面	
s 4 7	ナイフ形石器 I- ③区	49	22	8	8.5	-	31	-	-	-	f	-	-	-	-	完	打面	
s 4 8	ナイフ形石器 I- ③区	57	22	11	12.7	-	46	-	-	-	p	-	-	-	-	完		
s 4 9	ナイフ形石器 I- ④区	60	28	6	9.4	-	27	-	-	-	f	断面	1	3	-	完		
s 5 0	ナイフ形石器 I- ③区	162	142	7	44.8	-	47	-	-	-	f	-	-	-	-	完	打面	
s 5 1	ナイフ形石器 I- ④区	75	22	8	12.2	-	26	-	-	-	p	-	-	-	-	完		
s 5 2	ナイフ形石器 I- ④区	36	65	9	14.6	112	46	-	-	-	p	断面	1	1	-	完		
s 5 3	ナイフ形石器 VI区	44	68	13	36.9	-	56	-	-	-	p	-	-	-	-	完		
s 5 4	スクレイバー I- ③区	44	66	5	19.5	122	20	-	-	-	f	-	II	1	-	完		
s 5 5	スクレイバー I- ②区	63	40	10	23.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	完		
s 5 6	スクレイバー I- ②区	22	43	4	5.3	125	47	-	-	-	p	f	II	2	-	完		
s 5 7	スクレイバー I- ①区	21	56	6	13	134	-	-	-	-	f	2	-	-	-	完	侧面	
s 5 8	スクレイバー I- ②区	39	56	5	17.3	130	-	-	-	-	f	-	II	2	-	完	侧面	
s 5 9	スクレイバー I- ①区	57	38	18	31.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	完		
s 6 0	スクレイバー I- ①区	54	57	17	53.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	完		
s 6 1	スクレイバー I- ②区	77	36	12	45	125	-	-	-	-	-	裸面	-	I	1	-	完	打面
s 6 2	スクレイバー IV区	68	43	15	31.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	完	
s 6 3	スクレイバー I- ②区	38	49	6	12.7	106	60	-	-	-	f	-	IV	1	-	完	打面	

s 6 4	スクレイバー	I- ①区	40	57	6	15.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1/2		
s 6 5	スクレイバー	I- ②区	35	61	7	15.1	-	67	--	--	-	-	-	-	-	-	--	完	
s 6 6	スクレイバー	IV区	71	75	12	84.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1/2		
s 6 7	抉入石器	I- ①区	94	48	14	51.9	-	45	-	-	-	-	像	-	I	I	-	1/2 0.8	
s 6 8	抉入石器	I- ②区	94	25	15	32.9	-	78	--	--	-	f	-	-	-	-	--	完	
s 6 9	翼状刮片	I- ①区	31	100	10	35.2	125	65	-	-	22	58	p	調	I	I	-	完	
s 7 0	翼状刮片	I- ④区	30	57	8	10.7	125	55	-	-	-	-	p	調	I	I	--	1/2 0.2	
s 7 1	翼状刮片	I- ③区	18	46	5	2.6	123	65	-	-	16	39	p	調	I	I	-	--	完
s 7 2	翼状刮片	I- ①区	20	57	5	7.2	129	35	-	-	25	63	n	調	I	I	-	--	完
s 7 3	横長刮片	V区	19	37	4	2.4	132	30	-	--	16	34	f	f	I	2	-	-	完
s 7 4	横長刮片	I- ①区	22	67	7	15.3	139	58	-	-	21	60	p	n	I	I	-	-	完
s 7 5	横長刮片	I- ④区	29	72	11	15	137	43	-	-	21	72	n	調	I	2	-	-	完
s 7 6	横長刮片	I- ①区	32	69	8	17.6	140	57	-	-	27	69	p	n	--	--	-	-	完
s 7 7	横長刮片	I- ①区	23	49	6	4.8	126	34	-	-	19	38	f	f	I	3	-	-	完
s 7 8	横長刮片	I- ①区	24	47	9	9.4	120	40	-	-	19	44	n	調	I	3	-	-	完
s 7 9	横長刮片	I- ④区	29	53	9	13	138	40	-	-	22	52	n	a	I	2	-	-	完
s 8 0	横長刮片	I- ①区	24	54	8	8.4	116	56	-	-	18	51	--	f	I	3	-	-	完
s 8 1	横長刮片	I- ③区	33	63	6	16.7	118	24	-	-	26	45	f	f	I	2	-	-	完
s 8 2	横長刮片	I- ②区	37	59	7	16.2	147	35	-	-	32	56	p	直 N	I	2	--	-	完 打面
s 8 3	横長刮片	I- ②区	32	48	8	10.4	128	72	-	-	19	43	f	f	I	3	-	-	完
s 8 4	横長刮片	I- ④区	36	61	8	17.6	138	53	-	-	30	59	f	n	I	2	-	-	完
s 8 5	横長刮片	V区	38	36	6	7.7	130	38	-	-	34	36	f	n	I	2	-	-	完
s 8 6	横長刮片	I- ①区	33	64	9	24.1	129	67	-	-	26	62	n	調	I	3	-	-	完 底面
s 8 7	横長刮片	I- ②区	46	62	10	29.8	132	35	-	-	34	61	f	f	I	2	-	-	完
s 8 8	横長刮片	I- ②区	47	70	7	25.7	133	22	-	-	37	65	f	n	I	1	-	-	完
s 8 9	横長刮片	I- ④区	37	64	6	15.9	159	19	-	-	35	64	p	調	I	2	--	-	完 打面
s 9 0	横長刮片	I- ①区	46	67	7	29.7	120	59	-	-	41	66	f	a	I	2	-	-	完
s 9 1	横長刮片	I- ⑤区	48	82	12	56	148	45	-	-	34	70	f	調	I	4	-	1/2 0.8	
s 9 2	横長刮片	I- ③区	38	62	12	18.8	131	67	-	-	29	51	p	n	I	3	--	--	完
s 9 3	横長刮片	I- ①区	36	53	9	29.3	135	50	-	-	24	50	f	f	I	3	-	-	完
s 9 4	横長刮片	I- ④区	25	44	7	6.7	127	44	-	-	20	43	--	調	I	I	--	-	完 背面
s 9 5	横長刮片	I- ②区	54	110	15	68.3	132	67	-	-	42	108	-	調	II	I	-	-	完 背面
s 9 6	横長刮片	I- ②区	44	112	8	54.3	120	45	-	-	40	112	-	調	IV	I	-	-	完 背面

s 9 7	横長剥片	I- ①区	22	33	5	3.1	124	26	-	-	19	32	-	f	1	1	-	-	完		
s 9 8	横長剥片	V区	32	53	9	9.3	110	45	-	-	25	50	-	f	1	1	-	-	完	打面	
s 9 9	不定形剥片	I- ③区	30	61	7	15.1	112	16	-	-	25	59	-	f	II	1	-	-	完	含藍	
s 1 0 0	不定形剥片	V区	34	68	24	31	132	64	-	-	-	-	-	f	I	3	-	-	完	齊面	
s 1 0 1	横長剥片石核	I- ②区	57	10	20	99.4	-	-	115	-	21	73	p	n	-	-	b	1			
s 1 0 2	横長剥片石核	I- ②区	33	132	25	169	-	-	82	0~20	17	50	n	調	-	-	a,b	3以上			
s 1 0 3	横長剥片石核	I- ③区	41	77	14	66.7	-	-	115	-	19	61	p	n	-	-	b	1			
s 1 0 4	横長剥片石核	I- ②区	62	168	29	116	-	-	116	35	33	122	f	n	-	-	a,b	3以上	2次加工あり		
s 1 0 5	横長剥片石核	I- ③区	37	71	22	35.3	-	-	130	-	20	59	p	n	-	-	b	1		残存 2分に削打	
s 1 0 6	劃材剥片	I- ③区	50	76	11	48.9	-	-	120	-	16	62	f	f	-	-	c	1		劃材 2分に削打	
s 1 0 7	劃材剥片	I- ① I- ②区	65	70	15	101.9	-	-	108	50	21	52	f	調	-	-	c	1		劃材 2分に削打	
s 1 0 8	劃材剥片	I- ②区	49	93	18	68.4	-	-	145	0	47	57	p	n	-	-	a,b	2		複合資料	
s 1 0 9	瓣状剥片石核	I- ②区	63	151	30	229.6	-	-	105	45	25	65	p	調	-	-	b	1		複合資料	
s 1 1 0	横長剥片	I- ②区	57	104	18	72.3	140	40	-	-	38	70	f	n	II	1	-	-	完	複合資料 2次加工あり	
s 1 1 1	不定形剥片	I- ②区	67	110	15	188.3	141	51	-	-	61	98	f	n	II	2	-	-	完	複合資料 2次加工あり	
s 1 1 2	横長剥片石核	I- ③区	87	127	27	382.4	-	-	132	20	28	85	f	n	-	-	a,c	3以上		複合資料	

第12表 繪文時代以降の石器観察表

種別番号	器種	出土位置	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	備考
S 1 1 3	有舌尖彫器	II区中世包含層	(80)	24	9	15.8	サスカイト	
S 1 1 4	石槍	II区粘土探掘坑	(70)	37	12	40.8	サスカイト	
S 1 1 5	石鏃	SD 4 0 3	(35)	19	5	2.3	サスカイト	凹基式
S 1 1 6	石鏃	V区中世包含層	30	19	3	1.6	サスカイト	凹基式
S 1 1 7	石鏃	II区中世包含層	25	16	2	1.0	サスカイト	凹基式
S 1 1 8	石鏃	SD 1 0 7	27	16	3	1.1	サスカイト	
S 1 1 9	石小刀	I- ④区地山直上	(67)	36	9	26.7	サスカイト	
S 1 2 0	石包丁	SD 4 0 2	(70)	(55)	6	33.7	サスカイト	

第4節 弥生時代の遺構・遺物

S R O 1 (第 59 図)

III-①区の南端で確認した自然流路である。幅5~6 m、深さ約0.7~0.9 mを測る。調査区内で南東から北東方向に急激に向きを変えるためか、南側に偏った流路となっている。南接のIII-②区には広がらず、この自然流路を境に地山とした黄色粘土層の検出レベルが0.3 m下り、以北は一段低いやや不安定な地形となる。堆積状況から3~4時期にわたり埋没したものと考えられる。最下層では、黒色の粗砂が堆積しており短期間に充積したものと考えられる。両岸部に見られる黒色粘土層及び黄灰色シルト質粘土層は比較的緩慢に堆積したものと考えられる。さらに黒色粘土層による埋没でS R O 1は機能しなくなったと考えられるが、この堆積の上位部からはほぼ完形の壺等の遺物が出土している。出土位置が南側岸付近に寄ることから流路の南側から破棄された可能性もあるが、遺物には摩滅した痕が見られることから調査区の西側より流入したとも考えられる。

なお当遺跡内でS R O 1の他、II区の南部、I-④区北端~IV区及び、I-③区南端~V区北端にかけて、自然流路を確認している。遺物は見られなかったが、いずれも上部の堆積は同質のものと考えられる黒色粘土層が堆積しており最終の埋没期がほぼ同時期であったと推察される。

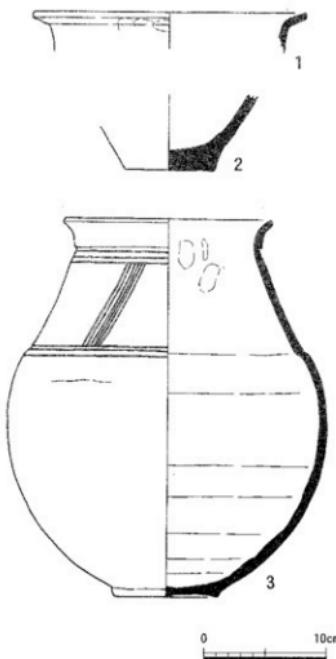
S R O 1 出土遺物 (第 58 図)

上記の黒褐色シルト層からは弥生前期中葉に比定される土器が出土しているが、ここでは小片は除き3点を図化した。

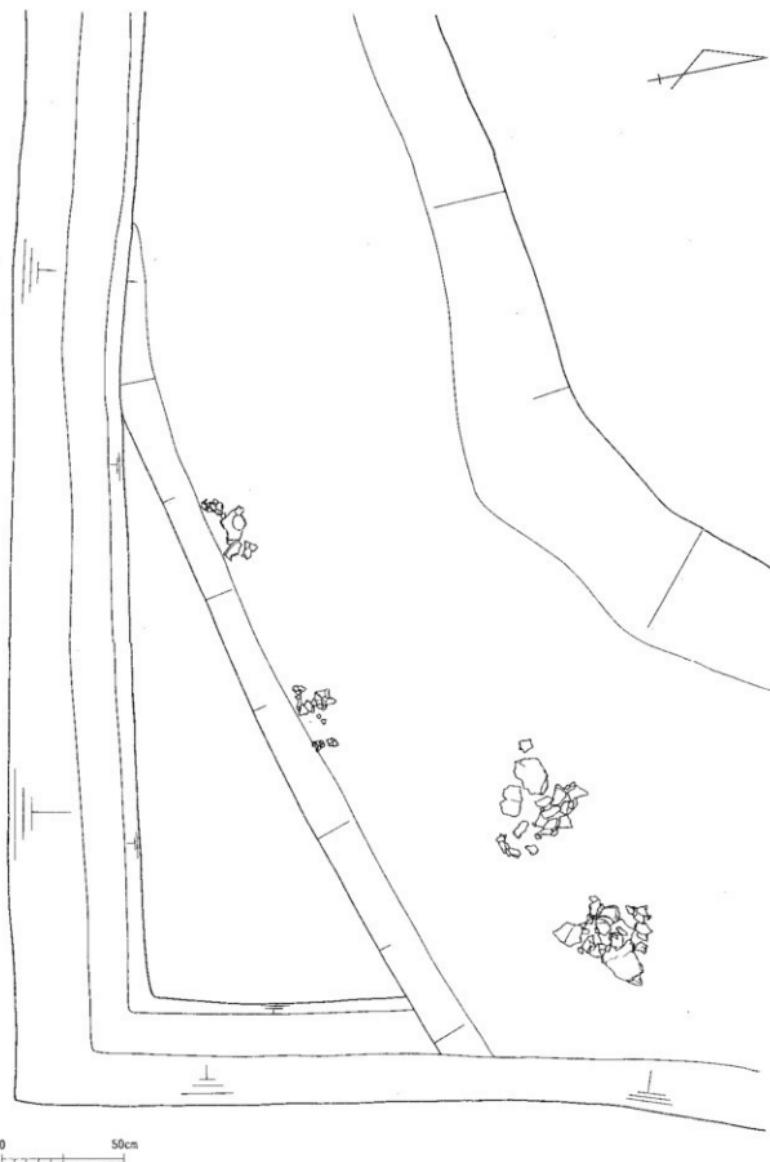
1は壺の口縁部である。口径22 cmを測り如意形を呈するもの。

2は壺あるいは鉢の底部片である。

3は口径16.6 cm、底径8.2 cm、器高約30 cmを測る中形壺である。口縁部と頸部、頸部と胴部の境にそれぞれ段が付き、ヘラ描沈線が各々3条施される。頸部にはこの沈線の間に、6条のヘラ描沈線がななめに施されている。体部内面には輪積痕が認められる。



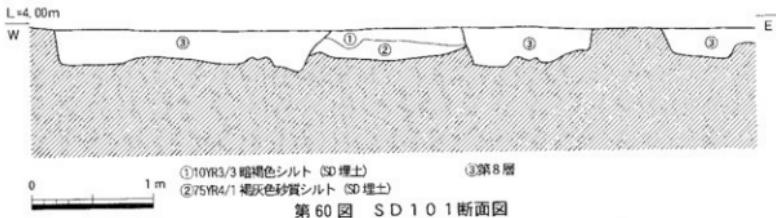
第58図 S R O 1 出土遺物



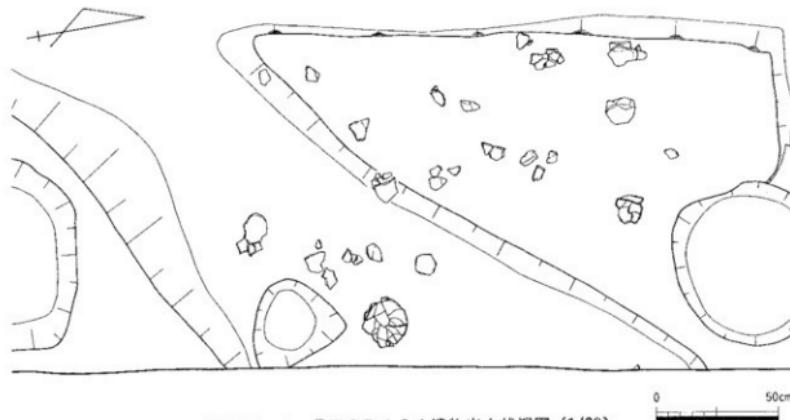
第59図 SR01遺物出土状況図 (1/20)

SD 101 (第60~62図)

I-②区の北部からI-①区南端へ横断する溝跡である。検出面及び底面レベルは、南から北へ標高3.83~3.77m、標高3.66~3.59mを測り、南西から北東方向へ緩やかに下る。検出幅1m、深さ0.2m弱であるが、SD 107及び密集した不定形土坑により壊される。埋土は2層に分層でき、断面は緩やかなU形を呈すると思われるが、破壊が大きく定かではない。遺物は溝の底面付近で出土しているが、後世の擾乱のためか散乱し出土するものもある。



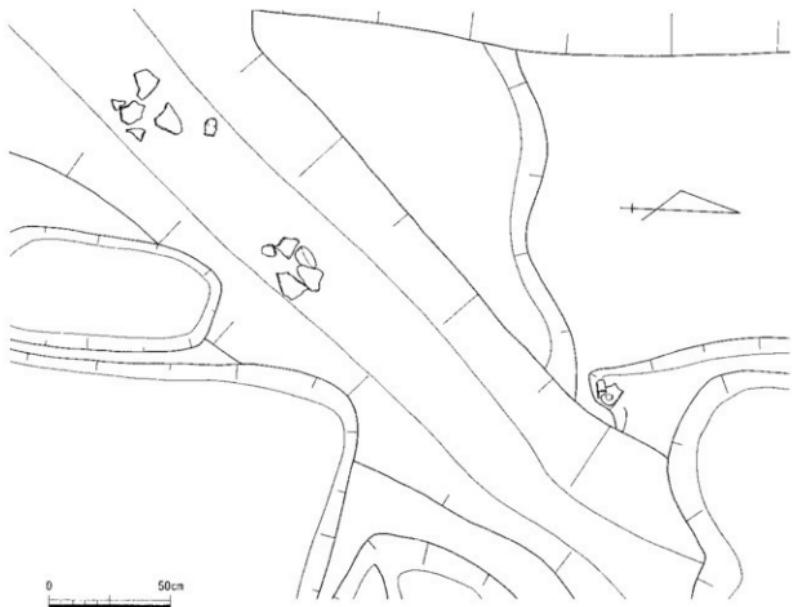
第60図 SD 101断面図



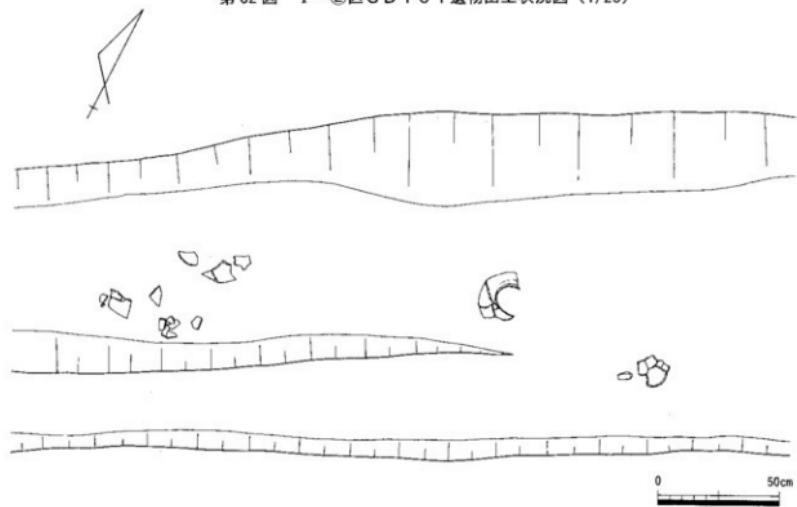
第61図 I-①区 SD 101 遺物出土状況図 (1/20)

SD 101出土遺物 (第64図)

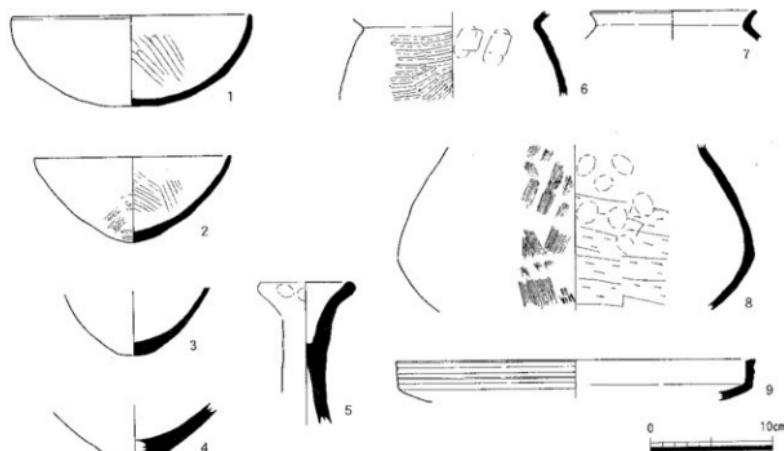
出土した遺物は、9は中期末と古い様相を示すが概ね弥生時代後期～古墳時代前期初頭に位置づけられる。1, 2は浅鉢である。1は丸底をしたもので内面をヘラ削り、ヘラ磨きによる器面調整をし、2は外面に叩き目が残る。3は甌の底部で、小形化したものである。内外面にヘラ削りが見られる。4は壺の底部である。5は支脚である。先端は平坦で、上部は屈曲しない。筒部は貫通しておらず、上下に穿孔させる。6, 7は甌である。6は外面に叩き目を残す。8は壺の体部である。9は高環の口縁である。直立口縁で外面に凹線文を施す。4, 8, 9に角閃石が見られる。



第62図 I-②区SD101遺物出土状況図(1/20)



第63図 SD103遺物出土状況図(1/20)

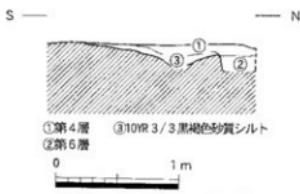


第64図 SD 101出土遺物

SD 102～104は、I-②区南部で検出した溝跡である。埋土の特色及び流路の方向により、同時期に属するものと考えるが、堆積関係からすれば各々機能していた若干の時期に違いが認められる。

SD 102 (第65図)

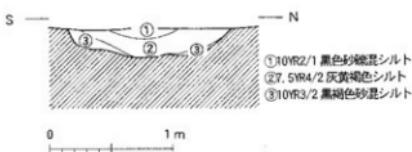
不定形土坑及びSD 107、SX 101に壊される。検出面及び底面レベルは、西から東方向で標高4.06～4.00m、標高3.79～3.69mをそれぞれ測り、南西から北東方向へ緩やかに下る。検出幅は最大で1.5mを測るが、上部は搅乱及び削平が見られる。遺物は出土していない。



第65図 SD 102断面図

SD 103 (第63, 66図)

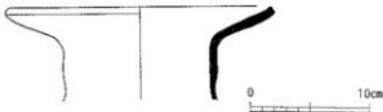
一部を不定形土坑及びSD 107、SX 100 Iに壊される。検出面は標高4m前後、底面レベルは西から東方向に、標高3.79～3.73mを測り、南西から北東方向へ緩やかに下る。検出幅は最大で1.7mを測り、埋土は3層に分層でき、少なくとも一度は掘り直している。遺物は灰黄褐色シルト層より出土しているが、1点のみ図化した。



第66図 SD 103断面図

SD 103 出土遺物 (第 67 図)

1 は広口壺である。頸部は直立し屈曲して外反するもので、口縁端部のつまみ上げは小さい。後期後半に属すると考えられる。



第 67 図 SD 103 出土遺物

SD 104 (第 68 図)

1-②区南部で検出した溝跡である。南端は SD 107 に切られる。検出面は標高 4 m 前後、底面レベルは西から東方向に、標高 3.85 ~ 3.79 m を測る。南北から北東方向へ緩やかに下るが、中央部でやや東に方向を変え SD 102, 03 と同方向を向く。南部はかなり削平をうけたものと考えられるが、検出幅は最大で約 1 m である。埋土は 2 層に分層できる。



第 68 図 SD 104 断面図

I-②区不定形土坑出土遺物 (第 71 図)

後述のするように古代末に属する不定形の土坑より弥生土器が出土している。出土した遺物には時期的に幅が見られる。

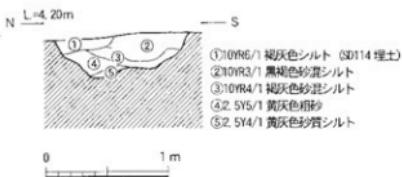
1 は鉢である。2 は広口壺の口縁部である。3 ~ 9 は壺である。口縁部を肥厚させるもの、「く」字状のものがある。4 は明瞭な頸部を持たず、口縁部を大きく外反させ端部を下方向につまみ出す。調整は外面にナデ、内面にヘラ削り、指押さえ、ナデである。10, 15 は壺の底部、11 ~ 14 は壺の底部で平坦面が小形化するものが見られる。16 ~ 21 は高杯である。19 は拡張した口縁端部は内傾して、凹線文が 3 条施されるもので、中期後葉まで遡るもの。16, 21 は浅い皿状の杯部から屈曲し斜め上方に弯曲しながら立ち上がるるもので後期後半に比定される。17, 18, 20 は後期前半に考えられる。5, 7, 10 ~ 12 に角閃石が多く認められる。

SD 105

I-③区で検出した溝跡である。埋土の特色及び流路の方向により、弥生時代に属するものと考える。不定形土坑及び SD 110, 111, 112 に切られる。蛇行ぎみであり、検出面は標高 4.1 m 前後、底面レベルは標高 4 m 前後と流路の方向は不明瞭である。検出幅は 0.25 ~ 0.35 m を測る。遺物は出土していない。

SD 106 (第 69 図)

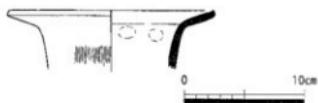
I-③区南部で検出した溝跡である。SD 110, 114, 115 及び不定形土坑に塹される。検出面は標高 4.1 m 前後、底面レベルは西から東方向に、標高 3.9 ~ 3.82 m を測り、南北から北東方向へ緩やかに下る。検出幅は最大で 1.2 m を測り、断面では 2, 3 度の掘り直しが見られる。遺物は底付近の砂質土より、弥生土器が出土している。



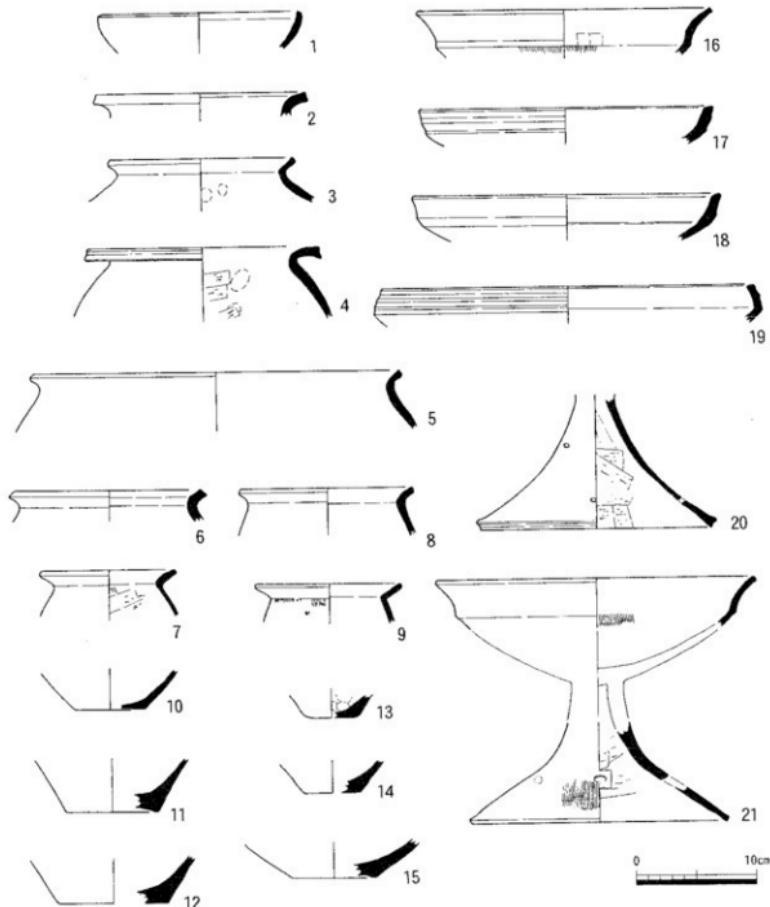
第 69 図 SD 106 断面図

SD 106 出土遺物 (第 70 図)

1 は広口壺である。頸部は外傾して、口縁端部は上方へ
つまみ上げられる。後期後半に位置付けられる。



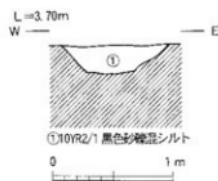
第 70 図 SD 106 出土遺物



第 71 図 I-②区不定形土坑出土遺物

SD 401 (第72図)

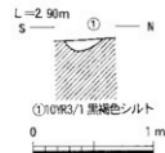
4区南部で検出した溝跡である。埋没した自然流路の上層部をベースとして掘削され、不定形土坑及びSD 402により切られる。検出面は標高3.6m前後、底面は西から東方向に3.31～3.28mを測る。緩やかに北東方向へ向かうが、途中で東方向に折れ曲がる。埋土の特色及び流路の方向により、弥生時代に属するものと考える。



第72図 SD 401断面図

SD 303 (第73図)

III-①区南部で検出した溝跡である。埋没した自然流路 (SR 01) の上層部を造構面として掘削される。検出面は標高2.86～2.76m、底面は2.73～2.69mを測り、緩やかに北東方向へ向かう。埋土の特色及び流路の方向からすれば、弥生時代に属するものと考える。



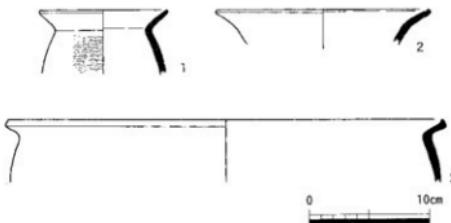
第73図 SD 303断面図

SK 301

III-④区の北西隅で検出した不定形の土坑である。調査区外に広がるが、削平が激しい。深さは最深で8cmを測り、埋土は灰褐色粗砂の単層である。出土遺物から後期後半のものと考えられる。

SK 301出土遺物 (第74図)

1は壺である。口縁を「く」字に外反させ、外面に叩き目が残る。2は広口壺の口縁部である。3は口縁を「く」字に外反させた大型の鉢である。



第74図 SK 301出土遺物

参考文献

- (財)香川県埋蔵文化財調査センター
「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 空港跡地遺跡II」1997
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 郡家原遺跡」1993
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VII 下川津遺跡」1990
高松市教育委員会
「一般国道11号線高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 さこ・長池遺跡」1993

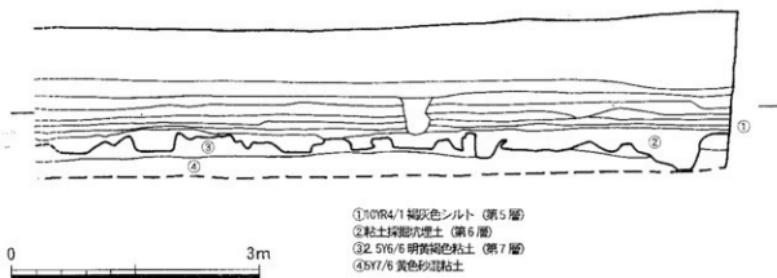
第5節 古代～中世の遺構・遺物

粘土探掘坑

I区、II区、III-②、④区、IV区南部の広範にわたり不定形土坑を検出している。以下の状況から、第8層（黄色粘土層）及び黒色粘土層から粘土を採取した痕と考えられる。

検出及び堆積状況（第75図）

第5層を除去する過程で、褐灰色シルトと地山（黄色粘土層）をブロック状に含んだ黒褐色土との搅乱が広範に確認された。平面において個々の土坑の切り合い関係を判定するのは不可能であり、また断面の観察においても土坑内の堆積が複雑なことから上層とした第5層との分離も困難であった。そのため、個々の土坑間及び第5層との間で時期差がほとんどないものと考えられた。



第75図 I-④区北壁・粘土探掘坑堆積状況図

埋土

褐灰色シルト、黒褐色粘土、黄色粘土と3種類の堆積物に搅乱され埋没する。明確に分割できなかつたが、上層に第5層とほぼ同質の褐灰色シルト、下層部に黄色粘土をブロック状に含んだ黒褐色粘土が堆積したものとみられ、掘削が終了した時点である程度の埋め戻しを行いその後に耕作土を敷いたものと考えられる。

形状

平面において、隅丸方形あるいは隅丸長方形として検出できる個所と、集中した範囲では不定形なものとして検出された個所がある。横面はほぼ垂直なものが多く、中には壁面を抉り取ったようにオーバーハングしたものも見られる。底面には凹凸が見られ、集中した範囲では段状となる個所もある。

分布

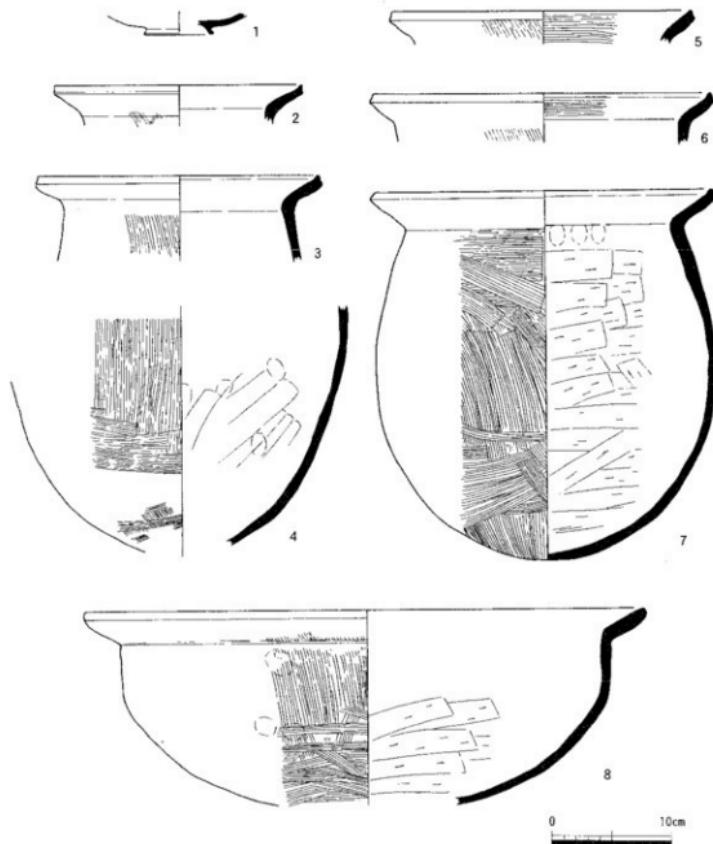
I、II、III-②、④、IV区南部において、第8層（黄色粘土層）直上において検出した。調査区（II区南部及び4区南部）によっては、II流路の上部に堆積した黒色粘土層をベース面として検出された個所もある。調査範囲全般を通じては、東西方向の範囲は確定できないが、南北方向には空白の生じる調査区があり、断続的なまとまりを見せる。空白地の要因としては、粘土の堆積状況、土地利用の違い、削平等が考えられる。各々調査区の範囲で見れば、長方形状のものが東西及び南北の方向性を見せるものもある。集中した個所と散漫な個所に分布の違いがみられるのは、堆積する粘土層の質に起因するものや、撤出路等の目的が考えられる。

規模

平面において規格的な大きさを見出すことはできないが、0.5m～2m前後の長方形及び方形状のものが多く見られる。掘削の深度は0.2m～0.5m前後が多いが、下層になると砂が混じることから、ほぼ粘土層の堆積範囲までを下限として掘削されている。

遺物出土状況（第82図）

出土遺物の多くが第5層と混在するものと考えられる。土坑の底面より出土するものは少ないが、ほぼ完形の土師器甕が出土している。各調査区とも古代に比定される遺物を中心とするが、弥生時代末からの遺物も見られることから、粘土探査により以前の遺構等が消失した可能性がある。



第76図 I-②区粘土探査坑出土遺物

I-②区粘土探掘坑出土遺物（第76図）

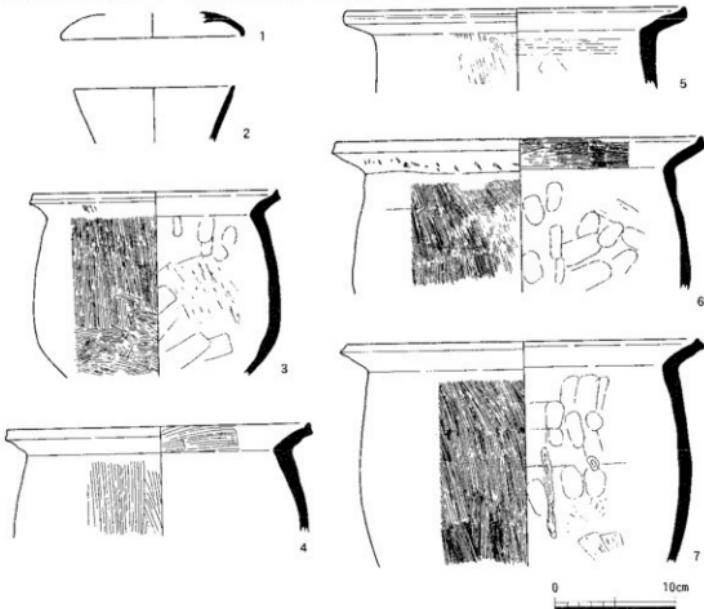
1は黒色土器壺の底部である。高台が矮小化しており、片桐編年ではII-④～⑥期に相当すると考えられ、12世紀に位置付けられる。2～8は古代末から中世初頭の甕および鍋。4は土師器甕か羽釜の胴部。7の土師器甕は、ほぼ完形で出土した。外面に刷毛目、内面はヘラ削りにより調整される。8は口径46cmを測り、胴の短い洗面器状の鍋。13世紀に比定される。混入した可能性がある。

I-④区粘土探掘坑出土遺物（第77図）

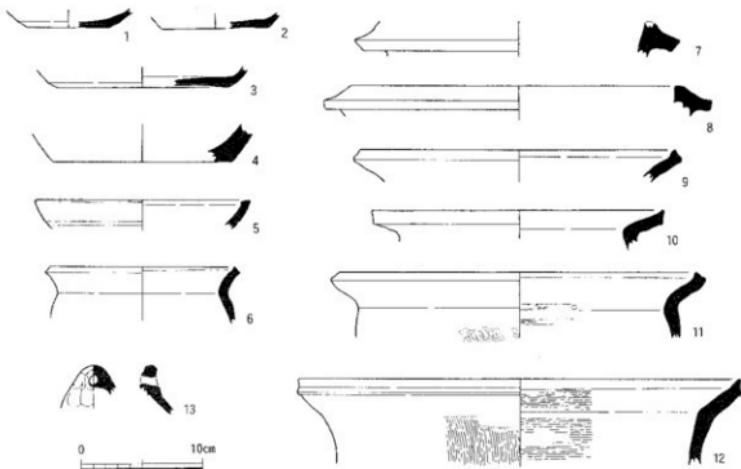
1は須恵器蓋である。口縁端部の特徴と口径(15.2cm)から、佐藤編年のII-②期に相当し、8世紀半ばに位置付けられる。2は須恵器环である。体部が直線的に開くことから、9世紀後半に比定できる。3～7は土師器甕である。いずれも外面は、縦方向の刷毛目、内面は、ナデにより仕上げられる。

IV区粘土探掘坑出土遺物（第78図）

1は土師器环の底部である。2は須恵器环の底部。体部は直線的に外上方に開く。3は須恵器皿の底部である。底径が17.2cmと大型で、体部は直線的に伸びるものと考えられことから、9世紀前後の年代が推察される。4、5はそれぞれ須恵器の鉢底部、及び壺口縁部分。6は甕の口縁部。7、8は土師器羽釜の口縁部である。鋸が矮小化することから片桐編年のII-③～⑥期にあたり、11世紀末から12世紀に比定される。9～12は土師器甕の口縁部である。13は土師器飯蛸壺。



第77図 I-④区粘土探掘坑出土遺物



第78図 IV区粘土探掘坑出土遺物

III-②粘土探掘坑出土遺物（第79図）

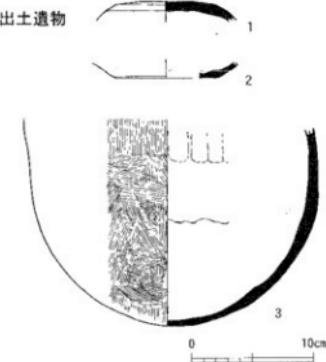
1は須恵器蓋である。2は須恵器壺の底部である。
外方向に大きく開くことから、10世紀の年代が想定できる。3は上師器壺あるいは羽釜の胴部である。長
胴タイプのもので外面を刷毛目、内面をナデにより器
面調整される。

III-④区粘土探掘坑出土遺物（第80図）

1は須恵器壺の頸部で波状文が施される。2、3は
須恵器の口縁部。

II区粘土探掘坑出土遺物（第81図）

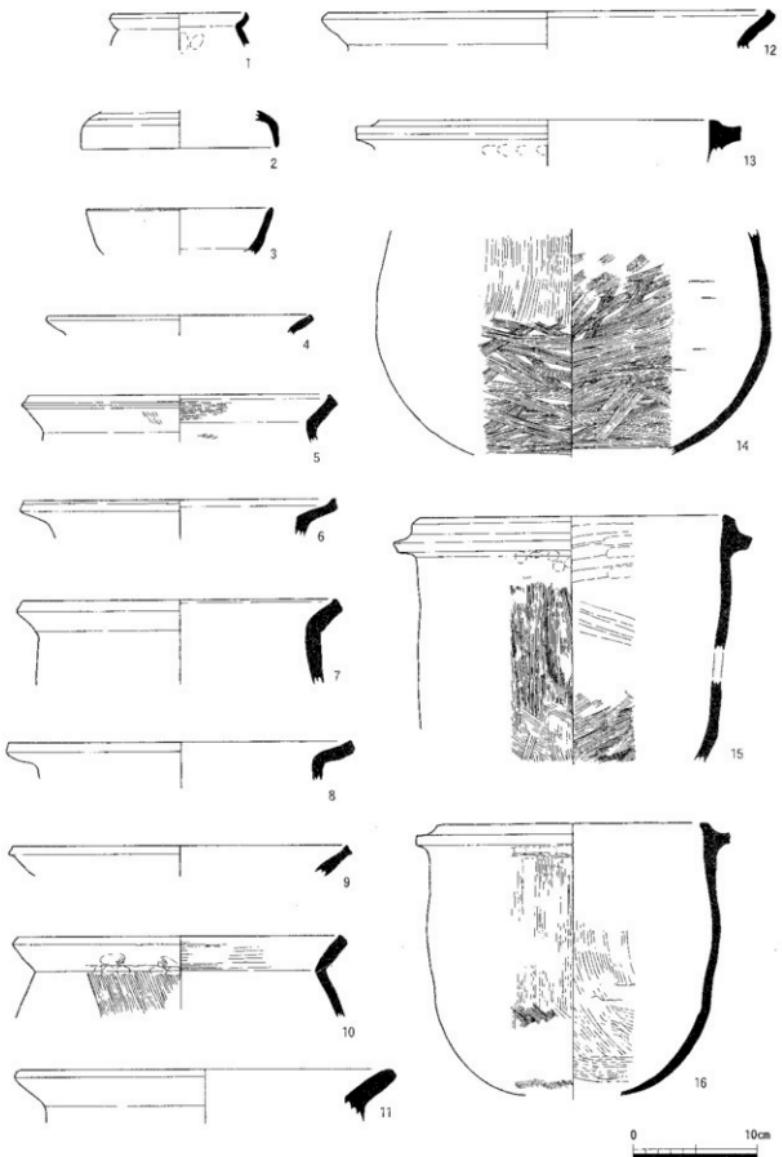
1は、弥生後期の壺口縁部。2は7世紀代に比定さ
れる須恵器蓋である。3の須恵器壺は、体部が丸みを帯びる
こと、口径（15cm）から、佐藤編年のII-①期に相当し
8世紀前半に位置付けられる。4は壺の口縁部。5～12は
土師器壺の口縁部である。14は土師器壺の体部である。外
面の調整は、底部に横方向の刷毛目が、上部には縦方向の刷
毛目が見られる。内面は刷毛目により調整されるが、接合痕
が残る。13、15、16は土師器羽釜である。口縁部及び
萼の特徴から、片桐編年のII-④期に相当し12世紀に位置付けられる。調整は外側の萼下部を指頭压
痕、体部には刷毛目が施される。内面には接合痕が見られ、下半は刷毛目を施す。



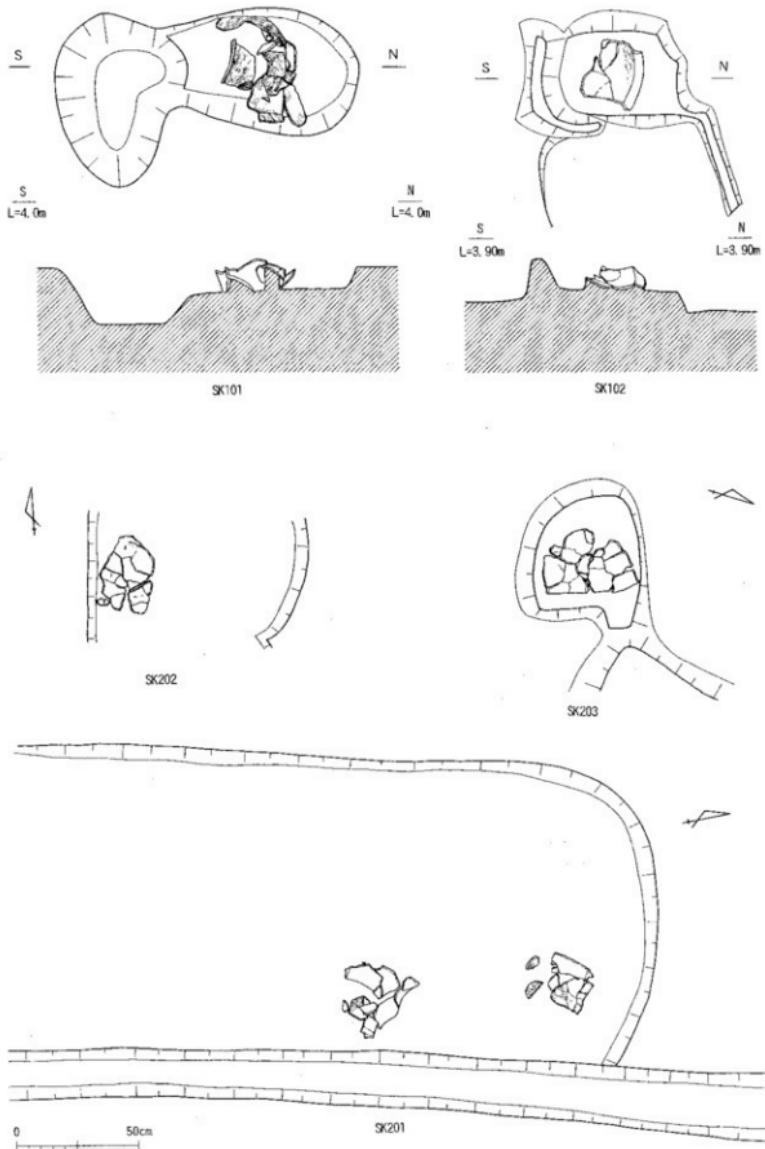
第79図 III-②区粘土探掘坑出土遺物



第80図 III-④区粘土探掘坑出土遺物



第 81 図 II 区粘土探掘坑出土遺物

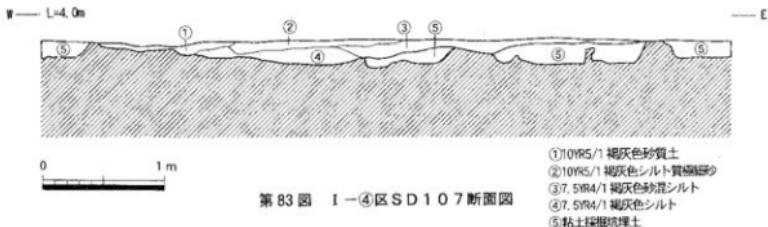


第 82 図 粘土探掘坑遺物出土状況図

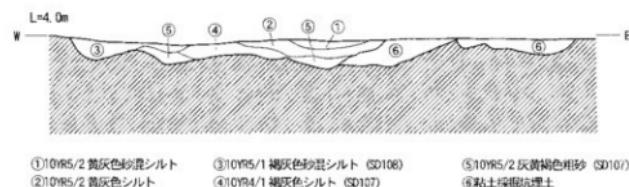
溝跡

SD107 (第83、84図)

I区の西半において、推定坪界に位置する南北の現道に沿って検出された溝跡である。ほぼN-Eへ向いて、およそ幅約2~4m、深さ0.2~0.3mで確認した。底面のレベルはI-④区で標高3.55~3.71m、I-①区で標高3.63~3.71m、I-②区で標高3.69~3.82mを測り、緩やかに北方向に配水されたものと考えられる。埋土は、概ね褐色灰色砂混じりシルト～砂質土が堆積し粘土採掘坑を壊す。切り合い関係が不明瞭だが、複数の流路が見られ南方に向かって分岐し、SD108、SD110~112へと繋がると考えられる。褐色土において、10~12世紀に比定される遺物が主として出土しており、上部に堆積する黄灰色シルト層では13世紀代の遺物が含まれることから、12世紀代の埋没時期が推測される。またSD107を含め推定坪界に位置する溝跡の底から7世紀後半～8世紀代に遡る遺物が出土していることから、当該期に開削された可能性も考えられる。



第83図 I-④区SD107断面図



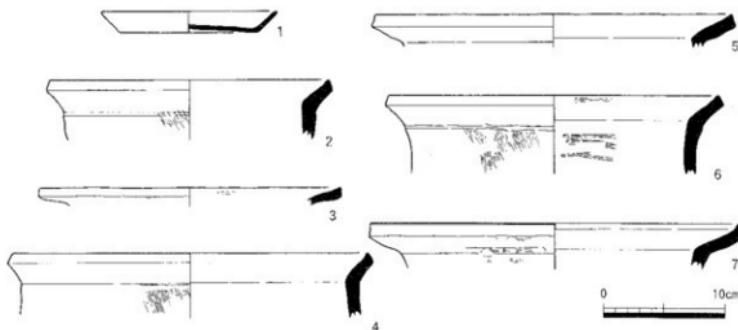
第84図 I-②区SD107, 108断面図

I-④区SD107出土遺物 (第85図)

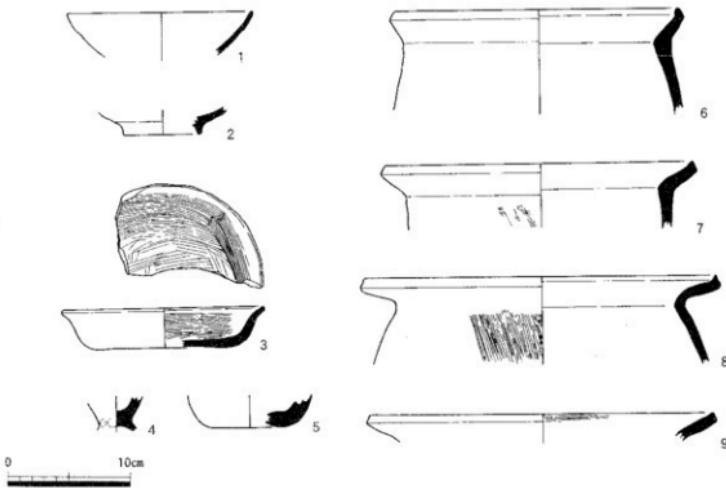
1は土師器皿である。口径14.4cm、器高1.7cmを測る。体部が直線的に伸びること、及び口径から片桐編年においてはI-②~④期に相当し、10世紀に位置付けられる。2~7は土師器皿の口縁部である。

I-①, ②区SD107出土遺物 (第86図)

1及び2は黒色土器碗である。1は器高からすれば12世紀以降に位置付けられる。2は高台の大きさから、片桐編年の中Ⅱ-②~④期(10世紀)に位置付けられる。3は8世紀前半に比定される土師器皿である。口縁部が玉線状に仕上げられ、内面は粗い刷毛目により調査が為されている。4は製塙土器の底部。5は土師器の鉗頭。6~9は土師器皿の口縁部である。



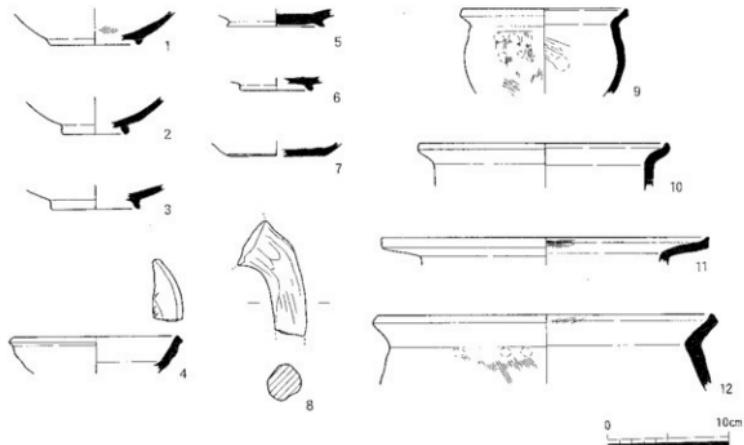
第85図 I-④区 SD 107出土遺物



第86図 I-①, I-②区 SD 107出土遺物

I-②区 SD 107上層出土遺物（第87図）

1, 2, 3, 5, 6は10～12世紀に比定される黒色土器底である。6は高台が矮小化しており、12世紀以降の年代が推察される。4は近世の陶磁器片である。混入したものと考えられる。8は13世紀以降に比定される土師質土器足金の脚部。9, 10は弥生後期末の壺。上記の弥生時代溝状遺構から混入したものと考えられる。11, 12は土師器壺の口縁部。



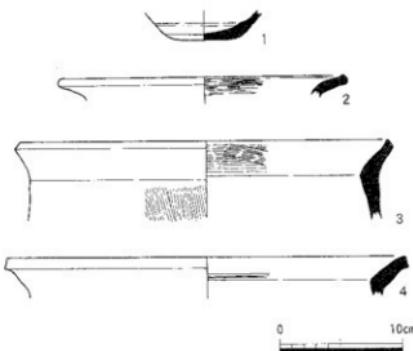
第87図 I-②区(南部) SD 107上層部(黄灰色シルト)出土遺物

SD 108 (第84図)

I-①～③区においては微高地となり削平が大きいと見られ、SD 107は分岐した溝跡として検出された。SD 108はI-①及び②区の調査区西端で、SD 107に平行する幅1m弱、深さ約0.15mの溝跡として確認した。部分的には調査範囲外となるが堆積状況は、SD 107とほぼ同等である。

I-②区 SD 108出土遺物 (第88図)

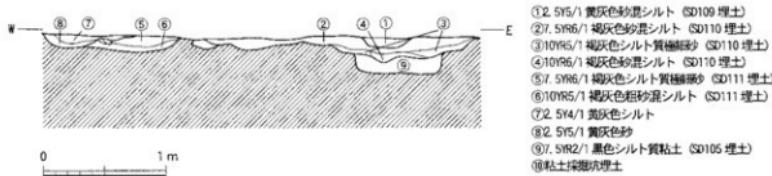
1は7世紀後半に比定される須恵器壺の底部である。2～4は土師器壺の口縁部。いずれも口縁内面には、刷毛目による調整が為されている。



第88図 I-②区 SD 108出土遺物

SD 110 (第89図)

I-③区で検出された南北方向の溝跡である。東西推定坪界にあたる現道を隔て、SD 107と繋がるものでI-③区においてはSD 110とした。方位N-8°-E、底面レベルは標高3.92～4.02mを測り、南へ北方向を向く。埋土は褐色灰色砂混じりシルト～シルトであり、SD 105及び粘土採掘坑を壊す。また上部には、SD 109が同方向に掘削される。



第89図 SD 110, 111断面図



第90図 SD 110出土遺物

SD 110出土遺物（第90図）

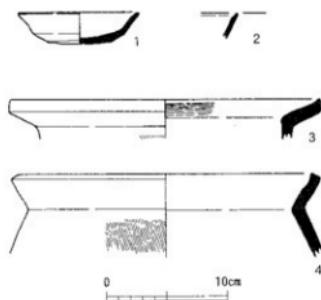
1, 2は黒色土器椀の底部である。高台が矮小化しており12世紀以降の年代が推察される。3は土器壺の口縁部である。

SD 111（第89図）

I-③区で検出された幅約0.5~1m、深さ5~10cm程の溝跡である。東西推定坪界にあたる現道を隔て、SD 108と繋がるもので、I-③区においてはSD 111とした。南部において、本流と見られるSD 110から分岐し、平走する。断面は船底形を呈し、埋土は褐灰色シルト～粗砂混じりシルトが堆積する。

SD 111出土遺物（第91図）

1は土器壺である。底部はヘラ切りされ、体部を内湾、口縁部を外反させる。口径10cm、器高2.6cmを測り、片桐編年での上師器壺Cに相当し、II-③期（11世紀末）に位置付けられる。2は口縁端部から撤入品と考えられる黒色土器椀。片桐編年のI-②～II-①期に相当し、10世紀末～11世紀代に位置付けられる。3, 4は土器壺の口縁部。



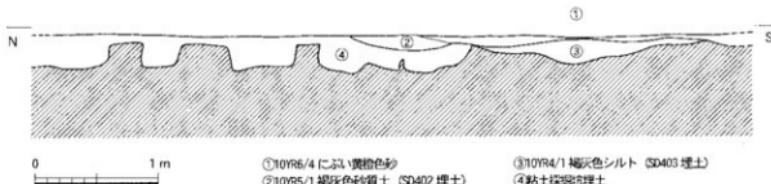
第91図 SD 111出土遺物

SD 402（第92図）

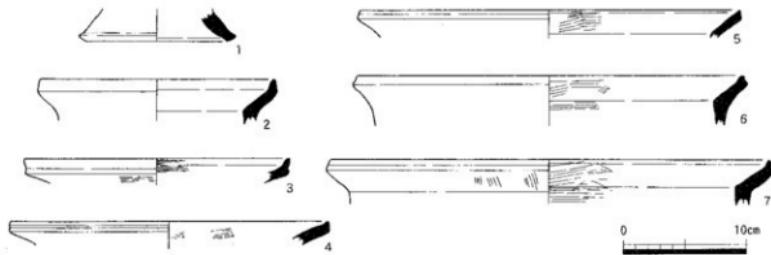
IV区において、検出された南北及び東西方向の推定坪界に位置する溝跡である。埋土は、にぶい黄橙色砂～褐灰色砂質シルト層で、切り合ひの関係において粘土採掘坑及び褐灰色シルトが堆積するSD 403より後出する。方位N-8°-E, N-112°-Eを割り、南北方向は、SD 107の延長部である。東西、南北方向ともに、検出幅0.7~1m、深さは0.1m前後である。遺物は褐灰色砂質シルト層より出土した。

SD 402出土遺物（第93図）

1は7世紀に比定される須恵器高壺の脚部である。2～7は土器壺の口縁部。



第92図 SD 402, 403断面図



第93図 SD 402出土遺物

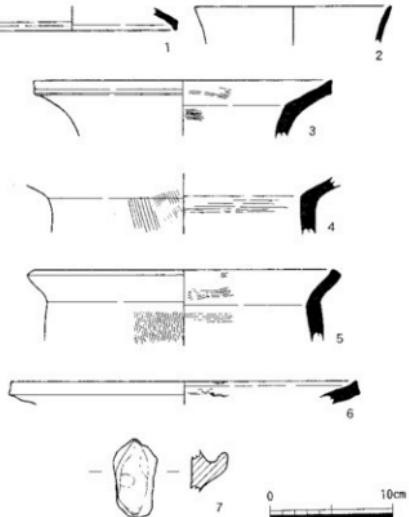
SD 403 (第92図)

IV区の南西隅で検出された溝状の構造である。南北方向の流路は、大部分が調査区外となり不明だがSD 107に繋がり、北進するものと考えられる。東西方向は検出幅2m弱、深さ0.2m程であるが、東端では浅くなり削平のためほとんど検出できなかった。

また粘土探査坑との切り合いも不明である。

SD 403出土遺物 (第94図)

1は須恵器蓋である。口縁端部が下方に伸び、また強いナゲが施されることと、口径(17cm)により、佐藤編年のII-2～4期にあたり9世紀前後に位置付けられる。2は須恵器壺の口縁部である。口径16cmを測り、体部は直線的に伸びることから佐藤編年のII-5期(9世紀半ば)に位置付けられる。3～6は上師器壺の口縁部。7は土師器の把手部である。



第94図 SD 403出土遺物

SD 301 (第 95 図)

III-①区西端で検出された南北方向の溝跡である。大半が調査区外に広がり、全様は不明である。推定坪界にあたる南北現道にはほぼ平行するもので、南部で検出された SD 107 等と同じく、古代末～中世にかけての坪界に相当する溝跡と考えられる。III-①南部において、東へと分岐するものと考えられたが、削平が激しく定かではない。

SD 304 (第 96 図)

III-①区北部で検出された溝跡である。方位約 N-2.0° - E を向き、検出幅 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は黒褐色シルトの単層で SD 301 を壊す。遺物は出土していないが、堆積関係及び上部包含層に奈良～平安前半の遺物が出土することから、当時期に該当すると推測される。

SD 201 (第 97 図)

II 区北半で検出された N-8° - E の方位を示す南北方向の溝跡である。粘土採掘坑による破壊が大きいが、最大検出幅約 1 m、深さ 0.1 m 弱を測り、途中で東西方向へと分岐する。遺物は出土していないが、埋土は黒褐色シルトが堆積することから、SD 304 と同時期に埋没したと考えられる。

SD 507 (第 98 図)

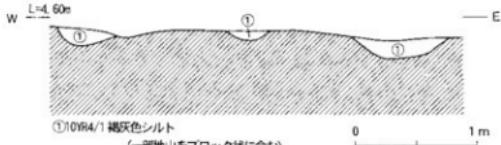
V 区において検出された南北方向の溝跡である。N-3° - E の方位を示し検出幅 1 m、深さ 0.2 m 前後である。水流の方向は、底面のレベルからすれば、北及び南より後述の SD 508 に集められる。一部を SD 502 により壊される。埋土は褐灰色シルトが堆積するが、一部地山（第 8 層）が含まれる。

SD 507 出土遺物 (第 99 図)

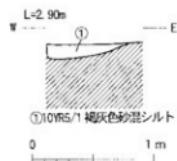
1 は、黒色土器碗の底部である。底径 8.1 cm を測る程の大きい高台が付くことから、片桐編年の I-②期に相当すると考えられ、10 世紀前半の年代に位置付けられる。2 は、奈良・平安時代の製塙土器である。体部は口縁に向かって大きく内弯するもので、内外面には指頭圧痕が残る。

SD 506 (第 98 図)

V 区において検出された南北方向の溝跡である。検出幅 0.5 ~ 1 m、深さ 0.15 m 前後を計り、SD 507 に平行する。底面レベルは標高 4.41 ~ 4.36 m を測り、南へと下る。部分的に SD 502 により壊される。埋土は SD 507 と同一であり、同時期に機能していたと考えられる。



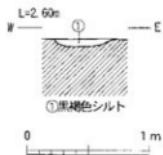
第 98 図 SD 506, 507 断面図



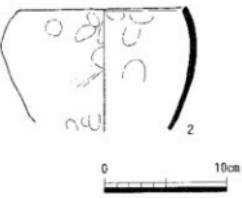
第 95 図 SD 301 断面図



第 96 図 SD 304 断面図



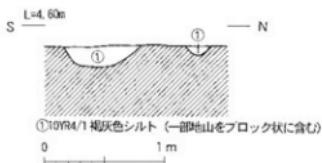
第 97 図 SD 201 断面図



第 99 図 SD 507 出土遺物

SD 508 (第100図)

V区において検出された東西方向の溝跡である。検出幅0.5~1m、深さ0.2m前後を計り、SD 507に直交する。底面レベルは標高4.36~4.26mを測り、東へと下る。埋土はSD 507と同一であり、同時に機能していたと考えられる。



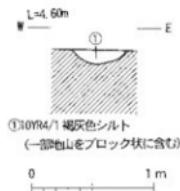
第100図 SD 508, 509断面図

SD 509 (第100図)

V区において検出された東西方向の溝跡である。検出幅0.2~0.3m、深さ0.1m弱で、SD 508に平行するが、削平のため調査区中央部で断絶する。埋土はSD 507と同一であり、同時に機能していたと考えられる。

SD 510 (第101図)

V区において検出された溝跡である。検出幅0.3m、0.1m前後である。SD 506、507から北東を向き、SD 508に合流すると考えられるが、削平が大きく定かではない。埋土はSD 507と同一である。先述のように、SD 506~510の堆積には地山がブロック状に混じることから、一括して埋め戻された可能性がある。



第101図 SD 510断面図

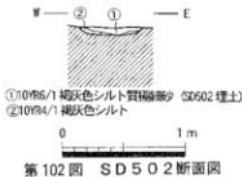
以下はV区において検出された条里方向を向く溝跡で、上記のSD 506~510を壊し開削される。埋土はどの溝跡も褐色シルト質粘土砂が堆積しており、同時に埋没したと考えられる。時期特定のできるものは出土していないが、堆積関係からすれば上層の灰黄褐色シルト層が12世紀後半~13世紀代に位置付けられ、また10世紀代に比定されるSD 507等より切り合い関係において後出することから、この間において開削、埋没したと考えられる。

SD 502 (第102図)

V区西側で南北方向に検出された溝跡である。方位N-8°-E前後を示す。最大検出幅0.7m、深さ0.05mを測り水流は緩やかに北へ向かうと考えられるが、底面レベルはSD 504の交差部に向かい低くなる。

SD 503 (第103図)

V区東側で南北方向に検出された溝跡である。方位は、ほぼSD 502に平行する。最大検出幅0.5m、深さ0.05mを測る。底面レベルは緩やかに北へと下る。



第102図 SD 502断面図

SD 504 (第104図)

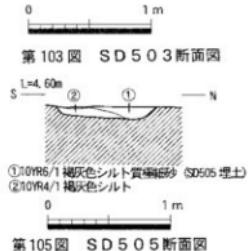
V区南側で東西方向に検出された溝跡である。方位N-120°-E前後を示し、条里方向から20°程南にずれる。遺構面の等高線に直交した地形に沿うもので、底面レベルは東へと下る。検出幅0.7m、深さ0.15mを測る。



第104図 SD 504断面図

SD 505 (第105図)

V区北側で東西方向に検出された溝跡である。方位N-100°-E前後を示し、条里方向に合致する。底面レベルは



第105図 SD 505断面図

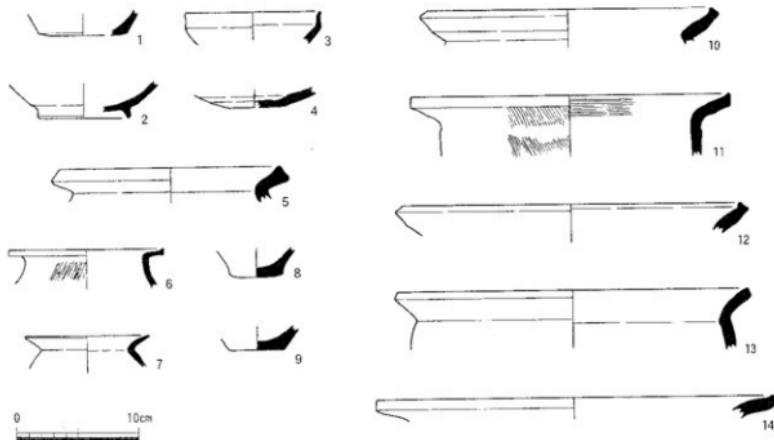
東へと下り、検出幅0.8m、深さ0.1mを測る。

水田土壤層（第5層）出土遺物

調査範囲の大半で、褐灰色の土壤層が確認された。畦畔等の遺構は確認できなかったが当土壤層からは、大量のプラントオパールが検出されている。遺物は10世紀前後を中心に出土しているが、堆積関係からすれば、上層の黄灰色シルト層は13世紀の遺物が中心となること、ほぼ同時期に機能していたと考えられる坪界の溝跡及び先行する粘土探柵坑には12世紀以降の遺物が含まれることからすれば、ほぼ12世紀代までの水田層と考えられる。また出土遺物には7世紀後半に遡るものを見られるが、下位に堆積した黒褐色土層（第7層）等から混じり込んだと考えられる。

I-①, I-②区第5層出土遺物（第106図）

5, 6, 7は甕の口縁部、8, 9は底部で各々後期後半に属すると見られる弥生土器である。1は土師器杯の底部である。2は黒色土器椀の底部である。底径（7.2cm）、高台の作りからすれば、片桐編年のI-③期に相当し、10世紀後半と想定できる（片桐1992）。3, 4は須恵器杯の口縁部と底部である。3は外傾する体部から口縁を直立させ、7世紀後半のものと考えられる。10～14は土師器甕の口縁部である。口縁端部を摘み上げるもの、摘み上げないものとが見られる。



第106図 I-①, ②区第5層出土遺物

I-④区第5層出土遺物（第107図）

1, 2は、須恵器杯である。

1は、体部が開かず直線的に伸びるもの。2は、高台が底

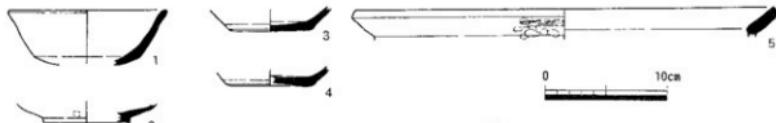


第107図 I-④区第5層出土遺物

部の外縁近くに貼り付けられる。1, 2とも器高が高くなると見られることから、佐藤編年でのII-5期に相当し、9世紀前半頃のものと考えられる。(佐藤1993)

IV区第5層出土遺物（第108図）

1, 2は須恵器楕である。1は体部を内彎させ口縁において外反させる。佐藤編年のIV-1期にあたり、11世紀前半に比定される。2は平高台が認められ、底部は回転糸切りがなされている。3, 4は土師器坏である。底径がそれぞれ6.6cm, 6.4cmを測り、ともにヘラ切りがなされる。片桐編年ではI-②～④期、10世紀前半～10世紀末に相当すると考えられる。5は土師器壺の口縁部である。



第108図 IV区第5層出土遺物

V区第5層出土遺物（第109図）

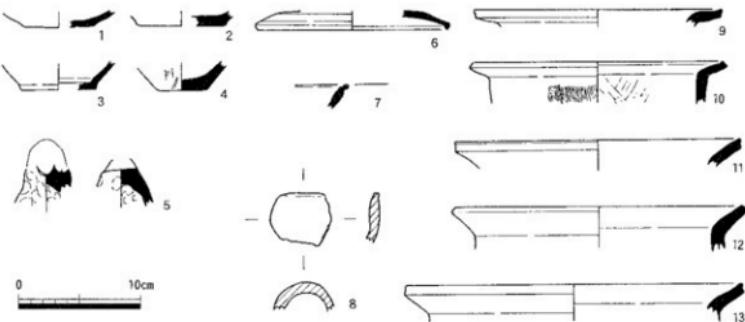
黒色土器楕の底部である。高台の作り及び底径(6.8cm)からすれば、片桐編年のI-④期に相当し、10世紀末と想定できる。



第109図 V区第5層出土遺物

II区第5層出土遺物（第110図）

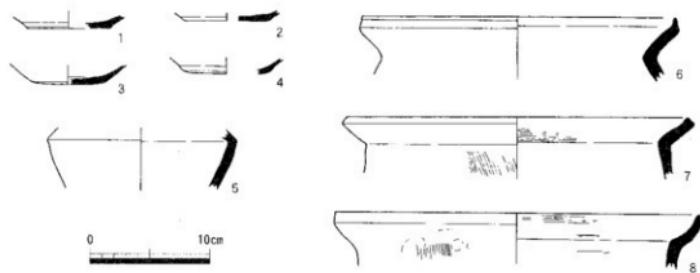
1～3は土師器坏の底部である。2, 3は体部が直線的に外上方向に延びるもので、底部との境に高台状の段差を持つことから、10世紀の年代を想定できる。4は弥生土器の底部。5は8世紀後半の須恵器蓋。6は、8世紀後半の須恵器蓋。7は口径15.4cmを測る土師器皿の口縁部である。口縁が玉縁状に仕上げられていることから、8世紀前半に位置付けられる。9～13は土師器壺の口縁部である。



第110図 II区第5層出土遺物

III-③区第5層出土遺物（第111図）

1～3は土師器壺の底部である。4は須恵器壺である。体部がかなり外に開くこと等から、佐藤編年III-④期に相当し、10世紀後半の年代が想定される。5は壺の体部である。肩が強り、7世紀に比定される。6～8は土師器壺である。



第111図 III-③区第5層出土遺物

参考文献

岡山県教育委員会「北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地蔵遺跡、都市計画道路万成・国富線建設に伴う発掘調査Ⅰ」1998

片桐孝治「考察—古代から中世にかけての土器様相—」『川津元結木遺跡』(財)香川県埋蔵文化財センター-1992

佐藤竜馬「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西考古学研究室四拾周年記念考古学論叢』1993

第6節 中世の遺構・遺物

I 区遺物包含層

人力掘削中及び遺構面精査中に黄灰色層から出土した遺物である。

I-④区黄灰色シルト層出土遺物（第112図）

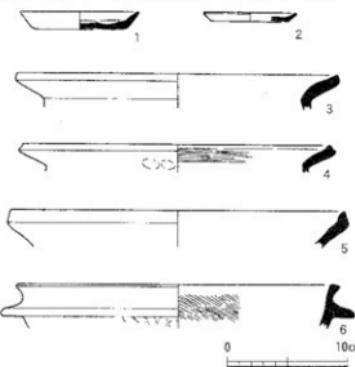
1は土師質上器羽釜の口縁部である。鋸の矮小化からすれば、13世紀以降に位置付けられる。

I-①, ②区灰黄色シルト極細砂層出土遺物（第113図）

1, 2は上器皿小皿である。1は、底部をヘラ切りされる。法量（口径9.6cm, 器高1.4cm）からすれば、12世紀に比定される。2は底部ヘラ切りで、小型であることから、13世紀以降に位置付けられる。3, 4は土器器蓋の口縁部。5は束縛系須恵器こね鉢の口縁部である。口縁部の外反は小さく口縁端部の拡張も僅かなことから、森田編年の第Ⅱ期第2段階に相当し、12世紀末～13世紀初頭に位置付けられる。6は13世紀以降に比定できる土師質上器羽釜の口縁部である。



第112図 I-④区黄灰色シルト層出土遺物



第113図 I-①, ②区灰黄色シルト極細砂層出土遺物

I区溝跡（第114図）

以下は、1区において検出された溝跡である。SD112を除き条里方向を向くもので時期特定のできる遺物が出土していないが、埋土が上記の遺物包含層とほぼ同質であることから、概ね12世紀末～13世紀に埋没したものと考えられる。

SD112

I-①区北西隅で、検出した北東方向の溝状遺構である。検出幅0.3m、深さ0.05～0.1mを測り、断面U形を呈する。黄灰色シルトが堆積し、SD107, 108を切る。

SD109

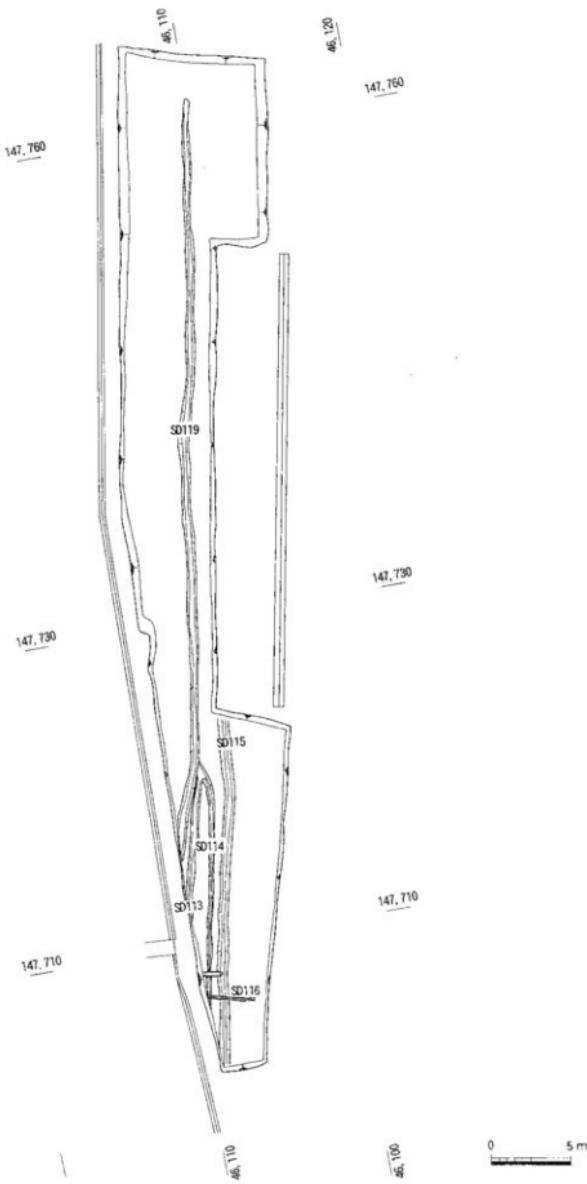
I-③区で検出された南北方向の溝跡である。検出幅約0.5m、深さ0.1mで、方位N-8°-E前後を示す。SD110を壊し、同方向に掘削される。断面は船底を呈し、黄灰色砂混じりシルトが堆積する。切り合ひ関係からは、SD113, 114より後出する。

SD113（第115図）

I-③区南半において検出した南北方向の溝跡である。検出幅約0.3～0.5m、深さ0.05～0.1mで、方位N-8°-E前後を示す。埋土は黄灰色シルトが堆積する。

SD114（第115図）

SD113に平行する南北方向の溝跡である。SD109に切られるが、SD113に合流し北に延びるものと考えられる。検出幅約0.3m、深さ0.05mを測り、埋土は黄灰色シルトが堆積する。



第 114 図 I-③区第一造構面造構配置図

SD 116

I-③区南端部で検出された東西方向の溝跡である。方位N-100°-E、検出幅0.3m、深さ0.05mを測る。SD 114、SD 115を壊す。埋土は黄灰色砂混じりシルトが堆積し、同埋土のSD 109と同時期に埋没したものと考えられる。

SD 115 (第115図)

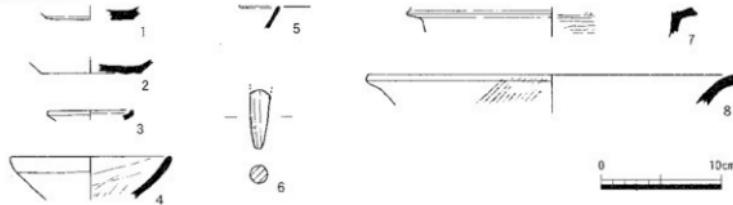
I-③区南部で検出された南北方向の溝跡である。方位N-8°-E前後を示すが、調査区の北側では、検出できなかった。検出幅約0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は褐灰色シルト質極細砂が堆積し、堆積関係からすればSD 114等より先行すると考えられる。

V区遺物包含層

V区灰黄色シルト質極細砂～灰黃褐色シルト出土遺物（第116図）

人力掘削中及び遺構面精査中に黄灰色層から出土した遺物である。

1、2は土師器壺の底部である。ともに底部はヘラ切りされる。3は須恵器壺の口縁部である。佐藤編年の壹B IIとみられ、口縁端部の摘み上げが弱いことからIV-③期（12世紀後半）に比定される。4は須恵器碗である。器高が低くなると考えられ、回転ヘラ磨きも見られないことから佐藤編年のIV-④期に相当し、13世紀に位置付けられる。5は瓦質上器碗の口縁部。6は土師質上器足釜の脚部。7は土師質上器羽釜の口縁部である。鉗の退化からすれば、13世紀以降に位置付けられる。8は須恵器壺の口縁部。



第116図 V区灰黄色シルト質極細砂～灰黃褐色シルト出土遺物

犁溝

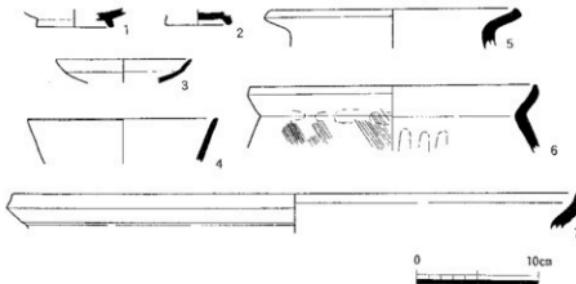
V区第1遺構面において検出した犁溝である。上記の灰黄色土を埋土とすることから、13世紀以降の耕作痕と考えられる。

II区遺物包含層

人力掘削中及び遺構面精査中に黄灰色層及び砂質土層より出土した遺物である。

II区灰黄色シルト質極細砂層出土遺物（第117図）

1は黒色上器碗の底部である。2は土師器碗の底部。3は龍泉系青磁皿である。体部中位で屈曲し、口縁部は直に薄く引き出す。横田編年の1類に属し、13世紀以降に位置付けられる。4は須恵器壺である。体部が直線的に開き、10世紀前後の年代が推測される。5～7は土師器壺の口縁部である。



第117図 II区灰黄色シルト質極細砂層出土遺物

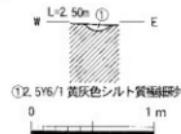
II区灰オリーブ色砂質土～シルト質極細砂出土遺物（第118図）

1は土師器坏底部。摩滅が著しい。2は法量から13世紀に比定される土師器小皿。底部はヘラ切りされる。3, 4は土師器壺、口縁部。5の土鍋は、口縁部に内耳が付くもので、片桐編年のIII-6～7期（ほぼ16世紀）にあたる。6, 7は足釜の脚部。8は有溝土錘である。

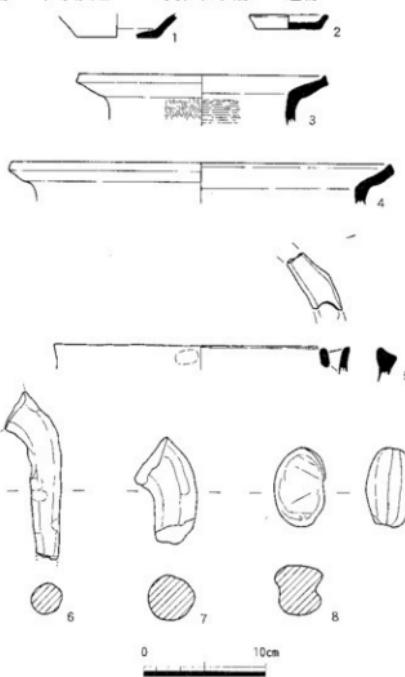
II区溝跡

SD 202（第119図）

II区北半で検出された南北方向の溝跡である。方位N-8°-Eを示し、検出幅0.3m、深さ0.05mを測る。削平が激しく、南方においては検出できなかった。埋土は黄灰色シルト質極細砂が堆積し、13世紀以降の埋没時期が推察される。



第119図 SD 202断面図



第118図 II区灰オリーブ色砂質土～シルト質極細砂出土遺物

III区遺物包含層

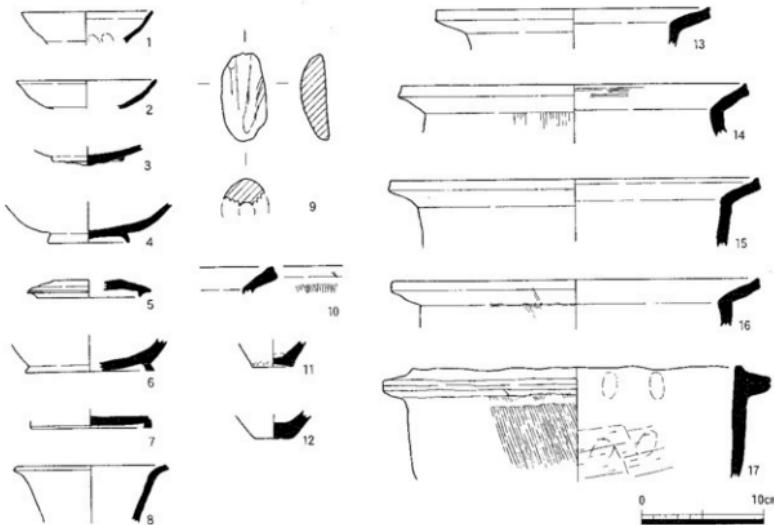
人力掘削中及び造構面精査中に褐色シルト質極細砂他の包含層から出土した遺物である。地山直上に堆積する褐色シルト質極細砂は僅かに土壤化し、鋤痕等により凹凸状に地山を削平する。

III-①区褐色シルト質極細砂層出土遺物（第120図）

1, 2は土師器坏である。片桐編年の土師器坏Dで口径（10.8cm, 11.2cm）より、II-⑧⑨期に相当し13世紀に比定される。3は土師器碗の底部である。高台は矮小化が著しく、役割を為さない。片桐編年のII-⑦, ⑧期（13世紀）に相当すると考えられる。4は黒色土器碗の底部である。高台の矮小化から、12世紀頃のものと考えられる。5は7世紀後半のツマミが付く坏蓋である。6, 7は8世紀前半に相当する須恵器坏の底部である。8は須恵器壺である。9は管状の土錐。11, 12は弥生土器。10及び13～16は土師器甕。口縁部を摘み上げるものが多い。17は土師器羽釜である。体部は長胴タイプのもので、鋤はしっかりとした作りになっている。10世紀頃に比定される。

III-①区明褐色シルト質極細砂層出土遺物（第121図）

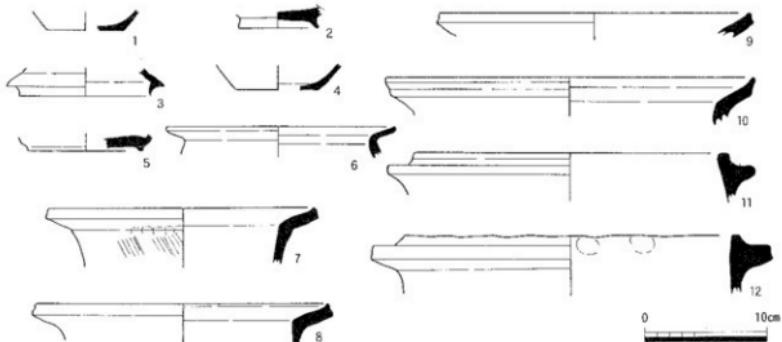
1は土師器坏の底部である。2は黒色土器碗の底部。3は7世紀後半の須恵器坏蓋である。4は須恵器坏である。体部は直線的に開き、底部は無高台で平坦なもの。5は須恵器坏の底部である。6～10は土師器甕、口縁部。11, 12は土師器羽釜である。11はしっかりした鋤が付き、鋤から口縁部までは短い。



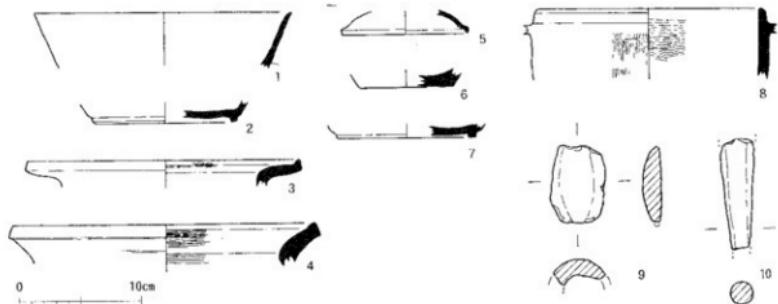
第120図 III-①区褐色シルト質極細砂層出土遺物

III-①区床土下～明褐灰色シルト質極細砂層出土遺物（第122図）

8～9世紀の須恵器等が多く混じる。1は須恵器環である。器壁は薄く、体部は直線的に伸びる。2, 7は須恵器環の底部である。3, 4は土師器壺の口縁部。5は須恵器蓋。カエリは短く下方向に稍曲する。6は弥生土器。摩滅が著しい。8は土師器羽釜である。9は管状の土錘。10は足釜の脚部。



第121図 III-①区明褐灰色シルト質極細砂層出土遺物



第122図 III-①区床土下～明褐灰色シルト質極細砂層出土遺物

III区溝跡

SD302

III-①区中央部で検出された東西方向の溝跡である。方位N-97°-Eを示し、条里方向を向く。検出幅0.3m, 深さ0.05m以下で、削平が激しく断続的に検出された。埋土は灰黄色シルト質極細砂が堆積し、13世紀以降の年代が推察される。

SD305

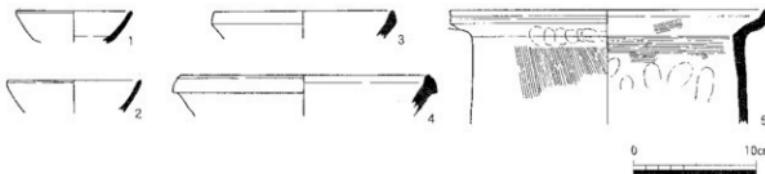
III-③区で検出された東西方向の溝跡である。方位N-100°-E前後を示し、条里方向を向く。検出幅0.3m, 深さ0.1mで、削平が激しく西端と東端のみで検出された。埋土は黄灰色シルト質極細砂が堆積し、13世紀以降の年代が推察される。

SD 306

III-③区で検出された東西方向の溝跡である。方位N-100°-E前後を示す条里方向を向くもので、推定坪界にあたる東西現道より数m北に位置する。検出幅0.5m、深さ0.2~0.3mで、西に向って深さを減じ、途切れる。断面U形を呈し、埋土は3~4層に分層できる。時期の特定できる遺物は出土していないが、褐灰色砂混じりシルト～黄灰色砂混じりシルト質極細砂が堆積することから、13世紀前後に数回にわたる掘削と埋没があったと推察される。

III-④区上面精査中出土遺物（第123図）

1、2は上師器壺である。法量からは15世紀以降の年代に位置付けられる。3は16世紀代のすり鉢口縁部。4は束播系須恵器こね鉢である。口縁端部の拡張が少なく小型の鉢であることから、森田編年第三期第3段階（14世紀後半）以降に相当する。5は土師器壺である。口縁端部は上方に向て鋭く摘み上げられ、丁寧な器面調整が施されている。

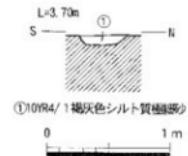


第123図 III-④区上面精査中出土遺物

IV区溝跡

SD 404（第124図）

IV区中央部で検出された東西方向の溝跡である。方位N-98°-E前後を示し、条里方向を向く。検出幅0.4m、深さ0.05m程である。SD 402及び粘土採掘坑との切り合い関係は不明である。埋土は褐灰色シルト質極細砂が堆積することから、12世紀後半～13世紀前後の埋没が推定される。



第124図 SD 404断面図

参考文献

- 横田賛次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978
森田稔「中世須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995

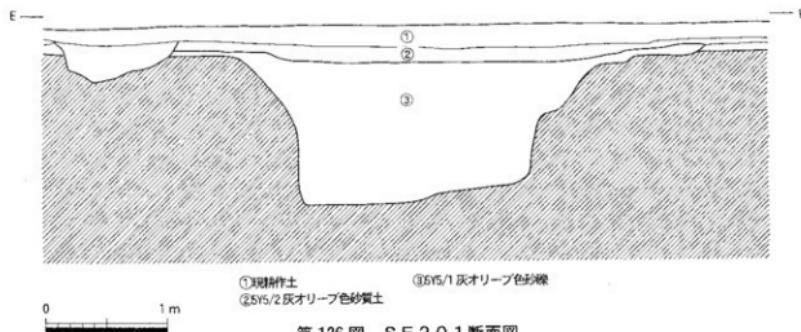
第7節 近世以降及びその他の遺構・遺物

SE 201 (第126図)

II区南端に掛った掘り方で幅約2m、深さ1m以上の落込み。埋没旧河道上に掘削が為され、現在においても水が豊富に湧き出ることから井戸跡と考えられる。出土遺物は、瀬戸・美濃、肥前陶磁器碗等で18世紀以降に破棄、埋没したと考えられる。



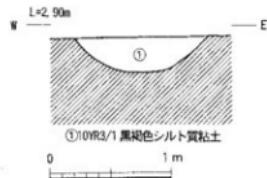
第125図 SE 201出土遺物



第126図 SE 201断面図

SX 301 (第127図)

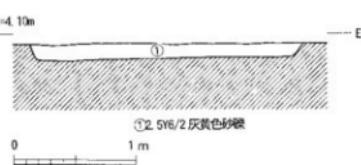
III-①区西縁に掛る不定形の窪みである。埋土は単層で黒褐色土が堆積するが、遺物が出土せず時期不明である。



第127図 SX 301断面図

SX 101 (第128図)

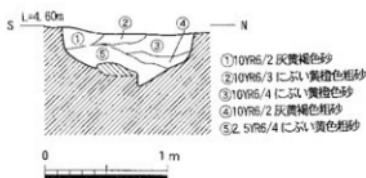
I-②区南部で検出した梢円状の落込み。SD 107等を切る。埋土は砂礫層で近世の埋没時期が推測される。



第128図 SX 101断面図

SD 501 (第 129 図)

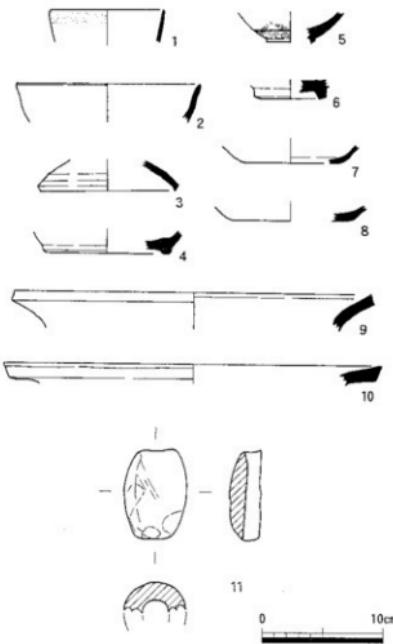
V 区南西隅に掛かる南東方向の溝跡。南端で急激に深さを増し、直径約 1 m、深さ 0、4 m 程の窪み状となる。底部に板状の石が敷かれており、埋土は砂層がラミナ状に堆積する。



第 129 図 SD 501 断面図

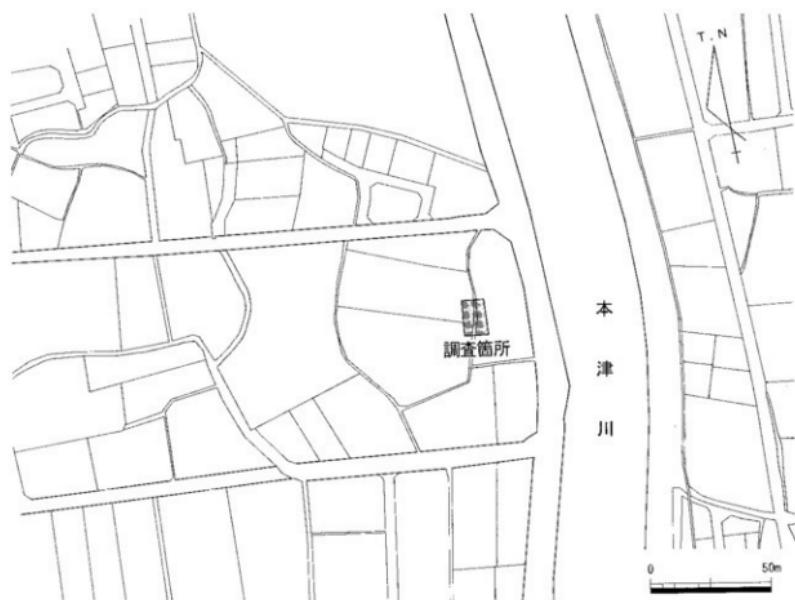
III-②区人力掘削中出土遺物 (第 130 図)

1、5 は 18 世紀代の近世染付け。2 は土師器坏の口縁部。3 は須恵器蓋。4 は須恵器坏底部。6 は龍泉窯系青磁碗である。7、8 は土師器底部。摩滅が著しい。9、10 は土師器底の口縁部で摩滅が著しい。11 は管状の土錐。



第 130 図 III-②区人力掘削中出土遺物

第8節 香西南部ポンプ場建設予定地の発掘調査について



第131図 香西南部ポンプ場建設予定地調査位置図

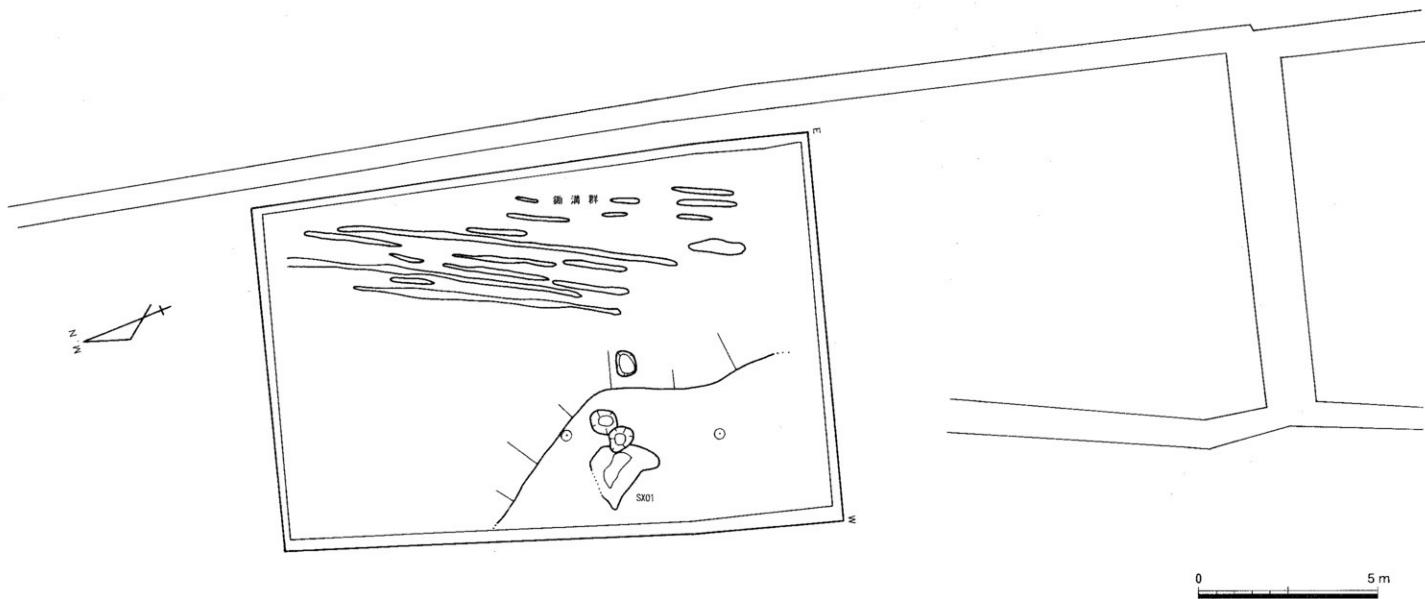
1.はじめに

平成8年12月11日～平成9年1月14日の期間で行った港頭地区再開発関連事業に伴う試掘調査のうち、香西南部ポンプ場予定地内で行った試掘調査で試掘トレンチ中央部から焼上とともに多量の土器が出土した。その後の打ち合わせの中で、香西南部ポンプ場の工事を急ぐことが判明したため、工事の実施前に発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成9年2月3日～2月7日の期間で実施し、調査面積は約140m²である。

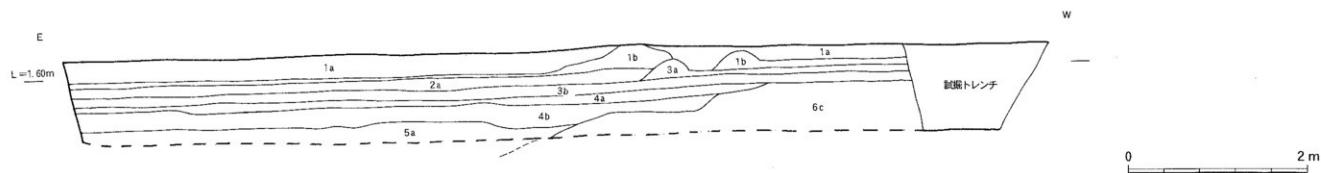
試掘調査を行う前は、調査対象地が木津川の西側堤防のすぐ西に位置し、周辺の地形の乱れ等からの判断では木津川の旧河道内に位置し、遺構は存在しないものと想定していた。調査の結果、当初の予想を上回る成果を得ることができた。

2. 調査成果

発掘調査で確認した遺構は、土器廃棄土坑1、土坑3、鋤溝群、木津川の旧河道である。確認したこれらの遺構は中世から近世にかけての遺構である。

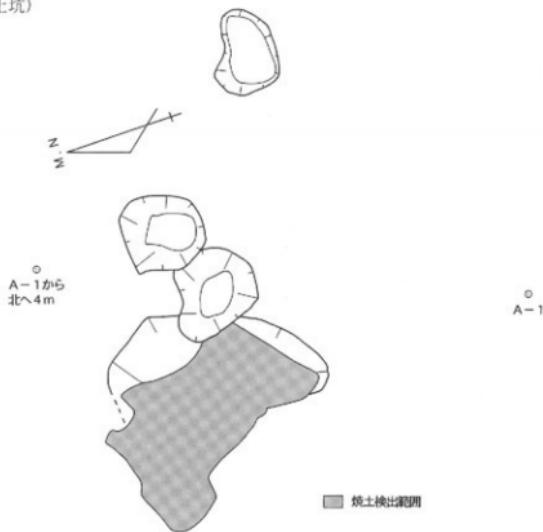


第132図 香西南部ポンプ場建設予定地造構配置図

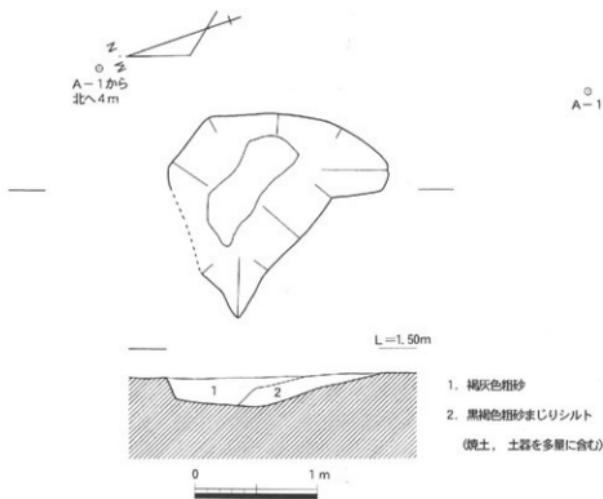


第133図 香西南部ポンプ場建設予定地南壁土壁図

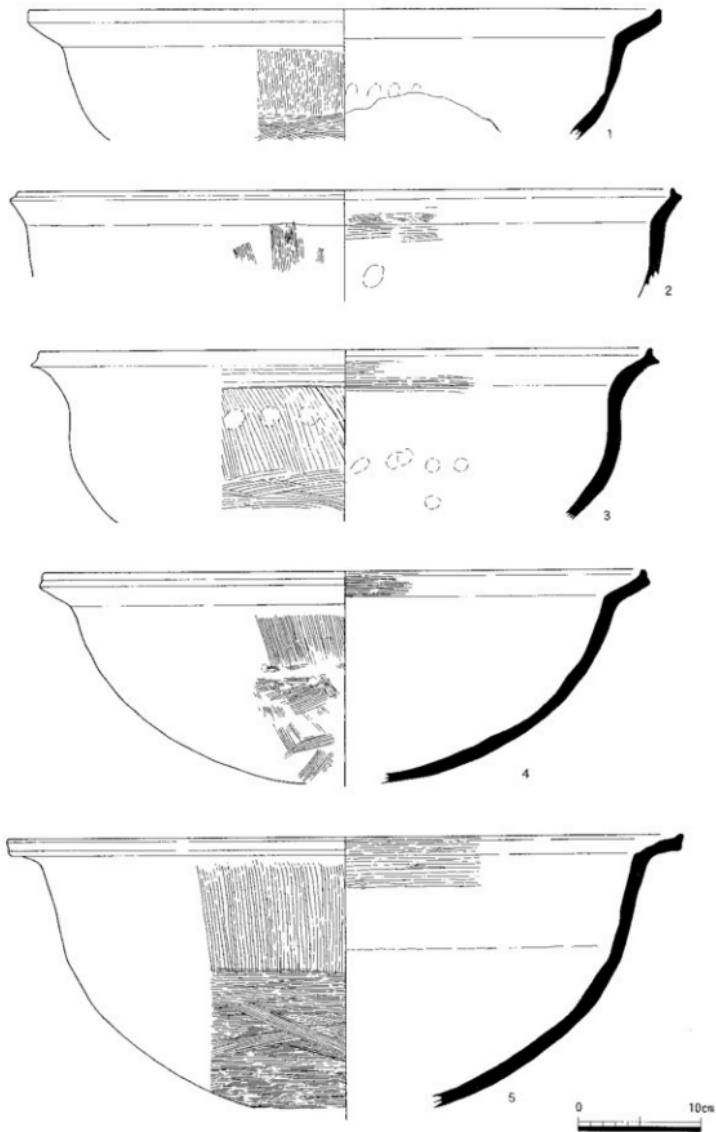
S X 0 1 (土器廃棄土坑)



第 134 図 S X 0 1 検出状況図



第 135 図 S X 0 1 平面図, 土層図



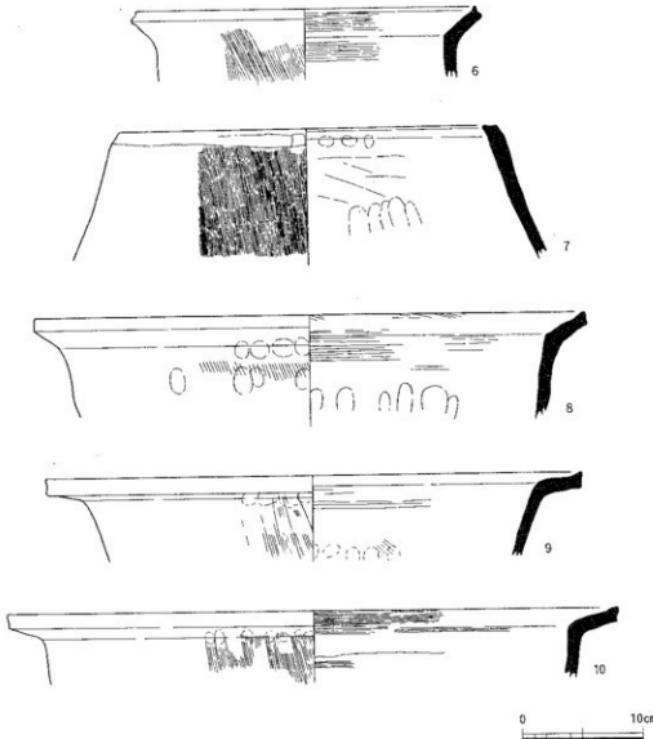
第136図 SX01出土土器実測図(1)

調査区南西で確認した遺構である。S X 0 1が存在する6 c層中に13世紀代の遺物を含むことから、堆積してからさほど時間を置かずにS X 0 1が穿たれたものと想定できる。遺構を確認した時点では、土坑南側に焼土が広がっていた。土坑の平面形は不整形を呈する。土坑の規模は東西3.00m、南北2.50m、深さ0.25mである。土層の堆積は2層に分かれ、1層 喬灰色粗砂、2層 黒褐色粗砂混じりシルト（焼土、上器を多量に含む）である。土坑の南側に2層が堆積した後、北側に1層が堆積したのが土層からわかる。

遺構検出当初、焼土とともに多量の大型土師器鍋が出土したことから、土器焼成遺構と考え調査を行ったが、土坑の壁面が焼けていないことから、その可能性は薄いものと考えられる。ただ、土器とともに多量の焼土も出土していることから、近くで土器焼成が行われていたことは確実である。当土坑は土器焼成で破損した土器、焼土などを廃棄した土坑の可能性が考えられる。

S X 0 1出土遺物

第136、137図1～5、8～10は大型の鍋である。口径50cm、器高が20cmを超えるものと、



第137図 S X 0 1出土土器実測図（2）

20 cm内に収まるものがある。器形の特徴として口縁の形状にある。口縁端部の上部へのつまみ上げが強く、3のように上下に拡張するものもみられる。調整は体部外面上半は縦ハケ、下半は横ハケ、口縁部内面に横ハケ、体部内面はナデである。6は長胴の壺である。口縁端部が上方につまみあがる。胴部内外面にハケが施されている。7は移動式の壺であろうか。外面はハケ、内面はナデである。

SK01~03

SX01の東で確認した土坑である。いずれの土坑も不整形である。土坑の規模は直径約70cm、深さ10~20cmと浅い。いずれの土坑も近世のものであろう。

鍛溝群

調査区東半部で確認したものである。溝状遺構が幅30cm程度で等間隔に並ぶこと、溝の深さが一定でないことなどから耕作に伴う鈍溝であると考えられる。溝の方位はN30°Eで現在周辺に残る地割りに比べ20°東に振る。今回は細片のため図示していないが、各溝からは近世と考えられる染付等が出土している。

SR01（本津川旧河道）

調査区の南西部をのぞく大半がSR01の堆積物である。4a層 灰灰色粗砂混じりシルト、4b層 黄灰色粗砂混じりシルト、5a層 灰黄褐色粗砂混じりシルトであり、それより下は湧水が激しく堆積を確認できなかった。堆積物中にはほとんど遺物を含まないが、13世紀頃と考えられるSX01が存在する6c層 にぶい黄橙色粗砂を切っていること、SR01上に近世の鍛溝が存在することから、時期幅は広いが早ければ13世紀以降、遅くとも18世紀後半頃には地形を大きく変えるよな変化はなくなり、当地が安定していったものと想定できる。

3. 小結

確認した遺構は少なかったものの、当初の予想を超える成果を上げることができた。特に大型の土師器鍋を多く出土したSX01があげられる。調査の結果、土器焼成遺構ではなかったものの、出土状態から当地で製作されたことは間違いない。口縁端部を上方につまみ上げる形態を持つ特徴のある土師器鍋が出土したことによって、今後周辺で出土する土器を考える上で、一つの目安となろう。また、これらの特徴を持った土器がどの程度の範囲で流通するのか周辺の調査成果に期待する部分は大きい。

第13表 香西南西打遣跡出土遺物観察表

第58図 SR01出土遺物

No	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	弥生土器 甕口縁部		22.0	(3.3)	外面：指頭圧痕、ヨコナデ 内面：磨滅のため調整不明	外面：灰白(10YR8/1) 内面：黄橙(10YR8/8)	2mm 以下の石英、 長石を含む	
2	弥生土器 底部		7.2	(6.2)	外面：磨滅のため調整不明 内面：磨滅のため調整不明	外面：灰白(2.5YR8/1) 内面：黄灰(2.5Y6/1)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
3	弥生土器 甕	16.6	8.2	30.7	頭部外面：沈痕横に3条づつ 体部上面：沈痕横に3条づつ 機械縫の間にななめ沈 縫6条	外面：褐色(10YR6/1) 内面：褐色(10YR6/1)	3mm 以下の石英、 長石、角閃石を含む	内面 輪廻痕 あり

第64図 SD101出土遺物

No	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	弥生土器 鉢	19.4		7.4	内面：ヘラミガキ ヘラケズリ	外面：明褐色 (7.5YR5/6) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	1~2mm 以下の石 英、長石を含む	
2	弥生土器 鉢	16.0		7.0	外面：タタキ 内面：ハケ目	外面：明褐色 (7.5YR5/6) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	3mm 以下の石英、 長石、雲母、赤色 粒を含む	
3	弥生土器 底部		2.0	(5.5)	外面：ヘラケズリ 内面：ヘラケズリ	外面：灰白 (7.5YR8/2) 内面：褐色 (7.5YR5/1)	1~2mm 以下の石 英、長石を含む	底部出 現あり
4	弥生土器 底部		5.0	(4.0)		外面：にぶい橙 (5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	2mm 以下の石英、 長石、角閃石を 含む	
5	弥生土器 支脚			(11.5)	外面：指頭圧痕 内面：しほり目	外面：灰白(7.5YR8/2) にぶい橙(5YR7/4) 内面：にぶい橙 (5YR7/4)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
6	弥生土器 甕			(6.9)	外面：タタキ 内面：指頭圧痕、板ナデ	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	1~5mm 以下の石 英、長石、雲母を 含む	
7	弥生土器 甕	13.0		(2.5)	外面：磨滅のため調整不明 内面：磨滅のため調整不明	外面：黒褐色 (10YR2/2) 内面：黒褐色 (10YR3/1)	1mm 以下の石英、 長石、雲母を含む	
8	弥生土器 甕(体部)			(13.5)	外面：ハケ目 内面：指頭圧痕 ヘラケズリ	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR8/4)	1~2mm 以下の石 英、長石、雲母、 角閃石を含む	
9	弥生土器 高杯	29.0		(3.3)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：明褐色 (7.5YR5/6)	0.5~2mm 以下の 石英、長石、角閃 石を含む	

第67図 SD103出土遺物

No	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	弥生土器 甕	21.6		(7.6)	外面：ナデ 磨滅のため調整不明 内面：ナデ	外面：橙(5YR6/6) 内面：橙(5YR6/6)	1~5mm 以下の石 英、長石を含む	口縁端 部内面 に煤化

第70図 I-③区 SD105

No	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	弥生土器 壺	16.6		(4.8)	外面：ナデ ハケ目 内面：ナデ 指彫压痕	外面：にぶい白 (7.5YR7/3) 内面：にぶい白 (7.5YR7/3)	1~2mm 以下の石英、長石、雲母、角閃石を含む	

第71図 I-②区不定形土坑出土遺物

No	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	弥生土器 鉢	16.0		(3.2)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：明褐色 (7.5YR5/6) 内面：にぶい黄褐色 (10YR5/4)	1.5mm 以下の石英、雲母、角閃石を含む	
2	弥生土器 壺	17.2		(2.0)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 内面：にぶい黄褐色 (10YR5/3)	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
3	弥生土器 壺	15.0		(3.7)	外面：ナデ 内面：ナデ 指彫压痕	外面：にぶい黄褐色 (10YR6/4) 内面：にぶい黄褐色 (10YR6/4)	1mm 以下の石英、長石を含む	
4	弥生土器 壺	19.0		(5.8)	外面：ナデ 内面：ナデ 指彫压痕 ヘラケズリ	外面：にぶい黄褐色 (10YR6/3) 内面：にぶい黄褐色 (10YR6/3)	1~2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
5	弥生土器 壺	30.0		(4.8)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい黄褐色 (10YR7/2) 内面：灰白色(10YR7/1)	1~2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
6	弥生土器 壺	15.0		(2.6)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：オリーブ黒 (7.5Y3/1) 内面：黒(7.5I2/1)	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
7	弥生土器 壺	11.0		(3.9)	外面：ナデ 内面：ナデ ヘラケズリ	外面：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 内面：灰黄褐色 (10YR6/2)	1mm 以下の石英、長石を含む	
8	弥生土器 壺	14.0		(4.0)	外面：磨減のため調整不明 内面：磨減のため調整不明	外面：にぶい黄褐色 (10YR6/3) 内面：にぶい黄褐色 (10YR6/3)	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
9	弥生土器 壺	11.6		(3.3)	外面：ナデ タテハケ目	外面：淡黃(2.5Y8/3) 内面：淡黃(2.5Y8/4)	1mm 以下の石英、長石を含む	
10	弥生土器 壺 底部			5.6 (3.2)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 内面：黒(10I2/1)	0.5~2mm 以下の石英、長石、雲母を含む	
11	弥生土器 壺 底部			7.4 (4.3)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 内面：にぶい黄褐色 (10YR6/3)	1mm 以下の石英、角閃石を含む	
12	弥生土器 壺 底部			9.0 (3.8)	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	外面：にぶい黄褐色 (10YR5/4) 内面：にぶい黄褐色 (10YR6/3)	0.5~2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
13	弥生土器 壺 底部			4.4 (1.9)	外面：ナデ 内面：ナデ 指彫压痕	外面：黒(2.5I2/1) 内面：灰(7.5Y1/1)	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
14	弥生土器 壺 底部			4.6 (2.5)	外面：調整不明 内面：ヘラケズリ	外面：褐灰(10YR5/1) 内面：褐灰(10YR4/1)	0.5~1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	

15	弥生土器 壺 底部		6.8	(3.1)	外面：ナデ 指頭圧痕 内面：ナデ	外面：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	2mm 以下の石英、 長石、角閃石を 含む	
16	弥生土器 高环 口縁部		23.9	(3.8)	外面：ヨコナデ ハケ目 板ナデ 内面：ヨコナデ ハケ目	外面：橙(7.5YR6/6) 内面：明褐色(7.5YR5/8)	1mm 以下の石英、 長石、角閃石を 含む	
17	弥生土器 高环 口縁部		23.8	(3.9)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：浅黄(2.5Y7/3) 内面：灰黄(2.5Y7/2)	2mm 以下の石英、 長石、角閃石を 含む	
18	弥生土器 高环 口縁部		24.6	(3.8)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/4)	1.5mm 以下の石 英、長石、角閃石 を含む	
19	弥生土器 高环 口縁部		30.4	(3.1)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：黒褐(10YR3/2) 内面：黒褐(10YR3/1)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
20	弥生土器 高环 脚部			18.7 (11.0)	外面：円孔2 内面：ヘラケズリ	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm 以下の石英、 長石、角閃石を 含む	
21	弥生土器 高环	25.8	20.8	20.0	外面：ハケ目 円孔 内面：ヘラケズリ ハケ目	外面：明褐色 (7.5YR5/6) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/3)	1mm 以下の石英、 長石、角閃石を 含む	

第74図 SK301出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	弥生土器 壺	10.4		(5.2)	外面：ナデ タタキ	外面：淡赤橙 (2.5YR7/4) 内面：灰白(7.5YR8/2)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
2	弥生土器 壺口縁部	17.4		(2.8)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：黒(7.5YR2/1) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/3)	1~5mm 以下の石 英、長石、雲母を 含む	
3	弥生土器 鉢	35.8		(5.0)	外面：ナデ 内面：ナデ 指頭圧痕	外面：明褐色(5YR5/8) 内面：橙(7.5YR6/6)	1~2mm 以下の石 英、長石、雲母を 含む	

第76図 1-2区 粘土採掘坑出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	黒色土器 壺 底部		5.8	(1.8)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰白(10YR8/2) 内面：墨褐(10YR3/1)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
2	土師器壺 口縁部	20.4		(3.2)	外面：ナデ ハケ目 内面：ナデ	外面：淡黄橙 (10YR8/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.5~2mm 以下の石 英、長石を含む	
3	土師器壺 脚部	23.2		(7.4)	外面：ナデ ハケ目 内面：ナデ	外面：明褐色(7.5YR5/8) 内面：橙(7.5YR6/6)	1~3mm 以下の石 英、長石を含む	
4	土師器壺 かぶり金 脚部			(19.5)	外面：ハケ目 内面：ナデ 指頭圧痕	外面：淡黄(2.5Y8/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.5~1mm 以下の石 英、長石を含む	

5	土師器壺	24.7		(2.7)	外面：ナデ ハケ目 内面：口縁端部 ハケ目	外面：にぶい褐色 (7.5YR7/4) 内面：にぶい褐色 (7.5YR7/3)	1~2mm 以下の石英、長石を含む	
6	土師器壺	27.6		(4.1)	外面：ハケ目 内面：ハケ目	外面：褐色(7.5YR6/6) 内面：褐色(7.5YR6/8)	0.5~2mm 以下の石英、長石を含む	
7	土師器壺	27.7		30.0	外面：ナデ ハケ目 内面：指頭圧痕 ヘラケズリ	外面：にぶい黄褐色 (10YR7/3) 内面：黒褐色(5YR2/1)	1~5mm 以下の石英、長石を含む	
8	土師質 上點綴	46.0		(16.0)	外面：ナデ ハケ目 指頭圧痕 内面：ナデ	外面：灰褐色(5YR5/2) 内面：灰黃褐色 (10YR6/2)	1~5mm 以下の石英、長石、雲母を含む 口縁部 外 面 黒 質 口縁部 外 面 煤化	

第77図 1~④区 粘土採掘坑出土遺物

No.	器種	口径	底径	高さ	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	須恵器 环蓋	15.2		(2.0)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰(N6/) 内面：灰白(N7/)	密	
2	須恵器 环身	13.0		(4.5)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰白(N7/) 内面：灰白(N7/)	1mm 以下の砂粒を含む	
3	土師器壺	20.2		(15.1)	外面：口縁部 ヨコナデ 体部上半 タテハケ 体部下半 ヨコハケ 内面：口縁部 ヨコナデ 体部上半 指頭圧痕 体部下半 ヘラケズリ	外面：灰白(10YR7/1) 内面：にぶい褐色 (7.5YR7/3)	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
4	土師器壺	25.0		(9.0)	外面：タテハケ 内面：口縁端部 ハケ目	外面：にぶい褐色 (7.5YR6/3) 内面：褐色(5YR6/6)	2mm 以下の石英、長石、雲母を含む	
5	土師器壺	27.8		(6.8)	外面：ナデ ハケ目 内面：ナデ ハケ目	外面：灰褐色(2.5YR7/2) 内面：淡褐色(2.5YR7/4)	やや粗 1mm 以下の石英、長石を多量に含む	
6	土師器壺	30.0		(12.5)	外面：口縁部 ヨコナデ 体部上面 ハケ目 内面：口縁部 ヨコナデ 体部上面 ナデ 口縁部外面 刻文	外面：にぶい褐色 (7.5YR6/4) 内面：にぶい黄褐色 (10YR7/3)	1mm 以下の石英、長石を含む	
7	土師器壺	28.8		(18.3)	外面：口縁部 ヨコナデ 体部 タテハケ 内面：口縁部 ヨコナデ 体部上半 ナデ 指頭圧痕 体部下半 ヘラケズリ	外面：褐色(5YR6/6) 内面：灰褐色(7.5YR6/2)	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	

第78図 IV区 粘土採掘坑出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	土師器 坏底部		6.6	(1.6)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい緑 (7.5YR7/4) 内面：にぶい緑 (7.5YR6/4)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
2	須恵器 坏底部		9.0	(1.2)	外面：ヨコナデ 底部 ヘラ切り 内面：ヨコナデ	外面：灰白(N7/) 内面：灰白(N7/)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
3	須恵器 底底部		17.2	(1.7)		外面：灰白(N7/) 内面：灰(N6/)	0.5~1mm 以下の 石英、長石を多 量に含む	
4	須恵器 底部		14.6	(3.1)		外面：灰白(7.5YR8/1) 内面：灰白(7.5YR8/1)	1~3mm 以下の石 英、長石を含む	
5	須恵器 口縁部		17.6	(2.3)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰白(N8/) 内面：灰白(N8/)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
6	土師器 口縁部		15.0	(4.6)	外面：ハケ目 内面：磨滅のため調整不明	外面：にぶい緑 (7.5YR7/4) 内面：緑(7.5YR6/6)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
7	土師器 羽釜 口縁部		21.0	(2.8)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：明褐色 (7.5YR7/2) 内面：明褐色 (7.5YR7/1)	0.5~2mm 以下の 石英、長石、角閃 石を含む	
8	土師器 羽釜 口縁部		31.6	(2.5)		外面：淡黄(5YR8/3) 内面：淡赤橙 (2.5YR7/4)	2mm 以下の石英、 長石を含む	
9	土師器 口縁部		25.6	(2.6)		外面：にぶい黄緑 (10YR7/4) 内面：淡黄(2.5Y8/3)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
10	土師器 口縁部		24.0	(2.5)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：明黄色 (10YR7/6) 内面：淡黄橙 (10YR8/4)	0.5~2mm の石 英、長石、角閃石 を含む	
11	土師器		29.4	(5.3)	外面：ハケ目 内面：ハケ目	外面：明褐色(7.5YR5/8) 内面：明褐色(7.5YR5/6)	2mm 以下の石英、 長石、雲母を含 む	
12	土師器		36.0	(7.0)	外面：タテハケ 内面：タテハケ	外面：にぶい黄緑 (10YR7/3) 内面：にぶい黄緑 (10YR7/2)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
13	たこ壺			(3.7)	外面：指頭王痕	外面：淡黄橙 (10YR8/3) 内面：灰白(10YR8/2)	1~2mm 以下の石 英、長石を含む	

第79図 III-②区 粘土採掘坑出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	須恵器 坏蓋			(1.7)	外面：ヘラ切り ヘラケズリ 内面：ナデ	外面：灰白(N8/) 内面：灰(N6/)	1mm 以下の石英、 長石を多量に含 む	
2	須恵器 坏身		8.5	(1.3)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰(N6/) 内面：灰(N6/)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
3	土師器 か羽釜 胸部			(16.9)	外面：ハケ目 内面：指ナデ 捜合痕	外面：にぶい黄緑 (10YR7/2) 内面：にぶい黄緑 (10YR7/2)	1mm 以下の石英、 長石を含む	

第80図 III-④区 粘土採掘坑出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	須恵器 壺 頭部			(5.1)	外面：波状文	外面：灰白(N7/)	密	
2	須恵器 环蓋			(2.2)		外面：灰(N6/1) 内面：灰(N6/1)	密	
3	須恵器 口縁部					外面：灰白(N6/) 内面：灰白(N6/)	密	

第81図 II区 粘土採掘坑出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	弥生土器 壺	10.8		(2.8)	外面：ナデ 内面：ナデ 指頭圧痕	外面：褐(7.5YR4/4) 内面：浅黄褐色 (10YR4/4)	1~3mm 以下の石英、長石を含む	
2	須恵器 环蓋	16.0		(3.1)	外面：ナデ 回転ヘラケズリ 内面：ナデ 回転ヘラケズリ	外面：灰白(N7/0) 内面：灰白(N7/0)	密	
3	須恵器 环	15.0		(3.8)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：灰(N6/1) 内面：灰白(N7/1)	密	
4	土師器壺 口縁部	21.4		(1.6)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：明黄褐色 (10YR7/4) 内面：淡黄 (2.5Y8/3)	1~2mm 以下の石英、長石を含む	
5	土師器壺 口縁部	24.4		(4.0)	外面：ナデ ハケ目 内面：ナデ ハケ目	外面：淡黄 (2.5Y8/3) 内面：明黄褐色 (10YR7/8)	1mm 以下の石英、長石を含む	
6	土師器壺 口縁部	25.6		(3.0)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰白 (5Y8/2) 内面：浅黄 (2.5Y8/3)	1~3mm 以下の石英、長石を多量に含む	
7	土師器壺	25.2		(7.0)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡黄 (2.5Y8/3) 内面：灰白 (2.5Y8/2)	1~3mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
8	土師器壺 口縁部	28.0		(3.2)	外面：磨滅のため調整不明 内面：磨滅のため調整不明	外面：淡黄 (2.5Y8/3) 内面：にぶい黄褐色 (10YR7/4)	1~2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
9	土師器壺 口縁部	27.0		(2.4)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡黄 (2.5Y7/4) 内面：浅黄 (2.5Y7/3)	1~2mm 以下の石英、長石を含む	
10	土師器壺	25.8		(6.6)	外面：指頭圧痕 ハケ目 内面：ナデ ハケ目 壺部 接合痕	外面：褐 (7.5YR6/8) 内面：灰白 (2.5Y8/2)	1~2mm 以下の石英、長石を含む	
11	土師器壺 口縁部	30.0		(4.3)		外面：にぶい黄褐色 (10YR6/2) 内面：明赤褐色 (5YR5/8)	1~2mm 以下の石英、長石を含む	
12	土師器壺 口縁部	35.4		(3.1)		外面：にぶい褐色 (7.5YR5/3) 内面：明褐色 (7.5YR5/6)	1mm 以下の石英、長石を含む	
13	土師器 羽釜 口縁部	26.0		(3.4)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰白 (7.5YR8/1) 内面：灰白 (7.5YR8/1)	1mm 以下の石英、長石を含む	
14	土師器壺 体部			(18.4)	外面：タテハケ目 ヨコハケ目 内面：ハケ目 接合痕	外面：灰白 (2.5Y8/2) 内面：浅黄 (5Y8/3)	1~2mm 以下の石英、長石を含む 体部 上面 黒斑	

15	土師器 羽釜	24.8		(20.2)	外面：ハケ目 指頭圧痕 内面：ハケ目 口縁部 接合痕	外面：淡黄褐色 (7.5YR8/3) 内面：灰白 (10YR8/2)	1~3mm 以下の石英、長石を含む	
16	土師器 羽釜	20.8		(22.0)	外面：指頭圧痕 ハケ目 内面：あらいハケ目 接合痕	外面：にふい黃褐色 (10YR6/3) 内面：黄灰 (2.5Y4/1)	1mm 以下の石英、長石を含む	

第85図 I-④区 SD107 出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	土師器 皿	14.4	11.3	1.7	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰黄 (2.5Y7/2) 内面：淡黄 (2.5Y7/3)	1mm 以下の砂粒を含む	
2	土師器甕	23.0		(4.8)	外面：ナデ 内面：ナデ ハケ目	外面：黄褐色 (10YR5/6) 内面：明赤褐色 (10YR6/6)	1mm 以下の石英、長石を多量に含む	
3	土師器甕 口縁部	24.8		(1.5)	外面：ナデ 指頭圧痕 内面：ナデ 指頭圧痕	外面：灰黄褐色 (10YR5/2) 内面：黄灰 (2.5Y5/1)	1mm 以下の石英、長石を多量に含む	
4	土師器甕	29.0		(5.3)	外面：ナデ タテハケ 内面：ナデ 指ナデ	外面：淡黄 (2.5Y7/3) 内面：明褐色 (7.5YR5/6)	1mm 以下の石英、長石を多量に含む	
5	土師器甕 口縁部	29.2		(2.7)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：明褐色 (7.5YR5/6) 内面：灰黄褐色 (10YR6/2)	2mm 以下の石英、長石を多量に含む	
6	土師器甕	27.0		(6.3)	外面：ナデ タテハケ目 内面：ナデ ヨコハケ目 外面剥離 沈線1条	外面：灰黄 (2.5Y7/2) 内面：明褐色 (7.5YR5/6)	1mm 以下の石英、長石を多量に含む	外 面 黒斑
7	土師器甕	30.2		(3.7)	外面：ナデ タテハケ目 指頭圧痕 内面：磨滅のため調整不明	外面：にふい黃褐色 (10YR6/3) 内面：灰黄 (2.5Y6/2)	1mm 以下の石英、長石を多量に含む	

第86図 I-①,②区 SD107 出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	黒色土器 碗	15.2		(3.5)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 (5YR8/3) 内面：黒褐色 (10YR3/1)	1mm 以下の石英、長石を含む	
2	黒色土器 碗 底部		6.3	(2.2)	外面：磨滅のため調整不明 内面：磨滅のため調整不明	外面：明黄褐色 (10YR6/6) 内面：灰黄褐色 (10YR4/2)	1mm 以下の石英、長石を含む	
3	土師器 环	16.4	11.2	3.2	外面：磨滅のため調整不明 内面：ハケ目	外面：浅黄 (2.5Y7/3) 内面：にふい黃褐色 (10YR7/2)	1mm 以下の石英、角閃石を含む	
4	製塙土器 底部				外面：ナデ 内面：ナデ	外面：明黄褐色 (10YR6/6) 内面：明黄褐色 (2.5Y7/6)	0.5~2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
5	土師器 たこ巻		6.0	(2.6)		外面：にふい黃褐色 (5YR7/3) 内面：褐灰色 (10YR6/1)	1mm 以下の石英、長石を含む	
6	土師器甕	23.0		(8.6)	外面：磨滅のため調整不明 内面：磨滅のため調整不明	外面：褐 (7.5YR6/6) 内面：褐 (7.5YR7/6)	2mm 以下の石英、長石を含む	

7	土師器甕	25.0		(5.5)	外面：ハケ目 内面：ナデ	外面：にぶい橙 (7.5R7/3) 内面：浅黄橙 (10Y8R/3)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
8	土師器甕	28.8		(7.2)	外面：ハケ目 内面：磨滅のため調査不明	外面：灰黄(2.5I7/2) 内面：明黄褐 (10YR6/6)	1~2mm 以下の石 英、長石を含む	
9	土師器甕 口縁部	28.6		(2.3)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：浅黄橙 (7.5R8/4) 内面：浅黄橙 (7.5R8/4)	1~2mm 以下の石 英、長石を含む	

第87図 1-②区(南部) SD107 上層部(黄灰色シルト) 山土遺物

No.	断面	口径	底径	高さ	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	黒色土器 椀 底部		7.4	(2.6)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい橙 (7.5R7/4) 内面：黒(7.5R1.7/1)	2mm 以下の石英、 長石を含む	
2	黒色土器 椀 底部		5.0	(3.0)	外面：ナデ	外面：灰白(10YR8/2) 内面：墨褐(10YR3/1)	0.5mm 以下の長 石、角閃石を含 む	
3	黒色土器 椀 底部		7.0	(1.9)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：浅黄橙 (10Y8R/3) 内面：褐灰(10YR5/1)	やや密	
4	陶器器口 縁部	13.4		(3.0)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：明オーラブ灰 (2.5G7/1) 内面：明オーラブ灰 (5G7/1)	密	口縁外 面 施釉
5	黒色土器 椀 底部		8.2	(1.4)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡黄(2.5Y8/4) 内面：黄灰(2.5Y5/1)	1mm 以下の石英、 長石、角閃石を含 む	
6	黒色土器 椀 底部		5.8	(1.1)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡黄橙 (10Y8R/3) 内面：褐灰(10YR4/1)	0.5mm 以下の石 英、長石を含む	
7	土師器 杯 底部		8.0	(1.1)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい橙 (7.5R7/4) 内面：浅黄橙 (10Y8R/4)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
8	土師質 土器 足盤脚部			(9.8)		外面：にぶい橙 (7.5R7/4) 内面：	2mm 以下の石英、 長石を含む	
9	弥生土器 甕	13.4		(7.2)	外面：ハケ目 指頭圧痕 ナデ 内面：ヘラケズリ 指頭圧痕	外面：淡黄(2.5Y8/4) 内面：明黄褐 (10YR7/6)	1.5mm 以下の石 英、長石を含む	
10	弥生土器 甕	20.3		(3.9)	外面： 内面：ナデ	外面：にぶい橙 (7.5R7/4) 内面：にぶい橙 (7.5R7/3)	2mm 以下の石英、 長石を含む	
11	土師器甕 口縁部	26.8		(2.3)	外面：ナデ 内面：ハケ目	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：浅黄橙 (10Y8R/3)	1.5mm 以下の石 英、長石を含む	
12	土師器甕	27.2		(6.3)	外面：ハケ目 指頭圧痕 内面：ナデ ハケ目	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：浅黄(2.5Y8/3)	2mm 以下の石英、 長石を含む	

第88図 I-②区 SD108出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	須恵器 环			(2.4)		外面：灰白(8Y7/1) 内面：灰白(8Y7/1)	密	
2	土師器 口縁部	23.0		(1.7)	外面：ナデ 内面：口縁端部 ハケ目	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	?	
3	土師器 裏	30.0		(6.5)	外面：ハケ目 内面：口縁部 ハケ目	外面：にぶい緑 (10YR7/3) 内面：淡黄(2.5Y8/3)	2mm以下の石英、 長石を含む	
4	土師器 口縁部	32.4		(3.1)	外面：ナデ 内面：ナデ ハケ目	外面：緑(7.5YR6/6) 内面：緑(7.5YR6/6)	2mm以下の石英、 長石を含む	

第89図 I-③区 SD110出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	黒色土器 碗 底部		5.2	(1.3)		外面：灰白(7.5YR8/2) 内面：	密 霧母を含む	
2	黒色土器 碗 底部		7.0	(1.2)		外面：浅黄橙(7.5YR8/4) 内面：褐灰(7.5YR6/1)	2mm以下の石英、 長石を含む	
3	土師器 口縁部	28.6		(1.2)		外面：緑(7.5YR7/6) 内面：緑(7.5YR7/6)	1~3mmの石英、 長石を含む	

第91図 I-③区 SD111出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	土師器 环	10.0	5.0	2.6		外面：灰白(2.5Y8/1) 内面：灰白(2.5Y8/2)	密	
2	黒色土器 碗					外面：黒(2.5Y2/1) 内面：黒(2.5Y2/1)	密 角閃石を含む	
3	土師器 口縁部	25.0		(3.2)	外面：ハケ目 内面：ハケ目	外面：にぶい緑 (7.5YR5/4) 内面：にぶい緑 (7.5YR6/4)	1~3mm以下の石英、 長石、角閃石を含む	
4	土師器 裏	24.0		(6.9)	外面：ハケ目 内面：	外面：淡黄(2.5Y8/3) 内面：淡黄橙 (10YR8/3)	1mm以下の石英、 長石、角閃石を含む	

第93図 IV区 SD402出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	須恵器 环 脚部		11.4	(2.6)		外面：灰白(8Y8/1) 内面：明オーリーブ灰 (2.5G7/1)	密	
2	土師器 口縁部	19.0		(3.6)	外面：磨減のため調整不明 内面：磨減のため調整不明	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：黄褐(10YR5/6)	2mm以下の石英、 長石を含む	
3	土師器 口縁部	11.6		(2.0)	外面：ナデ ハケ目 内面：ナデ ハケ目	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：緑(10YR4/1)	1mm以下の石英、 長石を含む	
4	土師器 口縁部	15.8		(1.9)	外面：ナデ 口縁端部 沈線1条 内面：ハケ目	外面：緑(10YR4/4) 内面：緑(10YR4/6)	1mm以下の石英、 長石を含む	
5	土師器 口縁部	31.0		(2.2)	外面：ナデ 内面：ハケ目	外面：明黄褐 (10YR6/6) 内面：緑(7.5YR6/6)	1mm以下の石英、 長石を含む	

6	土師器壺 口縁部	31.0		(4.0)	外面：ナデ 内面：ハケ目	外面：縁(7.5YR6/6) 内面：縁(7.5YR4/6)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
7	土師器壺 口縁部	35.4		(3.6)	外面：ナデ ハケ目 内面：ナデ ハケ目	外面：縁(5YR6/8) 内面：縁(5YR6/6)	1mm 以下の石英、 長石、角閃石を 含む	

第94図 IV区 SD403出土遺物

No	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	須恵器 壺	17.0		(1.8)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰黄(2.5Y6/2) 内面：灰(5Y6/1)	密	
2	須恵器 壺	16.0		(2.9)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：灰(N5/0) 内面：灰(N6/0)	密	
3	土師器壺 口縁部	24.2		(4.7)	外面：ナデ 内面：ハケ目	外面：縁(7.5YR6/6) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	1.5mm 以下の石 英、長石を含む	
4	土師器壺				外面：ナデ タテハケ目 内面：ナデ ヨコハケ目	外面：縁(2.5Y6/8) 内面：縁(2.5Y6/8)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
5	土師器壺	25.4		(5.8)	外面：ナデ ハケ目 内面：ハケ目	外面：にぶい赤褐 (5YR4/4) 内面：にぶい赤褐 (5YR4/4)	2mm 以下の石英、 長石、角閃石を 含む	
6	土師器壺 口縁部	28.0		(1.8)	外面： 内面：ハケ目	外面：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
7	土師器 把手				外面：ナデ 指頭圧痕 内面：ナデ	外面：縁(2.5Y6/8) 内面：縁(2.5Y6/8)	0.5mm 以下の石 英、長石を含む	

第99図 V区 SD507出土遺物

No	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	黒色土器 椀 底部			8.1	(1.8)	外面：浅黄澄 (7.5YR8/3) 内面：浅黄澄 (7.5YR8/3)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
2	製塙土器	13.4			(10.5)	外面：ナデ 指頭圧痕 内面：ナデ 指頭圧痕	外面：浅黄澄 (7.5YR8/3) 内面：浅黄澄 (7.5YR8/4)	0.5~3mm 以下の 石英、長石を含 む

第106図 I-①, ②区 第5層出土遺物

No	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	土師器 壺底部			7.4	(1.8)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい緑 (7.5YR7/4) 内面：浅黄澄 (7.5YR8/3)	1mm 以下の石英、 長石を含む
2	黒色土器 椀 底部			7.2	(2.7)	外面：磨滅のため調整不明 内面：磨滅のため調整不明	外面：明黄褐 (10YR7/6) 内面：灰黄(2.5Y6/2)	1mm 以下の石英、 長石を含む
3	須恵器 壺	11.2			(2.6)		外面：灰白(N7/1) 内面：灰白(N7/1)	密
4	須恵器 壺底部			4.0	(1.5)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：灰白(N7/1) 内面：灰白(N7/1)	1mm 以下の石英、 長石を含む

5	弥生土器 甕 口縁部	18.0		(1.7)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰黄(2.5Y7/2) 内面：灰黄(2.5Y6/2)	1mm 以下の石英、 長石、角閃石を含む	
6	弥生土器 甕	12.6		(3.2)	外面：ナデ ハケ目 内面：ナデ	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
7	弥生土器 甕	32.4		(3.1)	外面：ナデ 内面：ナデ ハケ目	外面：橙(7.5YR6/6) 内面：橙(7.5YR6/6)	2mm 以下の石英、 長石を含む	
8	弥生土器 甕 底部		4.4	(2.2)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：明黃褐 (10YR6/8) 内面：褐(10YR4/6)	1mm 以下の石英、 長石、角閃石を含む	
9	弥生土器 甕 此部		4.4	(1.7)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：褐灰(10Y4/1) 内面：明黃褐 (10YR6/6)	1~2mm 以下の石英、 長石、角閃石を含む	
10	土師器甕 口縁部	23.2		(2.9)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：明赤褐 (10YR7/6) 内面：淡黄(2.5Y8/3)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
11	土師器甕	26.0		(5.0)	外面：ナデ ハケ目 内面：口縁端部 ナデ ハケ目	外面：にぶい褐色 (7.5YR7/4) 内面：棕(5YR6/6)	1~2mm 以下の石英、 長石、角閃石を含む	
12	土師器甕 口縁部	22.7		(2.4)	外面：施漬のため調整不明 内面：施漬のため調整不明	外面：灰白(10YR8/1) 内面：灰白(10YR8/2)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
13	土師器甕	28.8		(4.8)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：明褐(7.5YR5/8) 内面：棕(7.5YR7/6)	1~5mm 以下の石英、 長石を含む	
14	土師器甕 口縁部	32.4		(1.8)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	2mm 以下の石英、 長石を含む	

第107図 I-④区 第5層出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	須恵器 环	20.6		(5.2)		外面：灰(N6/) 内面：灰(N6/)	密	
2	須恵器 环 底部		12.0	(3.5)		外面：青灰(S6B/1) 内面：青灰(S6B/1)	密	

第108図 IV区 第5層出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴		色調	胎土	備考
					外面：ナデ	内面：ナデ			
1	須恵器 椀	13.0		(4.4)	外面：回転ナデ 指頭圧痕 底部 糸切り 内面：回転ナデ	外面：灰(10Y6/1) 内面：灰(7.5Y6/1)	密		
2	須恵器 椀 底部		7.0	(1.5)	外面：回転ナデ 指頭圧痕 底部 糸切り 内面：回転ナデ	外面：灰白(7.5Y7/1) 内面：灰白(7.5Y7/1)	密		
3	土師器 环		6.6	(1.7)	外面：ナデ 底部 ヘラ切り 内面：ナデ	外面：にぶい褐色 (5YR6/4) 内面：にぶい褐色 (5YR5/4)	1mm 以下の石英、 長石を含む		
4	土師器 环 底部		6.4	(1.3)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 底部 ヘラ切り	外面：明オーラー灰 (2.5G7/1) 内面：灰白(7.5Y7/1)	密		

5	上師器 口縁部	34.0		(2.4)	外面：ハケ目 指頭圧痕 内面：磨滅のため調整不明	外面：淡黄(2.5Y8/3) 内面：浅黄(2.5Y7/3)	1mm 以下の石英、 長石、雲母を含む	
---	------------	------	--	-------	-----------------------------	----------------------------------	------------------------	--

第109図 V区 第5層出土遺物

No.	器種	口径	底径	高さ	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	黒色土器 壺 底部		6.8	(1.5)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：黒(7.SYR1.7/1)	2mm 以下の石英、 長石を含む	

第110図 II区 第5層出土遺物

No.	器種	口径	底径	高さ	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	土師器 壺 底部		5.6	(1.3)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい橙 (5YR7/3) 内面：灰白(2.5Y8/2)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
2	土師器 壺 底部		7.2	(1.3)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい黄澄 (10YR7/4) 内面：灰白(10YR8/2)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
3	土師器 壺 底部		6.0	(2.3)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰白(7.5YR8/2) 内面：灰白(7.5YR8/2)	やや密 1mm 以下の石英 を含む	
4	弥生土器 底部		4.0	(2.3)	外面：ナデ ハケ目 内面：ナデ	外面：橙(7.5YR6/6) 内面：黒褐(7.5YR3/1)	1~2mm 以下の石 英、長石、角閃石 を含む	
5	たこ壺				外面：指頭圧痕 内面：ナデ	外面：灰黄褐 (10YR5/2) 内面：淡黄(2.5Y7/3)	1~2mm 以下の石 英、長石、角閃石 を含む	
6	須恵器 環壺		15.3	(1.6)	外面：ナデ ヘラケズリ 内面：ナデ	外面：灰白(8/0) 内面：灰白(N7/0)	密	
7	土師器 皿 LII種		15.4	(1.9)		外面：橙(7.5YR6/6) 内面：灰白(5Y8/2)	やや密	
8	土鍋				外面：ナデ 内面：指頭圧痕 板ナデ	外面：灰白(2.5Y8/1) 内面：黄褐(10YR6/6)	1~4mm 以下の石 英、長石、角閃石 を含む	
9	土師器 口縁部		20.0	(1.4)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面：淡黄(2.5Y8/3)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
10	土師器 壺		20.0	(3.5)	外面：ハケ目 内面：ヘラケズリ	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：灰黄褐 (10YR6/2)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
11	土師器 口縁部		23.0	(2.2)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：褐灰(10YR5/1) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	1~2mm 以下の石 英、長石を含む	
12	上師器 壺		23.0	(3.7)	外面：磨滅のため調整不明 内面：磨滅のため調整不明	外面：橙(7.5YR6/6) 内面：淡黄(2.5Y8/3)	2mm 以下の石英、 長石を含む	
13	土師器 口縁部		27.0	(3.1)		外面：淡黄橙 (10YR8/4) 内面：淡黄(2.5Y8/3)	1mm 以下の石英、 長石、角閃石を 含む	

第111図 III-③区 第5層出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	土師器 环 底部			7.0 (1.0)	外面：ナデ 内面：ナデ ヘラケズリ	外面：にぶい赤褐色 (5YR5/4) 内面：にぶい褐色 (5YR6/4)	0.5mm 以下の石英、長石を含む	
2	土師器 环 底部			7.0 (0.8)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰白(2.5Y8/2) 内面：灰白(2.5Y8/1)	1mm 以下の石英、長石を含む	
3	土師器 环 底部			6.0 (1.6)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい褐色 (7.5YR7/3) 内面：褐色(7.5YR6/6)	1mm 以下の石英、長石を含む	
4	須恵器 环 武部			7.3 (1.2)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰白(7.5Y7/1) 内面：明オーリーブ灰 (2.5GY7/2)	0.5~2mm 以下の石英、長石を含む	
5	須恵器 盞 口上				外面：ナデ ヘラケズリ 内面：ナデ	外面：灰(7.5Y5/1) 内面：灰(7.5Y6/1)	密	
6	土師器甕	25.8			外面：磨滅のため調査不明 内面：磨滅のため調査不明	外面：灰白(10Y8R8/2) 内面：灰白(10Y8R8/2)	1~2mm 以下の石英、長石を含む	
7	土師器甕	27.8			外面：ハケ目 内面：ハケ目	外面：淡黄(2.5Y8/3) 内面：淡黄(2.5Y8/3)	2mm 以下の石英、長石を含む	
8	土師器甕	30.0			外面：ヘラケズリ ハケ目 指頭 压痕 内面：ナデ ヘラケズリ：	外面：にぶい黃褐色 (10YR6/4) 内面：にぶい黃褐色 (10YR7/4)	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	

第112図 I-④区 黄灰色シルト層出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	土師質 土器羽釜 鉢	29.0			外面：ヨコナデ 指頭压痕	外面：褐色(7.5YR4/4) 内面：にぶい褐色 (7.5YR5/3)	1mm 以下の石英、長石、黄母を含む	

第113図 I-①,②区 灰黄色シルト極細砂層出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	土師器 小皿	9.6	7.0	1.4	外面：ヨコナデ 底部 ヘラ切り 内面：ヨコナデ	外面：灰白(7.5YR8/1) 内面：灰白(10YR8/2)	密	
2	土師器 小皿	7.6	6.4	0.7	外面：ヨコナデ 底部 ヘラ切り 内面：ヨコナデ	外面：淡黄褐色 (10YR8/3) 内面：淡黄褐色 (10YR8/3)	1mm 以下の石英、長石を含む	
3	土師器甕 口縁部	26.0			外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰白(10YR8/2) 内面：灰白(2.5Y8/2)	2mm 以下の石英、長石を含む	
4	土師器甕 口縁部	25.4			外面：ナデ 指頭压痕 内面：ナデ ハケ目	外面：明褐色 (7.5YR7/2) 内面：褐色(7.5YR5/1)	1~2mm 以下の石英、長石を含む	
5	こね鉢 (束腰系)	27.4				外面：明褐色(5B7/1) 内面：明青褐色(5B7/1)	1mm 以下の石英、長石を含む	

6	土師質 七器別途 口縁部	25.0		(3.6)	外面：ナデ 指頭圧痕 内面：ナデ ハケ目	外面：橙(5YR7/6) 内面：にぶん 橙 (7.5YR7/4)	1~3mm 以下の石 英、長石、角閃石 を含む	
---	--------------------	------	--	-------	-------------------------	--	-------------------------------	--

第116図 V区 灰黄色シルト極細砂～灰黄褐色シルト出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	土師器 杯 底部				外面：ハケ目 底部 ヘラ切り 内面：	外面：浅黄(2.5Y8/3) 内面：淡黄橙 (10Y8R/3)	1mm 以下の石英、 長石、角閃石を含む	
2	土師器 杯 底部		8.4	(1.1)	外面：底部 ヘラ切り 内面：ナデ	外面：黄褐(10YR5/6) 内面：浅黄橙 (10Y8R/4)	1~2mm 以下の石 英、長石を含む	
3	須恵器 壺 口縁部	6.8		(0.8)		外面：明オーリーブ灰 (2.5G7/1) 内面：明オーリーブ灰 (2.5G7/1)	密	
4	須恵器 檻	13.0		(3.4)	外面：ヨコナデ 内面：ナデ ヘラケズリ	外面：灰白(7.5Y8/1) 内面：灰白(7.5Y8/1)	密	
5	瓦質土器 碗 口縁部			(1.8)		外面：褐灰(10YR4/1) 内面：褐灰(10YR4/1)	密	
6	土師質 土器足釜 脚部			(4.8)	外面：ナデ	外面： 内面：にぶん 橙 (7.5YR6/4)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
7	土師質 土器足釜 口縁部	23.0		(2.3)	外面：ナデ タテハケ目 内面：ナデ ヨコハケ目	外面：灰白(10YR8/1) 内面：淡黄橙 (10Y8R/4)	0.5mm 以下の石 英、長石を含む	
8	須恵器 壺 口縁部	30.0		(2.4)	外面：タタキ	外面：灰(5Y5/1) 内面：灰白(5Y7/1)	密	

第117図 II区 灰黄色シルト極細砂層出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	黒色土器 椀 底部		6.2	(1.6)	外面：ヘラケズリ 内面：ナデ ヘラケズリ	外面：淡赤褐 (2.5R7/4) 内面：赤灰(2.5R6/2)	0.5~1mm 以下の 石英、長石を含む	
2	土師器 椀 底部		5.2	(1.0)	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	外面：灰白(2.5Y8/1) 内面：灰白(2.5Y8/1)	密	
3	龍泉系青 磁 小皿	10.9		(1.9)		釉 明緑灰 (7.5G7/1) 断面 灰白(N7/1)	密	
4	須恵器 壺	15.3		(3.6)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰(N5/1) 内面：青灰(5PB6/2)	密	
5	土師器 碗 口縁部	20.0		(3.2)		外面：灰白(10YR8/2) 内面：にぶん 黄橙 (10Y8R/4)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
6	土師器 碗 口縁部	23.4		(5.5)	外面：タテハケ目 指頭圧痕 内面：ナデ	外面：浅黄橙 (10Y8R/3) 内面：灰白(10YR8/1)	0.5~1mm 以下の 石英、長石を含む	
7	土師器 碗 口縁部	45.8		(2.8)		外面：明褐(7.5YR5/6) 内面：にぶん 黄橙 (10Y8R/2)	0.5~1mm 以下の 石英、長石を含む	

第118図 II区 灰オリーブ色砂質土へシルト質極細砂出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	上師器 坏 底部		6.4	(2.0)		外面：橙(5YR7/6) 内面：橙(5YR7/8)	密	
2	土師器 小皿	6.3	5.4	1.2	外面：ナデ 底部 ヘラ切り 内面：ナデ	外面：に5YV4 (5YR6/4) 内面：明赤褐 (5YR5/6)	1~2mm 以下の石英、長石、雲母を含む	
3	土師器甕	20.0		(4.0)	外面：ハケ目 内面：ハケ目	外面：に5YV4 (10YR7/4) 内面：に5YV4 (10YR7/3)	1~2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
4	上師器甕 口縁部		31.0	(3.2)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：明黄褐 (10YR7/6) 内面：浅黄褐 (10YR8/4)	1~2mm 以下の石英、長石、雲母を含む	
5	土師質 上縁	20.0		(2.7)		外面：に5YV4 (7.5YR7/4) 内面：に5YV4 (7.5YR7/4)	1~2mm 以下の石英、長石を含む	
6	土師質 土器足釜 脚部				外面：指頭圧痕 ナデ	外面： 内面：に5YV4 (10YR7/3)	0.5~1mm 以下の石英、長石を含む	
7	土師質 土器足釜 脚部				外面：ナデ 内面：ナデ	外面： 内面：赤橙(10R6/8)	1mm 以下の砂粒を含む	
8	土鍤				外面：ヘラ痕	外面：橙(2.5YR7/8) 内面：橙(2.5YR7/8)	0.5mm 以下の石英、長石を含む	

第120図 III-①区 暗灰色シルト質極細砂出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	上師器 坏		10.8	(2.6)	外面：ナデ 内面：ナデ 指頭圧痕	外面：淡黄(2.5Y8/3) 内面：灰白(2.5Y8/2)	1mm 以下の石英、長石を含む	
2	土師器 坏		11.2	(2.4)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：浅黄褐 (7.5YR8/4) 内面：浅黄褐 (7.5YR8/3)	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
3	土師器 碗 底部		5.8	(1.7)	外面：ナデ 内面：ナデ ヘラケズリ	外面：淡黄(2.5Y8/3) 内面：灰白(2.5Y8/1)	密	
4	黑色土器 碗 底部		6.6	(3.3)	外面：磨滅のため調整不明 内面：	外面：灰白(5Y8/2) 内面：灰白(2.5Y8/2)	0.5~1mm 以下の石英、長石を含む	
5	須恵器 坏蓋		8.5	(1.9)	外面：ナデ ヘラケズリ 内面：ナデ	外面：灰白(N7/0) 内面：灰白(N7/0)	やや密 1mm 以下の石英、長石を含む	
6	須恵器 坏 底部		10.6	(2.6)	外面：ナデ 接合痕 内面：ナデ 指頭圧痕	外面：灰白(N8/0) 内面：灰白(N8/0)	密	
7	須恵器 坏 底部		9.6	(1.0)	外面：ヘラケズリ 内面：ヘラケズリ	外面：淡黄(2.5Y8/3) 内面：灰白(2.5Y8/2)	0.5~1mm 以下の石英、長石を含む	
8	須恵器 蓋		12.0	(4.6)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：灰(N5/0) 内面：灰白(N7/0)	1mm 以下の石英を含む	
9	土鍤				外面：ナデ	外面：橙(5YR7/6) 内面：淡橙(5YR8/4)	0.5~1mm 以下の石英、長石を含む	

10	土師器甕 口縁端部		(2.2)	外面：ナデ ハケ目 内面：ナデ ハケ目	外面：明褐色(7.5YR5/6) 内面：にぶい黄褐色 (10YR7/4)	2mm 以下の石英、 長石、角閃石を 含む	
11	弥生土器 底部	3.4	(2.1)	外面：指頭圧痕 内面：ナデ	外面：灰白(5Y7/1) 内面：灰(5Y4/1)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
12	弥生土器 底部	3.0	(2.3)		外面：橙(2.5YR6/8) 内面：灰白(10YR8/2)	1~2mm 以下の石 英、長石、角閃石 を含む	
13	七輪器甕	22.4	(3.3)		外面：浅黄褐色 (10YR8/4) 内面：にぶい黄褐色 (10YR7/4)	2mm 以下の石英、 長石を含む	
14	土師器甕	28.0	(4.3)	外面：ナデ タテハケ目 内面：ナデ ヨコハケ目	外面：にぶい黄褐色 (10YR7/4) 内面：にぶい黄褐色 (10YR7/4)	0.5~1mm 以下の 石英、長石を含 む	
15	土師器甕	30.0	(5.6)	外面：ナデ ハケ目 内面：ナデ	外面：灰白(2.5YR8/2) 内面：灰白(2.5YR8/2)	0.5mm 以下の石 英、長石を含む	
16	土師器甕	30.0	(3.9)	外面：ナデ タテハケ目 内面：ナデ	外面：橙(7.5YR6/6) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	0.5~1mm 以下の石 英、長石を含む	
17	土師器 羽釜	27.0	(9.1)	外面：ナデ ハケ目 内面：ナデ 指頭圧痕 ヘラケズ リ	外面：浅黄褐色 (7.5YR8/4) 内面：灰白(10YR8/2)	1~5mm 以下の石 英、長石、雲母を 含む	口縁部 外 黒塵

第121図 III-①区 明褐色シルト質粘粗砂層出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	土師器 甕		6.0	(1.6)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡黄(2.5Y8/3) 内面：灰白(2.5Y8/1)	やや密	
2	黒色土器 甕 底部		6.6	(1.7)		外面：褐灰(10YR6/1) 内面：灰白(10YR8/2)	1~2mm 以下の石 英、長石、雲母を 含む	
3	須恵器 甕蓋	10.7		(2.2)		外面：灰(7.5Y6/1) 内面：灰白(N8/) 釉 暗オーリープ灰 (2.5GY3/1)	粗 1~2mm 以下の石 英、長石を含む	
4	須恵器甕 底部		6.8	(2.1)		外面：灰白(N8/) 内面：灰白(N8/)	密	
5	須恵器甕 底部		9.3	(1.4)	外面：接合痕	外面：灰白(N8/) 内面：灰白(N8/)	密	
6	土師器甕	18.8		(2.5)		外面：にぶい橙 (10YR7/4) 内面：にぶい橙 (10YR7/4)	1mm 以下の石英、 長石を含む	
7	土師器甕	22.0		(4.6)	外面：ナデ ハケ目 指頭圧痕 内面：ナデ	外面：灰白(10YR8/2) 内面：浅黄褐色 (10YR8/4)	0.5~1mm 以下の石 英、長石を含 む	

8	土師器 甕	24.0	(3.4)		外面：明黄澄 (10YR7/6) 内面：にぶい黄澄 (10YR7/4)	1~2mm 以下の石英、長石を含む	
9	土師器 甕 口縁部	25.6	(1.9)		外面：澄 (5YR6/6) 内面：にぶい黄澄 (10YR7/4)	1~2mm 以下の石英、長石を含む	
10	土師器 甕 口縁部	30.4	(3.9)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい黄澄 (10YR6/4) 内面：にぶい黄澄 (10YR6/4)	1~2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
11	土師器 羽釜	24.4	(4.0)	口縁部 接合痕	外面：にぶい黄澄 (10YR6/4) 内面：明黄澄 (10YR6/6)	0.5~3mm 以下の石英、長石を多量に含む	
12	土師器 羽釜	26.2	(4.7)	外面：ナデ 内面：ナデ 指頭圧痕	外面：明黄澄 (10YR7/6) 内面：淡黄 (2.5Y8/3)	1~3mm 以下の石英、長石を含む	

第122図 III-①区 床土下～明褐色シルト質極細砂層出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	須恵器 甕	21.2		(4.6)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰 (5Y1/1) 内面：灰白 (N8/0)	1mm 以下の石英、長石を含む	
2	須恵器 甕 底部		11.0	(1.8)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰白 (N7/) 内面：灰白 (N8/)	密	
3	土師器甕 口縁部	22.2		(2.2)	外面： 内面：口縁部 ハケ目	外面：明黄澄 (10YR6/6) 内面：浅黄 (2.5Y7/3)	1mm 以下の石英、長石を含む	
4	土師器甕 口縁部	24.4		(3.4)	外面：ナデ ハケ目 内面：ハケ目	外面：浅黄 (2.5Y7/4) 内面：浅黄 (2.5Y7/4)	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	口縁部 外面 黑斑
5	須恵器 蓋	10.2		(1.9)		外面：灰白 (N8/) 内面：灰白 (N8/)	密	
6	弥生土器 底部		7.6	(1.5)	外面：磨滅のため調整不明 内面：磨滅のため調整不明	外面：澄 (2.5YR6/8) 内面：明黄澄 (10YR6/6)	1mm 以下の石英、長石を含む	
7	須恵器 甕 底部		11.2	(1.1)		外面：紫灰 (5RP6/1) 内面：明紫灰 (5RP7/1)	密	
8	土師器 羽釜	18.0		(5.7)	外面：ハケ目 内面：ハケ目	外面：にぶい黄澄 (10YR7/3) 内面：淡黄澄 (10YR8/3)	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
9	土甕					外面：淡黄澄 (7.5YR8/3) 内面：浅黄澄 (7.5YR8/3)	1~2mm 以下の石英、長石を含む	
10	土師質 土器足釜 脚部					外面：にぶい黄澄 (10YR5/4) 内面：にぶい黄澄 (10YR5/4)	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	

第123図 III-④区 上面精査中出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	土師器 甕	9.4		(2.6)		外面：淡黄 (2.5Y8/4) 内面：淡黄 (2.5Y8/4)	1mm 以下の石英、長石を含む	

2	土師器 环	11.0		(2.7)		外面：灰白 (7.5YR8/2) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/3)	密	
3	鉢 口縁	14.6		(2.2)		外面：灰(N5/) 内面：灰(M4/)	0.5~1mm 以下の石英、長石を含む	
4	東播系 こね鉢	20.4		(3.3)		外面：灰白(7.5Y7/1) 内面：灰白(7.5Y7/1)	密	
5	土師器壺	26.0		(9.1)	外面：ナデ ハケ目 指頭圧痕 内面：ナデ ハケ目 指頭圧痕	外面：橙(7.5YR7/6) 内面：橙(7.5YR8/8)	1~3mm 以下の石英、長石を多量に含む	

第125図 II区 SE201 出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	窓戸・美濃 陶器碗底 部		4.1	(1.3)		外面：黒(SV11.7/1) 内面：灰白(7.5Y8/2) 断面 灰白(7.5Y8/2)	密	内面全体に貫入
2	肥前京焼 風 陶器 碗 底部		4.9	(1.9)		外面：浅黄橙 (10YR8/4) 内面：浅黄橙 (10YR8/4) 断面 灰白 (2.5Y8/2)	密	
3	土師器 羽釜 口縁部					外面：灰白 (2.5Y8/1) 内面：灰白 (2.5Y8/2)	0.5mm 以下の石英、長石を含む	

第130図 III-②区 人力掘削中出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	肥前 染付猪口	9.3		(2.6)	外面：團隙2条	外面：釉 明緑灰 (10G18/1) 内面： 断面 灰白(10Y8/1) 模様 青	密	
2	上師器 环	15.0		(3.2)		外面：灰白(10YR8/2) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	1mm 以下の石英、長石を含む	
3	須恵器 蓋	11.0		(2.4)	外面：回輪ナデ 内面：回転ナデ	外面：灰白(N6/0) 内面：灰白(N6/0)	密	
4	須恵器 环 底部		10.0	(1.9)		外面：灰白(N8/) 内面：灰白(N8/)	やや密	
5	肥前系 染付碗			(2.4)	外面：團隙4条	断面 灰白 (10Y8/1) 釉 透明釉 模様 青	密	
6	龍泉窯系 青磁 底部		6.0	(1.5)	外面： 内面：蛇口目 釉ハギ	断面 灰白 (7.5Y7/1) 釉 灰青リーブ (7.5Y6/2)	密	
7	土師器 底部		8.0	(1.5)	外面：ナデ ハケ目 内面：ナデ ハケ目	外面：浅黄橙 (7.5YR8/3) 内面：淡黄橙 (10YR8/3)	0.5mm 以下の石英、長石を含む	

8	土師器 底部		9.8	(1.2)	外面：ナデ ヘラケズリ： 内面：ナデ	外面：淡緑(5YR8/4) 内面：淡緑(5YR8/4)	密	
9	土師器甕 口縁部	29.4		(3.0)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：灰白(7.5YR8/1) 内面：灰白(10YR8/1)	1~2mm 以下の石英、長石を含む	
10	土師器甕 口縁部	31.0		(1.6)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい黄緑 (10YR7/3) 内面：にぶい黄緑 (10YR7/3)	0.5~1mm 以下の石英、長石を含む	
11	土鍾				外面：ナデ 指頭圧痕 内面：ナデ	外面：にぶい黄緑 (10YR7/2) 内面：灰白(10YR7/1)	0.5~2mm 以下の石英、長石を含む	

第136, 137図 ポンプ場予定地内調査区出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴		色調	胎土	備考
					外面：ナデ ハケ目	内面：指頭圧痕 接合痕			
1	土師質 土器鍋	51.0		(10.6)	外面：にぶい褐色 (2.5YR6/4) 内面：緑(5YR7/8)		1~3mm 以下の石英、長石を含む		
2	土師質 土器鍋	53.4		(8.9)	外面：粗いハケ目 内面：ハケ目 指頭圧痕		1~2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む		
3	土師質 土器鍋	49.4		(14.0)	外面：粗いハケ目 指頭圧痕 内面：ハケ目 指頭圧痕		1~2mm 以下の石英、長石を含む		
4	土師質 土器鍋	49.6		(17.3)	外面：ナデ ハケ目 指頭圧痕 内面：ナデ ハケ目		外面：明赤褐色(5YR5/6) 内面：にぶい赤褐色 (5YR5/4)	2mm 以下の石英、長石を含む	
5	土師質 土器鍋	55.0		(22.0)	外面：体部上半 粗いタテハケ目 体部下半 ヨコハケ目 内面：口縁部 ヨコハケ目 接合痕		外面：にぶい褐色 (10YR7/4) 内面：にぶい緑 (10YR7/4)	1~2mm 以下の石英、長石を含む	
6	土師器甕	27.9		(5.7)	外面：ナデ 粗いタテハケ目 内面：ナデ 粗いヨコハケ目		外面：緑(2.5YR6/6) 内面：明赤褐色 (2.5YR5/6)	1~2mm 以下の石英、長石を含む	
7	移動式 かまど	30.2		(11.0)	外面：口縁部 ヨコナデ 体部 ハケ目 内面：口縁部 ヨコナデ 指ナデ		外面：明赤褐色(5YR5/6) 内面：明赤褐色(5YR5/6)	3mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
8	土師質 土器鍋	45.0		(8.6)	外面：ナデ ハケ目 指頭圧痕 内面：指ナデ ハケ目 指頭圧痕		外面：にぶい褐色 (7.5YR6/4) 内面：にぶい緑 (7.5YR7/4)	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む	
9	土師質 土器鍋	44.0		(6.8)	外面：ナデ ハケ目 指頭圧痕 内面：ナデ		外面：浅黄緑 (7.5YR8/3) 内面：浅黄緑 (7.5YR8/4)	0.5~2mm 以下の石英、長石を含む	
10	土師質 土器鍋	50.0		(5.7)	外面：ナデ タテハケ目 指頭圧痕 内面 ナデ ヨコハケ目：		外面：にぶい緑 (7.5YR6/4) 内面：にぶい緑 (5YR6/4)	0.5~1mm 以下の石英、長石を含む	

第4章　まとめ

第4章　まとめ

第1節　遺構の変遷

香西南西打遺跡では、旧石器、弥生上器、古代から中世に至るまでの土師器及び須恵器等の遺物が見られるが、遺構は平安時代後半から鎌倉時代前半の条里に関係した溝跡を中心とする。遺物に反して遺構が見られないのは、平安時代後半から行われたと考えられる粘土採取による搅乱の影響が推察されるが、また当遺跡が長期にわたり、集落の周辺部に位置する水田等耕作地としての土地利用が主であったとも考えられる。ここでは当遺跡を弥生時代以前、弥生時代後期前後、平安時代後半、平安時代末～鎌倉時代に大別した。

弥生時代以前

調査範囲においては、弥生時代までに埋没したと考えられる流路を確認しているが、それまでは谷状の地形を呈していたと推測できる。より本津川氾濫の影響が大きいと考えられた北部の調査区において、ほとんど摩滅の見られない有舌尖頭器等の石器が出土していることから、縄文時代の早い段階までは比較的安定した地形であったと推定される。調査範囲の南部、勝賀山麓の山裾末端に位置する標高4m前後の微高地上で後期旧石器時代の文化層が僅かに残存する。文化層はA T降灰以降であるが角錐状石器は見られず、ナイフ形石器は一側縁加工若しくは基部に2次加工を施すものに限られることから、瀬戸内技法を主体とする石器群の範疇に収まるものと考えられる。

弥生時代後期

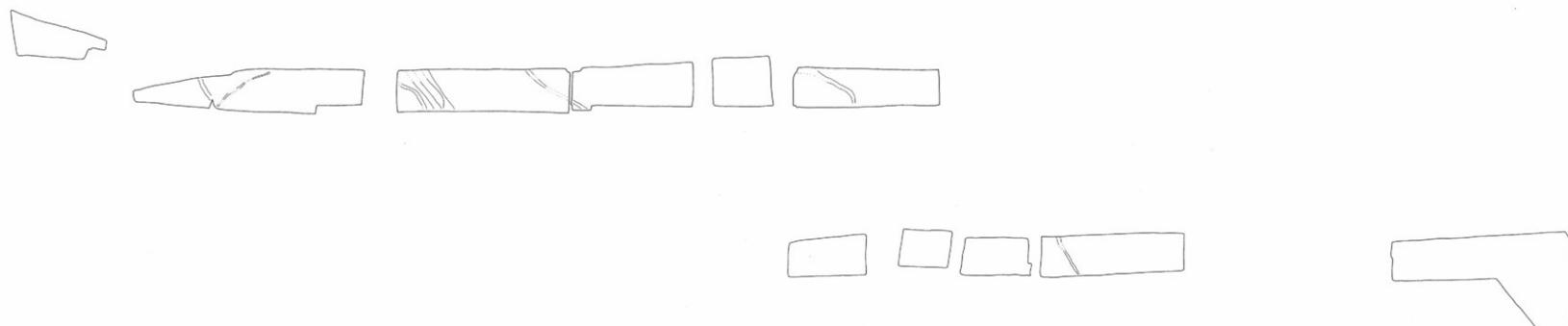
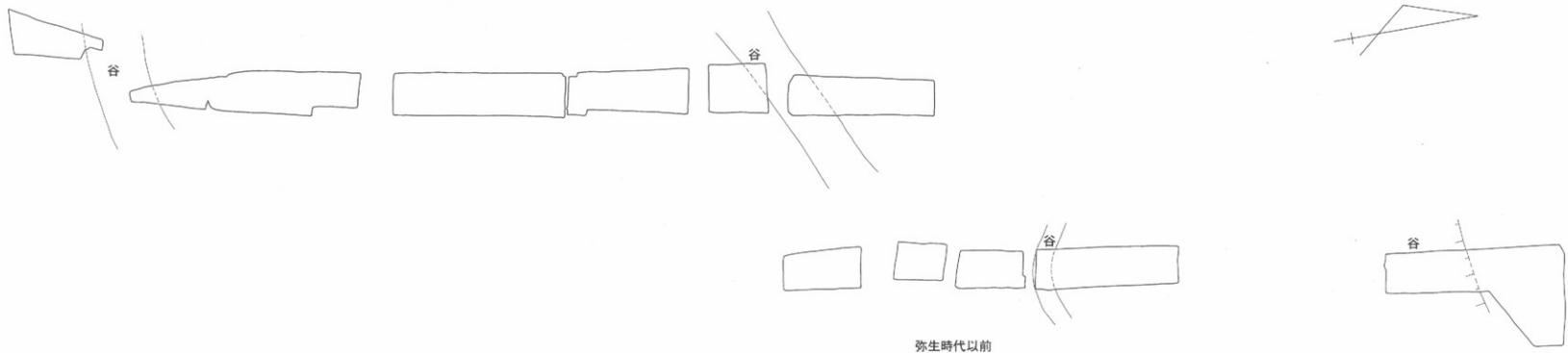
溝跡のみが検出された。北東方向に下る地形に沿ったもので、水田等の遺構は確認できなかつたがほとんどが主要な灌漑用水路であったと推察される。S D101～04は微高地上に、S D401等は低地部で旧流路にほぼ平行して掘削される。堆積状況、出土遺物から埋没時期に差が見られる。

平安時代後半

南北方向の推定坪界に溝跡及び水田層を確認している。出土する遺物には、8世紀前後に比定されるものが見られ、古代期の早い段階において開削されていた可能性もある。また0.5km南に位置する鬼無藤井遺跡においても、この南北坪界に同規模の溝跡を検出しておらず、当地区では古代から中世にかけて、この溝跡が条里区画された主要な灌漑用水路であったといえる。また第7、8層及び埋没旧流路の粘土層を採取した痕が広範に確認されており、埋土に水田層と考えられる第5、7層が搅乱し見られる。第7層が弥生～古代の堆積であることから、弥生～古代の水田だったところで粘土採掘を行い、さらに後世に採掘坑を埋めた後に再び水田耕作を行ったと考えられる。V区で検出されたS D508等は方位が今の条里地割と異なりほぼ真北を向く。当時期までには既に埋め戻し等で機能が損なわれており、平安中期頃までの溝跡と考えられる。北の調査区で検出したS D201、304は、方向及び堆積層状況からより古い様相を呈する。

平安時代末～鎌倉時代

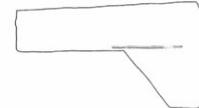
南北坪界に想定された溝跡は、最上層部において当時期の堆積物が確認されるが大部分を削平されたものと考えられる。対して坪内の区画溝など小規模なものが、部分的に検出されている。



弥生時代後期

第139図 遺構変遷図①

0 25m



平安時代末～鎌倉時代

第140図 遺構変遷図②

0 25m

第2節 条里遺構について

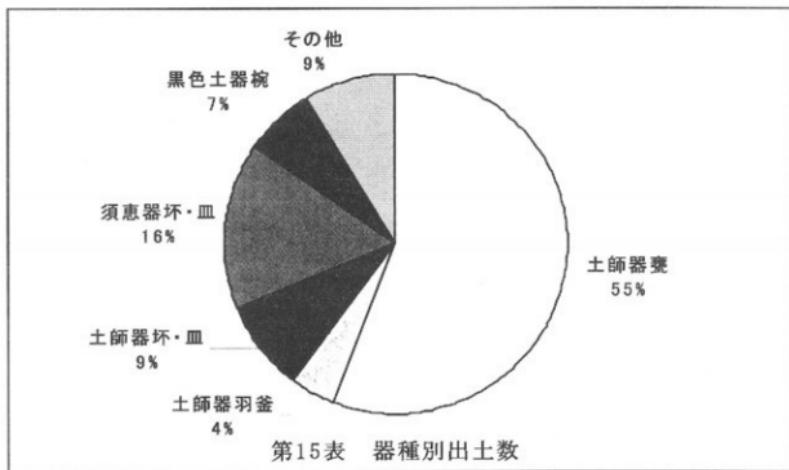
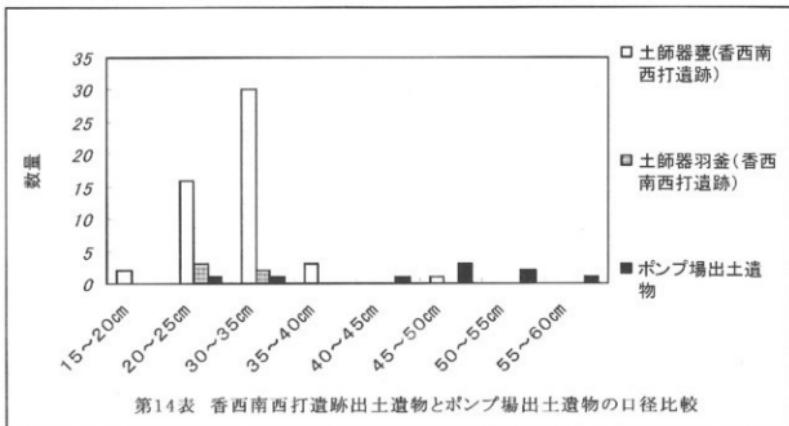
条里地割のシステムによると、香川郡10条19里内に本遺跡は位置し、19里界に相当する舟入川より北で20里付近までの坪界に相当する箇所を調査範囲としたことになる。SD107等、現有道路の東側に設置された用水路に平行するもので、現在の道路区画が推定される坪界より西にぶれた箇所を主な検出箇所としている。当坪界にあたる溝が機能していたと見られる平安時代後半～鎌倉時代初頭においては、現在の地割方向に合致した直線的な区画が存在していたと推察できる。

それ以前の様相については、平安時代後半の堆積物である土壌層とその下部の堆積層においてもプラントオパールが一定量確認されていること、集落域とみられるような柱穴跡等の遺構が全く検出されていないことより、当地が古代を通じて専ら水田等の耕作地として利用されていたことが窺われる。この坪界に相当する溝跡の開削時期が出土遺物から平安時代初頭であったとも考えられ、早期から条里区画による耕作地としての土地利用が為されていた可能性も考えられる。この後平安時代後半において、広範に粘土の採掘が行われており、一時期において土地利用に変化が生じたことが窺われる。

坪界を挟み西の調査区となったV区において見られる地割方向と異なる方向を示す溝跡が南北及び東西方向において検出されている。出土遺物から平安時代後半まで機能していたことが推測できるもので、後に掘削された溝が平安時代末から鎌倉時代に埋没したと考えられることから、平安時代後半において、土地利用について何らかの変化が生じたと推察される。ひとつには、坪界を挟んで西側の微高地が、集落域であり東の耕作地に比べて条里的施行が遅れたとも考えられる。また他方においては、当地区全体の条里区画施行が当時期において為されたとも推察できる。異方向を示す溝跡は、山田郡北部に相当する小山・南谷遺跡において報告されているが、時期及び郡の縁辺部に位置するという点で類似が認められる。

第3節 出土煮沸具について

香西南西打遺跡では、平安時代後半と考えられる堆積物より多数の土師器壺、羽釜が出土しており、器種別では全体の6割（第15表）を占めている。広範囲において検出された粘土採掘坑では、ほぼ完形の状態で出土するものが見られた。窯等の焼成を行ったと見られる遺構を確認できなかつたが、胎土分析を行った結果からも、採取された粘土を用いて大型の土師器生産を行った可能性が強い。当遺跡の近辺で焼成を行い、欠落品等が破棄されたと考えられる。また当遺跡から数百m東のポンプ場建設予定地箇所において、焼土を伴い、土錫等を多量に破棄した土坑が確認されている。当遺跡が口径25～35cm程度の長胴タイプの器形が主となるのに対して、ポンプ場試掘箇所では大型で胴の短いものがほとんどである（第14表）。器形や伴出した上器から判断すれば、当遺跡の長胴タイプの壺や釜が10～12世紀に属し、ポンプ場試掘箇所の大型鍋は12世紀後葉～13世紀である。しかしながら、胎土や調整、口縁端部を肥厚させ強いナデを行う等、両者には類似する点も多い。以上のことから、同一集団により、微妙に場所を移動しながらも、10～13世紀にかけて、煮沸具等の土器生産が行われていたと推測できる。少なくとも、この香西の南地区においては、平安時代後半から鎌倉時代前半にかけての土器作りの集落があったことが明らかにできたと考える。



参考文献

高松市教育委員会1999「第2次弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査報告書 讃岐国弘福寺領の調査II」

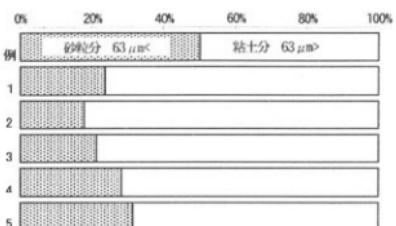
第5章 自然科学的分析

高松港頭地区再開発関連埋蔵文化財発掘調査業務
土壤中火山灰抽出分析業務委託報告書

株式会社 京都フィッショングラック

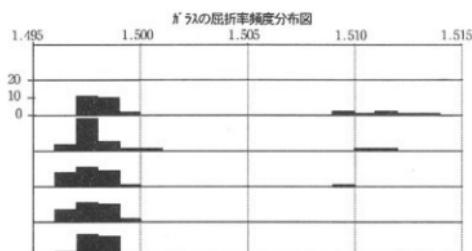
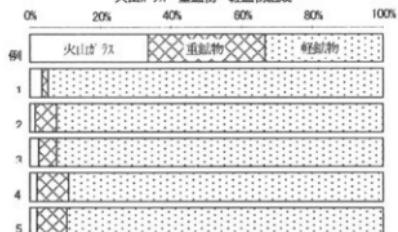
試料採取層準土層模式柱状図および分析結果

粘土・砂粒度組成(%)



#120～#250 粒度試料中の

火山ガラス・重鉱物・軽鉱物組成



主要重鉱物および備考 ^{*1}	Po ^{*2} 含有率(%)	主要火山ガラス型 ^{*3*4}	色付ガラス 有無
GHo>Opq>Opx,Cpx,Zr,Bi	4.5	Hb,Cb	+
GHo>Opq>Opx>Zr	1.0	Hb,Cb,Ca	+
GHo>Opq>Opx,Zr,Bi	+	Hb,Cb	-
GHo>Opq>Opx,Bi,Zr	+	Hb,Cb,Ca	-
GHo>Opq>Opx,Bi,Zr	+	Hb,Cb	-

図1. 香西南西打遺跡 I -③区東壁土壤試料分析 5 試料

*¹ 主要重鉱物の略称と鉱物名

O1: カンラン石 Opx: 斜方輝石 Cpx: 単斜輝石 GHo: 緑色普通角閃石 BHo: 褐色普通角閃石
Bi: 黒雲母 Gar: ザクロ石 Zr: ジルコン Id: イディングサイト Opq: 不透明鉱物

*² Po: プラント・オパール含有率 or 有無
*³ 主要ガラス型の名称(吉川, 1976)

Ha, Hb: 扁平型(バブルウォール型) Ca, Cb: 中間型(軽石型) Ta, Tb: 多孔質型(軽石・繊維状型)

*⁴ (吉川, 1976)以外のガラス型の略称

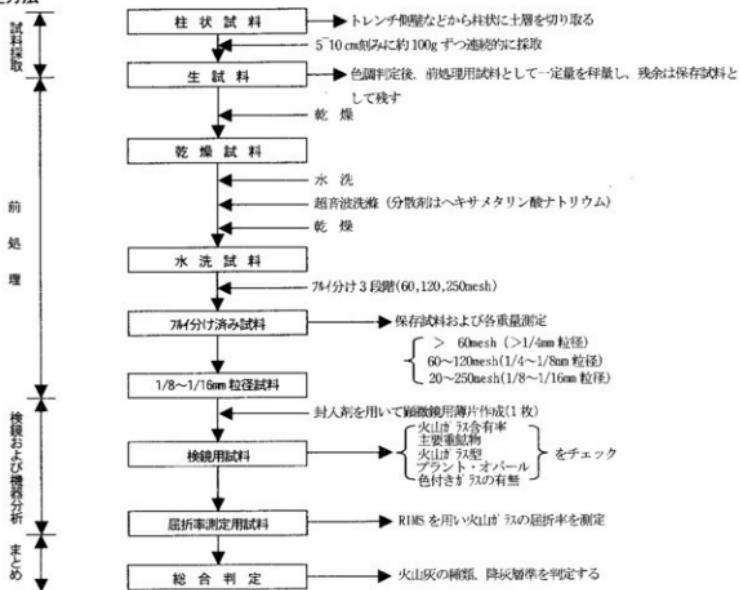
SG: スコリア質ガラス

It: 不規則型

1. 試料

分析試料は、高松港頭地区再開発関連埋蔵文化財発掘調査業務により、香西南西打遣跡 I - ③区東壁で高松市教育委員会発掘担当者の手で採取された全長 40 cm の土壌柱状試料である。この柱状試料は分析室内でさらに 8 cm 間隔に区分され、約 60 g ずつ 5 個の試料を採取(巻末記録写真参照)し、測定に供した。

2. 測定方法



土壤中火山灰(火山ガラス)抽出分析処理順序表

次に処理工程について説明を加える。

(1) 前処理

まず未処理試料 50~100g を白紙上にとり、新版標準土色帳(農林省農林水産技術会議事務局監修、1970)により判定表示する。

次に半湿潤状態の生試料を適宜採取秤量し、50°Cで 15 時間乾燥させる。乾燥重量測定後、27 ピーカーで数回水替えしながら水洗いし、そのち超音波洗浄を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度 1~2% 程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗浄水の交換を繰返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使ひ捨てのフリイ用メッシュ・クロスを行い、3段階の篩別(60, 120, 250mesh)を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた 120~250mesh(1/8~1/16mm)粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤(Nd=1.54)を用いて岩石用薄片を作成した。

(2) 火山ガラス含有率測定

前処理で作成された岩石用薄片を検鏡し、特に火山ガラスの含有率や特徴を中心に以下の各項目について測定・チェックを行った。

① 火山ガラス含有率

鏡下で火山ガラス・重鉱物・軽鉱物(土粒子やアモルファス粒子を含む)を識別し、各含有率を測定した。

② 火山ガラス型

吉川(1976)※(1)の分類に準拠して、含有される火山ガラスの形態を多いものから判定的求め表示した。なお吉川の分類に含まれないものについては、不規則型として一括した。

③ プラント・オパール含有

鏡下でしばしばプラント・オパールが識別されるため、その含有と、比較的多い場合には全粒子に対するプラント・オパール含有率を判定的に示した。

④ 色付きガラスの有無

淡色～淡紫色を呈する色付きガラスの有無は、広域テフラの識別の際に特徴の一つとなる場合がある。そこで、色付きガラスの有無を示した。なおここでいう色付きガラスには、スコリア(塩基性火山碎屑物)中にしばしば含まれる赤褐色、褐色、黄、緑色などのガラスは含まれない。

(3) 重鉱物分析

主要重鉱物(カンラン石・斜方輝石・单斜輝石・角閃石・黒雲母・アバタイト・ジルコン・イディングサイト等)を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有が少ないものは結果的に総数200個に満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理により重鉱物を凝集することが行われるが、風化による比重変化や粒径の違いが組成分布に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。

(4) 火山ガラスの屈折率測定

前処理により調製された120～250mesh(1/8～1/16mm)粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置(RIMS)※(2)(3)を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として1試料あたり30個の火山ガラス片を測定するが、火山ガラス含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

具体的な測定データは表にデータシートとしてまとめられ、以下に述べるように表示されている。まず最上位に試料名(Series および Sample Name)が明記され、Immersion 01は測定に使用した液体の種類を示す。火山ガラスの屈折率ndの式は浸液温度から対応する屈折率を換算するもの、ndは屈折率、tは温度を示す。

温度変化型屈折率測定法※(4)は火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度を測定することにより、各浸液ごとに決められた浸液温度と屈折率の換算式から火山ガラスの屈折率を計算して求める方法である。 $(A.s. + D.e.)/2$ は波温制御の際の上昇時(Ascent)と下降時(Descent)の平均値を意味する。繁雑さを避けるためここでは測定温度を表示せず、各火山ガラス片毎の屈折率のみを表示した。

測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。Count,min,max,range,mean,st.dev,skewnessはそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。*一つが1個の火山ガラス片の測定結果を示す。

3. 分析結果および考察

今回得られた分析結果は集約され、前掲の図1に表示されている。これらの分析情報の中で考古学的に価値を持つものは、編年上意味のあるテフラ(広域テフラ)の降灰層準を合理的に認定する根拠を与える情報である。具体的には、テフラ起源物質として明確に同定される火山ガラスの特徴や含有量比の情報が最も重要となる。

一般に土壌中に含まれる重鉱物の分析が広く行われているが、重鉱物分析結果をテフラ降灰層準との関係で論議する場合には十分な注意が必要である。その理由は、土壌中の重鉱物は岩起源のものを含むのが普通であり、必ずしもテフラ起源とのみ特徴することができないからである。しかも同一種類の鉱物でも組成・かなりの多様性をもつことが普通であり、純粹にテフラ起源の重鉱物のみを識別することは困難が多い。このため、今回の分析結果の考察においては、重鉱物分析結果から得られる情報は参考程度として低く扱わざを得ないことをお断りしておきたい。

さて火山ガラスから得られる情報に注目すると、今回の試料中に少なくとも2種類の火山ガラスが識別される。それらは、各火山ガラスの特徴を考慮し火山灰アトラス(町田・新井, 1992)※(5)もとにテフラの対比を行うと、降灰年代の古いものから姶良-Tn(AT)、鬼界アカホヤ(K-Ah)のテフラに由来するものと判断される。

各火山灰の特徴と分布層準は次ページ以下の表1にまとめて示す。なお今回検出された土壌中の火山ガラスについて、堆積過程において生じたと考えられるバリアスの存在を一言付記しておきたい。それは、1. 全体に軽石質のものが非常に少なく、2. 気泡に入ったガラスも非常に少ないとある。AT や K-Ah のようにバブル・ウォール型が特徴とされるガラスにもとともに軽石質のもののが少ないので当然だが、決して含まれないわけではない。風成火山灰の測定例から考えて、初生的には少なくとも 10%以上の軽石質ガラスが含まれると推定される。しかし同じ火山灰が水成堆積すると、ガラスが水中で比重分離され、軽石質のものや気泡の入ったガラスが選択的に除去される。そのため、再堆積層中の火山ガラスにはほとんど軽石質や気泡の入ったものが少なくなると考えられる。したがって今回の検出ガラスは再堆積された可能性が高く、降灰層準を直接決定できるものではない。分析データを解釈する上でこの点に十分注意が必要である。以上の点を考慮した上で、各層の年代について考察する。

表1. 香西南西打遣跡I-③東壁における火山ガラス濃集層準とその特徴

火山 ガラス 検出 層準	サンプル No.	No. 1 ~ No. 3	No. 1 ~ No. 5
	深度	—	—
	サンプル No.	No. 1	—
	深度	—	—
地層名	8. 黒褐色 シルト質粘土	9. 明黄褐色 粘土	
屈折率 (Nd)	1.508~1.514 最頻値=1.510	1.498~1.501 最頻値=1.500	
主な火山 ガラス型	H型 (扁平型)	H型 (扁平型)	
※(5) 対比される広域 テフラ	鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah)	始良Tn 火山灰 (AT)	
※(5) 降灰年代	6,300 B. P.	24,000~25,000 B. P.	
備 考	全分布層準で下位層準の火山ガラス(AT)と混在するが、上位層ほど相対的に含有量が高く、最も濃集。ただし火山ガラスの含有量が3.5%と少なく、降灰層準決定することは困難だが、黒褐色シルト質粘土層はAT降灰以降と判断される。火山ガラス形態は扁平型が主で、濃い色付ガラスを含む。火山ガラスの屈折率が高く特徴となる。最濃集層付近ではブラント・オーバル含有量が多く注目される。	今回の全分布層準で検出されるが、濃集度は低く、降灰層準を認定することは困難である。ただし分析層準の下位ではK-Ahガラスが全く含まれず、同層の上の微量のK-Ahガラスは上方からの汚染と判断されるため、堆積時期はK-Ah降灰以前と考えられる。無色透明な扁平(バブル・ウォール)型ガラスを主とするが、亀ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。	

- 注) ※ (1) 吉川周作 (1976) : 大阪層群の火山灰層について。地質学雑誌, 82 (8), 479 - 515.
 (2) 横山卓雄・檀原 徹・山下 透 (1986) : 温度変化型屈折率測定装置による
火山ガラスの屈折率測定。第四紀研究, 25 (1), 21 - 30.
 (3) Danbara T., Yamashita T., Iwano H. and Kasuya M. (1992) : An improved
system for measuring refractive index using the thermal immersion method.
Quaternary International, 13/14, 89 - 91
 (4) 檀原 徹 (1993) : 温度変化型屈折率測定法。日本第四紀学会編。第四紀試料分析法
2. 研究対象別分析法, 149 - 157. 東京大学出版会。
 (5) 町田 洋・新井房夫(1992) : 火山灰アトラス[日本列島とその周辺]。東京大学出版会。
 #PAT. 1803336, 1888831

保存用試料一覧表

No.	試料名	処理生試料 乾燥重量 (g)	篩別試料重量(g)			色調判定	備考
			>1/4 mm	1/4~1/8 mm	1/8~1/16 mm		
1	香西南西打遺跡 I-③区東壁土層 I	26.8	2.91	1.42	2.01	2.5Y2/1 & 2.5Y2/3	
2	香西南西打遺跡 I-③区東壁土層 II	22.6	1.09	1.16	1.74	2.5Y6.8 & 10G4/1	
3	香西南西打遺跡 I-③区東壁土層 III	26.0	1.64	1.57	2.31	2.5Y6/8 & 10G4/1	
4	香西南西打遺跡 I-③区東壁土層 IV	23.7	2.45	1.72	2.55	2.5Y6/8 & 10G4/1	
5	香西南西打遺跡 I-③区東壁土層 V	27.3	3.04	2.43	3.17	2.5Y6/8 & 10G4/1	
	以下余白						

注 1) 表中の数字は保存試料の重量を示す。

2) 1/8 1/16段階の保存試料は、一部岩石薄片作成にしようしたため実際よりわずかに少なくなっている。

3) 色調判定は、新版標準土色帳(農林省農林水産技術会議事務局監修、1970)による。

No	試料名	重鉱物組成※(1)										
		01	Pyroxene		Amphibole		Opq	Id	Zr	Bi	Ap	Total
			Opx	Cpx	BHo	Gho						
1	香西南西打 遺跡 I -③ 区東壁土層 I	-	8	1	-	163	25	-	1	2	-	200
		0.0	4.0	0.5	0.0	81.5	12.5	0.0	0.5	1.0	0.0	100.0
2	香西南西打 遺跡 I -③ 区東壁土層 II	-	9	-	-	163	26	-	2	-	-	200
		0.0	4.5	0.0	0.0	81.5	13.0	0.0	1.0	0.0	0.0	100.0
3	香西南西打 遺跡 I -③ 区東壁土層 III	-	6	-	-	172	17	-	2	3	-	200
		0.0	3.0	0.0	0.0	86.0	8.5	0.0	1.0	1.5	0.0	100.0
4	香西南西打 遺跡 I -③ 区東壁土層 IV	-	7	-	-	159	27	-	2	5	-	200
		0.0	3.5	0.0	0.0	79.5	13.5	0.0	1.0	2.5	0.0	100.0
5	香西南西打 遺跡 I -③ 区東壁土層 V	-	7	-	-	169	18	-	1	5	-	200
		0.0	3.5	0.0	0.0	84.5	9.0	0.0	0.5	2.5	0.0	100.0
	以下余白											

注. ※(1) 上段 計測粒子数 下段 %

なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。

- | | | |
|------------------|-----------------|-------------------|
| O1 : カンラン石, | Opx : 斜方輝石, | Cpx : 單斜輝石, |
| Blo : 暗色普通角閃石, | Gho : 緑色普通角閃石, | Opq : 不透明(鉄)鉱物, |
| Id : イディングサイト, | Zr : ジルコン, | Bi : 黒雲母, |
| Ap : アバタイト, | Gar : ザクロ石, | VG : 火山ガラス |
| Zoisite : ユウェン石, | Cum : カミングトン閃石, | Weipidote : 緑レン石, |

第2表 香西南西打遣跡 I - 3区東壁土壤中火山灰抽出分析

通番	試料名	乾燥重量(g)	粒度網目(φ)		鉱物・ガラス組成(%)			主要鉱物および参考	*1	*2 PO含有(%)	*3,*4 主要火山灰型	色付 記号 有無	
			網目分(mesh size)		粘土分		火山灰						
			>60	~	~	<250	ガラス物	物	物				
1	I-3区東壁 I	26.8	2.9	1.4	2.0	20.4	3.5	1.5	95.0	Glio+Opx+Cpx,Zr,Bi	4.5	Hb,Cb	+
2	I-3区東壁 II	22.6	1.1	1.2	1.7	18.6	1.5	6.0	92.5	Glio+Opx,Opx+Zr	1.0	Hb,Ob,Ca	+
3	I-3区東壁 III	26.0	1.6	1.6	2.3	20.5	2.5	5.0	92.5	Glio+Opx+Cpx,Zr,Bi	+	Hb,Cb	-
4	I-3区東壁 IV	23.7	2.5	1.7	2.5	17.0	2.0	9.0	89.0	Glio+Opx+Opx,Bi,Zr	+	Hb,Cb,Ca	-
5	I-3区東壁 V	27.3	3.0	2.4	3.2	18.6	2.0	8.5	89.5	Glio+Opx+Opx,Bi,Zr	+	Hb,Cb	-

*1 各鉱物とその略称は以下のように対応します。

G1: カンラン石 Opx: 斜方輝石 Cpx: 単斜輝石 Glio: 緑色角閃石 Can: カルナイト閃石 Hlio: 褐色角閃

Cdo: 斜エカルン石 Bi: 黒雲母 Gar: ザクロ石 Ze: ジルコン Id: 石英ガラス Opx: 不規則物

Epi: 絹雲母

*2 PO含有はプランクトン・オパールの含有量(%)を示します。

*3 火山ガラス型とその略称は吉川(1976)に従い以下のように対応します。

Hb,lb: 硅平型(バブル・ウォーターモード) Ca,Cb: 中間型(軽石型) Ta,Tb: 多孔質型(重石型, 槍状型)

*4 なお、吉川(1976)以外のガラス型について次の略語を用います。

SC: スコリア質ガラス

It: 不規則型

[屈折率値頻度分布]

(No.)	1	2	3	4	5
	I	II	III	IV	V
1.495<Nd<1.496	0	0	0	0	0
1.496<Nd<1.497	0	3	8	7	3
1.497<Nd<1.498	11	18	11	11	13
1.498<Nd<1.499	10	5	9	10	12
1.499<Nd<1.500	2	1	1	2	2
1.500<Nd<1.501	0	1	0	0	0
1.501<Nd<1.502	0	0	0	0	0
1.502<Nd<1.503	0	0	0	0	0
1.503<Nd<1.504	0	0	0	0	0
1.504<Nd<1.505	0	0	0	0	0
1.505<Nd<1.506	0	0	0	0	0
1.506<Nd<1.507	0	0	0	0	0
1.507<Nd<1.508	0	0	0	0	0
1.508<Nd<1.509	0	0	0	0	0
1.509<Nd<1.510	2	0	1	0	0
1.510<Nd<1.511	1	1	0	0	0
1.511<Nd<1.512	2	1	0	0	0
1.512<Nd<1.513	1	0	0	0	0
1.513<Nd<1.514	1	0	0	0	0
1.514<Nd<1.515	0	0	0	0	0

火山ガラスの屈折率測定結果一覧表

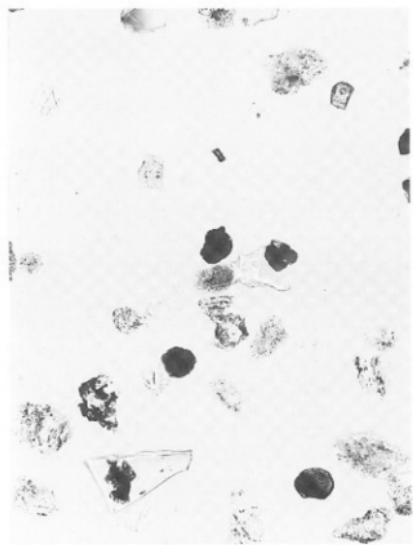
No.	試料名 (Sample Name)	屈折率範囲 (range)		屈折率平均値 (mean)	測定個体数 (個)	屈折率最頻値(mode)	火山ガラス形態 (glass type)
		最小	最大				
1	香西南西打I-3区 東壁上層I	1.497 1.509	1.500 1.513	1.4980 1.5109	23 7	1.497 ≤ n < 1.499 *70%	H, C型
2	香西南西打I-3区 東壁土層II	1.496 —	1.500 —	1.4976 1.5100	28 2	1.497 ≤ n < 1.498 *60%	H, C型
3	香西南西打I-3区 東壁上層III	1.496 —	1.499 —	1.4975 1.5090	29 1	1.496 ≤ n < 1.499 *90%	H, C型
4	香西南西打I-3区 東壁土層IV	1.496	1.499	1.4977	30	1.497 ≤ n < 1.499 *70%	H, C型
5	香西南西打I-3区 東壁土層V	1.496	1.499	1.4979	30	1.497 ≤ n < 1.499 *80%	H, C型
	以下余白						

* 全測定数に対する mode 範囲内にある火山ガラスの含有を示す。

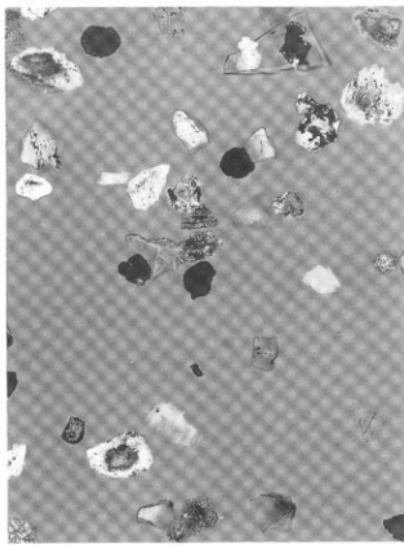
※ H: 扁平型
 C: 中間型
 T: 多孔質型
 (吉川, 1976)
 It: 不規則型

open nicol

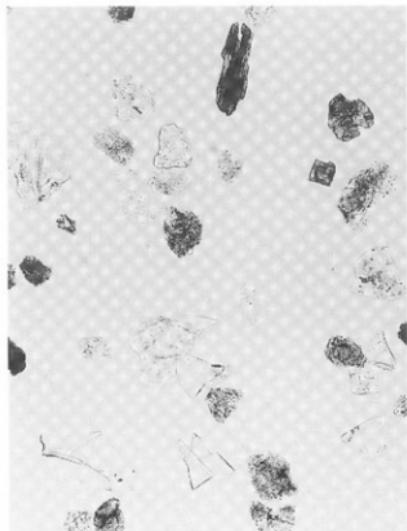
cross nicol + 鏡敏模板



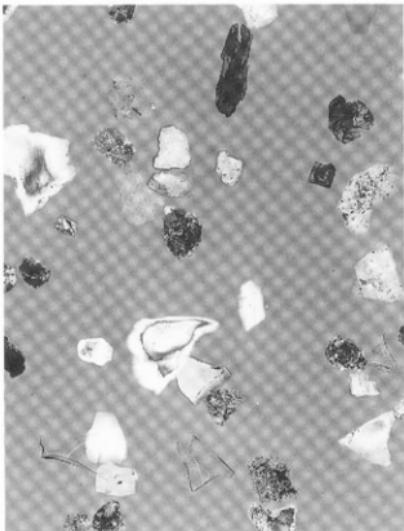
I-③区東壁土層I（8層）



同 左



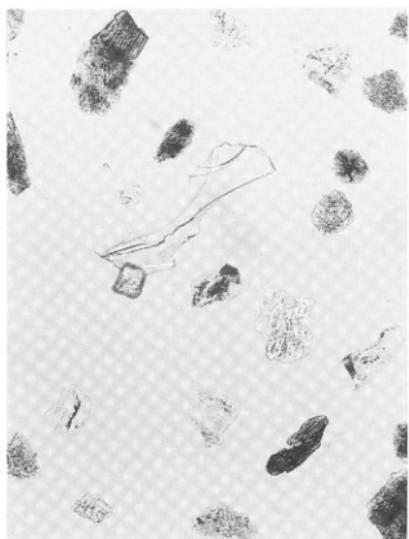
I-③区東壁土層II（9層）



同 左

open nicol

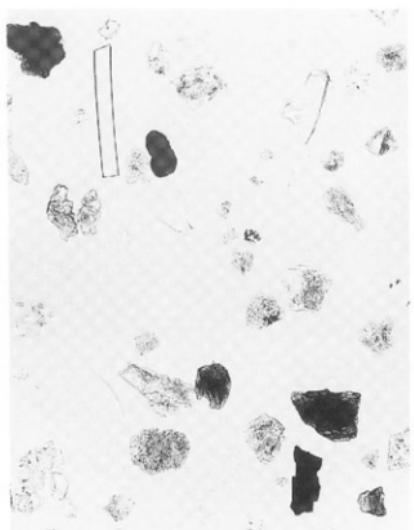
cross nicol + 锐敏模板



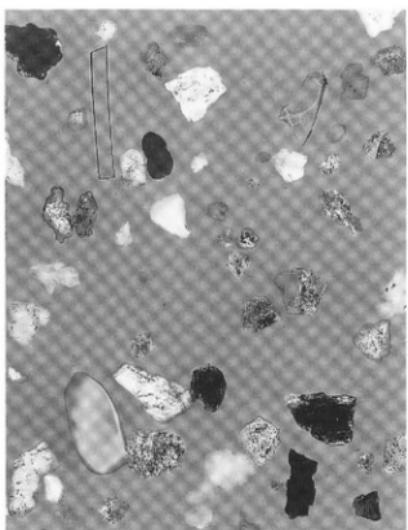
I-③区東壁土層III (9層)



同左



I-③区東壁土層V (9層)



同左

第2節 香西南西打遺跡の花粉化石

鈴木 茂（バレオ・ラボ）

高松港頭地区再開発事業にともない香西南西打遺跡において発掘調査が行われ、水田遺構ではないかとみられる堆積層が検出された。この堆積層について水田かどうかを検討する目的で土壌試料が採取され、花粉分析およびプラント・オパール分析が行われた。ここでは花粉分析結果・考察を以下に示すが、合わせて遺跡周辺の古植生についても検討した。

1. 試料と分析方法

分析はI-①区東壁より採取された7試料をもとに、④層、⑤層、⑦層の各層について行った（図1）。試料の採取層準および土相についてはプラント・オパール分析の節を参照して頂きたいが、土相についてはおおむね砂質のシルトや粘土である。また、出土遺物などから④層は13世紀以降、⑤層は12世紀頃と考えられている。これら3試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約4g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂などを除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え30分間放置する。水洗後、重液分離（臭化亜鉛溶液：比重2.1を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。次に、酢酸処理、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。また、花粉化石の単体標本を適宜作成し、各々にPLC.SS番号を付し形態観察用および保存用とした。

2. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉25、草本花粉20、形態分類を含むシダ植物胞子3、藻類1の計49である。これら花粉・胞子の一覧を表1に、また、主要な花粉・胞子の分布を図1に示したが、最下部の⑦層試料においては検出できた樹木花粉数が少ないため分布図とし示すことができなかった。なお、分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物は全花粉胞子総数を基数として百分率で示してある。また、図および表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の差異が困難なものを示し、クワ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に括していっている。

検鏡の結果、樹木類ではコナラ属アカガシ亞属とシノキ属一マテバシイ属（以後シイ類と略す）の優占で特徴づけられる。次いでスギ、コナラ属コナラ亜属が10%前後の出現率を示し、ツガ属やマツ属複雑管束亞属が⑤層試料においてやや目立って検出されている。その他、コウヤマキ属、イチイ科一イヌガヤ科一ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）、クマシデ属一アサダ属、ニレ属一ケヤキ属などが得られている。

草本類はイネ科が最も多く、40%前後と高い出現率を示している。他はいずれも低率で、そのなかではカヤツリグサ科・ヨモギ属

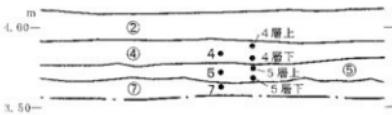


図1 試料採取地点付近の土層断面図(I-①区東壁)

表1 産出花粉化石一覧表

和名	学名	4	5	7
樹木				
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	1	-
モミ属	<i>Abies</i>	-	1	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	1	22	-
マツ属複数管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	1	23	3
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	1	6	2
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	8	7	-
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	22	27	2
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T. - C.	6	13	1
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	3	3	-
ノグリム属	<i>Platycarya</i>	-	-	-
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	1	1
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	6	6	1
カバノキ属	<i>Betula</i>	5	4	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	1	1	-
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	1	1	-
イヌブナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	-	1	-
コナラ属コナラ並属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	22	29	10
コナラ属アカガシ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	72	79	21
シイノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis</i> - <i>Pasania</i>	69	26	3
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	3	4	1
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis</i> - <i>Aphananthe</i>	1	1	-
イスノキ属	<i>Distylium</i>	-	1	-
サクラ属近似種	cf. <i>Prunus</i>	-	1	-
ニシキギ科	<i>Celastraceae</i>	1	-	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	2	-	-
草本				
ガマ属	<i>Typha</i>	1	-	-
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	1	1	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	7	-
イネ科	<i>Gramineae</i>	262	206	32
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	47	31	12
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	-	1	-
ユリ科	<i>Liliaceae</i>	-	1	-
クワ科	<i>Moraceae</i>	1	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	1	1	-
アカザ科-ヒユ科	<i>Chenopodiaceae</i> - <i>Amaranthaceae</i>	1	1	-
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	-	1	-
キンポウゲ科	<i>Ranunculaceae</i>	-	1	-
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	4	-	-
マメ科	<i>Leguminosae</i>	1	3	-
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	-	1	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	-	1	-
シソ科	<i>Labiatae</i>	1	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	38	27	11
他のククリ科	other <i>Tubuliflorae</i>	20	4	-
タンボボ科	<i>Liguliflorae</i>	21	2	1
シダ植物				
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	2	1	-
単柔型胞子	Monolete spore	15	1	3
三条型胞子	Trilete spore	4	3	4
黄緑色藻類				
	<i>Botryococcus braunii</i> Kutzing	1	1	-
樹木花粉	Arboreal pollen	225	258	48
草本花粉	Nonarboreal pollen	399	289	56
シダ植物胞子	Spores	21	5	7
花粉・胞子總数	Total Pollen & Spores	645	552	111
不明花粉	Unknown pollen	33	28	13

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceae を示す

が5～10%を示しやや目立って検出されている。その他では上位2試料よりソバ属が得られ、水生植物のサジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属（いずれも抽水植物）が若干検出されている。

なお、⑦の地山層試料においても上位層と同様の分類群が検出されており、それらが占める割合も上位試料と同じ傾向が認められる。こうしたことから遺物としては旧石器が検出されているものの花粉化石からは上位層と同様の植生が推測され、あまり時間的差は無いように思われる。

3. 香西南西打遺跡の古植生

イネ科花粉が40%前後と高い出現率を示し、水生植物のサジオモダカ属やオモダカ属、ミズアオイ属など、現在の水田において水田雑草として普通にみられる抽水植物群も検出されている。プラント・オバール分析においてイネのプラント・オバールが検出されており稻作が行われていたと判断されている。花粉分析結果も大量のイネ科花粉と水田雑草を含む分類群の検出は稻作を支持するものであり、香西南西打遺跡では⑤層堆積期、すなわち12世紀には水田稻作が行われていたと判断されよう。この水田あるいは畔にはカヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科、タンボボ亜科なども雑草として生育していたとみられる。また、上位2試料よりソバ属が検出されており、ソバの栽培も行われていた可能性がある。

一方、遺跡周辺丘陵部や微高地ではアカガシ亜属やシイ類を主体とした照葉樹林が優勢であった。また、スギ林やコナラ亜属・クマシデ属ーアサダ属の落葉広葉樹林も一部に成立していたであろう。その他、ツガ属、マツ属複雜管束亜属（アカマツ、クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）、コウヤマキ属などの針葉樹類も上記森林に混じるように生育していたものと思われる。

こうした植生は高松周辺では一般的であったと考えられ、先に報告した居石遺跡にも時代は多少異なるが認められる。そうしたなかツガ属とニヨウマツ類は④層試料において1%以下の出現率に減少している。④層試料の観察で、傷んでいた花粉化石が多く認められ、これが影響している可能性がある。すなわち、分解作用によりツガ属やニヨウマツ類は過少に、分解に強いとされるシイ類は反対に過大に表現されている可能性が考えられる。

引用文献

- 鈴木 茂（1995）居石遺跡の花粉化石。一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第七冊 居石遺跡、高松市教育委員会、p.173-191。

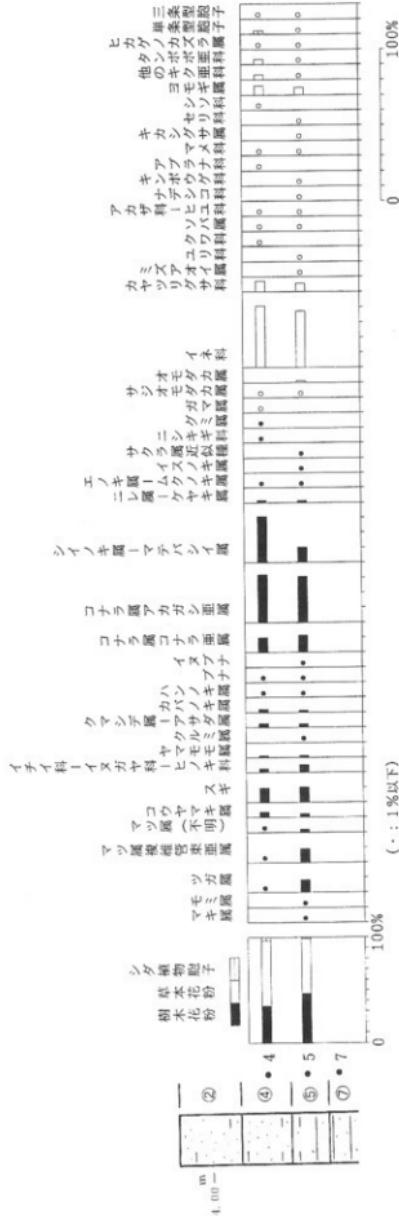
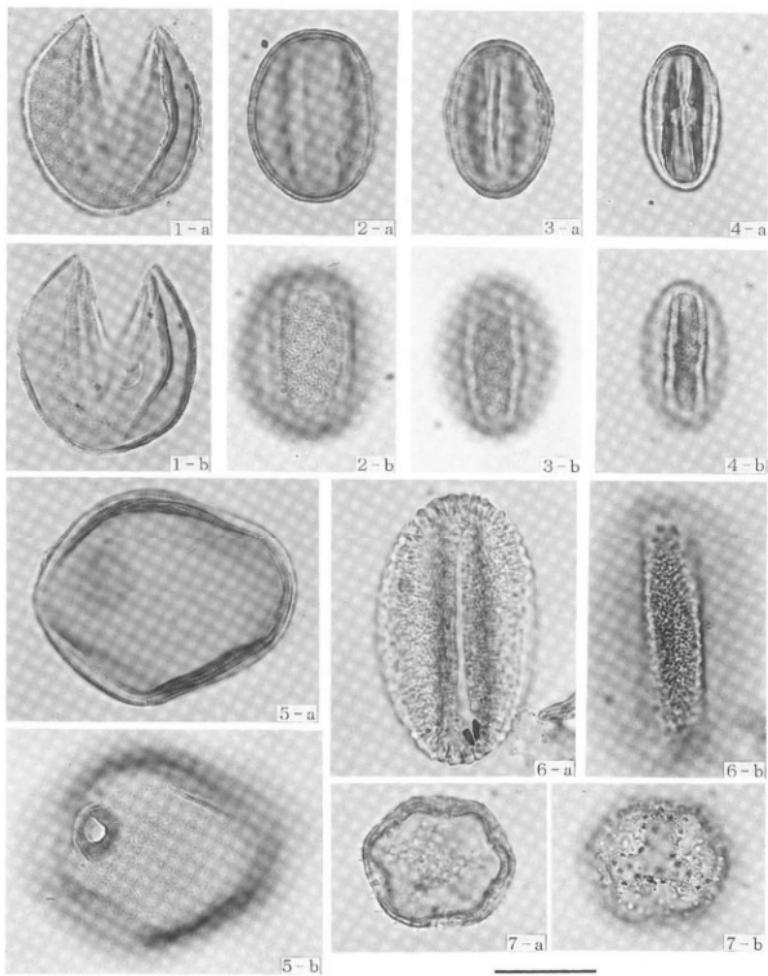


図 2 1-①区東壁の花粉化石分布図
(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)



図版 香西南西打遺跡の花粉化石 (scale bar : 20 μ m)

- 1 : スギ PLC.SS 2710 5層
- 2 : コナラ属コナラ亜属 PLC.SS 2709 5層
- 3 : コナラ属アカガシ亜属 PLC.SS 2712 5層
- 4 : シノキ属一マテバシイ PLC.SS 2711 5層
- 5 : イネ科 PLC.SS 2714 5層
- 6 : ソバ属 PLC.SS 2715 4層
- 7 : オモダカ属 PLC.SS 2713 5層

第3節 香西南西打遣跡のプラント・オパール

鈴木 茂（パレオ・ラボ）

プラント・オパールとは、根より吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体などの植物珪酸体）が、植物が枯れるなどして土壤中に混入して土粒子となったものを言い、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壤中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稲作の有無についての検討も行われている（藤原 1984）。このような研究成果から、近年プラント・オパール分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われている。こうしたことから、香西南西打遣跡においてもトレンチ断面より採取された試料についてプラント・オパール分析を行い、稲作の有無について機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールから検討した。

1. 試料と分析方法

分析用試料はI-①区東壁より採取された4試料である。各層について簡単に記すと、②層は酸化鉄の集積によりぶい黄色を呈するレキ混じりシルト質極細砂である。④層はやはり酸化鉄の集積により黄褐色を示すシルト質極細砂～砂質シルト（試料4層上、4層下）、⑤層は黒灰色シルト～粘土で酸化鉄の集積で褐色を帯び、上部は特に強い（試料5層上、5層下）。最下部⑦層も酸化鉄の集積で明黄褐色を呈する砂質粘土（地山）である。なお時代については出土遺物などから、④層が13世紀以降、⑤層が12世紀頃と考えられており、⑦層からは旧石器が出土している。プラント・オパール分析はこれら4試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスピーブ（直径約40μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波モジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスピーブが300個に達するまで行った。

2. 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピーブ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（表1）、それらの分布を図2に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

検査の結果、上部ほど保存状態は悪く、そのなか全試料よりイネのプラント・オパールが検出された。産出傾向は上部に向かい急減しており、5層下で約18,000個が4層上では約2,000個に減少している。また、4層上試料からはわずかではあるがイネの顆粒に形成される珪酸体の破片が認められている（写真図版参照）。

イネ以外について、最も多く検出されているのはネザサ節型で、最下部の5層下においては約960,000個と非常に多く得られている。次いでクマザサ属型、ウシクサ族が多く、イネ同様に上部に向かい減少する傾向が認められる。ヨシ属は10,000個前後とヨシ属としては高い検出個数を示している。

その他、キビ族は少ないながら全試料より得られ、サヤスカグサ属、シバ属は4層試料より検出されている。

表1 試料1 g当たりのプラント・オバール個数

試料番号	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	サヤスカグサ属 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ属 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
4層上	2,100	369,700	22,00	3,100	1,000	12,600	3,100	3,100	20,900	39,800
4層下	6,700	417,100	26,900	2,200	0	9,000	1,100	1,100	23,500	52,700
5層上	11,200	381,200	54,000	1,100	0	13,500	0	1,100	38,200	31,500
5層下	18,300	960,900	83,300	3,400	0	12,600	0	2,300	47,900	30,800

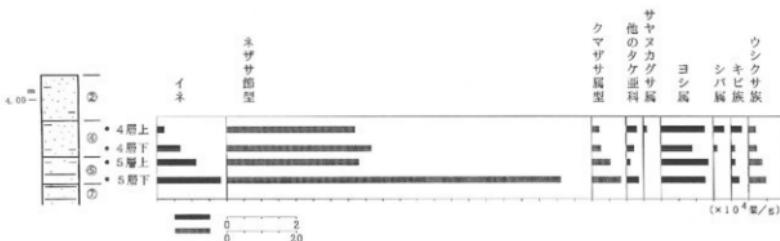
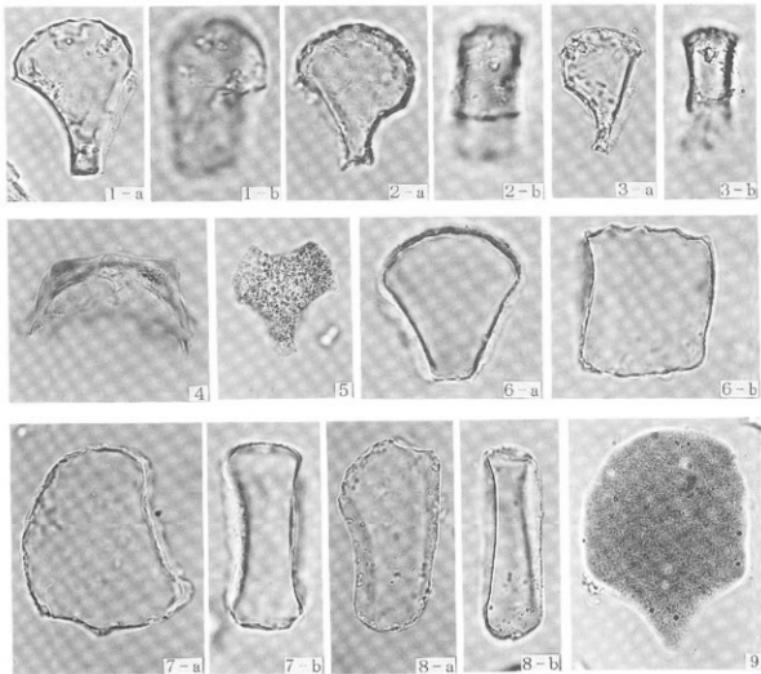


図1 I-①区東壁のプラント・オバール分布図

3. 稲作について

上記したように、全試料よりイネのプラント・オバールが検出されている。検出個数の目安として、イネのプラント・オバールが試料1 g当たり5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原 1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オバールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。香西南西打遣跡の5層試料においては10,000個を超えるイネのプラント・オバールが検出されており、プラント・オバール分析からは稲作が行われていた可能性は高いと判断される。一方、4層上試料においては2,100個で5,000個に達していない。しかしながら同じ4層の下試料では6,700個を示しており、4層の花粉分析結果をみるとイネ科花粉が大量に検出され、水田雑草を含む分類群（サジオモダカ属）も検出されていることから、4層においても稲作（水田稲作）が行われていた可能性は高いと判断されよう。

このように香西南西打遣跡においては遅くとも12世紀（5層）には水田稲作が行われていたと判断される。また、上部試料においてイネが減少している一因として、上部ほど保存状態が悪く、その結果イネと同定しがたく不明としたものの割合が多くなってしまったのではないかと思われる。



図版 香西南西打遣跡のプラント・オパール (scale bar : 30 μm)

- 1~3 : イネ (a : 断面、b : 側面) 1 : 4層上部、2, 3 : 5層下部
- 4 : イネ穂部破片 4層上部
- 5 : シバ属 (断面) 4層上部
- 6 : ネザサ節型 (a : 断面、b : 側面) 5層下部
- 7 : クマザサ属型 (a : 断面、b : 側面) 5層下部
- 8 : ウシクサ族 (a : 断面、b : 側面) 5層下部
- 9 : ヨシ属 (断面) 5層下部

4. イネ以外のイネ科植物

上記したように香西南西打遣跡においては水田稲作が行われていたと判断され、ヨシ属（ヨシ、ツルヨシなど）やサヤヌカグサ属（アシカキなど）は水田や周辺水路などに生育していた。また、シバ属（ノシバなど）は畔や道など比較的乾いたところに13紀頃になってみられるようになった。

最も多く検出されているネザサ節型について、このネザサ節型のササ類（ケネザサ、ゴキダケなど）は稲作地周辺の開けたところに生育してていたと推測され、ウシクサ族（ススキ、チガヤなど）とともに草地を形成していた。一方、クマザサ属型のササ類（スズタケ、ミヤコザサなど）については、遺跡周辺に成立していた森林の下草的存在で分布を広げていたと推測される。

引用文献

- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法— 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—. 考古学ジャーナル, 227, p.2-7.
- 藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）—イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状—. 考古学と自然科学, 11, p.9-20.

第4節 香西南西打遺跡出土土器の胎土分析

白石 純

はじめに

この胎土分析では理化学的な手法により、香西南西打遺跡出土の中世土器を分析し、以下の問題点について検討した。

1. 遺跡内より出土している中世土器には小型品の壺、皿、黒色土器椀や大型品の甕、鍋、羽釜、などの製品がある。この土器類が器種ごとで胎土に差異がみられるかどうか。
2. この遺跡では、土器の焼成用に使用されたと考えられる粘土採掘場が多数確認されている。そこでこの粘土採掘場の粘土と遺跡出土土器が理化学的な胎土分析で似ているかどうか。
3. 高松市内の他地域（高松空港跡地遺跡）の遺跡出土土器との比較を行い、遺跡ごとにより差異があるかどうか検討した。

分析方法、結果

分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置（セイコーアイネルツメント社製SEA2010L）により実施し、分析試料は上器を200メッシュほどの粉末状にしたものを作成し測定試料とした。測定方法は、この試料に15Kv-140μA、50Kv-30μAのX線をそれぞれ100秒照射し、半導体検出器により蛍光X線を測定した。分析データの定量値は標準試料JA-1（地質調査所）を使用して検量線を作成した。測定元素は、Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、Rb、Sr、Zrの13元素である。

分析の結果、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Sr（ストロンチウム）、Zr（ジルコニウム）の各元素に顕著な差がみられることから、これらの元素を用いてXY散布図を作成し検討した。

第1図K-Ca散布図および第2図Sr-Zr散布図より遺跡内出土土器で器種別により胎土に差があるかどうか検討した。この結果、第1図、第2図とも小型品（壺、皿、椀）と大型品（甕、鍋、羽釜）で胎土に差がみられた。

香西南西打遺跡の粘土採掘場から採取した粘土と同遺跡内から出土した土器との比較では、第3図K-Ca散布図および第4図Sr-Zr散布図より検討すると、粘土採掘場の粘土は遺跡出土土器の大型品（甕、鍋、羽釜）が分布する領域に粘土がプロットした。とくに大型品のなかの土師質羽釜の分布範囲と分布域が似ているようである。

空港跡地遺跡から出土した土器との比較では、第5図K-Ca散布図および第6図Sr-Zr散布図から検討すると、空港跡地遺跡出土の土師質壺・小皿（へら切り、糸切り）の分布領域と香西南西打遺跡出土の小型品（壺、皿）と分布域がほぼ一致した。

まとめ

香西南西打遺跡から出土した土器の分析結果の要点をまとめ、今後の課題についてふれてまとめてする。

- (1) 遺跡内出土土器のうち器種により胎土に違いがあるかどうかでは、大型品（甕、鍋、羽釜）と小型

品（壺、皿、椀）のあいだで胎土に差がみられた。この大型品と小型品で胎土に差がみられたことは、器種により使用する粘土の使い分けあるいは砂粒などの混和材を入れることにより、胎土に差がでたと推測される。また、小型品のなかでも須恵器の壺、皿類が一つにまとまり、土師質の壺や黒色土器椀とは分布域が異なるようである。このことより小型品の中でも質により胎土が違うことが推測される。

- (2) 粘土採掘場の粘土と土器の比較では、粘土採掘場の粘土は大型品の分布領域に分布した。とくに大型品の中でも土師質羽釜の分布範囲と粘土の領域がほぼ重なる傾向がみられたことから、土師質羽釜を焼成するための粘土採掘場であることが十分に推測される。しかし、他の大型品とも重複するところがあるため今回の分析で十分検討できなかった。今後資料を蓄積し再検討する必要がある。
- (3) 空港跡地遺跡出土土器との比較では、両遺跡の小型品（壺、皿）がほぼ同じ分布域に分布した。

以上のように今回の分析でわかったことを簡単にまとめたが、高松平野の他の遺跡出土資料との比較がほとんどできなかった。今後他の遺跡出土土器との胎土の比較を実施することにより、高松平野での中世土器の生産流通について再検討する必要がある。

香西南西打遣跡出土土器の胎土分析値(%)一覧表

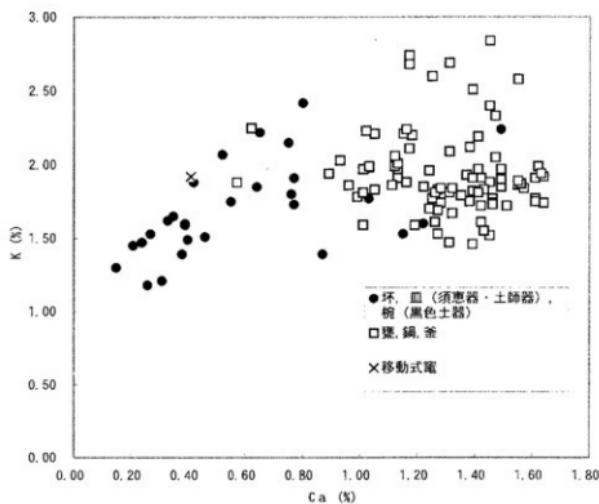
番号	編號器号	種類	時期	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	K	P	Rb	Sr	Zr
1. 沖81-2	环底 繁惑器	7c	66.96	0.98	18.48	7.08	0.05	1.67	0.21	2.90	1.45	0.07	157	46	292
2. 沖81-3	环 繁惑器	8c	68.54	0.82	16.72	6.28	0.06	1.64	1.02	2.63	1.97	0.10	130	109	264
3.	环 繁惑器		67.02	0.89	19.68	6.60	0.10	1.61	0.26	2.45	1.18	0.06	89	68	221
4. 沖78-2	环 繁惑器		66.22	0.82	18.73	8.40	0.05	1.66	0.33	1.97	1.62	0.04	146	70	276
5. 沖78-3	环 繁惑器	9c	68.67	0.77	17.46	6.78	0.04	1.57	0.39	2.53	1.59	0.05	126	80	322
6.	环 土師器		64.97	0.67	22.85	3.93	0.14	1.68	1.22	2.68	1.60	0.14	126	151	151
7.	环 土師器		54.86	1.17	22.66	13.90	0.29	1.86	0.64	2.47	1.85	0.03	140	111	329
8. 沖108-4	环 土師器	10c	55.11	1.21	23.07	13.73	0.15	1.98	0.46	2.52	1.54	0.01	158	89	352
9.	环 土師器	10c	61.38	0.91	19.37	11.49	0.18	1.71	0.39	2.61	1.60	0.05	122	86	318
10.	环 土師器	10c	67.04	0.59	15.95	8.85	0.08	1.48	0.65	2.39	2.22	0.08	113	226	255
11. 押81110-3	环 土師器	10c	61.38	0.99	19.72	12.02	0.13	1.54	0.31	2.45	1.21	0.06	130	63	243
12. 沖110-2	环 土師器	10c	72.21	0.59	16.22	4.37	0.03	1.50	0.76	2.28	1.80	0.06	117	115	276
13. 沖108-3	环 土師器	10c	59.21	0.97	19.86	12.19	0.19	1.49	0.49	2.13	2.24	0.00	156	184	397
14.	环 土師器	10c	64.84	0.93	18.51	10.04	0.12	1.53	0.35	1.86	1.65	0.01	140	77	296
15. 沖91-1	环 土師器	12c	69.77	1.09	18.21	4.01	0.05	1.57	0.77	2.52	1.73	0.10	131	99	262
16. 沖120-1	环 土師器	13c ~	68.43	0.88	19.03	5.54	0.06	1.52	0.55	2.00	1.75	0.08	101	95	276
17.	环 土師器		69.15	0.93	17.83	6.32	0.11	1.50	0.24	2.23	1.47	0.08	89	161	259
18. 沖116-4	褐色土器 横	13c ~	64.78	0.55	16.11	11.63	0.07	1.39	0.09	2.31	1.77	0.11	127	123	248
19.	褐色土器 横	10c	72.23	0.84	16.94	3.21	0.03	1.51	0.52	2.39	2.07	0.09	134	111	291
20.	黑色土器 横	10c	71.71	0.55	16.25	4.01	0.05	1.40	0.80	2.55	2.42	0.09	125	161	256
21. 沖106-2	黑色土器 横	10c	63.72	1.12	18.63	9.62	0.07	1.52	0.75	2.21	2.15	0.03	130	95	595
22. 沖87-5	黑色土器 横	12c	62.06	0.88	18.15	12.71	0.11	1.54	0.87	2.03	1.39	0.07	130	172	224
23. 沖87-6	黑色土器 横	12c	71.77	0.92	17.51	2.81	0.04	1.57	0.77	2.24	1.91	0.32	117	98	299
24. 沖87-12	黑色土器 横	12c	62.94	0.91	19.32	9.23	0.07	1.61	1.03	2.87	1.77	0.11	147	117	349
25. 沖120-4	黑色土器 横	13c	66.38	0.77	19.26	6.51	0.04	1.51	1.15	2.38	1.53	0.08	132	132	212
26. 沖120-7	黑色土器 横	8c	72.33	1.03	16.61	3.92	0.04	1.65	0.40	2.27	1.49	0.09	108	83	273
27. 沖120-6	环 繁惑器	8c	73.09	1.12	16.90	3.98	0.02	1.56	0.15	1.66	1.30	0.08	131	35	396
28. 沖121-5	环 繁惑器	8c	71.81	0.86	17.39	4.17	0.05	1.47	0.42	1.71	1.88	0.09	149	137	230
29. 沖81-7	环 繁惑器		66.39	0.95	18.32	7.72	0.05	1.64	0.27	2.41	1.53	0.06	147	122	256
30. 沖120-2	环 土師器		72.31	0.78	17.81	3.65	0.03	1.53	0.25	1.98	1.42	0.09	166	72	277
31. 沖120-4	环 繁惑器		63.81	0.87	18.56	10.99	0.09	1.61	0.38	2.11	1.39	0.00	112	64	278
32. 沖81-11	环 土師器		61.39	0.90	19.08	11.02	0.18	1.69	1.17	2.68	1.72	0.04	129	143	156
33. 沖81-10	环 土師器		63.83	0.76	17.52	10.21	0.06	1.55	1.65	2.58	1.66	0.05	120	178	248
34. 沖81-5	环 土師器		64.96	0.66	19.29	7.33	0.05	1.57	1.45	2.84	1.52	0.13	98	162	188
35. 沖81-6	环 土師器		63.59	0.67	17.01	10.01	0.08	1.41	1.24	1.88	1.04	0.04	96	161	201
36. 沖110-12	环 土師器		64.64	0.79	19.12	8.22	0.08	1.54	1.25	2.60	1.57	0.05	94	153	190
37. 沖111-6	环 土師器														

香西南西打遣跡出土土器の胎土分析値(%)一覧表

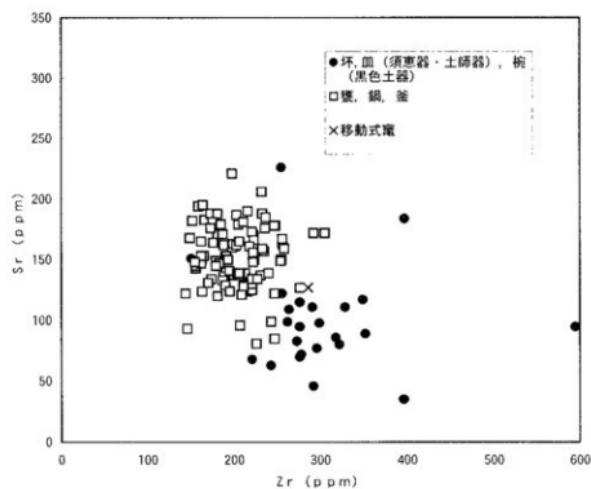
番号	規範器号	器種	時期	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	K	Na	P	Rb	Sr	Zr
75	76. 布図136-1	土師質鍋	66.91	0.69	18.31	6.61	0.06	1.53	1.46	3.09	1.73	0.31	106	162	203	
76	77. 布図106-11	土師質鍋	66.37	0.72	17.97	6.35	0.05	1.61	1.18	3.01	2.20	0.25	137	128	211	
77	78. 布図91-3	土師器蓋	67.09	0.68	18.37	5.52	0.06	1.58	1.43	2.98	1.83	0.32	94	165	206	
79	80. 布図76-6	土師器蓋	63.98	0.62	15.53	12.65	0.09	1.43	1.25	2.61	1.71	0.09	129	163	199	
81	82. 布図91-3	土師器蓋	67.26	0.63	16.58	7.34	0.06	1.52	1.03	3.31	1.98	0.14	107	124	216	
83	84. 布図120-10	土師器蓋	67.91	0.81	17.15	6.75	0.06	1.42	1.41	2.23	1.97	0.09	125	159	258	
85	86. 布図123-5	土師器蓋	63.09	0.62	18.23	10.72	0.06	1.48	1.43	2.46	1.55	0.11	120	165	162	
87	88. 布図121-8	土師器蓋	61.09	0.55	16.65	13.85	0.37	1.57	1.39	2.74	1.46	0.11	143	149	179	
89	90. 布図91-3	土師器蓋	61.92	0.78	17.27	9.54	0.08	1.45	1.28	2.64	1.74	0.11	119	150	224	
91	92. 布図137-6	土師器蓋	60.92	0.49	15.53	9.31	0.12	1.42	1.01	2.78	1.97	0.13	119	125	221	
93	94. 布図76-5	土師器蓋	65.38	0.56	17.62	8.38	0.06	1.49	1.27	3.16	1.69	0.09	113	133	187	
95	96. 布図86-7	土師器蓋	64.37	0.74	17.22	9.54	0.12	1.64	1.64	2.54	1.74	0.11	151	172	206	
97	98. 布図86-3	土師器蓋	69.96	0.61	16.54	5.36	0.06	1.38	1.62	2.96	1.99	0.17	136	206	232	
99	100. 布図86-6	土師器蓋	66.89	0.82	18.89	5.34	0.11	1.61	1.31	2.47	1.81	0.41	110	122	144	
101	102. 布図113-3	土師器蓋	66.15	0.85	18.47	6.77	0.07	1.41	1.38	2.04	1.75	0.34	101	137	231	
103	104. 布図106-13	土師器蓋	71.49	0.64	16.66	3.41	0.06	1.42	1.49	3.11	1.85	0.42	105	157	235	
105	106. 布図86-1	土師器蓋	67.31	0.71	16.51	6.52	0.07	1.73	1.41	2.99	1.61	0.21	2.21	0.29	118	
107	108. 布図78-12	土師器蓋	64.65	0.84	17.20	9.41	0.07	1.49	1.24	2.94	1.70	0.32	87	137	200	
109	110. 布図78-9	土師器蓋	64.74	1.03	17.86	9.27	0.08	1.53	1.39	2.00	1.82	0.10	127	187	203	
111		土師質羽釜	10 c													

香西南西打遣跡出土土器の胎土分析値(%)一覧表 ただし、Rb/Sr,Zr(ppm)

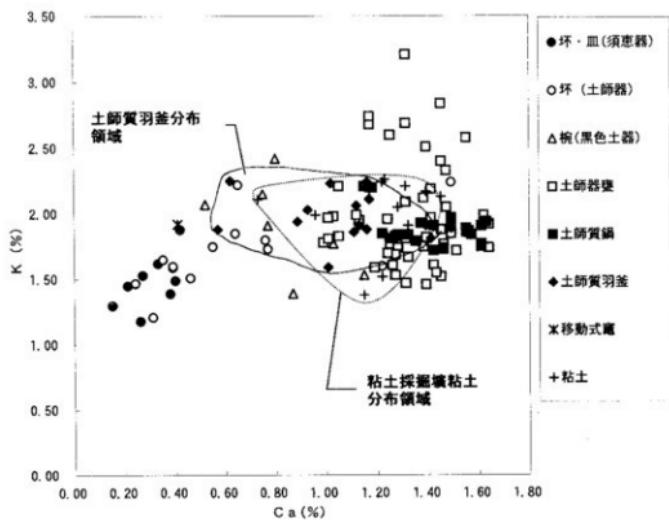
器号	掲載器号	種類	時期	S	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	K	Na	P	Rb	Sr	Zr
112	土師質羽釜			70.61	0.61	5.94	0.04	1.39	1.16	2.15	1.88	0.21	122	134	227	
113	神岡121-11	土師質羽釜	10.c	64.96	0.66	17.89	9.69	0.07	1.35	1.41	1.95	1.81	0.11	105	172	292
114	土師質羽釜			69.72	0.41	14.96	5.95	1.07	1.41	1.17	2.76	2.11	0.13	138	139	204
115	土師質羽釜			69.45	0.65	17.03	5.61	0.06	1.44	1.13	2.45	1.91	0.15	122	139	206
116	神岡121-12	土師質羽釜	10.c	70.19	0.44	15.12	6.74	0.11	1.42	1.02	2.37	2.23	0.17	130	124	196
117	土師質羽釜			71.81	0.78	17.86	2.79	0.03	1.46	0.57	2.31	1.88	0.34	171	85	247
118	土師質羽釜		13.c~	68.01	0.61	17.66	5.79	0.08	1.56	1.12	2.71	2.06	0.13	162	122	247
119	土師質羽釜		13.c~	66.56	0.73	19.15	6.68	0.16	1.57	0.89	2.01	1.94	0.14	163	96	207
120	神岡113-6	土師質羽釜	13.c~	64.38	0.63	19.54	7.55	0.05	1.53	1.39	2.15	1.91	0.11	116	148	155
121	土師質羽釜		13.c~	68.24	0.49	17.79	6.51	0.12	1.47	1.01	2.44	1.59	0.11	117	120	181
122	神岡122-8	土師質羽釜	13.c~	67.57	0.63	15.92	9.04	0.25	1.27	1.11	1.99	1.86	0.14	136	121	209
123	神岡116-7	土師質羽釜	13.c~	69.06	0.65	17.33	5.66	0.03	1.34	0.62	2.73	2.25	0.15	133	81	226
124	土師質羽釜		13.c~	70.81	0.59	18.09	3.44	0.04	1.41	0.93	2.41	2.03	0.16	119	93	146
125	神岡137-7	移動式壺		73.52	0.76	15.71	3.44	0.03	1.44	0.41	2.47	1.92	0.16	154	127	286
131	粘土Ⅲ.2			70.71	0.81	16.41	5.54	0.03	1.25	0.73	2.06	2.11	0.16	117	324	202
132	粘土 北1			66.94	0.81	19.21	5.07	0.13	1.67	0.96	2.88	1.99	0.16	192	96	210
133	粘土 北2			66.31	0.92	16.41	8.29	0.11	1.57	1.49	2.78	1.89	0.09	142	172	257
134	粘土 北3			60.28	1.16	22.54	8.79	0.11	1.71	1.15	2.58	1.38	0.11	155	117	154
135	粘土 北4			62.71	0.92	21.73	7.04	0.09	1.82	1.22	2.71	1.52	0.12	122	118	221
136	粘土 北5			67.71	0.72	17.96	5.89	0.07	1.59	1.28	2.39	2.05	0.12	153	150	256
137	粘土 東1			65.83	0.71	17.14	8.85	0.09	1.69	1.32	2.15	1.91	0.11	162	123	217
138	粘土 東2			72.33	0.76	13.61	5.35	0.13	1.41	1.31	2.59	2.21	0.17	137	158	275
139	粘土 東3			71.72	0.81	14.48	4.48	0.11	1.47	1.39	3.05	2.17	0.13	155	157	283
140	粘土 東4			73.34	0.73	14.07	3.47	0.05	1.45	1.45	2.98	2.13	0.15	130	167	308
141	粘土 東5			69.13	0.67	17.61	4.71	0.07	1.61	1.17	2.64	2.17	0.11	168	117	228
142	粘土 東6			68.72	0.68	17.64	5.21	0.05	1.54	1.22	2.34	2.24	0.16	167	134	225
143	粘土 東7			68.82	0.62	17.57	5.08	0.06	1.51	1.23	2.61	2.26	0.12	172	140	224



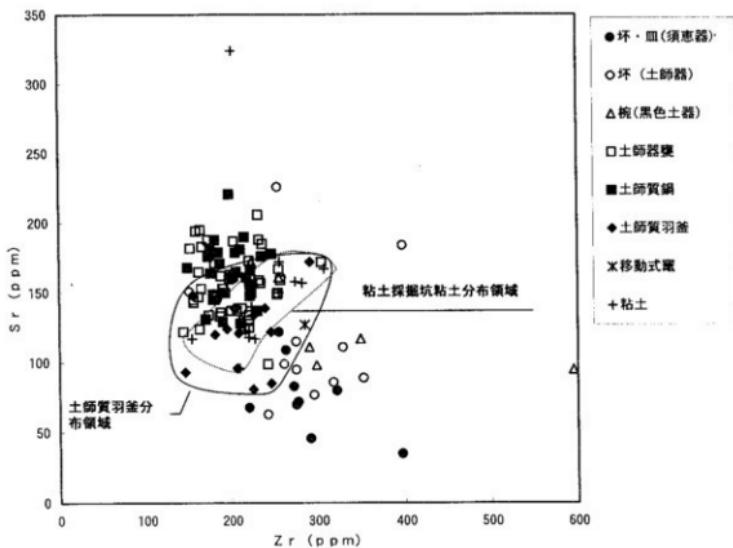
第1図 器種別による胎土の比較



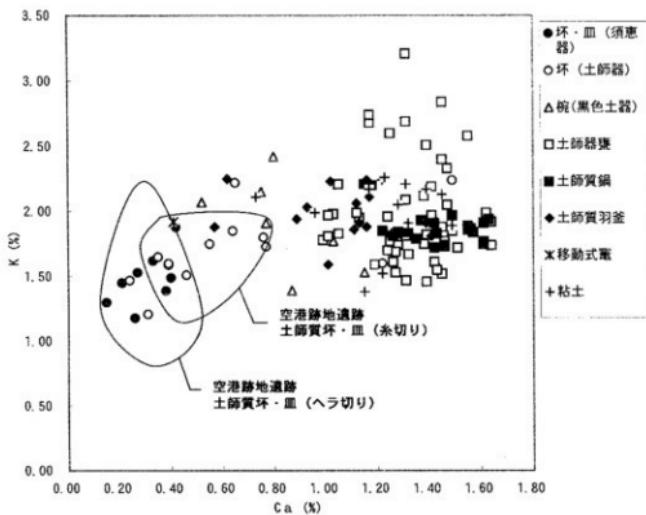
第2図 器種別による胎土の比較



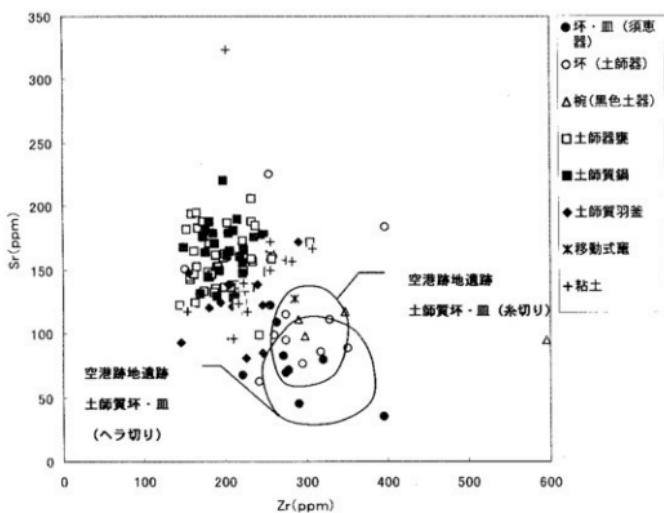
第3図 出土土器と粘土探掘穴粘土との比較



第4図 出土土器と粘土探掘穴粘土との比較



第5図 空港跡地遺跡出土土器との比較



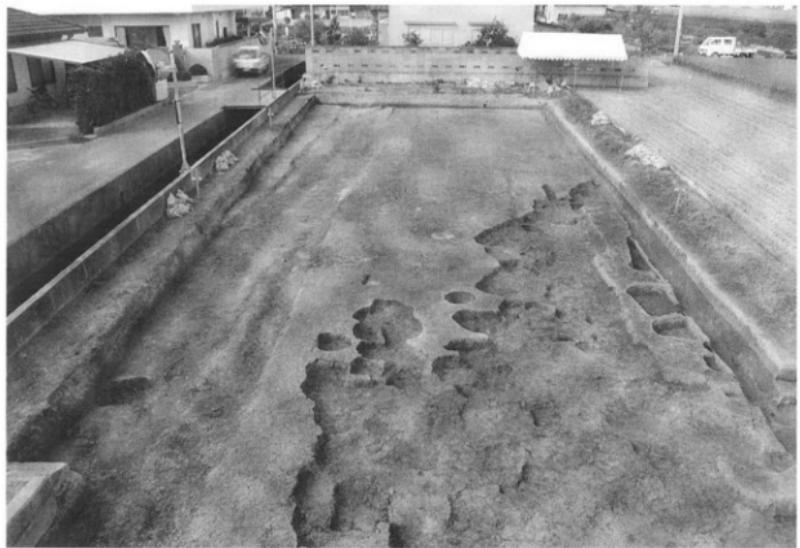
第6図 空港跡地遺跡出土土器との比較

写 真 図 版



SD101 (I-①区)

1



I-①区全域

2

図版2



1

I-②区 粘土探掘坑遺物出土状況



2

I-②区 全景

I-②区 東壁



1

SD103遺物出土状況



2

SD102, 103



3

図版 4



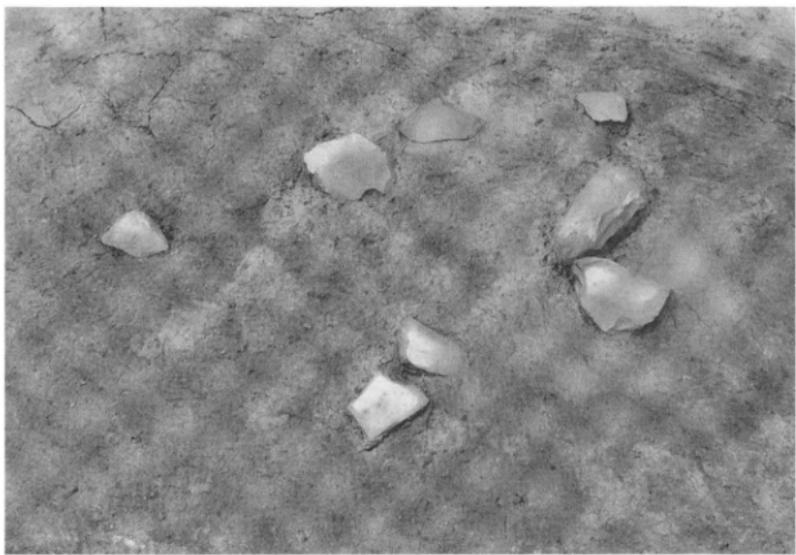
1

SD105



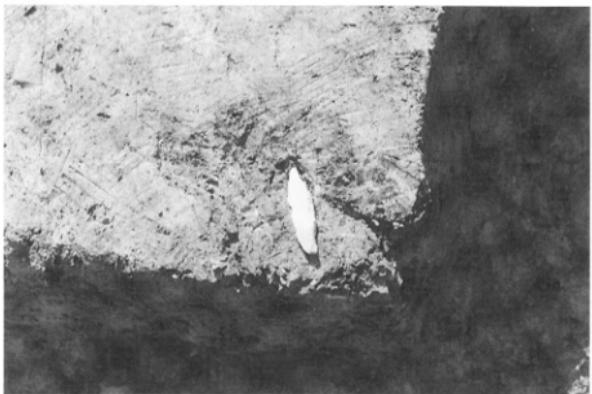
2

SD106



3

I-③区 石器出土状況



I-④区 石器出土状況